

JOURNAL
OF
ASIAN AND AFRICAN STUDIES

No.69

CONTENTS

Articles

Étude de la structure de syllabe en tibétain	SUZUKI, Hiroyuki	1
Elements of Space Grammar in Leggbó	NARROG, Heiko · UDOH, Imelda	25
Social Origins of the Late Ottoman Sharia Judges: Some Observations on Mobility and Integration	AKIBA, Jun	65
Paradox Found in Representations of Ideas of the Soul in the Chinese Society	HSIEH, Li	99
A Tonal Analysis of Nouns and Noun Modifiers of the Gwere Language	KAGAYA Ryohei	123

Source Materials and Remarks

The Verb <i>ʼbri</i> “to write” in Old Tibetan	HILL, Nathan W.	177
The Formation and Development of One Counter-traditional Movement: A Case Study of the Ilami Fijian Corporation in the Republic of Fiji Islands	NIWA, Norio	183
On the Structure of the General-purpose Digital Dictionary	KODAMA, Shigeaki	211

RESEARCH INSTITUTE FOR LANGUAGES
AND CULTURES OF ASIA AND AFRICA (ILCAA)



アジア・アフリカ言語文化研究

JOURNAL OF ASIAN AND AFRICAN STUDIES

No. 69/2005



アジア・アフリカ
言語文化研究
JOURNAL OF ASIAN AND AFRICAN STUDIES

No. 69

March, 2005

目次

論文

チベット語音節構造の研究.....	鈴木博之	1
Elements of Space Grammer in Leggbó	NARROG, Heiko · UDOH, Imelda	25
オスマン帝国末期イスラーム法官の4類型 —法官組織に見る社会移動—	秋葉 淳	65
中国社会の靈魂觀の表象に見られるパラドックス.....	謝 荔	99
グウェレ語の名詞と名詞修飾語の音調形分析.....	加賀谷 良 平	123

資料・研究ノート

The Verb <i>ʼbri</i> “to write” in Old Tibetan	HILL, Nathan W.	177
脱「伝統」運動の成立と展開 —フィジー諸島共和国における イラミ・フィジアン・コーポレイションを事例として—.....	丹 羽 典 生	183
汎用的な電子辞書の構造についての考察.....	児 玉 茂 昭	211

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
RESEARCH INSTITUTE FOR LANGUAGES
AND CULTURES OF ASIA AND AFRICA (ILCAA)



チベット語音節構造の研究

鈴木 博之
(京都大学大学院)

Étude de la structure de syllabe en tibétain

SUZUKI, Hiroyuki
Université de Kyoto

Cet article traite la structure de syllabe dans les dialectes du tibétain tout entier pour trouver l'existence de la différence syllabique tibétaine à partir du point de vue phonétique. Les études précédentes supposent que seule la construction syllabique existe dans chaque dialecte du tibétain. À partir de l'aspect phonétique, dans le cas de la série de deux consonnes CCV-, on a les cinq différences suivantes :

	modèle	explication phonétique
1	C°CV-/CCV-	possible d'insérer une voyelle affaiblie
2	CCV-	chaque consonne également prononcée
3	CCV-/°CV-	<i>ibid.</i> ou la précédente affaiblie
4	°CV-/°CV-	la consonne précédente affaiblie et possible d'insérer une voyelle affaiblie
5	°CV-	la consonne précédente toujours affaiblie

Comme résultat de la discussion, on a besoin de la distinction suivante :

	structure syllabique	explication phonétique
1	CCGV-	chaque consonne également prononcée
2	CCGV-/°CGV-	<i>ibid.</i> ou la précédente affaiblie
3	°C _i GV-	la consonne précédente toujours affaiblie

Parmi les constructions ci-dessus, les types CCGV- et °C_iGV-, nommés respectivement «*contruction de série consonantique*» et «*construction d'initiale*», peuvent être strictement distingués dans le tibétain.

Keywords: Tibetan language, dialect, phonetics, consonant cluster, syllable construction
キーワード：チベット語，方言，音声学，子音連続，音節構造

1 はじめに	3.2 C ^o CV- 型子音連続構造
1.1 本稿の背景と着目点	3.3 CCV- 型子音連続構造
1.2 『字性組織法』に関して	3.4 CC(G)V-/ ^c C(G)V- 型子音連続構造
1.3 本稿の構成	3.5 ^c C _i V- 型主子音構造
2 チベット語の音節構造概観と問題点	3.6 ^c C _i V- 型主子音構造
2.1 基本構造	4 音節構造の対比
2.2 先行研究にみられる初頭子音連続の音節構造	4.1 音節の置かれる環境による異なり
2.2.1 一般的な言及	4.2 前鼻音類
2.2.2 C _i を導入するもの	4.3 前気音
2.2.3 その他	5 記述に要する音節構造
2.3 具体例と問題提起	5.1 音節構造の差異が明確に現れる方言
2.4 音素体系との関連	5.1.1 Khrika 方言
3 子音連続の音声学的考察	5.1.2 Cherje 方言
3.1 概観と分類	5.2 方言間の差異が音節構造に現れる例
	6 まとめ

1 はじめに

チベット語は、文語としてチベット文語を共有する一方、口語として多様な特徴をもついくつかの方言群を擁する言語である。現代口語に関して、方言調査は中国で大規模に行われたことがあるが、先行研究では各方言を個別に記述している格桑居冕・格桑央京（2002）のようなものは例外的で、むしろ瞿霏堂（1991）や江荻（2002）などのように、諸方言の資料を部分的に取り出してチベット文語との対照を加えて歴史言語学的に取り扱うことが多くなされている。

多くの研究において、現代チベット語諸方言はチベット文語と対照して、伝統的な方言区分とチベット語自体の歴史的発展の関連性が伺えることが示されている。このような歴史言語学的観点に立つてチベット語を見るならば、現代口語における音声・音韻面で正確に分析・記述された資料は非常に重要な役割を果たすことになるといえる。しかしながら、これまでに報告される諸方言の資料を、筆者による調査記録と対比すれば、前者には音声学的な観点からの情報が不足しているおそれがあるように思われる。実際、諸方言を並列することでより明確になる共時的特徴が見受けられるのである。

本論文の趣旨は、できるだけ広くチベット語を俯瞰し、最も基礎的である音声の観察に依拠しつつ、先行研究で音韻記述に反映されていない音声現象をいかに扱うことが可能かについて考察を行う。本稿では、中国国内のチベット語諸方言¹⁾とゾンカ語を扱う。音声資料はその多くを筆者の調査によっているが、文献に付属の音声資料なども参考としている。

1) 言及する方言については、本文末に一括して掲げている。なお、本稿では方言名はローマン・アルファベットで示す。

1.1 本稿の背景と着目点

まず、以下に例として Khrika 方言の音声資料を掲げる。

[β° dʒE] 「8」と [β° dʒE] 「忘れる」

これらの例において、初頭子音の異なりはどのように音韻的に表すことができるだろうか。これらの初頭子音連続の調音音声学的特徴は近いものであるが、最初頭の子音の聞こえが異なる。

この例に関して問題なのは、1つはこのような音声実態の違いを反映させられる先行研究の記述が現在のところ見当たらない点、また1つはただ単純に子音連続を構成する音素を並列して音素表記を行うことが適切かどうかという点である。

多くの先行研究では、一般に語頭における複数の子音からなる音素列を「子音連続」として扱っている。しかし先の例のような音声実態を考慮すると、先行研究で一般に「子音連続」とひとくくりにされているものの中に、異なる音声現象が見られることが分かるだろう。その特徴をあげるならば、先に見たような子音連続を構成する子音が等価に発音されない²⁾ことや、子音群の連続がそれぞれ密接に発音されないことなどがある。多くの先行研究にはそのような音声実態に対する報告はなく、またいずれの音声現象も音素配列において区別されることはないといえる。

これらの違いはいくつかの方言を対照していくことによって、散発的な事例ではなく個々の方言を特徴づける要素であることが概観できるようになった。本稿の1つの着目点は、方言の特徴の一端が多くの他方言との対比の中に置くことで際立って現れると考える点にある。

少なくとも先にあげた Khrika 方言を見る限り、その2例の対立を音素レベルの対立と考えるのではなく、発音様式に基づく別の対立を設定するほうが現実に合致する。また、このような見方に歴史的観点から大きく参考になるものがチベット語には存在する。それはチベット語伝統文法『字性組織法³⁾』における記述と注釈である。それについて、以下に簡潔に述べる。

1.2 『字性組織法』に関して

先にあげた Khrika 方言の例では、初頭子音が問題になっている。その初頭子音について、『字性組織法』では音声について子音連続に関するチベット文字の構字法との関連が述べられている箇所がある。しかし同書に詳しく述べられていない子音連続も存在する。

たとえばチベット文語において、bg- と sg- という子音連続の組は両者とも可能であるが、前者は『字性組織法』において言及の対象となり、後者はそうではない。それはチベット文字の表記と関連しており、b- は「前置字」、s- は「頭字」になる。同書では前置字に関して詳細に述べられている。前置字に関する具体的な発音上の注釈は dPa'-ris Sangs-rgyas (1998) や Kesang Gyurmé (1992) などに見られる。

しかし「前置字」と「頭字」は同じ文字が両者に属することはなく、同様な調音からなる子音連続において違いを示す先に見た Khrika 方言の例と完全に対比されるべきものではない。しかしながら子音連続の構成という視点において、伝統文法の著作がなされたところにおけるチ

2) 多くは先行する子音が弱く発音される。

3) または『性入法』、『音勢論』などの名称で知られる。チベット語名 rTags kyi 'jug pa, gSer-tog sum rtags (1957) など参照。

ベット語には2通りの構成があり、音声に反映されていたと見ることもできる。すなわち、チベット語のプロトタイプの特徴として、2種の発音様式が存在し、現代口語においてもなお子音の配列とともに発音様式における何らかの異なりが存在するということが、十分仮説として想定可能と思われるのである。

1.3 本稿の構成

本稿の構成は次のようである。2節では先行研究における音節構造について紹介し、また問題点を示す。3節では音声実態に基づいて音声現象を分類し、諸方言の具体例を述べる。4節では3節の分類について、発音様式から見た音声実態における区別が音韻的に必要であることを示す。5節ではいくつかの方言を取り上げ、構造的に区別が必要であることを示す。最後に6節でこれまでの議論をまとめる。

2 チベット語の音節構造概観と問題点

音節構造は、一般に亀井他編(1996)における「音節構造」の項にあるように、 C_0VC_0 (C_0 は0個以上を示す)とされる型を考えることができる。チベット語の1音節もこれにならって、

[初頭子音(群)]+[音節核]+[末子音]

を考えることができる。

2.1 基本構造

先に掲げた各要素について、先行研究においてチベット語全般について見られることを簡単に述べる。

1. 音節核

ほとんどは母音が担う。母音は単母音、長母音、二重母音、鼻母音、重ね母音などが現れうる。音韻的に重ね母音以外はV、重ね母音はVV⁴⁾と書ける。アムドチベット語では音節の最小構成単位になる方言がある。

2. 末子音

存在するならば基本的に1要素である。Lhasa方言などで音韻論上必要とされる「鼻音化要素」などもこの位置に該当する(北村・長野1990)。また、末子音は音節核と密接な関係にあり、たとえばMangra方言では[^hkəl/^hkɛ]「言葉」というように、末子音の脱落を自由変異形に持つ語は、音節核の母音の質に影響を与える。

3. 初頭子音

格桑居冕・格桑央京(2002)におけるrTsekhog方言など、アムドチベット語牧民方言の一部には最大で3子音連続が見られる⁵⁾。

4) 筆者は長母音と重ね母音は音声的にも区別できるものとする。長さの点で後者は音韻的に2モーラの長さを持ちうるものと考えられる。明確に重ね母音と考えられる発音様式をもつものには、Sharkhog方言などがある。

以上の点から、チベット語全般に当てはまりうる音節構造を仮に書くとなると、CCCVVC のようになるだろう⁶⁾。

また、チベット語の音節は漢語などとは違って、音節全体の発音所要時間がどのような音節構成でも等しくなるよう音節核部分の発音持続時間が変化することはない。

以上のうちでもっとも問題点を多く含んでいるのは、最初に述べた例にもあるように、初頭子音についてである。初頭子音は、音節核と末子音のような密接な関係を、音節核とは持たず、わたり音に関する解釈に先行研究での異同が見られる（王双成 2004）以外は、ほぼその構成は他の影響を受けず独立に現れる。本稿での音節構造の議論はもっぱら初頭子音連続に絞ることにしたい。

2.2 先行研究にみられる初頭子音連続の音節構造

ここで初頭子音に関する先行研究の扱いについて述べる。本稿における議論で最も問題となるのは、アムドチベット語の場合である。しかし音節構造が明示的に記述されている先行研究は数少ない。

2.2.1 一般的な言及

子音の連続をいかに表現しているかが問題となるが、多くは特にその配列に区別を設けず特に言及しないか、たとえばアムドチベット語の初頭子音に関する音節構造は最大 CCCV- というものが一般的とされている。チベット語においては、子音連続を構成する各要素が注目される⁷⁾ため、特に中国における研究では組み合わせの数と実態について詳細に報告されることが多い。

以上のように、多くの先行研究に音節構造に関する議論は積極的にはなされてはおらず、子音連続の組み合わせを示す方法は1通りと考えられる。

2.2.2 C_i を導入するもの

少数ではあるが、以上のような音節構造のとらえ方を行わない主張もある。子音連続を構成するある子音に、 C_i と印をつけるものである。

Sharkhog 方言を扱う Nagano (1980) では C_i を導入した解釈を行っており、その子音は初頭第2子音が該当する。

Zhongu 方言を扱う Sun (2003) では、音節構造は明記していないが、子音連続を2通りの記述方法を用いて表している。たとえば、 $^h\text{ts}/$ と $^{\chi}\text{ts}/$ などである。ただし、本文中の記述を見ると、すべて初頭第2子音を中心に考えているようである。

-
- 5) 王双成 (2004) では、アムドチベット語のいくつかの方言で、他の先行研究では $/w/$ として子音連続を構成する一部に分類されるものを、二重母音の第1要素として記述している。ただし、筆者の調査した方言の場合、該当音は多分に子音の特徴を帯びており、本稿では子音連続の一部として取り扱う。
 - 6) Lhasa 方言について北村・長野 (1990) の音韻解釈では、末子音と重ね母音は共起しないため、-VVC と書くとき余剰な要素を含むことになるが、ここでは母音と子音を区別して扱うため、そのように表記する。
 - 7) 子音連続は、対応する蔵文との対比でしばしば議論される。Wolfenden (1929) などの研究によると、蔵文において特に動詞の初頭子音連続を構成する各要素がそれぞれ個別の意味を担っていると推定されている。

さて、音節構造の記述への C_1 の導入は、アムドチベット語についてよりも、むしろアムドチベット語と並んで子音連続の多く見られる川西走廊諸語の一部の言語について行われていることが多い。たとえば羌語を扱う Evans (2001) では、Mawo 方言に対し第2子音を C_1 とし、これを中心に音節構造を組み立てている。Sun (2003) における主張もまた同様の C_1 を導入したものと考えられる。また、ギャロン語 lCogtse 方言を扱う Nagano (2003) も C_1 を用いて音節構造を示している。

いずれにせよ、この主張もまた1種類の音節構造で十分表現できるものであるということである。

2.2.3 その他

子音連続に関して、音声実態を重視した解釈を行う研究もある。たとえば、mDzorge 方言を扱う Sun (1986) では子音連続を考えていない。この方言は子音連続の多く存在するアムドチベット語牧民方言に属するが、音声実態を考慮して前気音や前鼻音の存在を明示的にし、それらをもつ子音要素を音素に導入することによって、音素体系が少々煩雑にはなっているが、現実の音声をよく反映する音韻体系を立てている⁸⁾。

そのほかにも音節構造に言及しているわけではないが、詳細な音声情報を提供している先行研究もある。Rebgong 方言を扱う Gō (1954) では、音韻処理を施さずできるだけ音声を忠実に記述しているため、子音連続のほかに、弱母音、また前気音と考えられる音声にも言及している⁹⁾。

また、カムチベット語を扱う Migot (1957) の記述では、特に弱く発音する音声実態に対して上部に小さく記すという記法をとっている。これは Kalsang Norbu et al. (2000) の rDowi 方言の音声実態を表す場合にもとられている表記法で、それは多くの2子音連続の場合初頭子音は第2子音よりも弱く発音される事実を伝えている¹⁰⁾。

2.3 具体例と問題提起

以上に述べたような先行研究において多数を占める立場では説明のしにくい現象として、第2子音が1の事例を簡潔に紹介したい。

第2子音が1の場合について、華侃 主編 (2002) の記述では以下のように、地域によらず一定であるものがある¹¹⁾。

方言名\語義	歌	竜王
dMarthang	/hlə/	/hlə/
rDowi	/hlə/	/hlə/
bLabrang	/hlə/	/hlə/
藏文	glu	klu

8) 孫天心 (2003) によると、mDzorge 方言には大きく3種の下位区分(北部, 中・西部, 東部)があるとされている。Sun (1986) は中・西部方言, 孫天心 (2003) は東部方言を扱う。相互の方言差はかなり大きいと考えられる。また、東部方言は筆者の調査した Askyirong 方言が当てはまり、典型的にアムドチベット語とは考えられない。

9) ただし同じ語に対し異なる音声記述を施している場合もある。

10) 格桑居冕・格桑央京 (2002) において、bLabrang 方言の2子音連続の音声実態は、第1子音が弱く調音されることの旨が記述されているが、表記としては第1・第2子音とも並列されている。

11) 古期の発音をある程度反映している藏文も参考として掲げておく。

これに対し、以下に実際の音声実態を同様に対比して示す¹²⁾。

方言名\語義	歌	竜王
Khrika	[h ^ʔ lɿ]	[h ^ʔ lɿ]
Khrika _{db}	[h ^ʔ lɿ]	[^h lɿ / h ^ʔ lɿ]
Cherje	[q ^ʔ lɿ]	[^h lɿ / k ^ʔ lɿ]
rNgawa	[^ʔ lɿ]	[^h lɿ]
dMarthang	[^ʔ lɿ]	[^h lɿ]
rDowi	[flɿ]	[^h lɿ]
Mangra	[flɿ]	[flɿ]

これらの音声実態は、Mangra 方言を除いてそれぞれ2者間で音声上明らかな違いの存在を示している。詳しく見れば、Khrika 方言や rDowi 方言では子音連続の仕組みすなわち構成要素の発音上の明瞭さに異なり (fi^ʔl-fil^hl) が見られ、Cherje 方言ではそれに加えて複合的に構成要素自体にも異なり (q^ʔl-fil) が見られ、rNgawa 方言や dMarthang 方言では構成要素のみに異なり (l^hl/^ʔl^hl) が見られる。この違いはチベット語話者の認識にもものぼるものであり、記述の際に区別を設ける必要がある¹³⁾。

以上に述べた構成要素の調音上の異なりと発音上の明瞭さの異なりは、対立を構成する上で密接にかかわりあっている。そのため、実際に rNgawa 方言や dMarthang 方言のように構成要素自体が異なる方言が存在するのに、Khrika 方言や rDowi 方言もまた構成要素に異なりを求めて記述を行うことが妥当かどうかが問題となる。しかし最大の問題は、先にあげた先行研究からの引用でも分かるように、以上の2種の語がほとんどの先行研究でまったく同じく記述されている点にある。

2.4 音素体系との関連

本稿で取り上げるチベット語諸方言のうち、子音連続を多く含むものについて音素体系を示している文献には、格桑居冕・格桑央京 (2002)、華侃 主編 (2002)、黄布凡 主編 (1992) など、さまざまある。子音連続もまた各方言の音素体系の中から構成要素が選ばれることになる。基本的に、先行研究の音素体系は体系的にまとまっており、ほとんどの点で同意できるものである¹⁴⁾。

そして初頭子音連続もまた、1つの音素体系の中で記述されなければならない。それでは先に述べた1音に先行する子音の扱いはどのようになるだろうか。いくつかの方言では、問題なく音素配列を決定できるかもしれない。しかし簡単に決定できないものがあるのも事実である。最初に述べた Khrika 方言の例、[β^ʔdʒɛ]「8」と[^hdʒɛ]「忘れる」もまた、子音連続を記述するのに何らかの異なりを設定しなければならない。

12) 以下で言及する方言資料だけでなく、本稿ではその音声記述について各方言で一般に用いられる代表的な音声形を掲げている。その音声形に対して、本稿では各方言の音声実態と呼ぶようにする。

13) それぞれの話者に直接各語を対比する形で確かめた。また、以上のほかにも Sharkhog 方言の話者の例も得たが、異なりが見られるという点で同様の判断であった。

14) 見解の相違が見られる点としては、そり舌音が閉鎖音か破擦音かという違いなどが指摘できるだろう。

この問題を解決するには、いくつかの方法が考えられる。1つには、子音音素の設定の変更がある。また1つには、実際の音声から音韻上の規則を設定し、異なる子音の組からなる連続を設定することができるだろう。いずれも、1方言のみを考えるならば有効な方法かもしれない。しかしながら、いずれも少なからず問題点を含んでいる。前者の方法は、たとえば mDzorge 方言を扱う Sun (1986) のように、音素設定が煩雑になり多くの音韻規則を設定する必要性に迫られる。後者の方法は、記述と音声乖離する点を含むほか、同様の音声現象に対して方言ごとにまったく異なる音韻解釈が与えられる可能性が存在し、方言資料としての共通性を欠く結果を招きうる¹⁵⁾。

いずれにせよ記述の上で最も大きい問題は、音韻記述が実際の音声に忠実でなくかけ離れてしまう危険性が存在することである。実際先に見たように、多くの方言を音声学的な面から観察し発音様式の異なりを見出すことができるようになると、その観点から予測できることは、子音連続の配列方法の異なりの存在、言い換えれば音節構造に反映されるであろう子音の配列が1通りでない可能性の存在である。先に見たいくつかの例のように、構成する音素を取り出せば同じであると考えられる子音連続を示す音素列において、発音様式に大きく異なりが現れる。この点を説明していくには、各方言の音素体系に変更を加えていくのではなく、音節構造の異なりとして扱うほうがより現実的であるし、体系的にも見える可能性がある。

筆者の主張としては、子音連続に関する各構成子音の発音様式から、チベット語には子音連続それ自体について複数の音節構造が認められ、かつそれらを分類して記述を行う必要のある方言が存在するという点、そして音節構造上の違いがチベット語の記述に効果的に作用するという点である。

3 子音連続の音声学的考察

ここでは諸方言の音声実態に基づいて、子音連続を構成している要素の現れ方の異なりを音声学的な観点から述べていく。その出発点として、どのような異なりが見られるのかを模式化してから諸現象の観察に移ることにする。

3.1 概観と分類

先行研究ではほぼ1通りで書かれる子音連続には、その各構成子音の発音方法すなわち発音様式について、音声学的にいくつかの異なりが見られる。2子音連続 CCV- を例に以下に示す。

模式化	発音様式についての説明
1 C ^o CV-/CCV-	各子音が明瞭に発音され、かつ調音間に微少な間がある
2 CCV-	各子音要素が明瞭に発音され、等価な子音連続を構成
3 CCV-/ ^c CV-	等価な子音連続か先行子音が弱化し連続を形成しない
4 ^o CV-/ ^c CV-	先行子音が弱化し、かつ調音間に微少な間がある
5 ^c CV-	常に先行子音が弱化

上表の上から下に行くにつれて、子音間の結びつきが強くなっていく。初頭に上部に小さく

15) この方法の別の観点から見た問題は、多くの先行研究が音声分析の過程に触れずに音韻を示す傾向にある点である。

記しているものは、それ自体の発音が弱く不明瞭で十分な調音器官の動きが観察されないだけでなく、また聞こえにおいても後続する子音より決して大きくならないようなものが対応する発音様式である。

また、調音間に微少な間を含むものは、各子音要素の調音について調音開始から調音終了までの調音器官の動きがはっきりしているため、子音要素間に一定の時間の間が生まれることによる。多くは有声音どうしの組み合わせに見られ、この間は単に声帯振動のみが確認されることになり、母音的性格を帯びた音声で実現される。ただしこの要素は音節核には決してなりえず、子音連続を構成する特徴の1つに考えられる。本稿では、以下この要素を「弱母音」と呼ぶ。

さて、上表にあるいずれの場合でも、特に複合語を形成するときは最初頭の子音について、調音方法の弱化または脱落することもある一方、逆に調音が単独例より明瞭になることもある。上のモードにおいて“/”で示してあるのは、このような環境になくとも異なりが見られる場合に自由変異として現れるものである。

上表の分類の基本は鈴木（2004a）における議論である。そこでは以上のうち3.と4.の間で線引きを行い、前者を「子音連続構造」、後者を「主子音構造」として大枠での分類を試みている。ただし同論文では3子音連続まで扱い、3つ目の子音はGすなわち glide¹⁶⁾と拡張して考えている。本稿でもこの2大分類を踏襲し¹⁷⁾、Gも認める。

以上の分類は、もちろん多くの方言データの中に認められるものの集合体であって、1方言にすべてが備わっていることはむしろ珍しいし、また十分に整理可能である。また、チベット語に限定して考えれば、先に述べた glide が現れる子音連続の組は非常に限られており、3子音連続も珍しい。チベット語でGに分類できるのは、先行する子音に付随する形で調音が密接になされる [w, r] またはこれに準じる音に限られる¹⁸⁾。

本稿では、議論の糸口としてまずこの分類にしたがって、これらに分類される音声実態の諸現象を考察していくことにする。以下、先に掲げた5つの分類を仮の「音節構造」と呼ぶことにするが、実質音声実態の記述に要する差異を分類したものである¹⁹⁾。

また本稿では、Gが音節構造に対して問題とする点にあまり関わらないことから、煩雑を避けるために一括して上表の3.に分類し²⁰⁾、それ以外の場合についてはGを省略する。

3.2 C°CV- 型子音連続構造

この構造は、特に第2子音が共鳴音の場合に確認されることが多い。単音節の場合、音声的には聴覚印象として2音節のように聞こえることがあるが、これは完全に実質1音節であ

16) ここでいう glide は、「わたり音」を拡大解釈して用いている。その音質は、先行する子音に何らかの調音上の変化、たとえば口蓋化や円唇化などをもたらし、かつそれ自体は明瞭な調音器官の動きと調音持続時間を備えているものである。

17) 以下、主子音は C_i と表す。

18) 特に、直前の子音をそれぞれ円唇化させたり、そり舌の音色を含ませたり、同時調音的な要素もある。

ただし音声実態によってGに分類される [w, r] であってもCやC_iに相当することもある。

19) 本稿では個別方言の音素設定を行っていない。アムドチベット語については、華侃 主編（2002）に各方言の音素の概説があるが、基本的にそこで言及されるものと大きな差はないものとする。

20) 3.に分類するものの中には、実際弱母音が現れる例も入っている。いずれも明確な子音連続が確認され、また同時に初頭子音が弱化する例が分類される。

る²¹⁾。弱母音が現れないことも時にはありうる。

地理的なことを考慮すると、明確な弱母音が聞こえる例が頻出するものは青海省に分布するアムドチベット語諸方言に多い²²⁾。

具体例

Khrika : [fi:^əlɿ] 「歌」, [fi:^əʁqɿ] 「権利」, [fi:^əjaŋ] 「雄のヤク」

Cherje : [q:^əlɔŋ] 「牦牛」, [q:^əlu] 「歌」

rNgawa : [m^ədzo] 「雄のゾ（動物名）」, [m^ədzo rŋe] 「ゾルケ（地名）」

gYokhog : [fi:^əlu] 「歌」, [fi:^ənam] 「空」

Sharkhog : [fi:^əzu] 「蛇」

3.3 CCV- 型子音連続構造

この構造は、子音連続として比較的安定した子音連続として実現される。初頭子音が摩擦音の場合が多い。初頭が有声音の場合に、方言によっては音節初頭に入りわたりのあいまい母音が現れることもあり、それが子音間の弱母音として子音要素間に現れる場合も少ないが確認される。

具体例

Khrika : [χtsɛ̃ɿ] 「ツァン（地名）」, [χtɛ̃ɿ] 「1」

Cherje²³⁾ : [ʔrga] 「愛する」, [ʔga] 「5」

rDowi : [ɸlo] 「心」

Mangra : [fiɬə] 「歌」, [htɛ̃ɿ] 「1」

rNgawa : [bzi] 「4」, [p^ʰtɕu] ²⁴⁾ 「10」

gYokhog : [mɿ] 「火」, [vriχ] 「空気」

3.4 CC(G)V-/^əC(G)V- 型子音連続構造

基本的に音声実態が自由変異として子音連続構造のように両者が明瞭に発音されたり、主子音構造に合致するように発音されたりする場合、この構造に該当する。先に述べたような弱母音が現れる語であっても、場合によって子音連続が維持されなくなる例もまたここに該当する。

また本稿では、Gを伴うものをここに分類する²⁵⁾。Gを含む例は相対的に数少ないため、ここで一括しておく。また先にも述べたように、3子音連続自体もまた数が少ない。以下の例では該当する子音連続の箇所に対応する模式を添える。

21) たとえば、Khrika 方言の「歌」は聴覚印象として [fiɬɿ] に近いが、2音節ではないため、[fi:^əlɿ] と書くのが適切であろう。

22) 特に有声音の場合にしばしば観察される。この点については、農民方言と牧民方言との間に共通であることが多い。

23) Cherje 方言や他のいくつかの方言では、有聲の継続音が先頭に来到するときに発音初頭にわたり音として非常に弱い母音要素が聞かれる。これは音声実態として、いくつかの語においては子音連続中にわたり音として現れることもある。そのときは初頭にわたり音は現れない。

24) 複合語として「11」のときには、[p^ʰtɕu χtɛ̃ɿ] となるため、CCV- 構造に分類する。

25) 現在のところ、筆者がチベット語諸方言において音声実態として3子音連続を構成しているものを聞いたのは、ごくわずかの例にとどまる。主子音構造をとる3子音連続の例も存在するが、本稿ではここに分類する。

具体例

Khrika : [ʔa βrA] (第2音節 CG-) 「山ねずみ」 [χʷwɪ tɕʰA] (第1音節 CG-) 「本」

Khrika_{cb} : [ɬʷwɔ] (CG-) 「狐」, [βlA brɛN] (第2音節 CG-) 「ラプラン寺」

Cherje : [χʷwi tɕʰA] (第1音節 CG-) 「本」, [ʰkʷwA] (°C_iG-) 「命令」

Mangra : [hta] (CC-/°C-) 「馬」, [htsa] (CC-/°C-) 「草」

gYokhog : [ptɕu] (CC-/°C-) ²⁶⁾ 「10」

Sharkhog : [χkA] (CC-/°C-) 「鋤」, [ʂkɛ] (CC-/°C-) 「上あご」

3.5 °C_iV- 型主子音構造

この構造は、先行子音が有聲口腔内調音子音で、その中でも主子音が有聲音の場合に多く該当例が見られる。また、前気音を変異形にもつこともある。わたり音は義務的に出現するわけではなく、出現しえるものである。弱母音が現れる位置は子音要素間に限らず、時に初頭の入りわたり音になる場合もある。

また、弱母音または入りわたり音が出現したとしても、先行子音の聞こえは常に弱い。

具体例

Khrika : [ʰa̠ɳɔN] 「心」, [ʰdɔ] 「石」

Cherje : [ʰjA] 「漢族」

rNgawa : [ʰŋA/ʰa̠ŋA] 「5」

3.6 °C_iV- 型主子音構造

この構造は、先行子音が前鼻音、前気音である場合に代表され、また、前気音を変異形にもつ口腔内調音子音、中でも主子音が無聲音の場合に多く該当例が見られる。

多くのアムドチベット語方言で確認されるほか、中央チベット語、カムチベット語、ゾンカ語でも確認される子音連続の多くはこれに属する。

具体例 ²⁷⁾

Khrika : [ʰdɔn] 「7」, [ʰkɛ] 「言葉」

Khrika_{cb} : [ʰtɕɔ lA] 「ものの」, [ʰdɛn] 「7」

Cherje : [ʰpɔŋ] 「草地」, [ʰtɕəŋ] 「鉄」

rDowi : [ʰzɔ] 「4」, [ʰdɪ mɔ] 「平安」

rNgawa : [ʰlɔ] 「歌」, [ʰlɔ] 「竜王」, [ʰgu] 「9」

gYokhog : [ʰsɔn] 「雲」, [ʰlɔŋ] 「風」, [ʰtsʰo] 「海」

Mangra : [ʰkɕɔ] 「言葉」, [ʰtɕɔ] 「10」

Zungchu : [ʰtɔŋ] 「1000」, [ʰtɕɪk] 「1」

Sharkhog : [ʰtɔ] 「馬」, [ʰtɕɪk] 「印」

26) 複合語として「11」のときには、[ʰtɕɛ χtɕɪk] となるため、CC(G)V-/°C(G)V- 構造に分類する。

27) 本稿では声調に関しては議論にあまり関わらないため、簡略表記を行う。声調の記述には Kitamura (1977) のように語声調を採用し、語の左肩に次の記号を与える。すなわち、ˉ = 高平調 (55/44), ˊ = 高降調 (53/42), ˋ = 低昇調 (13/24), ˆ = 低降調 (131/231) の4種である。これらは Lhasa 方言以外に、他の中央チベット語、カムチベット語でも同様の記号を用いる。ただし、ˋ = 低平調 (11/22) を加える。また、語声調は Lhasa 方言以外では北村・長野 (1990) などが指摘するようには厳密に現れない。

Askirong : [^hteⁱ] 「1」, [^hni] 「2」
 Derge : [_^ⁿda] 「矢」, [^hte^hε^mbo] 「高い」
 Lhagang : [^hts^ho] 「湖」, [ⁿdo] 「行く」
 Chaphreng : [_^ⁿda] 「これ」, [^hgtɕ] 「9」
 Lithang : [ⁿdu] 「雷」, [^hgo] 「頭」
 Lhasa : [^mbu] 「虫」, [ⁿgo] 「頭」
 Dingri²⁸⁾ : [^hmi] 「目」, [^hɣol] 「銀」
 rDzongkha²⁹⁾ : [_^(^hp^h)dʒ^hɔ] 「鳥」, [^hmi ɬo] 「目」

4 音節構造の対比

ここでは、前節に述べた音声レベルから見た音節構造の分類が、子音連続の組み合わせについて音韻レベルにおいて対立を形成することを、それぞれの音節構造の特徴的な点を明示しつつ示す。

4.1 音節の置かれる環境による異なり

先に分類した音節構造を考えるにあたって、音声実態の面から見て、問題とする音節が単独の場合か複合語の一部か、複音節語の語頭か語中か、といったことで、同一語についてしばしばその音声実態に変化が現れることに触れなければならない。

音声実態の変化は大きく2種あり、音節構造を変えずに調音点において変化が見られる場合と、音節構造を変えて実現する場合である。

2子音連続を例に、以下に発音様式を模式化して示し、対応する音節構造を添える³⁰⁾。

タイプ	単音節	複音節初頭	複音節中	音節構造
a.	CCV-	CCV-	CCV-	子音連続構造 CCV-
b.	CCV-	^c CV-	CCV-/ ^c CV-	子音連続構造 CCV-/ ^c CV-
c.	^c CV-	^c CV-	CCV-	主子音構造 ^c CV-/ ^c C _i V-
d.	^c CV-	^c CV-	^c CV-	主子音構造 ^c C _i V-

上に示した4種類が代表的なタイプであるが、そのうちa.とd.は特に問題にしないでよい事例である。b.とc.の音節構造は、先の音声実態の分類ではCC(G)V-/^cC(G)V-構造になるが、単音節の場合を考慮するとさらに2つに分けられる。

さて、前節にあげた例にもあるように、複合語になったときの音声実態が音節構造の分類に寄与するものとして、以下の例を対比してみる。

28) Herrmann (1989) などでは子音連続が確認されていないが、筆者の調査結果にはごく少数ではあるが存在した。

29) ゾンカ語における子音連続には、van Driem (1998) における「両唇閉鎖音+前部硬口蓋破擦音」や、同書に付属の音声資料を分析した鈴木 (2004b) において追加で確認した「声門閉鎖音+共鳴音」がある。

30) 以下の「複音節中」の模式化は、先行音節が開音節であることを想定して示す。閉音節の場合、子音連続の初頭要素は脱落する例が見られるなど、現象が複雑に見える。

rNgawa : [pʰtɕu] 「10」 と [pʰtɕu ɣtɕiŋ] 「11」 と [ʰgə ptɕu] 「90」
 gYokhog : [ptɕu] 「10」 と [pʰtɕɛ ɣtɕikʰ] 「11」 と [rɲa ptɕə] 「50」

rNgawa 方言の場合はいずれの環境でも子音連続が維持されることからタイプ a. の CCV- 構造に、gYokhog 方言の場合は複合語初頭に来た場合に最初頭の子音が弱化することからタイプ b. の CC(G)V-/^cC(G)V- 構造に分類できる。

また、以上に示した分類は語ごとの結びつきが強い句中においてはじめて、複合語の例のような異なりが見られることがある³¹⁾。

Sers hul : [ʰtʰõ] 「飲む」と [dʒɿ ʰtʰõ] 「お茶を飲みなさい」

Sers hul 方言では、一般に「前鼻音+無声有気音」は主子音構造 ^cC_iV- をとる。それが上のようにはっきりと鼻音要素が聞こえる例は、非常に限られた句例に現れるのみである。このような例では、[ʰtʰõ] 「飲む」という語自体が CC(G)V-/^cC(G)V- 構造に属するのではなく、^cC_iV- 構造に分類することで理解できる。

なお、複合語中において初めて子音連続を形成するものが見られる。

Chaphreng : [ʰtsʰu] 「湖」と [dʒa mʰtʰu]³²⁾ 「海」

同様のことが Chaphreng 方言と地域的に近い nDabpa 方言や Muli 方言にも確認されるほか、黃布凡 他 (1994) における rDzatod 方言でも確認される現象である。

また、語中において初めて前鼻音が現れる場合もある。

Lhagang : [ʰtʰā] 「高原」と [tsa ʰtʰā] 「草原」

以上のような例は、音節構造とともに子音連続の出現に関する音韻的環境を考える必要がある。

さて、ここで本稿において問題提起として取り上げた l 音の前の声門摩擦音についてみると、Khrika 方言では複合語の場合に音声実態として明確に差が出る例がある。

Khrika : [ʰla pa] 「脳」と [ʰlɿŋ ʰta] 「風の馬」

初頭子音が [ʰ] と [l] からなる例では、単音節語のときに現れる [ʰl-] と [ʰl-] の異なりに比べると、複音節語でははっきりした差異が現れていることが分かるだろう。これらはすなわち、それぞれ CC(G)V-/^cC(G)V- 構造と ^cC_iV- 構造の異なりとして考えることができる。このことは、文中でも明確になる例が見られる。

[ɣʷwɛ tɕʰa ʰlɔɣ sʰõN] 「本を読んだ」

[ɣʷwɛ tɕʰa ʰlɔɣ sʰõN] 「本をなくした」

[ʰlɔɣ] 「読む」と [ʰlɔɣ] 「なくす」という語に注目すると、それぞれを構成する子音は [ʰ] と [l] であるが、発音様式の異なりが現れている。これらはそれぞれ単独で発音するときは [ʰlɔɣ] と [ʰlɔɣ] のようになり、単音節語例の異なりと同じく比較的発音上の差異があいまい

31) 語ごとの結びつきが強い句には、熟語、定型句、あいさつ句などが相当する。

32) この例の第2音節は CCV- 子音連続構造をなしている。

になる。このような事例に対して、それぞれ CC(G)V-/^cC(G)V- 構造と C^oCV- 構造に分類することで音韻的に違いを示すことができると考えられる。また、以下のように1音前の声門摩擦音が単独例で円唇性を伴うものも存在する。

Khrika : [ɸ^wːlo] 「精神」

このような例における円唇性については、音声実態として単に調音上の付加的特徴と考えられるが、子音連続を構成する要素の異なり、すなわち /wɫ-/ のように音素配列自体に異なりを与えて説明することができる。

4.2 前鼻音類

先行研究の一部には、鼻音要素が先行するものを「前鼻音つき子音」として音素に認めるものがあり³³⁾、発音上鼻音要素と後続子音が密接に結びついていると解釈されている。確かに音声実態から見た子音連続の分類では、多くが主子音構造 ^cC_iV- に属するが、方言によっては異なるものが存在する。

単音節例で音節構造の異なりが直接かわる方言としては、rNgawa 方言など少数である。rNgawa 方言では、^cC_iV- 構造に発音が合致する前鼻音のものと、C^oCV- 構造に発音が合致する初頭子音が m- で始まるものとの大きな異なりが見られる。rNgawa 方言の先行研究³⁴⁾ と対比すれば、先の違いは表記上それぞれ n- か m- かであるという違いのみで、音声実態が十分反映されているとはいえない。この点は、m- を初頭とする子音連続の多くが主子音構造 ^cC_iV- で現れる Cherje 方言³⁵⁾ と対照すると、区別を設けておく必要がある。

さて、単音節例では音節構造自体に異なりが現れない場合でも、たとえば調音点の差異について注目することができる方言が多く見られる。

Lhagang : [ˈm̥dzu] 「雄のゾ」 と [ˈn̥dzi] 「戦い」³⁶⁾

Cherje : [ˈm̥do] 「経文」 と [ˈn̥dɔ] 「これ」

しかしながら、複合語で初めて音節構造が問題になる場合もある。特に有声前鼻音は複合語中で鼻音が明瞭に発音される傾向があるが、それとは事情を異にする例がある。以下にカムチベット語3種の例を対比する。それぞれ共通に「穂先」と「帽子」を意味する語である。

Derge : [ˈŋi ˈgo] と [ˈx̥a ˈgo]

Sersul : [ˈŋi ˈgo] と [ˈʒaŋ ˈgo]

Lhagang : [ˈŋi ˈgo] と [ˈʒaŋ ˈgo]

これらの例は複合語の内部に位置する単独では前鼻音である要素が、それを維持するか何らかの変化を見せるかを対比している。Derge 方言と Sersul 方言はそれぞれ異なる一方が子音

33) 星 (2003) における Lhasa 方言, Hongladarom (1996) における rGyalthang 方言など。

34) 直接 rNgawa 方言を全般的に扱ったものは、《阿壩県誌》(1998) 以外見つけられていない。ここでは孫宏開・王賢海 (1987) の記述にしたがって阿壩州のアムドチベット語全般について考える。先行研究の資料としては、華侃 主編 (2002) の dMarthang 方言や賛拉・阿旺措成 (2004) の記述を考える。なお、Migot (1957) にも rNgawa 方言の資料が見られるが、体系的な解説はない。

35) たとえば [ˈm̥do] 「経文」や [ˈm̥d̥ɔŋ k̥ʰaŋ] 「宿」, [ˈm̥dzo] 「雄のゾ」など。

36) ただし、[ˈm̥dze ɸo/ ˈdze ɸo] 「美しい」のように、調音点の異なりが自由変異で現れるものもある。

連続構造を構成しているが、一方で Lhagang 方言は先述のとおり調音点の異なる鼻音として現れている。

以上のような特徴は各方言ごとに明らかにされなければならないが、前鼻音というのは音声実態から見ると、 cC_1V 構造に合致するような発音様式で実現されることが多い。しかし音声実態上主子音構造に合致しない場合もまた、上記のように主子音構造に合致するものと並列に見られるのである。

さて、前鼻音またはそれに準じる音声実態すなわち主子音構造をなす初頭に鼻音を含む組について、先に見た発音様式の音節数の異なりに関する模式化のうち該当部分を取り出し、鼻音要素に対応するものを N と書くと³⁷⁾、以下のように示すことができる³⁸⁾。

タイプ	単音節	複音節初頭	複音節中	音節構造
c'	${}^N\text{CV-}$	${}^N\text{CV-}$	NCV-	主子音構造 $\text{CC}_1\text{V-}/{}^c\text{C}_1\text{V-}$
d'	${}^N\text{CV-}$	${}^N\text{CV-}$	${}^N\text{CV-}$	主子音構造 ${}^c\text{C}_1\text{V-}$

この音声実態上の違いは、実際の傾向から見ればタイプ c' は「鼻音要素 + 後続子音」が有声音の組、タイプ d' は無声音の組が属しやすく、それだけ見ると単に音声レベルでの自由変異を示すだけにとどまってしまう。しかし先のカムチベット語に見られる異なりを音韻的に示すには、この分類は非常に有用であり、音節構造上の違いと考えることが可能である。

4.3 前気音

前気音についての直接的な言及は Sun (1986, 2003) および鈴木 (2004a) において見られる。Sun (1986) では、前気音つき子音を音素に認め、一方 Sun (2003) では前気音を子音連続の 1 種と考えて、別の軟口蓋摩擦音が先行する子音連続との対立を認めている³⁹⁾。

以上の先行研究にあるように、前気音は限られた方言で確認されるものであるように見えるが、筆者は前気音について、さらに多くのアムドチベット語でも確認できるものであり、またいくつかの方言では前気音のみが現れるものと何らかの摩擦音と前気音が自由変異で現れるものの区別があることを実際に確認した。

前気音の特徴としては、その音声実態を考えると、決して後続の子音より明確かつ十分な調音時間をもって発音されることのない音声である。その音声実態の特徴上、複数の音節構造が存在するならば、前気音を単なる子音連続とみなすことは難しい。前気音のみが確認される例はすべて、主子音構造 cC_1V に属すると考えられる。

一般的に摩擦音を初頭とする子音連続を含む音節が語中かつ先行音節が開音節の場合には、主子音構造に属するものならば多少初頭の摩擦音の明瞭化が期待される。しかし前気音のみが現れる場合は一定して前気音が維持され、音質に変化は見られないことも特徴の 1 つである。

Khrika : [ʰkɛ] 「言葉」と [kʰA ʰkɛ] 「口語」

37) この N は、後続子音と調音点が一致すればいわゆる前鼻音になるが、調音点が一致しない場合(多くは [m]) となる) も含むものとする。

38) ここでは rNgawa 方言にみられる子音連続構造をなす [m-] 始まりのものは扱わない。

39) Sun (1986, 2003) の研究と関連して、地域的に近い Sharkhog 方言を扱った Nagano (1980) があるが、この方言では前気音は報告されていない。しかし筆者の調査によれば前気音が確認され、他のアムドチベット語よりも気音部の持続時間が短いものであった。

また、前気音はカムチベット語においても現れうる。以下に Derge 方言, Sershul 方言, Lhagang 方言について、それぞれ共通に「デルゲ」と「先生」を意味する語をあげる。

Derge : [ˈde ^hge] と [ˈge ^hgẽ]

Sersshul : [ˈde ^hge/ˈde ge] と [ˈge ^hgẽ]

Lhagang : [ˈde ge] と [ˈge ^hgẽ]

カムチベット語で見られる前気音はほぼ複合語中に限定されているが、方言ごとに、また語ごとに現われ方が異なる。これらの例に見られる前気音は発音方法や聞こえが非常に微弱であるため、一般的な子音連続とは異なった音声実態と認識できる。カムチベット語の場合は、アムドチベット語などと違って前気音は自由変異で消失が可能であることが多い⁴⁰⁾。先行研究ではカムチベット語で前気音について言及はないが、上の例からみても Lhagang 方言⁴¹⁾では前気音が現れるのは語ごとに決まるため、前気音は無視できない要素であり、音韻上重要な役割を果たすと考えられる。

5 記述に要する音節構造

以上に見てきた音声実態とその特徴から、先行研究において記述のない音節構造による情報の提供がチベット語のいくつかの方言にとって必要性が高いことが示された。音声情報をもとに筆者は5つの構造に分けて考えたが、方言記述に適用するにあたって本来的に求められる音節構造はどのようなものか、整理し考える必要がある。

これまでに述べてきたことから、子音連続を構成する要素について、前鼻音と前気音に関しては他の子音連続と明確に区別されなければならないと考える。その表現方法としては、最初に認めた「主子音構造 ^CC_iV-」と「子音連続構造 CC(G)V-」の2種類が的確に表しているといえる。

5.1 音節構造の差異が明確に現れる方言

以下に比較的音節構造の差異が明確に現れる Khrika 方言と Cherje 方言について、現状と複数の音節構造の必要性について考察する。

5.1.1 Khrika 方言

アムドチベット語 Khrika 農民方言における、先の問題提起の箇所に見た発音上の明瞭さについての異なりは、以下の音節構造を与えて説明ができる。

構造	説明	反映例
^C CV-	子音間に弱母音を含む	> [ɦːˈlɥ] や [ɦːˈlɥN ˈtɹ]
CC(G)V-	弱母音を含みうるが先行子音が弱化可能	> [ɦˈlɥ] や [ˈlɹ pɹ]

40) Sogpho 方言では、前気音は特定の語について脱落することなく必ず現れる。たとえば [tɕu ^hɡu] 「19」などがある。また、中には Sharkhog 方言のように、前気音が現れる特定の語ではそれが消失が可能であることもあるが、脱落するかわりに前気音が属する音節が緊喉音化するなど、他に影響を与えるものも存在する。

以上の例は、「有聲声門摩擦音＋有聲齒茎側面音」という同じ要素の組み合わせにおいて、異なった音声現象を説明できる構造の違いであるといえる。

しかし一方で、初頭子音の聞こえの低い前気音や前鼻音とそうでないものの分類は、以下のようになる。

構造	説明	反映例
$^{\circ}\text{C}_i\text{V-}$	常に初頭子音が弱い	> $[\text{h}^{\text{b}}\text{k}\text{ɛ}]$ や $[\text{b}^{\text{b}}\text{d}\text{ən}]$
$\text{CC}(\text{G})\text{V-}$	各要素が等価またはそれに近似	> $[\text{x}^{\text{b}}\text{ts}\text{ā}\text{N}]$ や $[\text{β}\text{d}\text{e}]$

特にこの分類は初頭が有聲両唇摩擦音になる場合において、先述の1音の例と同様に異なった音声現象を説明できる構造の違いであるといえる。

また、この方言で $^{\circ}\text{C}\text{V-}$ とされているものは、基本的に第2要素が無声音のときは CCV- 構造に、第2要素が有声音のときは $^{\circ}\text{C}\text{V-}$ 構造に相当することが多い。

以上のことから、Khrika 農民方言においては、 $^{\circ}\text{C}\text{V-}$ 、 $\text{CC}(\text{G})\text{V-}$ 、 $^{\circ}\text{C}_i\text{V-}$ の3種類を考えることで、実態の記述に対し有効であることが確認される。しかしながら、音声実態として $\text{CC}(\text{G})\text{V-}$ と $^{\circ}\text{C}(\text{G})\text{V-}$ が単音節か複音節かで異なるものが見られる。このような例が現れるため $\text{CC}(\text{G})\text{V-}/^{\circ}\text{C}(\text{G})\text{V-}$ を考えて、先の $\text{CC}(\text{G})\text{V-}$ と置き換えることができる。

このとき $\text{CC}(\text{G})\text{V-}/^{\circ}\text{C}(\text{G})\text{V-}$ 構造は先に見たように、「主子音構造」と「子音連続構造」のどちらの音声実態も実現させることになる。ある語が主としてどちらの構造に属しているのかは、個別に単音節例と複音節例の音声実態を考えなければならないし、Khrika 方言の全体像を見据えて議論を行う必要があるだろう⁴²⁾。

さて、すでに $\text{CC}(\text{G})\text{V-}/^{\circ}\text{C}(\text{G})\text{V-}$ 構造を考えていれば、特に問題となる第2子音が1音の場合でも弱母音が記述に現れなくとも差し支えないことがいえるため、最終的には CCV- 、 $\text{CC}(\text{G})\text{V-}/^{\circ}\text{C}_i(\text{G})\text{V-}$ 、 $^{\circ}\text{C}_i\text{V-}$ の3種類を考えることができるだろう。

以上のように複数の音節構造を認めると、1音以外にも以下のような違いを明確にすることができる。初頭子音について音韻表記も添えて、異なりを示す。

$[\text{h}^{\text{b}}\text{k}\text{ɛ}]/\text{h}^{\text{b}}\text{k-}$ 「花が咲く」と $[\text{h}^{\text{b}}\text{k}\text{ɔ}]/\text{h}^{\text{b}}\text{k-}$ 「しかる」

$[\text{h}^{\text{b}}\text{t}\text{ɕ}\text{ɛ}\text{x}]/\text{h}^{\text{b}}\text{t}\text{ɕ-}$ 「鉄」と $[\text{h}^{\text{b}}\text{t}\text{ɕ}\text{ɛ}\text{A}]/\text{h}^{\text{b}}\text{t}\text{ɕ-}$ 「髪」

いずれも前者が $^{\circ}\text{C}_i\text{V-}$ 構造、後者が CCV- 構造に対応する。

5.1.2 Cherje 方言

Khrika 農民方言と同様に、Cherje 方言における先の問題提起の箇所に見た異なりやそれに似た例の異なりを示すには、以下の音節構造を与えて説明ができる。

構造	説明	反映例
$^{\circ}\text{C}\text{V-}$	子音間に弱母音を含む	> $[\text{q}^{\text{b}}\text{l}\text{u}]$ や $[\text{h}^{\text{b}}\text{n}\text{a}\text{m}^{\text{b}}\text{x}^{\text{b}}\text{i}]$
$^{\circ}\text{C}_i\text{V-}$	常に初頭子音が弱い	> $[\text{h}^{\text{b}}\text{l}\text{u}]$ や $[\text{h}^{\text{b}}\text{m}\text{e}^{\text{b}}\text{w}\text{A}]$

41) Lhagang 方言と地域的に近いところで話される同じくカムチベット語 Dando 方言でも、前気音は同様に出現し、音声学的にも聞こえがやや明瞭である。出現環境も Lhagang 方言のようにやや決まっている傾向にある。

42) その結論によっては、 $\text{CC}(\text{G})\text{V-}/^{\circ}\text{C}\text{GV-}$ 構造自体を考えなくともよくなる可能性もあるだろう。

以上の場合に Cherje 方言では初頭に半有声口蓋垂閉鎖音が聞かれるものがあるが、それは有声声門摩擦音を自由変異にもつ⁴³⁾。

一方で弱母音を含まない例は、初頭子音の聞こえの低い前気音などと比べると、以下のよう

構造	説明	反映例
^c C _i V-	常に初頭子音が弱い	[^h pɔŋ] や [^h tɕəŋ]
CC(G)V-	各要素が等価またはそれに近似	[ɕɕɔŋ] や [ɸtɔl]

特にこの分類は初頭が有声両唇摩擦音になる場合において、先述の1音の例と同様に異なった音声現象を説明できる構造の違いであるといえる。Cherje 方言で注目できることは、弱母音と初頭わたり音についてである。これらは同一の語に自由変異として現れるが、両者が共起することはない。該当する子音連続に音韻表記も添えて例をあげると、以下のようである。

例：[βʒɛ] と [^hβʒɛ]/βʒ-/「8」

このような例は、弱母音が必ずしも構造的に要求されている音声実態ではなく、子音連続として各子音を明確に発音する際に現れる付属的な要素であると考えることができる。

また、この方言で ^cC_iV- とされているものは、基本的に第2要素が無声音のときは CCV- 構造に、第2要素が有声音のときは ^cC_iV- 構造に相当することが多い。

さらに Cherje 方言の特徴として3子音連続があげられるが、Gが本稿で言及した CCGV- 構造に属さないもののほかに、まったく該当しない3子音連続も存在する。

例：[^hk^wɔŋ]/^hkw-/「命令」(^cC_iGV), [fiⁿma]/fiⁿm-/「傷」など

このような個別事例については、Cherje 方言の全体像を明らかにしつつ行わなければならない事例であると考えられる。

以上のことから、Cherje 方言においては、弱母音を取り立てて表現しない CC(G)V-, ^cC_iV(G)- の2種類を考えることで、実態の記述に対しても音節構造の異なりに対しても有効であるといえる。

さて、以上のように複数の音節構造を認めると、1音以外にも以下のような違いを明確にすることができる。

[^hdɔŋ]/^hd-/「7」と [^hβdɔŋ]/βd-/「妖精」

[^hkɛ]/^hk-/「階段」と [ɕka mo]/ɕk-/「難しい」

[^hme wa]/^hm-/「あざ」と [fiⁿma^w wo]/fiⁿm-/「赤い」

いずれも前者が ^cC_iV- 構造、後者が CCV- 構造に対応する。

なお、Cherje 方言は鈴木 (forthcoming) において個別に音声分析が行われている。

43) ただし逆にすべての有声声門摩擦音が半有声口蓋垂閉鎖音を変異形に持つとはいえない。また、無声口蓋垂閉鎖音がごくまれに無声摩擦音に先行して現れることがある。たとえば、[χsum/q'sum]「3」など。このとき弱母音は聞かれない。

5.2 方言間の差異が音節構造に現れる例

ここでは、音節構造の記述上の重要性について、方言の対照という観点から議論を行う。

例として、rNgawa 方言と Mangra 方言を取り上げ、その音声を概観するとともに音節構造について考察する。前に述べた l 音に関わるものとしては、以下のように Mangra 方言にはまったく音声学的に区別がない。

方言名 \ 語義	歌	竜王
rNgawa	[^ʔ lə]	[^ʰ lə]
Mangra	[filə]	[filə]

rNgawa 方言では両者とも主子音構造で一致しているが、構成している子音要素が異なっている。このとき、rNgawa 方言のみを考えるなら、これらの初頭子音の違いは /^ʔl/-/^ʰl/ としても /ɣl/-/fil/ としてもよいように見える。

しかし後者の記述は rNgawa 方言の特徴を表しているとはいいがたい。rNgawa 方言では、これらの語は主子音構造で現れて初めて rNgawa 方言と考えられるのであって、子音連続構造のように記述をすることは、Mangra 方言の発音様式との区別が表せていないことになる。

特に rNgawa 方言では、先に分類した音声レベルから見た音節構造について、子音連続構造をとるものは相対的に例が少ない。また上記のように、音素レベルでの対立が見られる場合、さらに音節構造について区別を設けることは 1 方言内の記述としては余剰と考えられるかもしれない。しかしながら、音節構造上の違いは 1 方言内にとどまらず、以上のように方言の対照という観点から見ると非常に重要な要素であって、発音様式や音節構造というものがある方言を特徴づける 1 つの要素であることが分かることもある。

そのために、rNgawa 方言の記述においては、主子音構造で実現される音声形を多く持つ方言というように特徴づけることができる。このような意味で音節構造の分類は決して無意味ではなく、一定の機能を担っているといえる。

6 まとめ

これまでの議論から、チベット語に見られる子音連続に関する音節構造は、弱母音の挿入を取り立てて扱わないような以下の種類が存在すると考えられる。

音節構造	対応する音声実態の説明
1 CCGV-	各子音要素が等価な子音連続
2 CCGV-/ ^ʰ CGV-	等価な子音連続か先行子音が弱化し連続を形成しない
3 ^ʰ C _i GV-	常に先行子音が弱化

このうちもっとも重要な、本稿の議論を通して確定できであろう異なりは CCGV- 構造と ^ʰC_iGV- 構造、すなわち「子音連続構造」と「主子音構造」の異なりである。これらは、先行研究にある無表示の子音連続 CCCV- と何らかの子音要素に印をつける ^ʰC_iGV- が、視点や立場の違いではなく 1 言語または方言に両者が備わっているというように考えることもできる。

以上の結果に基づいて、これから個別にチベット語諸方言の記述を行えば、さらに詳細な方

言特徴を見出せることが十分期待される。もちろん、3種の構造のいずれかがある方言では余剰である可能性は否定できない。その点については、各方言が個別に取り上げられて考察されることにより見出さなければならない特徴であると考ええる。

本稿では音声実態をできるだけ忠実に反映することを考えつつ、その実態に見られる違いから音節構造による異なりを指摘した。先行研究と比較すると、本稿の結果は以下のような点で大きな違いが見られる。

1. 先行研究でまったく区別されていない要素の区別が可能

例：1音を含む子音連続など多くの発音様式の異なる子音連続の組み合わせ

2. カムチベット語における子音連続の組み合わせの増加

例：前気音の存在や複合語内での音節初頭子音の変化

このような音節構造の違いの認定は、共時的観点からも、また歴史的観点からもさらに深く議論を行えるだろう。共時的には、チベット語のみならず、多くの子音連続をもつと報告されているギャロン語などの川西走廊諸語の一部にも適用して考えることができる⁴⁴⁾。以上の分析で得られた音節構造に関する視点から、各言語とも音声実態に基づいて再度分析する必要性も指摘できる⁴⁵⁾。歴史的には、格桑居冕(1985)にあるような伝統文法の記述と現代口語諸方言の対比について再考することができるだろう。

謝辞

調査協力をいただいた以下の各位に心から感謝の意を申し上げたい。

ツルティム・ケサン氏、クンチョ・ブンツォ氏、ヤンジェン・ラモ氏、ラモチェ氏、ジャンジン氏、ニマ氏、ツティン・スバ氏、ダワ・タシ氏、ジャムツォ氏、ツァンラゾン氏、肖松英氏、タシ・ドマ氏、タンデンツォ氏、ケサン・ラモ氏、イエシエムツォ氏、ノルツェムゼ氏、ツォメ氏、ツェラ氏、サムテン・ジェンツェン・カルメイ氏、ドルマ・トンドゥブ氏、ジャシエジャ氏、ラモ氏、ゴンボチェ氏、ソナム・ワンジェ氏、キンザン・ドルジ氏

音声資料について

本稿において依拠した音声資料は先の調査協力者の方々によるものと、いくつか文献に付属の音声資料に基づくものもある。

Lhasa 方言：Tournadre & Sangda Dorje (2003)

rDowi 方言：Kalsang Norbu et al. (2000)

44) 鈴木(2004a)では、川西走廊諸語の一部すなわちギャロン語、スタウ語、ゲシツァ語、ダバ語なども含めて議論され、今回得られた結果を十分適用可能であることが示されている。

また、ギャロン語 bTsanlha 方言を扱う Mansier (1983)では、共時的な分析にも通時的な考察にも、音節構造についての問題が複雑に関わりあっていると述べている。

45) このことは川西走廊諸語の共時的記述のみならず、チベット語における議論にも影響を与える可能性がある。これらの言語に現れる子音連続を持つものの中には、チベット文語と非常によく対応関係を残しているものがあり、それらは古期にチベット語から借用した語と考えられている。このような例がチベット語諸方言と文語との対比において示唆的な情報を提供する可能性があるといえる。

付記

筆者による現地調査のうち、2004 年 7-9 月に行ったものについては、平成 16 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (S)「チベット文化圏における言語基層の解明」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 16102001) の援助を受けている。

本稿で言及する方言の名称と分類

方言名はそれぞれ、「読み、本稿での表記、(蔵文の Wylie 方式転写に基づく慣用表記 / 漢語名)」で示す。

1. 中央 / ユーツァン (dBus-gTsang/ 衛藏) チベット語
チベット自治区内の dBus 地区, gTsang 地区, mNgari 地区などで用いられる。
(a) ラサ Lhasa (Lha-sa/ 拉薩) 方言 [dBus 方言]
(b) ティンリ Dingri (Ding-ri/ 定日) 方言 [gTsang 方言]
2. カム (Khams/ 康巴) チベット語
チベット自治区昌都地区, 同区那曲地区, 四川省甘孜藏族自治州, 同省木里藏族自治县, 雲南省迪慶藏族自治州, 青海省玉樹藏族自治州, 甘肅省甘南藏族自治州卓尼県, 同州舟曲県で用いられる。カムチベット語は非常に方言差が大きく, その下位分類には諸説ある。ここでは格桑居晏・格桑央京 (2002) の記述をもとに分類した。(a)-(e) が北路次方言群, (f)-(j) が南路次方言群, (k) が牧民方言群に分類される。
(a) デルゲ Derge (sDe-dge/ 德格) 方言
(b) ダンド Dando (Dar-mdo / 康定地方) 方言
 先行研究では一般にムニャ Minyang (Mi-nyag/ 木雅) 方言として知られている。
(c) ラガン Lhagang (Lha-sgang / 塔公) 方言
(d) セルシュ Sershul (Ser-shul / 石渠) 方言
 Häsler (1999) によると, Sershul 方言は Derge 方言の一部と考えられている。しかし調査結果から見ると, Derge 方言とは音声学的に異なる特徴を備えている。
(e) ソポ Sogpho (Sog-pho/ 梭坡) 方言
(f) リタン Lithang (Li-thang/ 理塘) 方言
(g) チャテン Chaphreng (Phyag-phreng / 郷城) 方言
(h) ダツパ nDabpa ('Dab-pa/ 稻城) 方言
(i) ムリ Muli (Muli / 木里) 方言
(j) ジェダン rGyalthang (rGyal-thang / 香格里拉) 方言
(k) ザト rDzatod (rDza-stod/ 雜多) 方言
3. アムド (A-mdo/ 安多) チベット語
青海省の大部分, 甘肅省天祝藏族自治州, 同省甘南藏族自治州の大部分, 四川省阿壩藏族羌族自治州, および同省甘孜藏族自治州の一部で用いられる。多傑東智 (2004) によると, 大きく牧区方言, 農区方言, 半農半牧区方言に分かれる。(a)-(f) が牧区方言群, (g) が農区方言群, (h)-(l) が半農半牧区方言群に分類される。
(a) ゴルゲ mDzorge (mDzod-dge/ 若爾蓋) 方言
(b) ガワ rNgawa (rNga-ba/ 阿壩) 方言

- (c) ヨコ gYokhog (g.Yo-khog/ 玉科) 方言

瞿霽堂 (1996) や江荻 (2002) ではタウ (rTa'u/ 道孚) 方言と呼ばれている。

- (d) スンチュ Zungchu (Zung-chu/ 松潘) 方言

Zungchu 方言という名称は、松潘県城付近で用いられるものをさす。

- (e) マルタン dMarthang (dMar-thang/ 紅原) 方言

- (f) ツエコ rTsekhog (rTse-khog/ 澤庫) 方言

- (g) ドウイ rDowi (rDo-sbis/ 道緯) 方言

瞿霽堂 (1991) や格桑居冕・格桑央京 (2002) では循化 Xunhua 方言と呼ばれている。

- (h) チェルジェ Cherje (Chos-rje/ 切吉) 方言

この方言は広義のチャプチャ Chabcha (Chab-cha/ 共和) 牧民方言に属する。共和県は農民方言話者もいるが、切吉郷では牧民が多数を占める。本稿では Cherje 方言と呼ぶ。

- (i) マンラ Mangra (Mang-ra/ 貴南) 方言

- (j) レブゴン Rebgon (Reb-gong/ 同仁) 方言

- (k) ティカ Khrika (Khri-ka/ 貴徳) 方言

筆者の協力者によると、Khrika 方言の中に牧民方言と農民方言の両方があり、それぞれ異なるという。本論文では牧民方言の発音について ɕ と印をつける。

- (l) ラブラン bLabrang (Bla-brang/ 拉卜楞) 方言

華侃・龍博甲編 (1993) などでは夏河 Xiahe 方言と呼ばれている。

4. その他のチベット語方言

Sun (2003) などによって言及される、四川省阿壩藏族羌族自治州松潘県、九寨溝県、若爾蓋県などで用いられる方言群をさす。

- (a) ヒヤルコフ Sharkhog (Shar-khog/ 松潘・九寨溝) 方言

Nagano (1980) によれば、この方言の使用域は「松潘から卓尼の間」である。

- (b) アシロン Askyirong (A-skyid-rong/ 阿西茸) 方言

若爾蓋県東部で用いられる。

- (c) ハングコク Zhongu (Zhang-ngu-khog/ 熱務溝) 方言

Sun (2003) による松潘県熱務溝で用いられる方言をさす。

参 考 文 献

- 《阿壩県誌》編纂委員會 [Aba xianzhi bianzuan weiyuanhui] 編 1998 《阿壩県誌》成都：四川人民出版社。
 多傑東智 [rDo-rje Don-grub] 2004 〈安多藏語動詞變化的簡化〉《民族語文》第2期：57-60。
 van Driem, George. 1998. *Dzongkha*. Leiden : Research School CNWS.
 Evans, Jonathan Paul. 2001. *Introduction to Qiang phonology and lexicon: synchrony and diachrony*. Tokyo : ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.
 Gō, Minoru et al. (eds.) 1954. *An Eastern Tibetan dictionary (revised) and a study of the Eastern Tibetan Language with special reference to the initial consonants*. Okayama : Chūgoku Printing Company.
 Häsler, Katrin Louise. 1999 *A grammar of the Tibetan Dege (Sde dge) dialect*. Zürich : Selbstverlag.
 Herrmann, Silke. 1989 *Erzählungen und Dialekt von Diiri*. Bonn : VGH Wissenschaftsverlag.
 Hongladarom, Krisadawan. 1996. Rgyalthang Tibetan of Yunnan: a preliminary report, in : *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* Vol. 19.2/Fall : 69-92.

- 星泉 2003『現代チベット語動詞辞典（ラサ方言）』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
 華侃 [Hua, Kan] 主編 2002《藏語安多方言詞匯》蘭州：甘肅民族出版社。
 華侃・龍博甲 [Klu-'bum-rgyal] 編 1993《安多藏語口語詞典》蘭州：甘肅民族出版社。
 黃布凡 [Huang, Bufan] 主編 1992《藏緬語族語言詞匯》北京：中央民族學院出版社。
 黃布凡 他 1994〈玉樹藏語的語音特點和歷史演變規律〉《中國藏學》第2期：111-134。
 江荻 [Jiang, Di] 2002《藏語語音史研究》北京：民族出版社。
 格桑居冕 [sKal-bzang 'Gyur-med] 1985〈藏語巴塘話的語音分析〉《民族語文》第2期：16-27。
 格桑居冕・格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] 2002《藏語方言概論》北京：民族出版社。
 Kalsang Norbu [sKal-bzang Nor-bu] et al. 2000. *Modern oral Amdo Tibetan*. Lewiston, Queenston and Lampeter : The Edwin Mellen Press.
 Kesang Gyurmé [sKal-bzang 'Gyur-med] 1992. *Le clair miroir : grammaire tibétaine*. Paris : Édition Prajñā.
 亀井孝他編 1996『言語学大辞典 第6巻 述語編』東京：三省堂。
 Kitamura, Hajime. 1977. *Tibetan (Lhasa dialect)*. Tokyo : Asia Africa gengo bunka kenkyūjo.
 北村甫・長野泰彦 1990『現代チベット語分類辞典』東京：汲古書院。
 Mansier, Patrick. 1983 *Lexique et phonologie du gyarong de Tsenla*. thèse de doctorat, École des hautes études en sciences sociales.
 Migot, André. 1957. Recherches sur les dialectes tibétains du Si-K'ang (province de Kham), en : *Bulletin de l'École Française d'extrême-orient*, tome XLVIII : 417-562.
 Nagano, Yasuhiko. 1980. *Amdo Sherpa dialect: a method for Tibetan dialectology*. Tokyo : Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.
 ——— 2003. Cogtse Gyarong. In : Graham Thurgood and Randy J. LaPolla (eds.) *The Sino-Tibetan languages*, 469-489. London and New York : Routledge.
 dPa'-ris Sangs-rgyas. 1998. *brDa-sprod gsal byed ngag-sgron*. Ziling : mTsho-sngon mi-rigs dpe-skrun-khang.
 瞿霽堂 [Qu, Aitang] 1991《藏語韻母研究》西寧：青海民族出版社。
 ——— 1996《藏族的語言和文字》北京：中國藏學出版社。
 gSer-tog sku-'phreng lnga-pa Blo-bzang Tshul-khrims rGya-mtsho. 1957. *gSer-tog sum rtags*. Beijing : Mi-rigs dpe-skrun-khang.
 孫宏開 [Sun, Hongkai]・王賢海 [Wang, Xianhai] 1987〈阿壩藏語語音中的幾個問題〉《民族語文》第2期：12-21。
 Sun, Jackson T.-S. 1986. *Aspects of the phonology of Amdo Tibetan: nDzorge Sceme Xyra dialect*. Tokyo : Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.
 ——— 2003. Phonological profile of Zhongu: a new Tibetan dialect of Northern Sichuan, in : *Language and Linguistics* 4.4 : 769-836.
 孫天心 [Sun, Tianxin] 2003〈求吉藏語的語音特徵〉《民族語文》第6期：1-6。
 鈴木博之 2004a『チベット語及び川西走廊諸語における子音の研究——音聲的特質に依拠した子音連続の分析の試み——』修士論文，京都大学。
 ——— 2004b「ゾンカ語の音聲と音素設定」『ニダバ』第33号：109-118。
 ——— forthcoming「アムドチベット語チャブチャ・チエルジェ牧民方言の音聲分析」『京都大学言語学研究』第23号。
 Tournadre, Nicolas & Sangda Dorje [gSang-bdag rDo-rje] 2003. *Manuel de tibétain standard : langue et civilisation*. Paris : L'Asiathèque.
 贊拉・阿旺措成 [bTsan-lha Ngag-dbang Tshul-khrims] 2004〈安多話與嘉絨話對比分析〉《贊拉・阿旺措成論文集》246-319. 成都：四川民族出版社。
 王双成 [Wang, Shuangcheng] 2004〈安多藏語複元音韻母的特點〉《民族語文》第3期：34-37。
 Wolfenden, Stuart N. 1929. *Outlines of Tibeto-Burman linguistic morphology*. London : The Royal Asiatic Society.

Elements of Space Grammar in Leggbó*

NARROG, Heiko

Tohoku University

UDOH, Imelda

University of Uyo

This paper aims to give a description of the basic elements of the grammar of space in a hitherto virtually undescribed language, the Upper Cross language Leggbó of the Niger-Congo phylum. The areas under investigation are deictics, topological relations, caused positions, and motion verbs. In addition to making use of conventional elicitation methods, we also employed tools for the exploration of spatial language developed at the Max Planck Institute for Psycholinguistics, Nijmegen; tools which are much more systematic than anything previously available to individual researchers and fieldworkers. The results show a strong tendency for Leggbó to express topological relations in terms of the activities which bring about the topological relations, rather than in terms of the stative relationship between the figure and the ground involved. Consequently, prepositions and locative nouns play only a minor role. There is no particular word for the concept 'under,' which is mostly expressed as 'inside.' Complex motion events are expressed through serial verb constructions. With respect to Talmy's typology of motion verbs, one can observe a slight preference for the expression of manner over path.

1. Goals of this paper
2. Contents
3. The language under investigation
4. Methodology and conventions
5. Locative Deictics
6. Basic grammatical means for the expression of topological relations
7. Use of the expressions for topological relations
8. Caused positions
9. Motion verbs
10. Transitive motion
11. Wrap-up

Keywords: grammar of space, deictics, topological relations, caused positions, motion verbs

1. Goals of this paper¹⁾

The primary goal of this paper is to provide a preliminary description of the grammar of space of Leggbó, an Upper Cross language of the Benue-Congo branch of the Niger-Congo language phylum. The area of the expression of spatial relationships is of particular interest for the semantic description of languages because of its basicness for language and cognition. The description is part of a larger project of the description of this hitherto virtually undescribed language. It is in large parts based on the cognitive framework for the study of grammar of space developed at the Max Planck Institute for Psycholinguistics, Nijmegen (henceforth abbreviated as MPIN).²⁾ The Language and Cognition group at this institute has developed on a grand scale tools for the cross-linguistic analysis of space and cognition which are much more systematic than, and go far beyond, the possibilities previously available to individual researchers.

In addition to the purely descriptive side, we will try to reach some generalizations with respect to the language of space in Leggbó, and point out those aspects which seem to be of particular typological relevance.

2. Contents

The following two sections will provide brief information on Leggbó, the language under investigation and the methods of description, in particular the framework of research developed at Nijmegen. Section 5 gives a brief overview over spatial deictics. Section 6 will discuss the basic grammatical means employed for the expression of static spatial scenes. Section 7 provides additional data for the study of topological relations in Leggbó, based on the MPIN questionnaire. Section 8 will do the same for caused positions, hence dealing with the interface between the conceptualization of dynamic and static spatial scenes. The last two sections will introduce the expression of dynamic scenes, namely motion verbs, and transitive verbs of moving objects.

3. The language under investigation

As mentioned above, Leggbó is an Upper Cross language of the Benue-Congo branch of the Niger-Congo language phylum. It is spoken by about 60,000 people in ABI and Yakurr Local Government Areas of Cross River State of Nigeria (Southeastern Nigeria).³⁾ Upper Cross languages are, in general, not satisfactorily documented. Pre-

-
- 1) We wish to express our deep-felt gratitude to Larry Hyman (University of California Berkeley) who has initiated and organized the project of the description of Leggbó, and has provided us with invaluable information and support. Magnus Wilson (Central University of Nationalities, Peking,) kindly took care of the English proof reading. We appreciate the valuable comments that we received from two anonymous reviews for JAAS.
 - 2) The MPIN, and Eric Pederson, University of Oregon, have generously supplied field manuals.

liminary grammatical descriptions exist for Lokaa of the Loko subbranch⁴⁾ and Mbembe of the Mbembe-Leggbó subbranch.⁵⁾ Leggbó is a tone language, with three level tones, high, mid, and low. They are rendered here as is common with accents, e.g. /ó/ (high), /o/ (mid), and /ò/ (low), respectively. Basic word order is SVO, SOV occurring mainly in negation. Subjects are obligatorily marked as prefixes on the verb.

4. Methodology and conventions

The data presented here were elicited with two types of methods. About half of the data were obtained by conventional elicitation, by finding the expression for sentences given in English or situations described in English. This applies for the data in sections 6, 9 (except 9.1.), and 10. These data also contain incidental evidence, such as data from elicitation on different topics or, more rarely, from stories. The other data, namely those from sections 5, 7, 8, and 9.1 were obtained by employing various picture book and video questionnaires developed at MPIN. The questionnaires developed at MPIN are the output of the “Spatial Language and Cognition” project running at the institute since 1992. This project has been extremely successful resulting in numerous qualitatively outstanding publications.⁶⁾ With a large number of scientists participating in the same project, the language of space has been explored in unprecedented systematicity and depth, driven by the motivation to go beyond surface phenomena and link the results to broader issues in areas such as language acquisition⁷⁾ and linguistic relativity.⁸⁾

For the purposes of the present research, the scenes were either re-enacted in real space and with real objects, or shown as pictures. These picture books and videos are not reproduced in the present article.⁹⁾ For one thing, this would be quite impossible within the limited space available. For another thing, this is not really necessary, because the decisive characteristics of the scenes can be described sufficiently verbally. The source of the Leggbó data is Dr. Imelda Udoh of the University of Uyo, Nigeria. We decided to indicate ungrammaticality by “??” instead of “*”, because Dr. Udoh found it often hard to exclude the possibility that an “ungrammatical” expression would be acceptable under very specific pragmatic circumstances.

5. Locative Deictics

We start here with a very basic area in the language of space, the deictics. We cannot

3) Udoh 2000. The data concerning the location of Leggbó provided in the *Ethnologue* (Grimes 2000) are outdated.

4) Iwara 1982.

5) Barnwell 1969.

6) e. g. Pederson et al. 1998, Levinson 2003, Levinson et al. 2003.

7) e. g. Bowerman 1996.

8) e. g. Levinson 1996a.

9) They are available on the following URL: <http://www.mpi.nl/world/data/fieldmanuals/STIMKITS/>

do full justice here to the whole deictic system of Leggbó, which would at least require a lengthy paper of its own. We will limit ourselves here to dealing with the most basic core spatial deictic notions, which are captured in the following MPIN questionnaire.

5.1 The questionnaire

The questionnaire used is a 1999 revised and improved version of a 25 picture-scene questionnaire designed by David Wilkins. It aims to systematically vary spatial situations along three parameters which its creator has identified as being most fundamental in the conceptualization of spatial deixis. These three parameters are (1) speaker-anchoredness vs. addressee-anchoredness vs. speaker&addressee-anchoredness vs. other-anchoredness; (2) distinctions in distance from speaker; and (3) distinctions of visibility vs. non-visibility.¹⁰⁾ Other factors that might influence the choice of encoding, such as physical contact between the speaker and the object, attention of the speaker, and gesturing, are marginally included in the instructions, or can be added by the investigator.

5.2 The data

The data obtained through the use of the questionnaire are listed below. The verbal description of the scene is the description provided by Wilkins. In elicitation, the scenes were re-enacted with actual objects in actual space. It turned out that all scenes could be covered by just two deictic terms, namely *amma* and *ámme*. We thus divide the scenes according to whether *amma* or *ámme* are used for them, and within that grouping list them according to the sequence in the questionnaire. The numbers in brackets refer to the number in the questionnaire. They are given in square brackets to distinguish them from the numbers of examples in our paper which are given in round brackets. In the data, speaker is abbreviated as “spkr”, addressee as “addr”.

amma is used when the speaker refers to:

- her/his own body part [1]
- a movable object in contact with her/his body [3]
- an object close to her-/himself and visually not easily accessible to the addr [6]
- an object close to her-/himself and visually easily accessible to the addr [7]
- an object that is in equal, short distance from both spkr and addr, between them [8]
- an object that is in equal but long distance from both spkr and addr, between them [17]
- an object outside the door in equal, short distance from both spkr and addr [20]
- an object outside the house, closer to spkr than to addr, who is outside the house [22]

ámme is used when the speaker refers to:

- addr's body part [2]

10) Wilkins 1999: 1.

- a movable object in contact with addr's body, pointing at it [4]
- a movable object in contact with addr's body, not pointing at it [5]
- an object in front of addr and visible to the spkr [9]
- an object close to the addr and visually not easily accessible to him-/herself [10]
- an object behind her-/himself, and visually easily accessible to addr, but not spkr [11]
- an object that is in equal, mid-distance in front of spkr and addr [12]
- an object that is far from both spkr and addr, with a third person, but clearly visible [13]
- an object that is far from both spkr and addr, between spkr and addr on one side, and a third person on the other side [14]
- an object that is far from both spkr and addr, with a third person, and not visible [15]
- an object that is far from spkr with the addr, but clearly visible [16]
- an object that is far from spkr with the addr, and not visible [18]
- an object that is inside a house, distant from addr who is also inside the house, but close to the spkr who is looking at it through a window [19]
- an object outside the door, in mid-distance from spkr and addr but closer to spkr [21]
- an object visible up in the hills, several kilometers away [24]
- an object up in the hills, invisible, several kilometers away [25]

5.3 Some generalizations and conclusions

amma is used for speaker's body parts, objects attached to speaker's body, and objects that belong to a common space between speaker and addressee. *ámme*, in contrast, looks like the unmarked term, as it can be used for all other scenes. It denotes things belonging to the addressee physically or in terms of space, and things that belong neither to the speaker's nor the addressee's space, including things far away. Thus, with respect to the three basic parameters named above, the Leggbó deictics *amma* and *ámme* are first and foremost speaker-vs. addressee-anchored. Secondly, distance plays a role, since *amma* is used with objects within an equal, but short distance to speaker and addressee while *ámme* is used when the distance to addressee and speaker becomes longer. Visibility is not an obvious factor.

On the other hand, the designation by *amma* vs. *ámme* may change if the speaker directly touches an object when pointing at it. The objects in scenes [2], [4], [5] for which otherwise *ámme* is used are referred to as *amma* if the speaker touches them. In contrast, mere pointing doesn't seem to make a difference, except for scene [19]. Here, pointing (putting her/his hand through the window) would give the speaker a physical presence in the space of the object that (s)he otherwise doesn't have. Another factor that the questionnaire draws attention to, namely whether there is a difference when the addressee is supposed to know an object and/or is supposed to be aware of its presence,

does not seem to be relevant in the choice of the deictic marker.

6. Basic grammatical means for the expression of topological relations

Unlike most of the data in the later sections, the data presented here have been collected through conventional elicitations. Although there is no contradiction with the data obtained through the visual tasks of the MPIN questionnaires, it is interesting to see that some expressions that are less salient in the conventionally elicited data became more salient in the picture book tasks, which are probably closer to actual language use. We will refer to this point again in sub-section 5.3.

6.1 Basic locative construction

In the MPIN framework it is assumed that languages have a default kind of construction for the expression of spatial relations, a construction that is used in unmarked cases and more frequently than others. It is the construction used in answers to “where...”-type questions.¹¹⁾ In Leggbó, the following construction can be identified as the basic locative construction (BLC):

V PREP (LOCN) N

V stands for verb. In fact, there is a specific verb which is fairly neutral with respect to specific spatial configurations, and this is the locational verb *kkù* ‘be, stay’. PREP stands for one of the two general locational prepositions *ńke* or *ìì*, which are explained below in a little more detail (6.2). The optional locative noun (LOCN) specifies a frame of reference or a topological relationship, and N the point of reference for the spatial relationship. The nouns also are described in their own subsection below (6.3). We will not go into much detail there, however, because in section 7 numerous examples of their use will be provided. Finally, subsection 6.4 provides a list of verbs other than *kkù* that feature prominently in spatial scenes.

6.2 Locative prepositions

Leggbó only has four prepositions, two of which have a spatial function. *ńke* is the most natural choice for the locative preposition slot in the BLC, but it can be replaced by *ìì*, or the combination of *ńke ìì* in correlation with any locative nouns. Thus,¹²⁾

- (1) *ńwɛnɛ sɛ ɛ-kkú ńke gɛzɔ ɛkɔpokolɔ#*
 book DEF 3SG-be LOC top.of table
 ‘The book is on the table’

is equivalent to:

- (2) *ńwɛnɛ sɛ ɛ-kkú ìì gɛzɔ ɛkɔpokolɔ#*,

11) cf. Levinson et al. 2003: 486.

12) The following abbreviations are used in the glosses: LOC, locative; DEF, definite article; 1,2,3, first, second, third person; SG, singular; PL, plural; DIM, diminutive; PRG, progressive; IMP, imperative; GER, gerund. # indicates the end of an utterance.

where *íjke* is replaced by *ìì*, or:

- (3) *ɲwɛnɛ sé e-kkú íjke ìì gèzɔ ekkpokolo#*,

where both prepositions occur together. Very general and easily inferable locations, like ‘at’, ‘in’, or ‘on’, do not need to be further specified by a locative noun. Thus, the following sentences without locative noun are also acceptable as the expression of the same meaning as the sentences above:

- (4) *ɲwɛnɛ sé e-kkú íjke ìì ekkpokolo#*

- (5) *ɲwɛnɛ sé e-kkú íjke ekkpokolo#*

- (6) *ɲwɛnɛ sé e-kkú ìì ekkpokolo#*

Furthermore, *ìì* can fuse with the initial vowel of the following noun, as in the following example:

- (7) *ɲwɛnɛ sé e-kkú eèkkpokolo#*

eèkkpokolo is the result of a fusion of *ìì* with *ekkpokolo*.

A noun alone without any prepositional marking, on the other hand, is not acceptable in the case of static relationships:

- (8) *??ɲwɛnɛ sé e-kkú ekkpokolo#*

In anticipation of the later sections dealing with dynamic scenes, we shortly refer here to the use of prepositions in dynamic scenes as well. Basically, the same combination of preposition(s) and locative nouns that is used to encode static spatial relations, is also used to encode dynamic situations. Consider the following example:

- (9) *wàhé sé ɛ-sɛɲi íjke ñzàm èttɔ sé#*
 child DEF 3SG-go LOC back.of house DEF
 ‘The woman went behind the house’

If the goal of motion does not need any further topological specification (general ‘to’), the preposition can be omitted without any change of meaning. The sentence

- (10) *ɛ-sɛɲi ɛppya#*
 3SG-go market
 ‘(S)he went to the market’

is equivalent to:

- (11) *ɛ-sɛɲi íjke ɛppya#*

Regardless of the stativity/dynamicity of the scene, *íjke* can be abbreviated to *kɛ*:

- (12) *ɲwɛnɛ sée-kkú kɛ ekkpokolo#*

- (13) *ɛ-sɛɲi kɛ ɛppya#*

As the second example demonstrates, where the regular form of the verb is *sɛɲi*, the high tone of the deleted segment /íj/ is “inherited” by the preceding syllable.

The exact conditions under which the initial /*ɲ*/ of *ɲke* can be omitted have not been established. It seems clear, however, that these are pragmatic-prosodic in nature, rather than being predictable from specific grammatical, lexical, semantic, or phonotactic features.

There is just one position where /*ɲ*/ cannot be elided, namely sentence-initially:

- (14) *wàhé sɛ́ e-kkú daʔ# - ɲke/*kɛ ɛ̀ttɔ#*
 child DEF 3SG-be where LOC house
 ‘Where is the child?’ - ‘In the house’

The fact that Leggbó has two general locative prepositions (and there are no others) that not only vie for the same slot but can also co-occur, is remarkable. It seems likely that *ii* is the older one and is in the process of being reinforced and eventually replaced by *ɲke* as a locative preposition. *ii* is more “inside” the noun phrase than *ɲke* (cf. *ɲke ii ɛ̀ttɔ* vs. *??ii ɲke ɛ̀ttɔ*), and it is far less common. Furthermore, it is being attenuated by fusion with the initial syllable of the following noun, and as such in the “danger” of getting reduced to zero.

While *ɲke* is undoubtedly of deictic origin, it seems reasonable to assume that *ii* originally expressed a topological relationship, namely containment. Although it can replace/or co-occur with *ɲke* in almost any position, those cases where it occurs naturally are rather limited, and mostly refer to some kind of containment or enclosure:

- (15) *kàa-yé kubbà (kɛ) ii ɛ̀ttɔ#*
 carry.IMP-3SG enter LOC LOC house
 ‘Carry it into the house!’

- (16) *mèmmɛ (kɛ) ii ibèn#*
 remove.IMP LOC LOC room
 ‘Remove it from the room!’

6.3. Locative nouns

The following represents a list of nouns that function in the basic locative construction to specify the spatial relation between a figure and a ground that have been identified in Leggbó. Their meaning as a noun is given, and then their equivalent(s) in English prepositions and other spatial expressions:

- | | | |
|-----------------------------------|---|-----------------------|
| <i>ɛ̀zɔ</i> ‘top of’ | ⇒ | ‘on’, ‘above’, ‘over’ |
| <i>ɛ̀tbbà</i> ‘side’ | ⇒ | ‘besides’, ‘along’ |
| <i>ɲzám</i> ‘back’ | ⇒ | ‘behind’ |
| <i>esovvé</i> ‘forehead’, ‘front’ | ⇒ | ‘in front of’ |
| <i>etekpan</i> ‘outside’ | ⇒ | ‘outside of’ |
| <i>littol</i> ‘inside’ | ⇒ | ‘inside of’ |
| <i>livil</i> ‘left’ | ⇒ | ‘to the left of’ |
| <i>(g)edubɔ</i> ‘right’ | ⇒ | ‘to the right of’ |

envém ‘center’ $\Rightarrow$ ‘in the middle of’, ‘between’

As can be seen, the number of locative nouns is rather limited (9), and each of them covers a large area. For instance *èzɔ* ‘top of’ is both appropriate if the figure (object) is in physical contact with the ground, like a book on the table, or not, like a bird flying over the house. There is no single expression corresponding to ‘under’ in English; *littol* is used when the ground can be conceptualized to enclose the object. This can be observed from the examples of concrete spatial scenes provided in the next section.

Below two examples are given with the basic locative construction and different locative nouns:

- (17) *wàhé sé e-kkú òké èbba ettɔ sé#*
 child DEF 3SG-be LOC side.of house DEF
 ‘The child is (stands) besides the house’

- (18) *wàhé sé e-kkú òké ñzàm ettɔ sé#*
 child DEF 3SG-be LOC behind house DEF
 ‘The child is (stands) behind the house’

The position of LOCN and N can be reversed without obvious difference in meaning:

- (19) *wàhé sé e-kkú òké ettɔ ñzàm sé#*
 child DEF 3SG-be LOC house behind DEF
 ‘The child is (stands) behind the house’

However, while the noun following the locative noun undergoes tone sandhi, the locative noun following the noun doesn’t.

6.4. Verbs of position and body posture

Besides the very general *kkù* ‘be, stay’, the following verbs in Leggbó denote either a static position, or both a static position and an action that leads to that position:

- be* ‘stand’ for humans; objects when emphasizing vertical position, also the sun; cf. *venne* ‘stand up’
mìna ‘lay’, ‘lie’, ‘lie down’ (tr./itr.)- for humans, and objects when emphasizing horizontal position
tòghɔ ‘sit’, ‘sit down’
zèèné ‘hang (on to)’ (tr./itr.)
pèèghé ‘lean against’ (tr./itr.)

The following sentence exemplifies the use of one of these verbs, *be* ‘stand’:

- (20) èttɔ sɛ e-be ɣkɛ gèvè èbba#
 house DEF 3SG-stand LOC lake side
 ‘The house stands at the lakeside’

7. Use of the expressions for topological relations

7.1. Questionnaire on topological relations

This section demonstrates how the grammatical means of expression sketched above, in combination with other means not mentioned yet, feature in the conceptualization of spatial relations in Leggbó. We do so by presenting the results of the questionnaire for static topological relations developed at the MPIN by Pederson, Wilkins and Bowerman in 1993.

According to its three creators, the questionnaire is “intended for an open-ended exploration of how different languages use their linguistic resources to ‘carve up’ the domain of topological spatial relations.” It is seen as a step towards “(i) identifying a language’s total resources for encoding static topological relations [...], (ii) delimiting the pragmatics of such resources; and (iii) discovering the semantics of spatial terms”.¹³⁾ The picture series focuses on figure-ground relations like contact, support, adjacency, inclusion and attachment. It does not claim to be exhaustive, however, and the authors admit the existence of some blind spots (underrepresentation or non-representation of certain relations). For instance, there is a certain bias towards what we might call ‘on’ – scenes, with a single figure being supported by or attached to a single ground.

The structure of the data given below is as follows. On the left side, a phrase in English describes the focus of the scene, which in the questionnaire is presented as a drawing. The number in brackets refer to the number of the drawing in the questionnaire. Often one picture is used to illustrate different spatial relationships, changing the viewpoint. Therefore the same scene may appear more than once in the data, since the results are organized semantically. The 24 headings (“figure supported by (more or less) horizontal surface” etc.) render what Bowerman and Pederson call “situational classes,” groupings to whose members most languages give a uniform grammatical treatment in their experience.¹⁴⁾

The sentences on the right describe the scene in Leggbó. When more than one expression for the same scene is possible, all expressions are provided. So are other related expressions that seemed relevant. Particularly, many scenes can be expressed both as a transitive action and an intransitive event. When a word or concept was not available in Leggbó, it was replaced by a similar concept. Frequently, the most natural way to express static scenes in Leggbó is as a relative clause, resulting in different tones, but the renditions below with a few exceptions have been unified to main clause phonology.

13) Pederson, Wilkins and Bowerman 1993: 1.

14) Pederson, Wilkins and Bowerman 1993: 7.

7.2. The data

7.2.1. Figure supported by (more or less) horizontal surface

pencil on desk [59]	ètti sé e-kkú ke ekkpokolo sé# stick DEF 3SG-be LOC table DEF ‘The stick is on the table’
cup on table [1]	àmóò e-kkú ke ekkpokolo# cup 3SG-be LOC table ‘A cup is on a table’
book on shelf [8]	ɣwènè e-nyíná ke ekkpokolo# book 3SG-place.on LOC table ‘A book is placed on a table’
tablecloth on table [29]	eggò e-bémmí ke ekkpokolo# cloth 3SG-cover LOC table ‘A cloth covers a(on a)table’
man on roof [34]	ènàn e-bé ke èttɔ èzɔ# person 3SG-stand LOC house top ‘A person stands on the top of a house’
cat on mat [40]	ànwaj e-tòghò ke likól# cat 3SG-sit LOC mat ‘A cat sits on a mat’
hose on tree stump, coiled [23]	àkpɔ e-daní ke ètti dɔ# hose 3SG-spin.around LOC tree stump ‘A hose spins around a tree stump’ cf. wadum sé e-dani àkpɔ ke man DEF 3SG-spin.around hose LOC ètti dɔ# tree stump ‘The man spins a gum hose around the tree stump’
hose on tree stump, draped [43]	àkpɔ e-zééné ke etti dɔ# hose 3SG-hang LOC tree stump ‘A hose hangs on a tree stump’

cf. only with animates:

zð ε-yðηηɹí kε etti dð#
 snake 3SG-pass LOC tree stump
 ‘A snake passes on a tree stump’

tree on top of mountain [65] *ètti e-bé kε ekkpon èzɔ#*
 tree 3SG-stand LOC mountain top
 ‘A tree stands on a mountain top’

tree on side of mountain [17] *ètti e-mení kε ekkpon ebbà#*
 tree 3SG-grow LOC mountain side
 ‘A tree grows on a mountain’s side’

hat on head [5] *ε-ηwá esì letól#*
 3SG-wear bag head
 ‘X wears a hat (bag of head)’
 cf. *??esì letól ε-ηwá kε letól#*
 bag head 3SG-wear LOC head
 ‘A hat is worn on the head’

boat on/in water [11] *kwal ḡkε lesaηal#*
 boat LOC river
 ‘A boat on a river’

7.2.2. Figure supported by hanging

clothes on line [37] *áwìlì, kkàkki, ibɔsðm ba-yáani*
 woman’s.gown trousers shirt 3PL-dry
ḡkε gèzí#
 LOC rope
 ‘A female gown, trousers, and a shirt dry on the rope’
 less naturally:
àwìlì, kkàkki, ibɔsðm ba-zéene
 woman’s.gown trousers shirt 3PL-hang
ḡkε gèzí#
 LOC rope
 ‘A female gown, trousers, and a shirt hang on a rope’

flag on mast [56]	<i>eggò ε-zéené kε ètti#</i> cloth 3SG-hang LOC pole 'A cloth hangs on a pole'
pendant on chain [57]	<i>èdzè ε-zéené kε ezi#</i> bead 3SG-hang LOC thread 'A bead hangs on a thread'
coat on hook [9]	<i>nkon ε-wai ýkε eppi#</i> coat 3SG-hang LOC wall 'A coat hangs on the wall'
earring in ear [69]	<i>èdzè litól ε-zéenε ýkε litól kolo#</i> bead ear 3SG-hang LOC ear hole 'A bead of ear hangs in the ear hole' or: <i>èdzè litól è-ýwá kε litól#</i> bead ear 3SG-wear LOC ear 'A bead of ear is worn on ear'
apples on tree [45]	<i>nttiwómá kε ètti#</i> fruit LOC tree 'Fruits on a tree' <i>nttiwómá ba-wómi wómózi#</i> fruit 3PL-fruit fruit-GER.PLU 'Fruits fruit fruiting' ¹⁵⁾
leaves on twig (hanging down)[41]	<i>ligwàl ε-ggama kε ètti#</i> leave 3SG-hang.on LOC twig 'Leaves hang on a twig'
apple on twig [27]	<i>nttiwómá e-kkú kε ètti#</i> fruit 3SG-be LOC twig 'A fruit that is on a twig'
picture on wall [44]	<i>ndisá ε-zéenε ýkε èppi#</i> picture 3SG-hang LOC wall 'A picture hangs on the wall'

15) The stem meaning 'fruit' is used both as a noun and a verb, and furthermore in the gerund of the verb. The same expression in English would clearly be infelicitous.

7.2.3. Adhesion

stamp on letter [3]

ligwàl *ε-ggama* *íjke* *ηwènè#*

leaf 3SG-stick LOC book

‘A leaf sticks on a book’ (also used if leaf/stamp wet)

also: *ηwènè* *awɔɔ* *vɔm* *e-bbi*

book ASS thing 3SG-blacken

èbbi *í-ke#*

3SG-blacken.GER LOC

‘A book on which it blackens black’ (= ‘A book on which there is something’)

7.2.4. Wet or smeary substance on a surface

raindrops on window [48]

àsi/ètewa *ε-tɔɔηɔzi* *íjke* *lèmmàl#*

water/rain 3SG-drip.PRG LOC window

‘Water/rain is dripping on the window’

also: *ètewa* *e-ttí* *ke* *lèmmàl#*

rain 3SG-rain.PRG LOC window

‘Rain is raining on a window’

butter on the knife [12]

ízððm *e-bbi* *èbbi#*

knife 3SG-blacken blacken.GER

‘A knife blackens black’

or: *ànàn* *ε-ffàgha* *íjke* *ízððm#*

oil 3SG-stick.onto LOC knife

‘Oil is on a knife’

7.2.5. Marks on a surface

picture on stamp [28]

cf. *gwanɔ* *sé* *e-kkú* *ke* *ndisa#*

woman DEF 3SG-be LOC picture

‘The woman is on the picture’

writing on letter [3]

ηwènè *ba-nyani* *vɔm* *í-ke#*

book 3PL-write thing LOC

‘A book on which they wrote things’

stain(/letters) on shirt [68]

ba-nyáni *vɔm* *íjke* *ibbɔsðm#*

3PL-write thing LOC shirt

‘They wrote things on the shirt’

7.2.6. Living creature on (nonhorizontal) surface

snail on wall [52]	<i>èkwò ε-danɲí kε èppi#</i> snail 3SG-crawl LOC wall 'A snail is crawling on the wall'
spider on wall [52]	<i>ndòdòwe sé ε-ddanɲi ɲke èppi#</i> insect DEF 3SG-crawl LOC wall 'The insect is crawling on the wall'
spider on the ceiling [7]	<i>ndòdòwe ε-ggama ɲke ñttókpan#</i> insect 3SG-crawl LOC ceiling 'An insect perches on the ceiling'

7.2.7. Figure both tightly attached to and projecting from ground

lamp affixed to ceiling [63]	<i>etòlikan ε-zéene èzene ɲke ñttókpan#</i> lamp 3SG-hang hang.GER LOC ceiling 'A lamp hangs hanging on the ceiling'
telephone on wall [25]	<i>ɲkalikan ε-zéene ɲke èppi#</i> bell 3SG-hang LOC wall 'A bell hangs on the wall'
shelf on wall [8]	<i>ébúkkpò ε-zéene ɲke èppi#</i> board 3SG-hang LOC wall 'A board hangs on the wall'
handle on cupboard [61]	cf. <i>lèbɔl lemàl#</i> handle door 'Handle of door'
hook on wall [50]	cf. <i>vɔ̀ banà-kaa-zèènè vɔ́m#</i> thing 3PL.HAB-hang thing 'A thing that they usually use to hang sth on'
leaf on twig (upright) [41]	<i>ligwàl ε-ggama kε ètti#</i> leaf 3SG-hang LOC twig 'Leaves hang on a twig'
flag on mast [56]	<i>eggò ε-zéene ɲke ètti#</i> cloth 3SG-hang LOC pole 'A cloth hangs on/from a pole'

clothespin on line [33]

aggà è-ggama ke gèzi#
 nail 3SG-stick LOC rope
 ‘A nail sticks on the rope’

7.2.8. Tied to - relations

balloon on stick [20]

àkpɔ ε-zéene ýke ètti#
 balloon 3SG-hang LOC stick
 ‘A balloon hangs on a stick’

flag on mast [56]

eggɔ ε-zéene ýke ètti#
 cloth 3SG-hang LOC pole
 ‘A cloth hangs on/from a pole’

strap on purse [66]

esi è-kaa lèbɔl#
 bag 3SG-carry.SRA handle
 ‘A bag that carries a handle’
lèbɔl esi#
 handle bag
 ‘A handle of a bag’

cord on telephone [25]

èzi ε-zéene ýke nkalikaŋ#
 rope 3SG-hang LOC bell
 ‘A rope hangs on the bell’

strings on mat [40]

èzizibé ε-zénni ýke likól#
 small.rope 3SG-hang.PRG LOC mat
 ‘Strings are hanging on a mat’

7.2.9. Encirclement

bandana around head [45]

eminakol ε-bayi èzi ýke letól#
 girl 3SG-tie rope LOC head
 ‘A girl has a rope tied on her head’

ribbon around candle [4]

èkkwen awɔaa ba-bayi vɔm í-ke#
 fire ASS 3PL-tie thing LOC
 ‘A fire on which they tied something’

ring on finger [10]

àgbanɔnɔɔ ε-ɣwá ýke inɔnɔɣ#
 ring 3SG-wear LOC finger
 ‘A ring is worn on a finger’

also: gwànwó sé ε-ηwá agbanɔnɔy íkε inɔnɔy#
 woman DEF 3SG-wear ring LOC finger
 ‘The woman wears the ring on her finger’

hose around stump [55]

zð ε-daní kε ètti dð#
 hose 3SG-wrap LOC tree stump
 ‘A hose wraps around the tree stump’

fence around house [15]

ηkátti e-kko èttɔ#
 fence 3SG-encircle house
 ‘A fence encircles a house’

7.2.10. Envelopment

shoe on foot [21]

ε-ηwá ákpaikon#
 3SG-wear shoe
 ‘X wears a shoe’

7.2.11. Clothing on

hat on head [5]

ε-ηwá esì letól#
 3SG-wear bag head
 ‘X wears bag of head’

shoe on foot [21]

ε-ηwá ákpaikon#
 3SG-wear shoe
 ‘X wears a shoe’

belt on [42]

èzi e-ssíla/bai íkε livɔl#
 rope 3SG-tie LOC belly
 ‘A rope ties on her belly’

necklace on [51]

eminakol ε-ηwá èdzè lekòòl#
 girl 3SG-wear bead neck
 ‘A girl wears a necklace’

ring on [10]

agbanɔnɔy ε-ηwá íkε inɔnɔy#
 ring 3SG-wear LOC finger
 ‘A ring is worn on a finger’

earring on [69]

èdzè litɔl e-kkú kε litɔl#
 bead ear 3SG-hang LOC ear
 ‘A bead of ear hangs in the ear’

èdzè lītɔl ɛ-ɣwá kɛ lītɔl#
 bead ear 3SG-wear LOC ear
 ‘A bead of ear is worn on the ear’

7.2.12. Complete containment

dog in kennel [71]

ènva e-kkú kɛ èttɔ littol#
 dog 3SG-be LOC house inside
 ‘A dog is inside a house’

fish in bowl [32]

ètèrn e-kkú kɛ ɪ̀ðhɔn así#
 fish 3SG-be LOC pot water
 ‘A fish is in a water pot’

rabbit in cage [54]

ànwáy e-kkú kɛ èkpon#
 cat 3SG-be LOC box
 ‘A cat is in a box’

apple in bowl [2]

ìsokòlo e-kkú kɛ ákkpɔɲ#
 orange 3SG-be LOC plate
 ‘An orange is on a plate’

owl in tree/hole [67]

lìzɔl e-zuí kɛ ètti littol#
 bird 3SG-dwell LOC tree inside
 ‘A bird dwells inside a tree’

apples on/in tree [45]

nttiwɔ́má kɛ ètti#
 fruit LOC tree
 ‘Fruits on a tree’
 cf. also: *nttiwɔ́má ba-wɔ́mì wɔ́mɔ́zi#*
 fruit 3PL-fruit fruit-GER.PLU
 ‘Fruits fruit fruiting’

7.2.13. Partial containment

cork in bottle [62]

èkkpa e-bémmí kɛ ekpoma#
 cover 3SG-cover LOC bottle
 ‘A cover covers the bottle’

box in bag [14]

èkpokpo-wé e-kkú kɛ ésì#
 box –DIM 3SG-be LOC bag
 ‘A small box is in a bag’

dog in basket [46]	<i>ènvva e-tóghó kɛ ikàtàm#</i> dog 3SG-sit LOC basket 'A dog sits in a basket'
candle in holder [4]	<i>èkkwɛn sé e-bé kɛ ákkpan#</i> fire DEF 3SG-stand LOC plate 'Fire stands on a plate'
cigarette in mouth [39]	<i>èzòzòh e-ggaméé kɛ ɛmma#</i> smoke 3SG-hang-3SG LOC mouth 'A cigarette hangs him in the mouth' cf. also <i>wàdum e-ggwai èzozòh#</i> man 3SG-drink smoke 'A man drinks smoke'

7.2.14. Containment in liquid or other mass

fish in water [32]	<i>ètèrn e-kkú kɛ izòhɔn así#</i> fish 3SG-be LOC pot water 'A fish is in a water pot'
--------------------	--

7.2.15. Containment by an encircling object

house in fence [60]	<i>ètɔ e-kkú h́kɛ ñkatti littol#</i> house 3SG-be LOC fence inside 'A house is inside a fence' cf. also <i>ètɔ aa ñkatti e-kko èkko#</i> house ASS fence 3SG-surround surround.GER 'A house that a fence surrounds round'
---------------------	---

7.2.16. Skewered

papers on spike [22]	<i>h́wɛnɛ ba-ttonni kɛ itɔɔyì#</i> book 3PL-pierce.PRГ LOC spike 'Paper is being pierced on a spike'
apple on stick [70]	<i>isokòlo e-ttonni kɛ itɔɔyì#</i> orange 3SG-pierce LOC spike 'An orange is being pierced on a spike'

7.2.17. Skewering

spike in/through papers [22]

ìtɔɔyì e-ttonni ɲwɛnɛ#

spike 3SG-pierce.PRG book

‘A spike is piercing paper’

cf. also:

ìtɔɔyì e-kumazi ɲwɛnɛ#

spike 3SG-pierce.PRG book

‘A spike is piercing paper’

arrow in/through apple [30]

ìtɔɔyì e-ttonni isokòlo#

spike 3SG-pierce.PRG orange

‘A spike is piercing the orange’

cf. also: *mkpa e-kumi kɛ nttiwoamá#*

arrow 3SG-pierce LOC fruit

‘An arrow pierces through the fruit’

7.2.18. Odd containers

hole in towel [18]

cf. *ikpò ɛ-yaà èyáà#*

towel 3SG-tear tear.GER

‘A towel tears tearing’

crack in cup [26]

cf. *àmmô ɛ-pàna èpána#*

cup 3SG-break break.GER

‘A cup breaks breaking’

7.2.19. Above

cloud over mountain [36]

èdzi e-be kɛ ekkpon èzɔ#

sun 3SG-stand LOC mountain top

‘The sun stands over the mountain’

lamp over table [13]

etòlikan ɛ-zéɛnɛ ɲkɛ èzɔ ekkpokolo#

lamp 3SG-hang LOC top table

‘A lamp hangs over the table’

7.2.20. Behind

boy behind chair [64]

mkpalawa è-bbakkí kɛ ekpian ñzám#

boy 3SG-hide.PRG LOC chair back

‘A boy hides at the back of a chair’

7.2.21. In front of

tree in front of church [49]

ètti e-be íkε esovvem ikɔbasi#
 tree 3SG-stand LOC front church

‘A tree stands in front of a church’

cf. also: *ètti e-be kε ikɔbasi εbbà#*
 tree 3SG-stand LOC church side
 ‘A tree stands on the side of a church’

7.2.22. Under

ball under chair [16]

isokòlo e-kku kε ekpian lèzèl#
 orange 3SG-be LOC chair ground
 ‘An orange is on the chair’s ground’

cat under table [31]

ànyway è-kku ké ekkpokolo littol#
 cat 3SG-be LOC table inside
 ‘A cat is inside a table’

chewing gum under table [53]

vɔ́m è-ggàma kε ekkpokolo littol#
 thing 3SG-hang LOC table inside
 ‘A thing hangs inside the table’

spoon under cloth [24]

èkɔ̀lìgbay eggɔ̀ è-bémmi#
 spoon cloth 3SG-cover.ORA
 ‘A spoon that a cloth covers’

cf. also: *eggɔ̀ e-bémmi èkɔ̀lìgbay#*
 cloth 3SG-cover spoon
 ‘A cloth covers a spoon’

cf. also: *eggɔ̀ e-nyíná kε èkɔ̀lìgbay#*
 cloth 3SG-be.placed LOC spoon
 ‘A cloth is placed on a spoon’

7.2.23. Next to

boy next to fire [38]

wàhé ε-tóghɔ̀ è-kpo/è-fɔ̀lɔ̀ èkkwen#
 child 3SG-sit 3SG-be.close fire

‘A child sits and is close to a fire’

also: *wàhé e-wabazi èkkwen#*
 child 3SG-warm.PRG fire
 ‘A child is warming at the fire’

also: *wàhé ε-tóghɔ̀/tóbbi èkkwen εbbà#*
 child 3SG-sit/sit.PRG fire side
 ‘A child sits/is sitting at the side of a fire’

dog next to kennel [6]	<i>ɛ̃vva e-kkú ke ɛ̃ttɔ ebbà#</i>
	dog 3SG-be LOC house side
	‘A dog is at the side of a house’

7.2.24. Miscellaneous

hose draped over stump [43]	<i>àkpɔ ɛ-zɛɛné ke etti dɔ#</i>
	hose 3SG-hang LOC tree stump
	‘A hose hangs on a tree stump’

ladder against the wall [58]	<i>ervenne ɛ-pééghé ke eppi#</i>
	ladder 3SG-lean LOC wall
	‘A ladder leans against the wall’

7.3. Some generalizations and conclusions

In the following paragraphs, based on the data of the preceding sections some generalizations about the expression of topological relations in Leggbó are presented:

The “situational classes” identified by the authors of the picture book questionnaire rarely have a uniform expression in Leggbó. In fact there is not a single class consisting of more than one scene which has a uniform expression. Still, at least a few tendencies conforming to the proposed groupings can be identified:

- ⇒ support by hanging is often expressed by the verb *zɛɛné* ‘hang’ (groups 2, 7, 8)
- ⇒ skewering is expressed by the verbs *tonni* and, alternatively, *kumi* (groups 16, 17)
- ⇒ different types of wearing (clothes) etc. are generally expressed by the verb *ɣwà* (groups 10, 11)

Other than that we find more differentiation within the groupings and overlap between the groupings. The verbs that were most frequently used are *kkù* ‘be’, 14 scenes, *zɛɛné* ‘hang’, 13 scenes, *ɣwà* ‘wear’ and *ggama* ‘stick to’, 6 scenes each, *be* ‘stand’ with 5 scenes, and *tɔghɔ* ‘sit’, *bemmi* ‘cover’, and *tonni* ‘pierce’ with 3 scenes each. All other verbs were used only once or twice.

In general, the verb carries the main load in expressing the spatial relationship. No relevant variation at all could be found in the preposition, and the locative nouns identified in translational elicitation were used rather infrequently, namely in only 12 scenes. They are used only if there is a particular necessity to elaborate on the position of the figure against the ground. This does not entail that the BLC (see 5.1. above) identified in translational elicitation is mistaken. In fact, *kkù* is confirmed as the verb for the most general and unmarked situations in the picture elicitation as well. However, there is a noticeable shift to expressions with verbs when the more “natural” picture scenes are employed. Perhaps, in conventional elicitation the English constructions with preposition and noun tend to trigger a construction with preposition and locative noun in the

target language when translated.

The conceptualization expressed through verbs shows particular sensitivity to the following features: (1) position of the figure; e.g. *be* ‘stand’, *təghɔ* ‘sit’ vs. *kkù* ‘be’; (2) type of contact between figure and ground; e.g. *zɛɛnɛ* ‘hang’, *ggama* ‘stick to’, *ɲwà* ‘wear’, *bayi* ‘be tied to’; (3) contact vs. support (verbs named in (2) vs. those named in (1)). In contrast, the notion of inclusion is obviously paid less attention to. This would in fact correspond to the lack of differentiation in lexical concepts in this field: The notions of ‘inside’ and ‘under’ are conflated in *littol* ‘inside’. Also, the concept of animacy plays only a very small role. Most verbs, including *be* ‘stand’ and *ggama* ‘stick, hang, perch’ can be used with both animate and inanimate referents with the exception of *təghɔ* ‘sit’. Although certain attention is paid to the position of the figure, apparently more than in English, there is no parallel to languages like Tzeltal¹⁶⁾ that are almost excessive in differentiating the shape of the figure in spatial relationships.

One point about the verb-centered expression of spatial relationships in Leggbó seems particularly remarkable: Leggbó clearly prefers to describe a static situation by an activity conceptualized in that situation, rather than by expressing the spatial relationship of figure and ground directly. Thus we have at least 13 scenes which are expressed by a non-locative activity verb followed by a NP introduced by *ɲkɛ*, and 8 scenes which depict activity only, without reference to a location.

Trying to express these scenes employing expressions of spatial relationships would produce unacceptable sentences. E.g.

- (21) *nttiwɔmá ba-wɔmi wɔmɔzi#*
 fruit 3PL-fruit fruiting
 ‘The fruit fruit fruiting’
 but:
 ?? *nttiwɔmá ba-zɛɛnɛ ɲkɛ ètti#*
 fruit 3PL-hang LOC tree
 ‘The fruit hang on/from the tree’
- (22) *gɛ̀và e-sí-ɛ kɛ gɛ̀vè#*
 wound 3SG-do-3SG LOC knee
 ‘The wound does it on the knee’
 but:
 ?? *ɛ-nnɛni gɛ̀và kɛ gɛ̀vè#*
 3SG-have wound LOC knee
 ‘(S)he has a wound on his/her knee’

16) cf. Brown 1994, Levinson 1996a.

- (23) *ikpò ε-yaà è-yáà#*
 towel 3SG-tear 3SG-tear
 ‘The towel tears tearing’
 but:
 ?? *lèbbòl e-kkú kε ikpò#*
 hole 3SG-be LOC towel
 ‘There is a hole in the towel’
- (24) *eggò e-bém̐mi èkòligbaŋ#*
 cloth 3SG-cover spoon
 ‘The cloth covers the spoon’
 but:
 ?? *èkòligbaŋ e-kkú kε eggò littol#*
 spoon 3SG-be LOC cloth inside
 ‘The spoon is under the cloth’
- (25) *áwìlì kkàkki ibasòm ba-yáni òjke gèzi#*
 woman’s.gown trousers shirt 3PL-dry LOC sun
 ‘The female gown, the trousers, and the shirt dry in the sun’
 but:
 ? *áwìlì kkàkki ibasòm ba-zéne òjke gèzi#*
 woman’s.gown trousers shirt 3PL-hang LOC sun
 ‘The clothes hang on the rope’ (less natural)

More generally, we may tentatively conclude that Leggbó is a language with a propensity to conceptualize situations with focus on the activity or event taking place in contrast to a possible focus on entities.

A topic that hasn’t been touched upon yet is the question of the frame of reference.¹⁷⁾ Leggbó primarily uses a relative frame of reference, that is, one where “[l]ocalisations in space are derived from, and described on the basis of, the position and orientation of the speaker.”¹⁸⁾ In this questionnaire the question of relative vs. absolute spatial orientation is touched only marginally, namely in examples like [38], [49], and [64]. Here, particularly languages with an absolute frame of reference¹⁹⁾ would likely have different expressions. Besides this rather marginal evidence, we wish to mention that we also conducted experiments that are specifically designed to detect the frame of reference,²⁰⁾ and they led to the same conclusion, namely that Leggbó’s basic frame of

17) cf. Levinson 1996b, 1997.

18) Senft 2001: 526.

19) “Absolute systems ... are based on conventionalized directions or other fixed bearings that can be derived from meteorological, astronomical, or landscape features” (Senft 2001: 526).

20) specifically tasks of the design described in Levinson 1996b: 113.

reference is a relative one.

8. Caused positions

Compared to the topological relations, when it comes to caused positions, one more salient element enters into the equation, namely an actor. Thus, there are at least three elements bearing on the conceptualization and linguistic expression: A figure, a ground, and an actor. In translational elicitation and from incidental evidence we had previously identified at least the following five verbs which might feature in the expression of caused position:

<i>nyina</i>	‘put, place’, ‘be placed’ (tr./itr.) – general for objects
<i>dzo</i>	‘put’ (general)’
<i>kè</i>	‘put inside sth’
<i>kpaa</i>	‘put on a very high place’ (e.g. roof); ‘lock away’ (also by putting sth inside sth)
<i>bele</i>	‘put an object in a container somewhere’

8.1. The questionnaire

Again, an MPIN questionnaire, developed by Birgit Hellwig and Friederike Lüpke (2001 version), is available which allows the language investigator to go far beyond the data obtained through translational tasks. The questionnaire is produced on video and systematically varies the three factors named above. Essentially two types of scenes are captured: (1) Scenes where a figure is moved by an actor with relation to the ground; and (2) the same scenes but the actor being absent, and only a figure being shown in a certain position, supported by the ground. An obvious point of interest here is whether both types of situations, transitive and intransitive, are encoded similarly or divergently. For some reason, only part of the scenes with an actor are also provided without actor. Now, in addition to presence or absence of the actor, scenes are varied systematically according to type of figure and ground, thus also effecting variation in the kind of contact/support between figure and ground, number of figure, and type of action.

The list below shows the three crucial variables, actor (A), figure (F), and ground (G), on the left side, together with the scene number of the video questionnaire in brackets for reference purposes. The absence of the actor is indicated by “-A.” On the right side, the linguistic encoding for each scene, the morpheme transcription, and a rough English translation are given.

Unlike in the case of topological relations, the creators of the questionnaire have not provided any groupings or situational types. We therefore arranged the scenes according to the verb actually used in Leggbó.

8.2. The data

8.2.1. *nyína* ‘put, place’ (tr.)

A; F bottle; G table [14]

e-nyína ekkpoma wɔ̀ni kɛ ekkpokolo#
 3SG-put bottle one LOC table
 ‘A put one bottle on a table’

A; F 2 bottles; G table [10]

e-nyína ekkpoma ɔ̀fɔ̀ŋ kɛ ekkpokolo#
 3SG-put bottle two LOC table
 ‘A put two bottles on a table’

A; F ball; G table [15]

e-nyína (ball) kɛ ekkpokolo#
 3SG-put (ball) LOC table
 ‘A put a ball on a table’

A; F 2 balls; G table [4]

e-nyína (ball) ɔ̀fɔ̀ŋ kɛ ekkpokolo#
 3SG-put (ball) two LOC table
 ‘A put two balls on table’

A; F cassava; G table [39]

e-nyína jākpu kɛ ekkpokolo#
 3SG-put cassava LOC table
 ‘A put a cassava on a table’

A; F cassavas; G table [26]

e-nyína jākpu àtan kɛ ekkpokolo#
 3SG-put cassava three LOC table
 ‘A put three cassavas on table’

A; F stick; G table [30]

e-nyína ètti kɛ ekkpokolo#
 3SG-put stick LOC table
 ‘A put a stick on a table’

A; F pot; G table [33]

e-nyína ɪ̀zɔ̀hɔ̀n kɛ ekkpokolo#
 3SG-put pot LOC table
 ‘A put a pot on a table’

A; F rope; G table [19]

e-nyína lèdudùl è̀zí kɛ ekkpokolo#
 3SG-put bundle rope LOC table
 ‘A put a bundle of ropes on the table’

A; F cloth (folded); G table [12]

e-nyína ɛ̀ggɔ̀ kɛ ekkpokolo#
 3SG-put cloth LOC table
 ‘A put cloth on table’

8.2.2. nyína ‘be placed’(itr.)

-A; F bottle; G table [25]	<i>ekkpoma e-nyína ke ekkpokolo#</i> bottle 3SG-place LOC table ‘A bottle is placed on a table’
-A; F stick; G table [44]	<i>ètti e-nyína ke ekkpokolo#</i> stick 3SG-place LOC table ‘A stick is placed on a table’
-A; F pot; G table [34]	<i>izðhɔn e-nyína ke ekkpokolo#</i> pot 3SG-place LOC table ‘A pot is placed on a table’
-A; F cloth; G table [42]	<i>eggɔ e-nyína ke ekkpokolo#</i> cloth 3SG-place LOC table ‘A cloth is placed on a table’
-A; F ball; G table [11]	(ball) <i>wðni e-nyína ke ekkpokolo#</i> (ball) one 3SG-place LOC table ‘One ball is placed on a table’
-A; F cassava; G table [35]	<i>jäkpɔ e-nyína ke ekkpokolo#</i> cassava 3SG-place LOC table ‘A cassava is placed on a table’

8.2.3. ffagha ‘wedge into, stick onto, attach to’(tr.)

A; F bottle; G tree/branch [43]	<i>ε-ffagha ekkpoma ke ñtti-mggba#</i> 3SG-stick bottle LOC tree-fork ‘A placed a bottle on a tree fork’
A; F pot; G tree/branches [8]	<i>ε-ffagha izðhɔn ke ñtti-mggbà#</i> 3SG-stick pot LOC tree-fork ‘A placed a pot on a tree fork’
A; F ball; G tree/branch [17]	<i>ε-ffagha (ball) wðni ke ñtti-mggba#</i> 3SG-stick (ball) one LOC tree-fork ‘A placed one ball on a tree fork’
A; F cassava; G tree/branch [31]	<i>ε-ffagha jäkpɔ ke ñtti-mggba#</i> 3SG-stick cassava LOC tree-fork ‘A placed a cassava in a tree fork’

8.2.4. ffagha ‘be wedged in between, stuck onto, attached to’ (itr.)

- A; F bottle; G tree/branch [22] *ekkpoma ε-ffagha ke ñtti-mggba#*
 bottle 3SG-be.stuck LOC tree-fork
 ‘A bottle is stuck in a tree fork’
- A; F pot; G tree/branches [18] *izðhɔn ε-ffagha ke ñtti-mggba#*
 pot 3SG-be.stuck LOC tree-fork
 ‘A pot is stuck in a tree fork’
- A; F ball; G tree/branch [32] (ball) *ε-ffagha ke ñtti-mggba#*
 (ball) 3SG-be.stuck LOC tree-fork
 ‘A ball is stuck in a tree fork’

8.2.5. pèeghe ‘lean against’ (tr.)

- A; F bottle; G tree/earth [16] *ε-pèeghe ekkpoma wðni ke ètti lèzil#*
 3SG-lean bottle one LOC tree base
 ‘A leaned a bottle against the base of a tree’
- A; F stick; G tree/earth [13] *ε-pèeghe ètitiwe ke ètti kkoŋ lèzil#*
 3SG-lean stick.DIM LOC tree big base
 ‘A leaned a small stick against the base of a big tree’
- A; F cassava; G tree/earth [23] *ε-pèeghe jākpu ke ètti lèzil#*
 3SG-lean cassava LOC tree base
 ‘A leaned a cassava against the base of a tree’
- A; F ladder; G tree [24] *ε-pèeghe ervenne ke ètti#*
 3SG-lean ladder LOC tree
 ‘A leaned a ladder against a tree’

8.2.6. kumma ‘put upside down’ (tr.)

- A; F bottle; G table [20] *e-kumma ekkpoma ke ekkpokolo#*
 3SG-put bottle LOC table
 ‘A put a bottle upside down on a table’
- A; F pot; G table [36] *e-kumma izðhɔn ke ekkpokolo#*
 3SG-put pot LOC table
 ‘A puts a pot upside down on a table’

8.2.7. kumma ‘stand upside down’ (itr.)

-A; F pot; G table [40]

izðhɔn e-kumma ke ekkpokolo#
 pot 3SG-be.placed LOC table
 ‘A pot stands upside down on a table’

8.2.8. kè ‘put into’ (tr.)

A; F rope; G box [27]

e-ké lèdudùl èzí ke èkpoon#
 3SG-put bundle rope LOC box
 ‘A put a bundle of ropes into a box’

A; F cloth (folded); G box [37]

e-ké eggð ke ekpoon#
 3SG-put cloth LOC box
 ‘A put a cloth into a box’

A; F cassava; G box [7]

e-ké jākpu ke ekpoon#
 3SG-put cassava LOC box
 ‘A put a cassava into a box’

8.2.9. zèene ‘hang’ (tr.)

A; F rope; G branch [38]

ε-zéene èzí ke ñtti-mbbó#
 3SG-hang rope LOC tree-branch
 ‘A hung a rope on a tree branch’

8.2.10. zèene ‘hang’ (itr.)

-A; cloth; G tree branch [21]

eggð ε-zéene ke ñtti-mbbó#
 cloth 3SG-hang LOC tree-branch
 ‘A cloth hangs from a tree branch’

A; F rope; G branch [2]

èzí ε-zéene ke ñtti-mbbó#
 rope 3SG-hang LOC tree-branch
 ‘A rope hangs from a tree branch’

8.2.11. zɔɔ ‘spill’ (tr.)

A; F beans G table [5]

ε-zɔɔ ñzèzénì ke ekkpokolo#
 3SG-spill bean LOC table
 ‘A spilt beans on a table’

8.2.12. zɔɔ ‘be spilt’ (itr.)

-A; F beans; G table [3]

ñzèzénì ε-zɔɔ ke ekkpokolo#
 bean 3SG-be.spilt LOC table
 ‘Beans are spilt on a table’

8.2.13. Various Verbs that only occurred once

A; F cassava on rope; G branch [29]	<i>e-ssilla jākpu kɛ n̄tti-bbɔ̄#</i> 3SG-tie cassava LOC tree-branch 'A tied cassava to tree branch'
A; F beans in bowl; G table [9]	<i>e-bele ákkpaŋ ègídì kɛ ekkpokolo#</i> 3SG-put plate bean LOC table 'A put a bowl of beans on a table'
A; F bottle; G table [28]	<i>e-mína ekkpoma kɛ ekkpokolo#</i> 3SG-lay bottle LOC table 'A lay a bottle on a table'
A; F stick; G ground [41]	<i>ε-ŋwa ètti kɛ l̄zèl̄#</i> 3SG-plant stick LOC ground 'A planted a stick into the ground'
A; F ladder; G ground [46]	<i>e-dzoi ɛrvɛnnɛ kɛ l̄zèl̄#</i> 3SG-put ladder LOC ground 'A put a ladder on the ground'
A; F cloth; G table [1]	<i>e-bém̄mi ɛggɔ̄ kɛ ekkpokolo#</i> 3SG-cover cloth LOC table 'A covered a table with a cloth'
A; F pot; G table [45]	<i>e-viŋŋa izòhɔn kɛ ekkpokolo#</i> 3SG-roll pot LOC table 'X rolled a pot on a table'
-A; F rope; G table [6]	<i>l̄ɛdudùl èzì ε-ttɔ̄ kɛ ekkpokolo#</i> bundle rope 3SG-fall LOC table 'A bundle of ropes falls on a table'

8.3. Generalizations and conclusions

The verb most frequently appearing in the data is *nyina* 'put', which seems to be a "default" verb broadly used with caused positions when the ground (as a result of an action or not) supports the figure. More specific situations are rendered with verbs like *ffagha* 'wedge' (7 occurrences), *kumma* 'put upside down', *kè* 'put into' (3 occurrences each), and *p̄ɛghɛ* 'lean against' (4 occurrences). The more specific verbs are triggered mainly by the kind of contact between figure and ground (e.g. *ffagha*, *p̄ɛghɛ*, *z̄ɛɛnɛ* 'hang'), the position of the figure (e.g. *kumma*, *mína* 'lie'), containment (*kè*), and

specific motion of the figure (e.g. *zɔɔ* ‘spill’, *viŋŋa* ‘roll’, *ttɔ* ‘fall’).

On the other hand, Leggbó shows no sensitivity towards the number of the figure. Also, transitive and intransitive realizations of the same situation are encoded basically in the same manner. Some verbs like *pɛɛghɛ* ‘lean against’, *mɪna* ‘lie’, and *bɛmmi* ‘cover’ are only represented in their transitive use above, but that doesn’t mean they are actually used only transitively. Rather, an “intransitive” scene corresponding to transitive use simply wasn’t contained in the questionnaire. This reveals a broader characteristic of Leggbó, namely that a large number of verbs can be used both intransitively and transitively (and even di-transitively, although this does not appear in the questionnaire) without morphophonological change.

9. Motion verbs

9.1. Verbs of coming and going

Among motion verbs, verbs of coming and going have traditionally attracted particular attention.²¹⁾ This is due to a number of facts, one of which is that in many languages verbs of coming and going are used extremely frequently and are often further grammaticalized to express other non-spatial notions, another being the presence or absence of deictic properties in them, depending on the language. In general, their use can vary to such a degree cross-linguistically that it has been seriously questioned that they are in any sense universal.²²⁾

At the MPIN, David Wilkins designed a questionnaire which is supposed to capture the denotational range of coming and going verbs within a wider system of verbs of (intransitive) motion. The main parameters along which the paths of motion were varied in the 20-picture questionnaire are (1) anchoring of a path, that is the presence or absence of particular points of start and/or finish; (2) the orientation of the path, e.g. towards the deictic centre or not; and (3) the shape of the path. Below we will list the verbs that were used in response to the tasks given in the questionnaire. The numbers in brackets are the scene numbers from the questionnaire given for reference purposes:

<i>sɛŋ</i> ‘go’	motion from deictic center to a determinate point [1]
<i>vi</i> ‘go out/away’, ‘exit’	motion from deictic center to an indeterminate destination [2]
<i>wɛɛl</i> (<i>ffu</i>) ‘come’, ‘arrive’	motion from a determinate source towards deictic center [3]-[6]
<i>nɔŋɔɔzi</i> - ‘wind’	moving around aimlessly [8]
<i>kko</i> - ‘circle’	motion in circles [9]-[12]
<i>zɛɛ</i> - ‘walk’	any other kind of motion; e.g. from determinate point distinct from the deictic center to other determinate

21) e. g. Fillmore 1997: 77-102.

22) Cf. Wilkins and Hill 1995, Senft 2000.

point distinct from deictic center; motion from the deictic center with a certain direction but with indeterminate destination; motion on an unanchored path; etc. [7], [13]-[20]

The results are largely unproblematic. In concordance with incidental evidence from other elicitations, we can identify *seŋ* as the typical ‘going’ verb of the language, and *wèel* as the typical ‘coming’ verb, both being deictic in nature. For other kinds of motion *zèe* is the most frequently used verb. The form *ffu* ‘come’, mentioned in brackets, is used suppletively for *wèel* in verb serializations.

9.2. Other path verbs

From conventional elicitation, we have identified a number of additional path verbs that were not captured by the questionnaire. The following are such verbs that alone, or with a satellite (object) lexicalize the notion of a path:

<i>seŋ lèsol</i> (‘go face’) ‘advance’	<i>nàa èden</i> (‘take way’) ‘pass’
<i>bila</i> ‘ascend, climb, go up’	<i>yohŋo</i> ‘cross, go/pass through, go past’
<i>ssia</i> ‘descend, go down’	<i>veeme</i> ‘depart, leave’
<i>kkuba</i> ‘enter’ ²³⁾	<i>mððŋɔ</i> ‘recede (e.g. from combat), return’

The example below illustrates the use of *mððŋɔ* ‘recede, return’:

- (26) *ε-mððŋɔ kɛ iì Lagos#*²⁴⁾
 3SG-return LOC LOC (name of a place)
 ‘(S)he came back from Lagos’

9.3. Manner verbs

The following are verbs that alone, or with a satellite (object) lexicalize the notion of manner:

<i>kaa leval</i> (‘carry race’) ‘run’	<i>zèe</i> ‘walk, hike’
<i>kpɔɔ leval</i> ‘chase’	<i>wòŋŋo</i> ‘fly’
<i>ggbɔ</i> ‘jump’	<i>nyammi</i> ‘tumble’
<i>kuŋŋa</i> ‘crawl’	<i>wee</i> ‘float, swim’
<i>myèeli</i> ‘slide’	<i>gboŋŋi</i> ‘bounce’
<i>viŋŋa</i> ‘roll’	

The following sentence illustrates the use of one of these verbs, *gboŋŋi* ‘bounce’:

23) The verb for ‘exit’ already appeared in the previous section.

24) Cf. section 6.2. for the co-occurrence of the two locative prepositions. This seems to happen most naturally when the meaning is something like ‘out of’.

- (27) *isokòlo sé e-gboŋŋi kɛ lɛzɛl#*
 orange DEF 3SG-bounce LOC ground
 ‘The orange bounced back from the ground’

9.4. Verbs for direction/goal

Direction/goal is commonly indicated by the verb *nii* ‘give’, optionally followed by *(ɲ)kɛ. nii* as the “main verb” will have its literal meaning. It only indicates a direction if serialized to a preceding manner verb of motion.

Manner+goal (V *nii* (*kɛ*) goal):

- (28) *e-weei e-nii lɛzaŋabba#*
 3SG-swim 3SG-give river.bank
 ‘(S)he swam towards the river bank’
- (29) *ɛ-kaa leval e-nii kɛ lɛmmal#*
 3SG-run race 3SG-give LOC door
 ‘(S)he ran towards the door’

With path verbs, the notion of goal usually needs no overt realization. The goal of motion is indicated simply as a prepositional object when entailed by the lexical meaning of the path verb (construction V *nii* (*kɛ*) goal; e.g. *sɛŋ* ‘go to’, *kubba* ‘enter’), but can be expressed with a verb indicating an endpoint when not entailed by the path verb. Here, the verbs *ŋwà* ‘reach’ or *kpoo* ‘end’ are used:

- (30) *ɛ-sɛŋi kɛ levɔl#*
 3SG-go LOC village
 ‘(S)he went to the village’
- (31) *e-kkubá kɛ levɔl#*
 3SG-enter LOC village
 ‘(S)he entered the village’
- (32) *e-bila ètti e-kpoo èzɔ ètti#*
 3SG-climb tree 3SG-end top tree
 ‘(S)he climbed the tree to the top’

9.5. Verb for source

be ‘stand’, obligatorily followed by *ɲkɛ* indicates the source of a motion. Independently, as a main verb, it will have its literal meaning, but if followed by a verb of motion it acquires a “source” meaning as in the following examples:

- (33) *e-bé kɛ ɛppya sé è-sɛŋ kɛ ikɔɔbàsi#*
 3SG-stand LOC market DEF 3SG-go LOC church
 ‘(S)he went from the market to the church’

- (34) *e-bé kɛ èppì è-ggbɔ#*
 3SG-stand LOC wall 3SG-jump
 ‘(S)he jumped from the wall’

9.6. Verbs for distance

vila indicates long distance, *fɔlɔ* short distance. If serialized to a verb of motion they indicate the distance of the subject from a point of reference as either part of or result of the motion, as in the following examples:

- (35) *ɛ-zɛɛ è-fɔlɔ kɛ ikɔɔbàsi#*
 3SG-walk 3SG-be.near LOC church
 ‘(S)he walked close to the church’

- (36) *e-yóŋŋo è-fɔlɔ kɛ ikɔɔbàsi#*
 3SG-pass 3SG-be.near LOC church
 ‘(S)he passed close to the church’

- (37) *ba-kpɔɔi-ɛ lɛval è-vila#*
 3PL-chase-3SG race 3SG-be.far
 ‘They chased him/her far away’

9.7. Combining path and manner

The following verb lexicalizes a combination of path and manner:

ttɔ ‘fall, plunge’

However, often, a combination of path and manner describing the same motion activity is expressed in a serial verb construction. The first verb encodes the manner of motion, the second the path:

- (38) *e-kuyɛa è-bilà ekkpon#*
 3SG-crawl 3SG-climb hill
 ‘(S)he crawled up the hill’

- (39) *e-kuyɛa è-ssìà ekkpon#*
 3SG-crawl 3SG-descend hill
 ‘(S)he crawled down the hill’

- (40) *ɛ-wɔŋŋɔ è-yòŋŋò lɛvɔl#*
 3SG-fly 3SG-pass village
 ‘The bird flew over the village’

- (41) *ε-zéε è-kkò geve sé#*
 3SG-walk 3SG-circle lake DEF
 ‘(S)he walked around the lake’

Path preceding manner would be infelicitous in the same meaning:

- (42) *??e-kkó geve sé è-zèε#*
 3SG-circle lake DEF 3SG-walk
 ‘(S)he walked around the lake’

There are also cases in which the path is not construed as a separate event but as a direct object to the verb (*ggbo* ‘jump’), or as a prepositional phrase (here with *zèε* ‘walk’). In the latter case, the path is simply conceptualized as the place where the activity took place:

- (43) *ε-ggbɔ èppi#*
 3SG-jump wall
 ‘(S)he jumped over the wall’
- (44) *ε-zéé ke èkɔtti#*
 3SG-walk LOC forest
 ‘(S)he walked through the forest’

9.8. Combining path, manner, and goal

A combination of three verbs, manner preceding path and goal is found to be grammatically correct but no natural way of expression:

- (45) *isokolo sé e-viŋŋa è-ssia è-nií ke lèzàŋàl#*
 orange DEF 3SG-roll 3SG-descend 3SG-give LOC river
 ‘The orange rolled down towards the river’

In a more natural way of expression, the path would be left out:

- (46) *isokolo sé e-viŋŋa è-nií ke lèzàŋàl#*
 orange DEF 3SG-roll 3SG-give LOC river
 ‘The orange rolled towards the river’

With *ttɔ* (‘fall, plunge’), which lexicalizes manner and path simultaneously, the goal is expressed as a prepositional object:

- (47) *ε-ttɔ ke asi#*
 3SG-jump LOC water
 ‘(S)he plunged into water’

10. Transitive motion

The data in this section come from translation-based elicitation and incidental evidence.

10.1. Verbs of moving an object

In sections 5. and 7., a considerable number of verbs of moving objects (putting), in which mainly the resulting position is encoded, were already introduced. There are other verbs that encode the path and the direction of force employed by the person moving the objects, like the following.

<i>nnui</i>	‘push’	<i>təl</i>	‘pull, drag’
<i>mèmmɛ</i>	‘remove’	<i>gwekke</i>	‘raise’
cf. also <i>kàa wèl</i> (‘carry come’) ‘bring’			

10.2. Source, path and goal with verbs moving an object:

The expression of source, path and goal in transitive motion is fundamentally the same as with intransitive motion. It was already noted in section 7.3 that in Leggbó the transitivity of an activity does not have dramatic impact on the linguistic encoding, particularly lexical encoding. Similar to other verbs of motion, source, path and goal are expressed either by verbs or by a prepositional phrase with *íjke* (ii).

10.2.1. Source of motion, path

The original position of the object and the path of motion are usually expressed as a prepositional phrase:

- (48) *mèmmɛ* *kɛ* *ìì* *ibèn#*²⁵⁾
 remove.IMP LOC LOC room
 ‘Remove it from the room!’

- (49) *ɛ-tɔ́li-é* *kɛ* *lèzàṇàl#*
 3PL-pull-3SG LOC river
 ‘(S)he pulled it out of the river’

- (50) *ɛ-tɔ́li-é* *kɛ* *lèzèl#*
 3PL-pull-3SG LOC ground
 ‘(S)he pulled her/him up from the ground (or: ‘dragged her/him along the ground’).’

The path can be further specified by a path verb:

25) See previous footnote for the co-occurrence of two locatives.

- (51) *ε-tóli ekpian ε-vvεεμε ήκε ekkpokolo#*
 3PL-pull chair 3SG-go.away LOC table
 ‘(S)he dragged/moved the chair away from the table’

Also, the original position of the mover can be further specified with the help of *be* ‘stand’:

- (52) *e-be κε ekpon è-nnui-ε è-nii κε lèzànyàl#*
 3SG-stand LOC hill 3SG-push-3SG 3SG-give LOC river
 ‘(S)he pushed it down the slope’ [lit.: ‘She stood on a hill and pushed it down to the river.’]

10.2.2. Goal of transitive motion

If the verb lexically entails a goal of motion, e.g. *kè* ‘put into’, *kàa wèèl* ‘bring’, the goal of motion is encoded by a simple prepositional phrase. If no goal is entailed, e.g. *tàl* ‘pull, drag’, *nnui* ‘push’, *gwekke* ‘raise’, the verb of direction *nii* ‘give’ indicates the goal:

- (53) *e-ké ηwεε ήκε essi#*
 3SG-put book LOC bag
 ‘(S)he put the book into the bag’
- (54) *kàa wèel κε lèvðl#*
 carry.IMP come.IMP LOC village
 ‘Bring it to the village!’
- (55) *e-tóli ekpian e-nii-m#*
 3SG-drag chair 3SG-give-1SG
 ‘(S)he dragged the chair towards me’
- (56) *e-gwekke ekpian sé è-nii ήκε nttɔkpan#*
 3SG-raise chair DEF 3SG-give LOC roof
 ‘(S)he raised the chair to the roof’
- (57) *nnui-ε è-nii κε lèzèl#*
 3SG-chase-3SG 3SG-give LOC ground
 ‘Push him to the ground!’

10.3. Some generalizations and conclusions

Throughout sections 9 and 10 the following points may have been noticed:

- Notions of source, goal, and path, that in some other languages are encoded by prepositional satellites (English), case marking on nouns (Japanese), or lexically by compound verbs (Japanese), are preferentially expressed by serial verb constructions in Leggbó. However, simple prepositional phrases with *ήκε* are also used, namely if the role

of the prepositional phrase in the conceptualization can easily be inferred by the clause semantics, particularly the semantics of the verb.

- With respect to Talmy's original typology of the encoding of motion events (three-way classification of languages lexicalizing either Motion+Manner/Cause, or Motion+Path, or Motion+Figure in verbs²⁶⁾), Leggbó first of all does not show a clear bias to either manner or path. Both notions are fairly well lexicalized in the motion verb inventory. The fact that in serializations involving three or more factors (among path, manner, goal etc.) it is "path" which is omitted betrays a certain bias towards manner. This would also coincide with the tendency observed in sections 6 and 7, namely the emphasis on the activity of a figure over other potential factors such as the position of the figure. With respect to Talmy's later typology (two-way classification of verb-framed vs. satellite-framed languages²⁷⁾), Leggbó is verb-framed, containing the path information in the verb.

11. Wrap-up

In this paper we have given an overview over some of the most basic areas of Leggbó space grammar. The framework and materials developed at MPIN have allowed us to bring to light some details that are otherwise difficult to identify. Perhaps the most distinguishing feature of Leggbó space language is the focus on activities and, consequently, verbs, rather than entities and their shapes, or static relationships. This is a fact that is potentially of considerable typological interest. The circumstance that Leggbó does not have a specific expression for 'under'-relations adds an attractive detail. Our description of the verbs of movement has been comparatively sketchy, but the analytic expression of complex motion events through serial verbs apparently constitutes the basic pattern in this language.

26) Talmy 1985.

27) Talmy 2000.

References

- Barnwell, Katharine Grace Lowry 1969. *A Grammatical Description of Mbembe (Adum Dialect) – A Cross River Language*. PhD Thesis at the Department of General Linguistics, University College London.
- Bowerman, Melissa 1996. “Learning How to Structure Space for Language.” In: Bloom, Paul, Mary A. Peterson, Lynn Nadel, and Merrill F. Garrett (eds.) *Language and Space*, 385-436. Cambridge: MIT Press.
- Brown, Penelope 1994. “The INs and ONs of Tzeltal Locative Expressions: the Semantics of Static Descriptions of Location.” *Linguistics*, 32: 743-790.
- Fillmore, Charles J. 1997. *Lectures On Deixis*. Stanford: CSLI Publications.
- Grimes, Barbara (ed.) 2000. *The Ethnologue*, 14th edition. Dallas: SIL International.
- Hellwig, Birgit and Friederike Lüpke 2001. “Caused positions.” In: Levinson, Steve and Nick Enfield (eds.) *‘CD-Manual’ for the field season 2001*. Nijmegen: Max Planck Institute for Psycholinguistics.
- Iwara, Alexander Ubi 1982. *Phonology and Grammar of Lókáá: A Preliminary Study*. Master Thesis at the Department of Africa, School of Oriental and African Studies, University London.
- Levinson, Stephen C. 1996a. “Relativity in Spatial Conception and Description.” In: Gumperz, John J. and Stephen C. Levinson (eds.) *Rethinking Linguistic Relativity*. Cambridge: Cambridge University Press, 177-202.
- Levinson, Stephen C. 1996b. “Frames of Reference and Molyneux’s Question.” In: Bloom, Paul, Mary A. Peterson, Lynn Nadel, and Merrill F. Garrett (eds.) *Language and Space*. Cambridge, MA: MIT Press, 109-169.
- Levinson, Stephen C. 1997. “Language and Cognition: The Cognitive Consequences of Spatial Description in Guugu Yimithirr.” *Journal of Linguistic Anthropology* 7/1: 98-131.
- Levinson, Stephen C. 2003. *Space in Language and Cognition – Explorations in Cognitive Diversity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Levinson, Stephen, Sérgio Meira, and The Language and Cognition Group 2003. “‘Natural Concepts’ in the Spatial Topological Domain – Adpositional Meanings in Crosslinguistic Perspective: An Exercise in Semantic Typology.” *Language*, 79/3: 485-516.
- Pederson, Eric, Eve Danziger, David Wilkins, Stephen Levinson, Sotaro Kita, and Gunter Senft 1998. “Semantic Typology and Spatial Conceptualization.” *Language*, 74/3: 557-589.
- Pederson, Eric, David Wilkins and Melissa Bowerman 1993. *Static Topological Relations*. Field Manual. MPI for Psycholinguistics Nijmegen.
- Senft, Gunter 2000. “‘Come’ and ‘Go’ in Kilivila.” In: Palmer, Bill and Paul Geraghty (eds.) *SICOL. Proceedings of the Second International Conference on Oceanic Linguistics: vol. 2, Historical and Descriptive Studies*, 105-136. Canberra: Pacific Linguistics.
- Senft, Gunter 2001. “Frames of Spatial Reference in Kilivila.” *Studies in Language* 25/3: 521-555.
- Talmy, Leonard 1985. “Lexicalization Patterns: Semantic Structure in Lexical Forms.” In: Shopen, Timothy (ed.) *Language Typology and Semantic Description*, vol. 3: 36-149. Cambridge: Cambridge University Press.
- Talmy, Leonard 2000. *Toward a Cognitive Semantics*, vol.2. Cambridge, MA: MIT Press.
- Udoh, Imelda I. L. 2000. *The Languages of Cross River State of Nigeria: A Geo-Political Profile*. Manuscript.
- Wilkins, David P. 1993. *Preliminary ‘COME’ and ‘GO’ Questionnaire*. Field Manual. MPI for Psycholinguistics Nijmegen.
- Wilkins, David P. 1999. *The 1999 Demonstrative Questionnaire: “THIS” and “THAT” in Comparative Perspective*. Field Manual. MPI for Psycholinguistics Nijmegen.
- Wilkins, David P. And Deborah Hill 1995. “When ‘Go’ Means ‘Come’: Questioning the Basicness of Basic Motion Verbs.” *Cognitive Linguistics* 6/2-3: 209-259.

オスマン帝国末期イスラーム法官の4類型*

— 法官組織に見る社会移動 —

秋 葉 淳
(千葉大学)

Social Origins of the Late Ottoman Sharia Judges: Some Observations on Mobility and Integration

AKIBA, Jun
Chiba University

This article focuses on the social and educational backgrounds of the judges of Sharia courts in the late Ottoman Empire, making a quantitative analysis based on the personnel records kept in the Archives of the İstanbul Müftülüğü. The collection of personnel records contains the curricula vitae of *ulema* serving at salaried posts from 1892 onwards. 295 personnel files of judges were selected from the collection as the sample for this study. The analysis of the birthplace of judges reveals that a large number of judges originated from particular regions, namely Istanbul, Ergiri, İbradı and the province of Trabzon.

Not surprisingly, Istanbul (11%) was overrepresented in proportion to its population. Istanbul-born judges were almost exclusively from *ulema* families.

It is notable that about 12% of the sample came from the southern Albanian district of Ergiri (Gjirokastëro). 20% of Ergiri-born judges' fathers were again judges; but the majority had a non-*ulema* background. Notables and landowners were the largest group (37%). As regards their education, more than half graduated from the *Naibs'* College (*Mekteb-i Nüvvâb*). These results indicate that Ergiri-born judges were relative newcomers to this profession, acquiring positions through formal education as well as personal networks.

İbradı in Konya province was another town famous for producing judges. Reflecting its long tradition dating back to the eighteenth century, most İbradı-born judges were sons of judges and trained in a traditional way, through a system of apprenticeship. However, the people of İbradı began to switch careers from the Sharia judiciary to other branches of governmental service, especially to the new secular judiciary and the local administration.

Keywords: The Ottoman Empire, Sharia Court, Ulema, Social Mobility, Education
キーワード: オスマン帝国, シャリーア法廷, ウラマー, 社会移動, 教育

* 本稿は筆者の博士論文(秋葉2003)の第4章の一部を大幅に書き改めたものである。また、本稿の原形となったのは、2000年11月の北米中東学会大会(米国フロリダ州オーランド)における報告(“The Making of a Judge in the Late Ottoman Empire: Some Observations on Social Mobility and Integration”)である。本稿の史料は、主に1998-2000年に平和中島財団奨学生としてトルコ留学中に調査したものである。

からず見られた人々のうちの1人である。彼が職業として選んだイスラーム法官職（シャリーア法廷裁判官職）は、オスマン帝国に初期から存在するものであったが、その組織は19世紀後半には大きな変容を遂げていた。新しい任命と養成の手続をもつ「ナーイブ制度」の存在がなければ、メフメト・フルシトのような出世物語は残されていなかったであろう。

オスマン帝国においては、初期の時代よりイスラーム法官であるカーディーが各都市や町に派遣され、シャリーア法廷を司るとともに、地方行政にも携わっていた。各地のカーディー職が序列化され、マドラサ教授職のヒエラルヒーとともに官職階層制を形成していたことが、オスマン帝国のカーディー制度の著しい特徴である。このカーディー職とマドラサ教授職の階層組織は「イルミエ制度」と呼ばれ、その頂点にはイスタンブールのムフティーであるシェイヒュルイスラームが位置していた³⁾。ナーイブとは、元来カーディーの代理の意味であったが、18世紀に

は代理任命の一般化によってカーディー制度が形骸化したため、それに代わってナーイブを、中央から任命される有給のイスラーム法官とするナーイブ制度が成立したのである。イスラーム法官の官職名は1913年に「カーディー」に変更されるまで「ナーイブ」であった。1864年の「州法」によって地方行政制度の再編が始められた結果として、1871年に、帝国全土の州（vilâyet）・県（sancak）・郡（kazâ）のシャリーア法廷に有給のナーイブが長老府（Bâb-ı Meşihat, シェイヒュルイスラームの官庁）によって任命されるという原則が確立したことをもって、ナーイブ制度の成立と見なすことができる。ナーイブは5段階の等級によって序列化され、その等級は試験によって認定された。そして、ナーイブ学院（Mu'allimhâne-i Nüvvâb, Mekteb-i Nüvvâb などに名称変更）という新しい学校（1855年設立）を通じて法官を養成するシステムが確立した（Akiba 2005; 2003; 秋葉1998b）。

その一方で、オスマン帝国の国家機構にお



地図2 1900年前後のオスマン帝国（アナトリア）

- 1) 19世紀オスマン朝下のアナトリア、バルカンにおけるマドラサ（イスラームの伝統的学問を教える学校）では、アラビア語文法や論理学といった基礎学問に始まり、後に法学へと進む教育が一般に行われていた。秋葉（1996; 1998a）参照。
- 2) İstanbul Müftülüğü, Meşihat Arşivi, Sicilli Ahvâl Dosyaları, no. 1908（以下では SA dos. 1908 のように略記する）; Albayrak 1996, 3: 208.
- 3) 古典期のイルミエ制度について、日本語では松尾（1996）を参照のこと。

けるイスラーム法官組織の相対的地位は大きく変化した。帝国の官僚組織が拡大し、地方行政制度も発達したことによって、従来地方の民政の中心的存在だったイスラーム法官の役割は縮小した。さらに、1864年に始まる地方行政改革の一環として、制定法裁判所 (*mahkeme-i nizâmiyye*) 制度が成立したことによって、シャリーア法廷の管轄範囲も狭められることになった。制定法裁判所の民事法廷の裁判長職は、ナーイブによって兼任されることが通例となったものの、刑事裁判官を始め、検察官、弁護士など新しい司法官僚が形成されていった⁴⁾。

このような新しい制度と環境のもとで、イスラーム法官職の担い手にはどのような変化が見られたのだろうか。彼らは何者であり、どこから来て、どのようにしてイスラーム法官になったのか。また、メフメト・フルシトのような事例はどの程度一般的だったのだろうか。これらの問題、すなわち末期オスマン帝国におけるイスラーム法官の出自に関して、マクロ的視点から考察を加えることが、本稿の主たるねらいである。

オスマン帝国史研究において、シャリーア法廷は近年とくに関心を集めている対象である。90年代以降は、法廷台帳からデータを抽出する従来の社会経済史的アプローチに代わって、法の実践という問題を扱う傾向が強まっている⁵⁾。法官の素性を知ることが、法廷における実践を捉えるうえできわめて重要であることは言うまでもない⁶⁾。このような問題意識から帝国末期のダマスカス出身の

1人の法官に焦点を当てた論文が、Agmon (2004)である。この論文は、マクロ研究である本稿と補完的な関係にある。本稿は法官組織の全体的傾向を明らかにし、個々人の事例をその中に位置づける試みなのである。

イスラーム法官職は、イルミエ制度に属し、またウラマーに固有の職務であることから、本研究はオスマン帝国末期のウラマーの状況に関する一研究でもある。ウラマーは元来イスラームの伝統的学問（とくに法学）を修めた学識者一般を集合的に表す用語である。ウラマーはイスラーム法官、ムフティー、マドラサ教授、イマーム（礼拝導師）、説教師など、ウラマーに固有の職業と見なせる職に従事していることが多いが、商業や農業などそれ以外の職業に携わっていることも少なくない。ただし、オスマン帝国末期においては、たとえマドラサ教育を修めた者であっても、一般文官職のキャリア (*mülkiyye*) に入り、イルミエ制度上の位階を一般文官職の等級に切り替えてしまえば（イルミエの位階を維持することもできるが）、もはやウラマーとは呼ばれないことが普通であった。いずれにせよウラマーはきわめて多様な集団であり、それを論ずる際にはその多様性に常に注意しなければならない。帝国末期のウラマーの出自や経歴に関して、ウラマーの伝記集成 Albayrak (1996, 1st ed., 1980-81) から500人を抽出して分析した Kushner (1994) があるが、彼はウラマーの職種を区別せずに、つまり母集団の輪郭が不明瞭なまま分析したために、議論に厳密性が欠けている⁷⁾。

4) 制定法裁判所については、*Encyclopaedia of Islam, New edition (E²)*, s.v. “Mahkama 2,” by C. V. Findley, 6: 7-11, Bingöl (1998), Ekinçi (2004), 秋葉 (1998b)などを参照。

5) ここでは、Iris Agmon, Beshara Doumani, Boğaç Ergene, Leslie Peirce, Najwa Al-Qattanなどの研究が念頭に置かれている。日本語では、三浦 (1998; 2004)を参照。

6) オスマン朝シャリーア法廷台帳研究の回顧と展望を行った Ze’evi (1998) は、裁判官を研究する必要性を指摘している (p. 53)。

7) 19世紀前半以前については史料上の制約から、伝記集を用いてイスラーム法官を含む高位のウラマーについて出自や経歴の研究がされてきた (Faroghi [Faroghi] 1973; Zilfi 1983a, 1983b, 1988; 今澤 1995)。シェイヒュルイスラームについては、長期的な変化を分析した、Itzkowitz (1969), Itzkowitz and Shinder (1972) がある。

Albayrak (1996) は、本稿が一次史料として用いる、イスタンブール・ムフティー局附属長老府文書館 (İstanbul Müftülüğü Meşihat Arşivi) に所蔵されているウラマーの履歴文書 (詳細は後述) から、任意に 2854 人を選んで各人の履歴を要約したものである。

本稿は、一次史料である履歴文書を直接利用することに特長があり、後述する方法でサンプルとして抽出した 295 人のイスラーム法官を対象にして分析を進める。その分析によってまず明らかになるのは、法官の出身地が特定の地域に偏っていることである。以下に見るように、首都イスタンブール、アルバニア南部のエルギリ (Ergiri) 郡、アナトリア南西部のイブラドゥ (İbradı)、そしてメフメト・フルシトの出身地である黒海東部のトラブゾン州という 4 地域出身の法官が、それぞれサンプル全体の 1 割前後を占めている。イスタンブールを除けばどちらかといえば帝国の辺境に位置するこれらの地域の人々が、どのように法官職という帝国の官僚組織に組み込まれ、またそれによって社会的上昇を果たしたのだろうか。本稿はこれら特定の地域の出身者について重点的に検討することとしたい。

エルギリ郡出身のイスラーム法官については、既に Clayer (2000) が Albayrak (1996) を用いてその出自、教育、経歴などを論じている。また、トラブゾン州出身の法官は、同様に Albayrak (1996) に依拠してコーカサス地方出身のウラマーを扱った Toumarkine (2000) の中で分析されている。たしかに両論文の議論は、本稿の第 3, 5 章と重なりと

ころも多いが、両論文については、二次史料を典拠とするがゆえの限界と、法官組織全体や他地域との関連の中での位置づけが不十分である点とを指摘することができる。

また、法官組織における地方出身者の存在は、オスマン帝国において官僚機構の発達と教育制度の普及によって住民がより緊密に国家に結びつけられ、そして、従来は国家官僚機構の外部や周縁にいた人々が、拡大する官僚組織の構成員に加わるようになったという現象を示している。すなわち法官組織は、学校制度と官僚組織への参加を通じた帝国臣民の統合と社会移動の問題を考えるためのケーススタディとして格好の対象なのである。

このような観点から本稿と関連する研究として、外務官僚の出自、教育、キャリアについて、ウラマーの履歴文書と同系統の外務官僚の履歴文書を利用した Findley (1989) がある。また、Szyliowicz (1971)、Findley (1989: 114-119)、Blake (1991)、永田 (2001) は、主に地方行政官を輩出した行政学院 (Mekteb-i Mülkiye) の卒業生の出自を分析している⁸⁾。Blake (1991) は、シリア出身者に焦点を当てて同地域の名士層の「オスマン化」を論じたものであるが、このほかにもオスマン朝末期アラブ地方史においては、地方名士の出自や経歴を伝記集やシャリーア法廷台帳を利用して調査した研究がある⁹⁾。これらの研究の方法と成果を参照しつつ、本稿はイスラーム法官の出自を明らかにすることで地方社会の住民の統合や移動の問題を考察し、また同時に、帝国官僚機構そして帝国社会の中でのイスラーム法官組織の位置づけを

8) これらは、履歴文書に依拠して編纂された Çankaya (1968-71) に基づいている。ただし、Blake (1991) は、一次史料である履歴文書も活用している。ほかにも、Baltaoğlu (1998) が旧オスマン官僚の履歴文書を用いて、アタテュルク時代のトルコ共和国県知事に焦点を当てている。また、先駆的な研究として、未刊行の伝記集成に依拠して中央及び地方の上級職官僚 1023 人の出自や経歴を分析した Szyliowicz (1975) があるが、対象にあまりに多様な集団が含まれ、対象時期も長すぎたことに加えて、官僚制度の仕組みとの関連づけが弱いことから、分析が不十分になっていることは否めない。なお、現在 Olivier Bouquet が総理府文書館の人事記録簿を利用して帝国末期の「パシャ」の研究に取り組んでいる。

9) Roded 1983; 1986; Yazbak 1995; 1997; 1998.

も明らかにすることを目的としている。

1. 史料とサンプル

本研究の基礎となる史料は、現在イスタンブル・ムフティー局附属長老府文書館に所蔵されているウラマーの履歴関連文書である¹⁰⁾。これは人事を系統的行い、管理するために作成されたものであり、その履歴資料の管理のシステムは、官僚組織の発達に伴ってまず1879年に一般文民官僚に対して導入され¹¹⁾、1892年に長老府においても採用された(秋葉2003: 115)。履歴文書には、ファイル形式と帳簿形式の2種類がある。最も基本となるのは本人の記入した履歴書(tercüme-i hâl varakası)であり、それは他の履歴関連書類(履歴書と同時に提出された任命状や卒業証書の写し、その後作成された年金計算のための職歴と給与の一覧表、嘆願書など)とともに個人別のファイルに収められ、人事ファイル(Sicilli Ahvâl Dosyaları)として管理された(現存総数6386)。他方で各ファイルの内容を要約した人事記録簿(Sicilli Ahvâl Defterleri)が、

職種ごとに大まかに分類して作成された(7巻現存)。

履歴書は時期によって若干形式が異なるが、どれも質問事項が印刷され、質問と回答の欄が枠で分けられている質問票で、通常は本人の直筆で回答が記入されている¹²⁾。質問事項は、本人の名前、父の名前と官職・位階、本人の生年と生地、教育歴、会話及び読み書きで使用する言語、著作、職歴、給与、位階、賞罰など多岐に渡る。履歴書は、出自に関する情報を得るための最も基本的な史料である。この基本史料を含む人事ファイルについては目録(Zerdeci 1998)が作成されているため、それを基本にしてサンプルを抽出した。目録に掲載されている官職名によれば、全6386名のうち、1384名がナーイブまたはカーディーである。まず、この1384人から、リストの上から3人目を起点として順に2人おきに選択し、461名のファイルを選び出した¹³⁾。そしてその中から、郡レベル以上の行政単位のポストにイスラーム法官として就任したことがあり、かつ、人事ファイルの中に履歴書またはその要約が含まれている者295名を¹⁴⁾、分析の基本となるサンプ

10) 長老府文書館所蔵の履歴文書の概略については、Bilici (1995)、Zerdeci (1998)を参照。

11) 一般文官の履歴文書については、とりあえずFindley (1989: 343-355)を参照。

12) 最末期に用いられた二つ折り4頁形式のものを除けば、A3よりもやや大きい用紙が使われている。用紙が不足したために全て手書きのものもある。履歴書の例は、図1に掲載した。Albayrak (1996, 3: 452, Vesika 38)も参照。

13) ファイルは、履歴書を返送してきた州(つまり履歴書作成時の法官の任地)の名前の(アラビア文字の)アルファベット順に大まかに並んでいるが、不規則性も大きい。ファイルの番号は原資料の番号であるが、同一人物のファイルの番号が何度も替えられることもしばしばだった。史料全体から何件かおきにサンプルを抽出することは歴史学では通常とられる方法である(Hudson 2000: 172)。標本の精度に関しては注15を参照。なお、この461人を選び出す際に、1カ所で1名(SA dos. 550, Mahmud Hamdi)を数え忘れてしまったことを告白しなければならない。それゆえ、この箇所でのみ、2人おきにすべきところが3人おきになっているが、このことによって標本に偏りを生じさせはしなかったと考えてよい。

14) ただし、人事ファイルの中に履歴書やその要約が含まれていない場合でも、人事記録簿(SA def. と略記)のほうに記載のある者も採用した。Priştineli Abdurrahman Sabit (SA dos. 1232; SA def. 5: 76); Ünyeli Mehmed Nuri (SA dos. 1457; SA def. 3: 89)。さらに、以下の2名については、ファイル中に履歴書が残されていないが、Albayrak (1996)に明らかに(紛失した)履歴書に基づくと思われる詳細な履歴情報が記載されていたため、ファイル中の他の資料と照合したうえで、サンプルとして採用した。Mardinli Yusuf Sıdkı (SA dos. 162; Albayrak 1996, 4: 378); Bağdadlı Mehmed Sabit (SA dos. 2931; Albayrak 1996, 3: 302)。

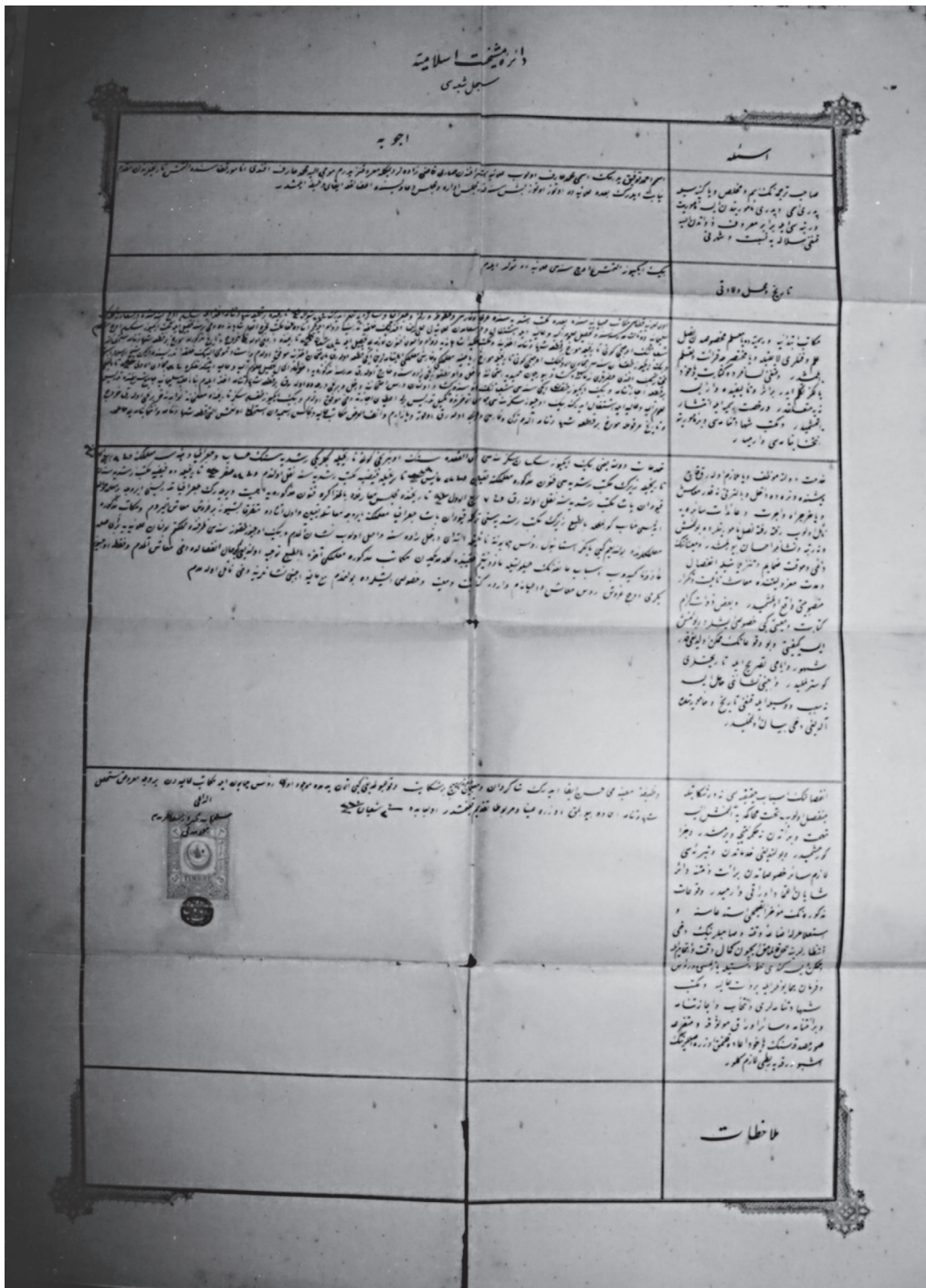


図1 アライエ出身のアフメト・テウフィクの履歴書

1893 年 2 月 19 日付 (2 Şaban 1310).

SA dos. 1917 (Alaiyyeli Ahmed Tevfik).

ルとした¹⁵⁾。郡より下位の行政単位すなわち郷 (nâhiye) のナーイブを対象外としたのは、その職が青年トルコ革命以前は長老府の直接管理下になく、また、法廷書記官と同様に郡のナーイブになるための見習いという位置づけがされていたためである。

人事管理方式が1892年に始まったことから、サンプルの295人は1892年現在の現職法官かそれ以後に法官職に就いたことのある人物である(秋葉2003: 115)。この法官集団の特質を通時的に把握するために、各人が法官職に初めて就任した年を4つの時期に区分して分類する。各時期は、法官の採用や任命の制度に変更があった年を区切りとして分けられる。制度に変更があれば、当然採用・任命される集団の傾向にも変化が現れると考えられるからである。

サンプル中で最も古参の法官は1844年に最初の任命があった。それ以後、1864年州法が帝国のほぼ全域に適用された1867年までを第Ⅰ期とする。1883年12月にナーイブ学院が改組され、定員枠が拡大されたことによって翌年からナーイブ学院の卒業生が増加するので、1868年から1883年までを第Ⅱ期とする。1908年の青年トルコ革命による

体制変革は、ナーイブ制度にも大きな影響を与えた。1909年9月より大規模な人員整理 (tensik-i umûmî) が長老府でも開始され、ナーイブ学院卒でなく、かつ等級をもたないナーイブは、次に法官職に就くためにはナーイブ学院で試験を受けて等級を得なくてはならなくなった。当時在任中の法官は「人員整理委員会 (Tensik Komisyonu)」によって厳しく審査され、解任されることもあった。同時に、65歳を超えた者も退職を余儀なくされた。これらの結果、以後(郡レベル以上の)ナーイブに新規に採用される者は、ナーイブ学院卒業生であるか、そうでなければ(郡の下)郷のナーイブ経験者であってイスタンブルで試験に合格した者に限られることになった。また、従来ナーイブ学院には、高位のウラマーの子弟を優遇する特別学級が存在していたが、それも革命直後に廃止された(Akiba 2003: 142-143, 151)。第Ⅲ期は、これらの改革が効果を現す以前の1909年までとし、第Ⅳ期は1910年から、最も新参の法官の採用年である1916年までとする。

以上の時期区分に基づいてサンプルを分類すると、第Ⅰ期(1844-67)45名、第Ⅱ期(1868-83)116名、第Ⅲ期(1884-1909)111

15) 仮にサンプル数を単純に3倍した数885が、履歴書を含む郡レベル以上の法官のファイル数であるとする、母集団(885)に対するサンプル(295)の調査の標本誤差は4.7%以下である。つまり本稿の295のサンプルは人事ファイル史料群全体の性格をおおむね反映しているものと言えることができる。人事ファイルには後述のように1892年またはそれ以後の現職法官(郡レベル以上)が含まれているのであるが、同条件の法官全体の総数をナーイブ学院卒業生の実数をもとに試算すると、約3200名という結果になる(法官の勤続年数を30年と仮定し、ナーイブ学院卒業生が法官職への新規参入者に占める割合に本サンプルから得られる数値を応用している)。仮に3200名の法官全体から無作為抽出して誤差を5%以内にするには、344以上の標本が必要となる。しかし、人事ファイル史料群は、実在した法官集団全体を無作為的に代表しているわけではない。履歴書が残存するか否かは必ずしも偶然によるのではなく、少なくとも初任時期が遅いほど履歴書が残りにくいことがわかっている(後述)。そのため本稿では初任時期を区分して分析を行っている。また、本稿では出身地域ごとに分析を進めるため、たしかに各地域の標本数は小さくなり、誤差の幅も当然大きくなる。しかし、出身地別の分析結果(表4)においてはそれぞれ特徴が明瞭に現れているため、悉皆調査によって結論が大きく変更される可能性はきわめて低い。いずれにせよ、本稿ではサンプルの不完全性を十分考慮し、統計上の計算結果だけでなく、ほかの史料やデータからも裏付けをとるようにし、サンプルから得られる数値を絶対視することはしないようにしている。なお、以上の点に加えて、各ファイルに含まれる情報量がきわめて膨大なことと、文書館で電子複写や写真撮影が原則禁止だったことから、人事ファイルの悉皆調査はその労力に十分見合うものとは言えない。

名、第Ⅳ期（1910-16）23名、となる。履歴書の導入は1892年なので、第Ⅰ期の人数が少ないのは理解できるが、第Ⅳ期は絶対数も1年当たりの人数もかなり少ない。その23名をつぶさに検討すると、実に20名がオスマン帝国滅亡以前に死亡し、1名が行方不明になっている。とすれば、第Ⅳ期中に採用され、帝国解体後に生きのびた法官たちの人事ファイルは別の場所、おそらくはトルコ共和国の関係官庁に移管されてしまった可能性が大きい¹⁶⁾。一般に、在職期間は初任時の年齢と関連性があり、初任時の年齢は法官職就任以前の経歴と関係する。実際、第Ⅳ期に17名含まれるナーイブ学院卒業生の平均初任年齢が32.3歳であるのに対し、それ以外の6名（全て郷ナーイブ出身）は44.7歳である。つまり、郷ナーイブ職を歴任してから郡ナーイブに昇進した者が第Ⅳ期に占める割合（26%）は、実態より過大であり、逆に若年で郡ナーイブに就任できるナーイブ学院卒業生の割合（74%）は実態より低くなっているのである。いずれにせよ第Ⅳ期のサンプルは少なく、信頼性が低いため、ナーイブ学院の全卒業生のデータと比較したうえで解釈することとする。第Ⅳ期にはナーイブ学院卒業生が74%をはるかに上回り、ほとんどを占めると推定できるからでもある。なお、第Ⅰ期から第Ⅲ期までのナーイブ学院卒業生の占める割合は、それぞれ20, 22, 36%であり、1909年まで順調に伸び、第Ⅳ期に急激に増加したことがわかる。

さて、上述したように、イスラーム法官集団の特徴は、その出身地（生地）の分布に現れることができる。まず、表1は出身地を大き

く地域別に分類したものである¹⁷⁾。人口比に対する人数においてはイスタンブル出身者が突出して多いが、イスタンブルの中心性を考慮すれば1割強というのは意外に少ない。それ以外の地域については、バルカン、アナトリア、アラブの三大地域区分からほぼバランスよく輩出されていると言える。ただし時期別に見ると、第Ⅳ期にはアナトリア出身者がほとんどを占めることになり、この点は考察が必要である。

表2、表3は、出身地をより細かく、州別及び郡別に調べたものである。一見して明らかのように、イスラーム法官の出身地はバランスよく散らばっているどころか、特定の地域にきわめて偏っている。サンプルの半数近くがコンヤ、ヤンヤ、トラブゾンの3州の出身である。郡レベルではヤンヤ州のエルギリ郡とコンヤ州のアクセキ郡が際立っており、それぞれの出身者はイスタンブル出身者の数に匹敵する。エルギリ郡出身者のほとんどはエルギリの町かその近隣のリボホヴァ（Libohova）村の出身であり、アクセキ（Akseki）郡の場合はイブラードゥ郷出身者がほとんどである。辺境の町や、郷や村といった小規模の居住地域から、これほど数多くの法官が輩出されていたということは、驚きに値する。これらの地域には法官を生み出すいかなる背景があったのだろうか。表4に見るように、法官の出自（出身階層）は地域によって大きく異なっていたのである。そこで、イスタンブルを初めとして、エルギリ郡、イブラードゥ、トラブゾン州のそれぞれについて分析を加えていくこととしたい。

16) 現に、表に「宗務庁（Diyanet [İşleri Başkanlığı]）に送られた」と書かれた、中身が空のファイルが多数存在する。

17) ここでは、アラブ地域を、1897年の行政区分を基準に、シリア、バイルート、モスル、バグダード、バスラ、ヒジャーズ、イエメン、トリポリの8州と、ゾール、エルサレム、山岳レバノンの3県、及び、マラシユ県を除くアレppo州の占める領域とする。マラシユ県はアナトリアと見なした。以下においても、行政区分は、*Devlet-i Aliyye'nin... İstatistik-i Umûmiyyesidir*; Güran (1997) を参照して1897年の区分を基本とした。

表1 イスラーム法官の出身地域

出身地域	計	第Ⅰ期 1844-67	第Ⅱ期 1868-83	第Ⅲ期 1884-1909	第Ⅳ期 1910-16	ムスリム男子 人口 (1906-7) *
イスタンブル	11%	9%	9%	15%	4%	3%
バルカン	22%	27%	26%	19%	4%	14%
アナトリア	50%	51%	45%	47%	87%	65%
アラブ地域	15%	11%	20%	14%	4%	17%
帝国外	2%	2%	0%	5%	0%	-
計	100%	100%	100%	100%	100%	100%
N=	295	45	116	111	23	8,280,000

* Karpat 1985: 168.

表2 イスラーム法官の出身地（州別）

出身州	計	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	第Ⅳ期
コンヤ	18%	27%	16%	14%	35%
ヤンヤ	13%	18%	16%	9%	0%
トラブゾン	12%	9%	9%	16%	13%
イスタンブル	11%	9%	9%	15%	4%
モースル	4%	4%	6%	3%	0%
スイヴァス	3%	2%	4%	2%	9%
その他	39%	31%	39%	41%	39%
計	100%	100%	100%	100%	100%
N=	295	45	116	111	23

表3 イスラーム法官の出身地（郡別）

出身郡	計	第Ⅰ期		第Ⅱ期		第Ⅲ期		第Ⅳ期	
	N	N	N	N	N	N	N		
エルギリ	12%	18%	15%	9%	0%				
(うちエルギリ市	18	4	8	6	0				
(うちリボホヴァ村	15	4	7	4	0				
(うちネブラヴィシユタ村	2	0	2	0	0				
アクセキ	12%	20%	12%	6%	17%				
(うちイブラードウ郷	27	8	11	4	4				
(うちギョデネ村	6	1	3	2	0				
(うちスツレス村	1	0	0	1	0				
イスタンブル	11%	9%	9%	15%	4%				
ホバ	33	4	11	17	1				
ダマスクス	3%	0%	2%	4%	9%				
リゼ	8	1	4	3	0%				
その他	3%	2%	3%	2%	0%				
計	2%	2%	3%	2%	0%				
	58%	49%	56%	61%	68	70%	16		
	171	22	65	68	68	70%	16		
	100%	100%	100%	100%	100%	100%			
N=	295	45	116	111			23		

表4 出身地別のイスラーム法官の父親の職業・地位

父親の職業・地位	イスタンブル	エルギリ郡	イブラードゥ	トラブゾン州	その他	計
イスラーム法官	67%	20%	63%	3%	15%	24%
その他のウラマー	27%	6%	4%	28%	41%	31%
地方官吏	0%	9%	0%	19%	2%	4%
軍人	0%	9%	4%	0%	1%	2%
地方名士・地主	0%	37%	0%	6%	8%	9%
商人	0%	3%	11%	6%	6%	5%
職人・小店主	0%	0%	4%	0%	4%	2%
農民	0%	0%	4%	6%	4%	3%
その他	3%	0%	0%	6%	1%	2%
不明（官職なし）*	3%	17%	11%	28%	18%	17%
計	100%	100%	100%	100%	100%	100%
N=	33	35	27	36	164	295

* 父親が官職を得ていた場合履歴書への記載が義務づけられていたため。

2. 「やむを得ない事情」—イスタンブル

イスタンブル生まれのイスラーム法官のほとんどがウラマーの家に生まれ（33人中31人、94%）、さらにそのうち22人の父親が法官経験者である。また、イスタンブル出身者全体の実に85%（28人）が、「メヴレヴィエト」以上の位階をもつ高位のウラマーである¹⁸⁾。首都イスタンブルはイスラーム法官の教育、登用、任命の中心であるため、イスタンブル出身者は法官職へのアクセスにおいて最も有利だった。さらに、親が高位のウラマーである場合は、教育機会や見習い先、そして等級の獲得に関しても特権的な立場にあった¹⁹⁾。ナーイブ学院には1908年の革命に至るまで高位のウラマーの子弟のための特別クラスが存在したが、少なくともサンプル中の1人アブドゥルラヒーム・シュクリュ（SA dos. 2681）は、自分が無試験でナーイブ学院に入学したことを履歴書に明記している。

しかし、このような圧倒的な有利さにかかわらず、法官全体に占めるイスタンブル出身者の割合は決して大きいとは言えない。同時代の外務省官僚の76%がイスタンブル出身であったというデータ（Findley 1989: 99）と比較すれば、11%はむしろ少ないとすら感じられる。それは何よりもまず、法官職が基本的には地方の官職だったことに由来する。地方での任務は、イスタンブルに生まれたウラマーにとって必ずしも望まれるものではなかったのである。この点について、ウラマーの家系に生まれたマーヒル・イズが、その回顧録に、「かつて『シェフリー（şehir, 「都市生まれ」）』と呼ばれたイスタンブルの

ウラマーは、やむを得ない事情のない限り（zaruret olmadıkça）、地方に出向くことは慣習的ではなかった」と記している（İz 1990: 19）。それまで長老府内で書記官をしていた彼の父の場合は、その慣例に反して、ミディルリ（レスボス島）の法官職を喜んで引き受けたという²⁰⁾。彼の記述を確かめるように、サンプル中のメフメト・パハーエッディン（SA dos. 3188）は、長老府のファトワー局に勤務していたが、「やむを得ない事情に駆られて（zarûret-i hâl sevkiyle）」ナーイブのキャリアに進んだ、と率直に記している。すなわち、イスラーム法官職は第一義的に生計の手段なのであり、そのため一般的には、首都において十分な収入がある場合、あえて法官職が選択されることはなかったのだと言える。

さらに、1910年以降に新たに法官職に採用されたイスタンブル出身者の数が急減していることにも注目したい。上述の1908-9年の制度変更がウラマー家系のもつ好条件を減じたことが、大きく影響しているに違いない。だがそれ以上に、中央のウラマー家系のイスラーム法官職に対する評価が低下したことがその背景にあるのではないかと考えられる。

また、イスタンブル生まれの法官のほとんどがウラマー家系の出身であったということは、逆にイスタンブル在住のウラマー層以外の人々が、法官職に関心を寄せていなかったということでもある。首都のムスリム住民であれば、そしてとりわけエリート家系の子弟であれば、教育や任官において地方出身者よりもはるかに恵まれた条件を兼ね備えていたはずであるが、法官職の中には彼らはほとんど見出されない。

18) 代々イルミエ制度で高位を占めてきたウラマー家系は多くなく、少なくとも16人の父親ウラマーは地方出身者である。

19) 高位のウラマーの子弟は幼少期から位階を授与された。そして、高い位階の保持者は自動的に高い等級を与えられた。Akiba 2005: 48-49; “Nüvâb hakkında Nizâmnâme,” art. 2, *Düstûr*, 1: 315-324; “Hükkâm-ı Şer’iye Nizâmnâmesi,” art. 2, *Ibid.*, 2: 721-725.

20) 彼の父イスマイル・アブデュルハーリムの履歴は、Albayrak (1996, 2: 249) を参照。

表5 ナーイブ学院, 法学校, 行政学院の卒業生 (1885-1902)

出身地	ナーイブ学院 *		法学校 **		行政学院 ***		総人口比 ****
		N		N		N	
イスタンブル	10.5%	32	31.6%	241	45.8%	334	4.14%
ザーデギヤーン (ナーイブ学院のみ)	4.9%	15					
エルギリ郡	13.8%	42	3.9%	30	0.8%	6	0.04%
その他バルカン	10.8%	33	21.9%	167	22.9%	167	22.02%
イブラードウ	0.7%	2	3.4%	26	1.5%	11	0.04%
トラブゾン州	19.3%	59	5.0%	38	3.3%	24	6.43%
その他アナトリア	37.0%	113	27.3%	208	15.2%	111	53.77%
アラブ地域	2.3%	7	5.6%	43	8.6%	63	13.58%
帝国外	0.7%	2	1.3%	10	1.8%	13	
不明		2		33		0	
計	100.0%		100.0%		100.0%		100.00%
N=		307		796		729	

* *İtmiyye Sâlnâmesi*, 705-721. 「ザーデギヤーン (zâdegân)」とは、出身地が不明だが名に “...zâde,” “...hafidi” などとあるもの。彼らは高位のウラマーの子弟で、イスタンブル生まれであることが多い。

** *Sâlnâme-i Nezâret-i Ma'ârif-i Umûmiyye*, 1 (1316): 580-602, 2 (1317): 651-653, 3 (1318): 695-701, 4 (1319): 94-95, 6 (1321): 94-99.

*** Çankaya 1968-71, 3: 183-969. アラブの有力部族子弟のための特別クラス (sınıf-ı mahsûs) は除外。

**** Karpat 1985: 168-169.

イスタンブルに生まれ、教育を重視し官職を志向する人々がどのような選択をしたかは、行政学院、法学校 (Mekteb-i Hukûk) の卒業生と、ナーイブ学院の卒業生とを比較してみると明瞭である。1885年から1902年までの時期をとってまとめてみると (表5)、行政学院卒業生 729 人中のほぼ半数、法学校卒業生 796 人中の約3割がイスタンブル出身であったのに対し、ナーイブ学院卒業生 307 人中にイスタンブル出身者が含まれる割合は10から15%程度にすぎない。このことは、これら3つの高等教育機関の間に序列が存在していたことを示している。そしてそれは、それぞれの学校の卒業後に控える職種—代表的には、地方行政官職、制定法裁判所制度の司法官職、シャリーア法廷裁判官職—の序列をも示唆しているのである。いずれにせよ、イスタンブル住民の、法官職に対する期待度が低いことは明らかであろう。そのことが逆に、法官組織において地方出身者が活躍する

場を用意したのである。

3. 新制度への適応—エルギリ郡

アルバニア南部に位置するエルギリは、山裾の平野を望む斜面に形成された町である。ビザンツ時代の名、アルギロカストロ (Argyrokastro) の由来となった城塞が小高い丘の頂きにそびえ立ち、町全体を見下ろす²¹⁾。今日ジロカスタル (Gjirokaštër) の名でアルバニア領にあるこの町は、オスマン帝国末期にはヤンヤ州に属するエルギリ県を中心であり、当時の人口は約8000人だった。オスマン帝国の「辺境」とも言うべきこのエルギリとその近郊の村から、オスマン帝国のイスラーム法官が多数 (サンプル中12%) 現れたことは、きわめて興味深い²²⁾。サンプル中には、エルギリの町出身の18名のほか、リボホヴァ村からの15名、ネブラヴィシュタ (Nepriştë) 村からの2名が含まれ

21) ジロカスタルの町 (1970年代) の概観については、Riza (1978)、エルギリに関する歴史的な概説は、*Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*, s.v. “Ergiri,” by Machiel Kiél, 11: 298-299; *Et*², s.v. “Ergiri,” by V. L. Ménage, 2: 708-709 を参照。



図2 エルギリ城とその周辺

(Riza 1978: 22).

ている。リボホヴァはエルギリから約20キロ南西に離れたところに位置する、山裾の比較的大きな村である。第二次立憲政期には村から郷に昇格した²²⁾。

エルギリとリボホヴァ出身の法官の多さは当時からよく知られていた。同じエルギリ県内のフラシェリ郷出身であるシェムセッディン・サーミーは、その歴史地理事典のなかで次のように述べている。「[エルギリの] ムスリム住民の大部分はマドラサ学生やウラマーの一員であり、この町とその向かいにあるリボホヴァという大きな村からは、数多くのカーディーが輩出されている」(Sâmî 1306-16, 2: 836)。また、「リボホヴァとネブ

ラヴィシユタという村はとても大きく、リボホヴァにはマドラサや学問の修得のための手段が数多くあるので、住民の大部分がマドラサ学生と、カーディーとして各地を巡るウラマーから構成されている」(Ibid., 2: 837)とも記している。

それではなぜ、これほどまで多くの法官がこの地域から生まれたのだろうか。エルギリ郡で法官を輩出した階層を検討してみよう。まず、親の代もイスラーム法官だった者が20%を占める。だがそれを除くと大多数が非ウラマー層出身者である。これはイスラーム法官職への特化が比較的新しい現象だったことを示している。出自別に見たとき、地

22) エルギリとリボホヴァ出身の法官に関しては、上述のように Clayer (2000) の専論がある。同地域出身の法官が多数存在したことは、Kreiser (1989) によって指摘されている。

23) *Sâhnâme-i Devlet*, 67 (1328): 967.

方名士・地主層が最大のグループ（13人、37%）である。一般にこの範疇に分類しているのは、史料中に「名士（eşrâf, hânedân など）」とあるものに加えて、地主、徴税請負人などである。これは地方名士の経済的基盤が土地所有や徴税請負にあることが多いからである。エルギリ郡の場合は、地主層、徴税請負人及び軍人系名士が顕著である。まず、父親が「自分の土地に携わっている（kendi emlâkiyle meşgul）」者²⁴⁾や、「土地所有者（ashâb-ı alâka）」である者²⁵⁾のほか、大農場（çiftlikât）を経営している者²⁶⁾など、土地所有を基盤にした名士出身者が6名見出せる。エルギリ県は全般的に山地であり農業に適した土地が多くないのだが、エルギリの町の下方に流れるドリン川の流域には肥沃な平野があり、この地帯で彼らは比較的大規模な農地を所有していたのだと思われる。徴税請負に従事していたことを示す例も4件ある²⁷⁾。商業を営んでいた父親が1名いるが、彼もまた名士層に属していた可能性はある²⁸⁾。

さらに、3名が「アーたち（Ağavât, Ağalar）」の集団に属し²⁹⁾、2名が「ベイ」

の称号をもつ名士である³⁰⁾。18世紀オスマン帝国においては、イエニチェリやスィパーヒー軍団あるいは非正規軍団に属する者たちが徴税請負権を始め様々な特権を利用して地方有力者に成長することが各地で見られたのだが、彼らはそのような軍人系の家系に属すると考えられる。また、表4では「軍人」に分類したが、スィパーヒー軍団に属し、それゆえ土地所有者であったと考えられる者が2名いる³¹⁾。これらの属性を全て有する典型例はリボホヴァ出身のユースーフ・アーギヤーフ・エフエンディ（SA dos. 198）の父親である。彼は「アーたちの集団に属し、ドカト部族出身で（Dokat kabîlesinden）、自分の財産の収益によって（kendi emvâl hasılâtıyla）、また十分の一税を徴税請負することで（a'sâr-ı şer'iyyeyi iltizâm ederek）生計を立てていた」という。

サンプルから得られた上記の結果は、1868年に書かれたヤンヤ州知事の報告書の内容とも一致する。州知事アフメト・ラースム・パシャは、「ヤンヤ州のシャリーアに関わる訴訟に携わっているナーイブの一部は、リボホヴァやエルギリのナーイブのように地元出

24) SA dos. 214 (Ergirili Yusuf Nabi); SA dos. 779 (Ergirili Halil Hamidullah). 「資産の収益から（emvâl hasılâtıyla）」という例もある（SA dos. 204, Libohovalı Mehmed Tevfik）。

25) SA dos. 172 (Libohovalı Mehmed Sıdkı); SA dos. 245 (Ergirili Mustafa Ragıb)。

26) SA dos. 210 (Ergirili Mehmed Hayreddin)。

27) SA dos. 176 (Libohovalı Mehmed Naim); SA dos. 198 (Libohovalı Yusuf Ağâh); SA dos. 268 (Ergirili Ali Murteza); SA dos. 1513 (Libohovalı Ahmed Besim)。

28) SA dos. 777 (Ergirili Mehmed Said)。なお、徴税請負人を父親にもつ一人は、「徴税請負人の商業（mültezim ticâreti）」に従事していると書いている（SA dos. 176）。

29) SA dos. 198; SA dos. 239 (Ergirili Hasan Fehmi); SA dos. 1501 (Libohovalı İsmail Hulusi)。

30) SA dos. 160 (Ergirili Mehmed Rüşdî); SA dos. 204 (Libohovalı Mehmed Tevfik)。後者はリボホヴァの征服者である「パシャル（Paşalı）」の家系に属するという。

31) SA dos. 166 (Ergirili Ali Rıza); SA dos. 2280 (Libohovalı Mehmed Şevki)。もう一人の軍人（SA dos. 291, Libohovalı Üveys Naili）は「大尉（yüzbaşı）」であったが、「ベイ」という称号で呼ばれていたというので、やはり名家の出であると思われる。「ベイ」は軍人としては中佐（kaymakam）以上に与えられる称号であり、それ以外には、パシャの家系、他の由緒ある名家にも与えられた（Heidborn 1908-12, 1: 186; Sâmî 1317-18, s.v. “bey”）。エルギリにおける軍人系名士の存在については、再びサーミーの事典が参考になる。エルギリの住民の「全員が勇敢で好戦的な男たちであり、近年に至るまで非正規軍（asâkir-i mu'âvine）の部隊に属し、リーダー格の者たちは部隊長として、より前の〔世代の〕者たちはスィパーヒーとして生計を立てていた」という（Sâmî 1310-16, 2: 836）。

身であるため、徴税請負人や商人である彼らの兄弟や親戚の個人的利益を保護するために不公平なやり方に頼る傾向がある」と記していたのである³²⁾。

エルギリ出身のイスラーム法官はいつの時代から現れるのだろうか。サンプル中には18世紀中に法官を輩出していた家系もある一方で、1860、70年代に非ウラマー系の名士の家に生まれた法官も存在する。また、ナীবの任命台帳からは、1850年代後半には既に、ヤンヤ州を始めその周辺の各郡でエルギリ・リボホヴァ出身のナীবが半独占状態を築いていたことが見て取れる³³⁾。これらを勘案すると、推測の域を出ないものの、Clayer (2000: 53) の指摘するように、ヤンヤ州を拠点としてアルバニア地方一帯を支配したテペデレンリ・アリー・パシャの失墜 (1822年)、1826年のイエニチェリ廃止と軍事改革、マフムト二世のアーヤーン (地域一円を支配する地方名士) 制圧政策³⁴⁾、そして1848年のティマール制の廃止などの諸要素が絡み合った19世紀前半という時期が、ある種の転換点だったのだろう。これらの変動によって権力・経済基盤が動揺し始めたエ

ルギリ・リボホヴァの名士たちが、イスラーム法官の道への転向によって新しい環境への適応を図ったのではないだろうか。エルギリのように資源の限られた地域において、帝国の官職は政治的経済的な勢力の存続と拡大を図るための有力な手段の一つだったであろう。そして19世紀の前半では、オスマン帝国の官僚制組織はいまだ十分に発達しておらず、当時のエルギリの名士たちには、軍事的な地位に代わる、彼らの権益を保護し拡大する手段として、イスラーム法官職が最適と見られたのではないだろうか³⁵⁾。

ただし、ウラマー層への移動は、必ずしも一方向的なものではなかった。例えば、メフメト・ハイレッディン (SA dos. 210) の家系は、彼の曾祖父 (あるいは高祖父か) の代に「高名なウラマーでカーディー」を出したが、父親自身は農場経営者だったという。またイスMAIL・フルスィー (SA dos. 1501) の場合では、代々「アーたち」に属する名家の出であったが、父親の祖父が教師であった。このような例を見ると、ある家系からウラマーが輩出されたとしても、その後その家系の男子成員全てがウラマーの道に進む

32) Başbakanlık Osmanlı Arşivi (BOA), Şura-yı Devlet Evrakı 2085/12, ヤンヤ州知事の大宰宛宛報告書, 4 Cemaziyelâhîr 1285/9 Eylül 1284 (21 Sept. 1868). なお, Clayer (2000: 36-38) は, エルギリ郡出身の法官の出自について, ウラマー層, それ以外の識字層, そして (その家系に既にウラマーを含んでいたような) 小規模な名士 (petits notables) としている。また, 「きわめて有力な名家の息子」はほとんどいなかったという。Clayer (2000) においては半数以上 (109人中64) が職業不明となっており, これは, Albayrak (1996) の簡約化した記述に依っているためだと思われる。本研究もサンプル調査であるので, 絶対的なことは主張できないが, ラースィム・パシャやサーミーの証言も参考に入れば, 土地所有と徴税請負を基盤とする軍人系名士層 (小規模であるかもしれないが) 出身, というのがエルギリ郡生まれの法官の典型であるとするほうが, より相応しいと思われる。

33) İstanbul Müftülüğü Meşihat Arşivi, D/I, no. 144, Naib Defteri. これは1855年のナীব制度改革を受けて作成され始めたものである。例えば, フィロリナ郡 (現ギリシャ領フロリナ) では, 1856年から64年までの約9年間, エルギリ出身のナীবが立て続けに6名任命されていた (Ibid., fol. 42b)。

34) マフムト二世のアーヤーン対策については, 永田 (1969) を参照。

35) 一般に, ウラマーの地位は, 財産没収の免除特権とともに宗教的な正統性を得られる点で魅力的だったと考えられる。19世紀前半, テペデレンリ・アリー・パシャの子孫や従者たちもまた, イルミエの階層制の中に地位を獲得していたことが知られている (Zilfi 1983a: 335)。サンプル中にも, アリー・パシャの親族 (akrabalarından) であるエルギリ生まれのナীবが存在する (SA dos. 174, Ergirili Abdülhalim)。

わけではなかったと想像される。それによって、上に引用したラーسيم・パシャの言葉通り、「兄弟や親戚」が「徴税請負人や商人」であるような状況が存在し、互いに保護・協力し合うことによって家系の存続が図られていたと考えられるのである。

それでは、エルギリ郡出身者の成功の理由は何だったのであろうか。この点に関して、再びヤンヤ州知事ラーسيم・パシャの言葉を引用すると、「今まで彼らがそのように地元民 (yerluden) でありながら [ヤンヤ州内に] 任命されていたのは、彼らがギリシア語を知っていることが考慮されたためであることは明らかである」という³⁶⁾。ヤンヤ州はギリシア文化の強い影響下にあり、ギリシア系住民に限らずギリシア語を話す人口も多かった。1868年に創刊された州の官報がトルコ語とギリシア語の両方で書かれていたように、ギリシア語はヤンヤ州の第二の公用語とも言える言語だった³⁷⁾。法官がシャリーア法廷のみならず制定法法廷や地方評議会でも重要な役割を担っていたことを考えれば、同州の法官にギリシア語の知識が求められても不思議ではない。知事の言葉通り、サンプル中のエルギリ郡出身の法官35人のうち、実に31人がギリシア語の知識をもつと履歴書に記入している。しかもそのうち22人が、ギリシア語を書くこともできるという。そのほぼ全員がアルバニア語を話すムスリムであるエルギリ県出身の法官たちが³⁸⁾、どのようにギリシア語の読み書きを身につけ

たかは必ずしも明らかではない。だがいかに習得したにせよ、彼らはギリシア語能力を活かして、ヤンヤ州を始めその周辺地域の法官職を手に入れていったと考えられるのであり、それが上述の1850年代後半の任命台帳に見られたような、彼らのヤンヤ州一帯の広域支配という状況となって現れているのである。もちろん、法官組織内部の、そしてラーسيم・パシャの指摘したような名士間の、地縁・血縁ネットワーク³⁹⁾を利用して地盤を築いていったのであろう。

しかし、彼らは単にアルバニア地方に君臨した地方エリートであるだけではなかった。エルギリ郡出身のイスラーム法官を最もよく特徴づけていたのは、ナーイブ学院での修学である(20人, 57%)。イスタンブルで学んだ者の割合は、83%(29人)に及ぶ。彼らはまさしく帝国の中央で養成されていたのである。また、ナーイブ学院卒業生全体を見たときのエルギリ郡出身者の占める割合も注目に値する。創立時から1909年までの768人の卒業生のうち、実に18%(141人)がエルギリ、リボホヴァの出身であり、一つの郡出身者としては他を完全に抜き出ている(表6参照)。彼らはオスマン帝国中央(長老府)の政策の変化に素早く適応したのである。1855年の改革以降、法官職を得るには地方社会における人的ネットワークだけではもはや十分でなく、ナーイブの等級をもつことがきわめて重要であり、等級を得るにはナーイブ学院を卒業すると最も有利であることを、

36) BOA, Şura-yı Devlet Evrakı 2085/12, ヤンヤ州知事の大宰相宛報告書。

37) Strauß 1995: esp., 306; *EF*², s.v. “Yanya,” by Meropi Anastasiadou, 11: 282.

38) エルギリ郡出身者35人中31人が履歴書にアルバニア語を知っていると申告している。残る4人も生まれ育った地の環境からしてアルバニア語を知らなかったとは考えにくい。

39) 血縁、地縁のネットワークは、見習いの慣行にも見ることができる。父親や兄弟が法官を務めている法廷で見習いをしたりリボホヴァ出身のメフメト・シェヴキー (SA dos. 191) の例がある。また、ユースフ・アーギヤフ (SA dos. 198) は、同郷のリボホヴァ出身の法官サーリフ・エフェンディとともにヤンヤに赴き、彼のもとで書記官を務めたのち、クシャダス郡 (アイドゥン州) に任命された別の同郷の法官ユースフ・エフェンディのもとで、同郡に属するアヤスルー郷のナーイブ職に任じられた。Cf. SA dos. 207 (Libohovalı Mustafa Âsım); SA dos. 2547 (Ergirili Musa Rıza)。同様の指摘は、Clayer (2000: 46-47)。

表6 ナーイブ学院卒業生の出身地*

出身地 / 卒業年	計	第Ⅰ期 1856-67	第Ⅱ期 1868-83	第Ⅲ期 1884-1909	第Ⅳ期 1910-17
イスタンブル	9%	9%	10%	10%	4%
ザーデギヤーン	3%	3%	7%	4%	0%
イスタンブル+ザーデギヤーン	12%	12%	18%	14%	4%
エルギリ郡	14%	19%	29%	15%	2%
その他ヤンヤ州	2%	6%	5%	1%	0%
セラーニキ州	3%	3%	2%	2%	4%
その他バルカン	6%	4%	7%	5%	8%
バルカン小計	25%	32%	43%	23%	14%
トラブゾン州	17%	4%	13%	22%	17%
イブラードウ	2%	13%	1%	1%	1%
その他コンヤ州	5%	7%	6%	4%	7%
スイヴァス州	5%	10%	4%	4%	4%
アダナ州+マラシュ県	5%	1%	2%	7%	6%
ヒュダーヴェンディギヤール州	5%	4%	1%	3%	13%
アイドゥン州	5%	1%	1%	3%	11%
その他アナトリア	14%	13%	10%	13%	18%
アナトリア小計	58%	53%	38%	57%	76%
アラブ地域	4%	4%	2%	2%	5%
帝国外	1%	1%	2%	0%	0%
不明 (N)	16	4	6	4	2
計	100% 100%	100% 100%	100% 100%	100% 100%	100% 100%
N=	1037	116	194	458	269

* *İlmiyye Sâlnâmesi*, 689-736; *Cerîde-i İlmiyye*, 14 (1333): 92-93, 24 (1334): 568-569, 32 (1335): 916-917.

上記文献で出身地が記載されないもの、および「アクセキ」「アライエ」出身とされているものについては、Albayrak (1996) で出身地を確認できる場合はその情報を加味した。シェフルエマーネティはイスタンブルに、イズミット県とカレイ・スルターニー（ビガ）県はヒュダーヴェンディギヤール州に含めた。

彼らは即座に看取したのであろう。とりわけ法官職において比較的新参者であるエルギリ郡出身者にとっては、新しいシステムを利用することが、法官組織全体の中で地位を確固たるものにすることに貢献したことは間違いない。

アルバニア語を母語とするエルギリ郡出身の学生が、トルコ語能力を重視するナーイブ学院 (Akiba 2003: 144-145) で成功を収めることができたのは意外ですらある。だが、既に出身地域とイスタンブルにまたがって存在していた同郷のイスラーム法官のネットワークの中で、法官職に対する強い指向性を持ち、法官職に必要な教養を身につける好条件を備えていたことが、彼らの成功の大きな要因なのであろう。この点は、例えば、ナーイ

ブ学院に入る前に既に法廷での見習いを経験している者がいることから確認できる⁴⁰⁾。

ナーイブ学院以外の専門高等教育機関についてはどうであろうか。1859年に主に郡長などの地方官を養成するためにイスタンブルで行政学院が開校したとき、新式学校が発達していなかった当時は多くのマドラサ学生が入学したのだが、エルギリ出身の学生もその機会を逃さなかった。最初の17年間に8人（全卒業生の5.4%）のエルギリ、リボホヴァ出身者が行政学院を卒業している (Çankaya 1968-71, 3: 20-40)⁴¹⁾。だが、その後行政学院が本格的な高等教育機関となるとその数は減少し、例えば1885年から1902年の間には6人しかエルギリ郡出身の卒業生がいなかった (0.8%)。それに対して法学校からは、同じ

40) SA dos. 166; 207; 779; 1501.

期間により多くの卒業生（30人、3.9%）を出している。しかし同時期にナーイブ学院を卒業したエルギリ郡出身者42人（13.8%）には及ばない（表5）。すなわち、エルギリ郡の人々が最も成功したのはイスラーム法官職においてであり、新しい司法制度や行政の官職がそれにとって代わることはなかったのである。

イスタンブルにおける教育、試験、そして任官のプロセスは、エルギリという辺境からやってきた地方エリートをオスマン帝国のエリートへと変貌させた。彼らは、地元のヤンヤ州やその周辺のみならず、アナトリア、そしてアラブ地域にまで任命されるようになった。サンプル中の35人のうち2割はバルカン半島の外に赴任しなかったが、他の8割はアナトリアでの勤務歴がある。そのうち6人（17%）がアラブ地域にも任命された。アナトリア、アラブ地域への任命回数は、後の世代になるほど多くなる傾向にあり、第I期のエルギリ郡出身法官の任命先のうち、アナトリア、アラブ地域は23%であったが、第III期の法官の場合、その割合は38%に上昇している⁴²⁾。

最後に、アルバニア・ナショナリズムの台頭という状況との関連を考えてみなくてはならない。1868年にヤンヤ州知事が現地出身の法官を問題視していたのは、必ずしも彼らのナショナリズムを警戒していたわけではなく、ローカリズムつまり地方に自立的な勢力が伸張することを抑えるという観点からだっ

ただろう。だが1881年にプリズレン同盟が解散させられた際には、エルギリ郡出身のナーイブにも累が及ぶことになった。同盟に対する弾圧の指揮をとったデルヴィーシュ・パシャによって、コソヴァ州に在任中の7人（一説には12人）の法官が、アルバニア人であるという理由で（*Arnabud bulunmak hasebiyle*）解任されたのである。サンプル中にはその肅清を経験した3名が含まれている⁴³⁾。彼らがどの程度プリズレン同盟の活動に関与していたのかは不明であるが、地方行政の要職にあつて、同盟の中心的メンバーと接触をもっていた可能性は高い。

第二次立憲政期には、アルバニア・ナショナリズムは独立運動として高揚する。エルギリもまた、ナショナリズム運動の一大中心地であった（Gawrych 1980: 233）。サンプル中の2人のエルギリ郡出身の法官が、「アルバニア反乱運動（*Arnavutluk harekât-ı isyâniyyesi*）」への関与を問われて1913年に追放された⁴⁴⁾。1912年のアルバニアの分離独立後も、オスマン帝国にとどまって法官職に従事し続けた者も少なくないが⁴⁵⁾、それ以後アルバニアからイスタンブルへという人の移動の流れはほとんど途絶えてしまったようである。サンプル中に1910年以後新たにエルギリ郡から現れた法官がいないのと同様に、ナーイブ学院からも、1912年卒業の1名を最後に、エルギリ郡出身の卒業生は姿を消す。

独立を機に帰郷した者たちや、法官家系の

41) 8人の父親のうち、1人が名士、2人がイスラーム法官、残る5人は職業不明で、「アー」の称号をもつ。

42) Clayer (2000: 49-51) も法官を生年別に3つのグループに分け、任地の割合を計算して同様の結果を導いている。

43) SA dos. 172 (Libohovalı Muharrem Sıdki, 当時カルカンドレン [テトヴォ] の法官) ; SA dos. 270 (Ergirili Ali Murteza, 当時ギラン郡法官) ; SA dos. 729 (Ergirili Mehmed Sa'îd, 当時イベッキ郡法官), デルヴィーシュ・パシャによる弾圧については, Külçe (1944: 265-270) 参照。ただし法官の解任については言及していない。

44) SA dos. 291; Albayrak 1996, 4: 344-346 (Libohovalı Üveys Naili) ; SA dos. 296 (Ergirili Ahmed Ramiz)。後者は、履歴書に「私の民族はアルバニア人である (milliyetim Arnabuddur)」と記入していた。

その後についての情報は、目下のところ乏しい。しかし新生アルバニアにおいてもシャリーア法廷を始め、司法、行政関係の職務に就いたであろうと想像される⁴⁶⁾。オスマン帝国のエリートの一角に加わっていたエルギリ郡出身者は、ここでナショナルなエリートへと転身したと言えるだろう⁴⁷⁾。

4. 職種の切り替え—イブラードゥ

アランヤとバイシェヒル、コンヤを結ぶ今日の幹線道路から、アクセキ方面とは反対側の西に折れて、約20キロ、曲がりくねった山道を登ったところにイブラードゥの町はある（標高900m）。山の斜面に細長くへばりついているこの小さな町が約100年前までいかにして多くのイスラーム法官を生み出したのか⁴⁸⁾、にわかには想像しがたい。この町にはどのような歴史があったのだろうか。



図3 イブラードゥ遠景

2002年8月著者撮影

- 45) エルギリの商人の息子サイドは、マルマリスの法官職を3度も務めた後、住民の強い要請により、マルマリスのムフティー職に就任した。7年間以上ムフティー職に在任した後1890年に、「個人的な用事 (masâlih-i zâtiyye)」のため故郷に帰ったが、1899年に4度目のマルマリス法官職に就任した。1913年末時点でもマルマリスに住んでいた (SA dos. 777)。彼のほか、アルバニア独立後もオスマン帝国のイスラーム法官職にとどまった例は、SA dos. 770 (Libohovahi Musa Kazım), SA dos. 1398 (Ergirili Ali Haydar), SA dos. 1428 (Libohovahi Hüseyin İbrahim) である。また、法官職には就かなかったが、バルカン戦争を逃れてイスタンブルに1913年に移住した例もある (SA dos. 1513, Libohovahi Ahmed Besim)。
- 46) 独立後のアルバニアでもシャリーア法廷は存続した (Popovic 1986: 16)。なお、行政学院を卒業した同郷者の何人かは、アルバニアに帰り新生国家の要職に就いている (Çankaya 1968-71, 3: 984 [Abdülrauf], 3: 1077 [Abdülkerim Sabit], 4: 1254 [İbrahim Pertev], 4: 1410 [Hasan Hüsnî], 4: 1420 [Bahri Omar], 4: 1472 [Zeynelabidin])。
- 47) 元来アルバニア・ナショナリズムはオスマン帝国の領土保全という点において、帝国と利害の一致を見ていたので、オスマン人であることと、アルバニア人意識とはあまり矛盾するものではなかった。Cf. 石丸 2002。

イブラードゥは古くからアライエ (Alâ'iyye, 現アランヤ)・サンジャクに属する郡であったが、1867年にコンヤ州が再編されたとき、アクセキ郡に属する郷に降格した⁴⁹⁾。共和国時代に一時期地名がアイドゥンケント (Aydinkent) とトルコ語化されたが、人々に馴染まれずにすぐもとの名に戻った。今日ではアンタルヤ県に属する郡 (ilçe) である。現在この町の名を知る者はオスマン史研究者の間でも少ない。郷土史家たちは、イブラードゥが山地で農業に適した土地が少ないため、生計の手段が町の外に、とりわけ官職に求められたのだと語る⁵⁰⁾。人口の多くが都市部に流出してしまった今日の現実を見てもそれは頷ける。

ある伝承によれば、イブラードゥの町における学問や教育の発展は、ミンカリーザーデ (Minkarizâde) と呼ばれる名家がこの地に根を下ろしたことに由来する⁵¹⁾。その家系の祖はセリム一世時代に遡り、アライエのサンジャクベイに任ぜられたときに、避暑のためにイブラードゥに別荘を設けたという。17世紀半ばには、この家系からシェイヒュルイスラーム、ヤフヤ・エフェンディが現れた (1661/62-73)⁵²⁾。このシェイヒュルイスラームについては、次のような興味深い逸話が伝

えられている。彼の在任当時、イブラードゥの人々にはもっぱら商売で身を立てており、とくにイスタンブルで宝石商を営む者が多かったという。あるときシェイヒュルイスラームは、イスタンブルにいるイブラードゥ出身の宝石商を集め、2年間の任期中に法廷手数料からいかに多くを稼ぐことができるかと説いて、彼らに息子たちをその道に進ませるように勧めたという⁵³⁾。この逸話自体は史実でないかもしれないが、イブラードゥ出身のウラマーの任用に関して、ヤフヤ・エフェンディを始めミンカリー家の人々の影響力が大きかったことを物語っている。

18世紀末には、イブラードゥのミンカリー家から、カドゥ・アブドゥラフマン・パシャという人物が現れた。彼は、セリム三世の改革時代にアナトリアにおける「ニザーム・ジェディード軍団」の編成に貢献したことで知られる⁵⁴⁾。その名 (「カドゥ」はカーディーのトルコ語) が示すように、彼は元来イスラーム法官であり、コンヤのナーイブ職やカイセリのカーディー職を歴任していた。だが、ボズクルとベレケトリの鉱山管理・徴税官 (maden emini) だったおじがボズクルのアーヤーンに殺されたとき (1801年)、彼はカーディーの地位を捨てて自ら兵を率いて

48) イブラードゥ出身の法官が多かったという事実は、Albayrak (1996) に基づいて、既に Kreiser (1989: 275), Clayer (2000: 38 n. 22), Meeker (2002: 274-277) によって指摘されている。とくに Meeker は、イブラードゥとアクセキから多くのウラマーが現れた背景について、黒海沿岸部の町オフと比較しながら示唆に富む議論をしている (後述)。

49) *Sâlnâme-i Devlet*, 22 (1284): 176, 23 (1285): 180.

50) Şahankaya 1977: 3, 7, 62. この文献を入手するにあたって、Yonca Köksal 氏の助力を得た。

51) Özkaynak 1954: 100-101; Enhoş 1974: 281 (Özkaynak の引用である); Sümbül 1989: 114 (これも Özkaynak の引用である)。

52) この人物については、以下を参照。İtmiyye *Sâlnâmesi*, 483; Rif'at Efendi n. d.: 70-71; Mehmed Süreyya 1308-11, 4: 637, 3: 585, s.v. Ömer Efendi, Minkarî.

53) イブラードゥ出身の事業家 Nabi Duru 氏談。2002年8月のイブラードゥにおける筆者の聞き取り調査による。ドゥル氏は、イスラーム法官だった義父からこの逸話を伝え聞いたという。カーディーの任期が2年で、手数料収入を得ていた、など細部の正確さが、この逸話をもっともらしくしている。

54) カドゥ・アブドゥラフマン・パシャは、セリム三世失脚後もアレムダール・ムスタファ・パシャが政権についたときに再び中央政界に復帰したが、イエニチェリの反乱に遭い、故郷イブラードゥに逃げ帰ったときに殺された (1809)。彼については、Uzunçarşılı (1971) が詳しい。また、ほとんどこれの引用だが、Şahankaya (1977: 22-28) も参照。

おじの仇をとり、その功績によってアライエの行政官 (mutasarrıf) に任命され「パシャ」になったのだった。彼の父、兄弟、甥もまたイスラーム法官だったことからわかるように、既に18世紀のイブラードゥでは、ミンカリ家から多くの法官が現れていた。郷土史家は18世紀にはイブラードゥが学問と富の中心地となっていたという (Özkaynak 1954: 101; Enhoş 1974: 281; Sümbül 1989: 114)。一方、アブドゥルラフマンのおじの地位や、彼本人がすぐさま兵力を集めたことから、ミンカリ家は、イブラードゥを拠点に広域な勢力をもつ強力なアーヤーンであり、法官職がその一つの重要な権力基盤になっていたのである⁵⁵⁾。イブラードゥの伝統は、おそらく彼らの家系の成功に始まり、そこから広がった地縁と血縁のネットワークを足がかりとして、イブラードゥの人々は法官組織の中に地位を確立していったのであろう⁵⁶⁾。

そのような長い伝統を反映して、サンプル中のイブラードゥ出身の法官の大半 (17人, 63%) が、やはり法官の父親をもつ⁵⁷⁾。それ以外には、商人が3人含まれ、ヤフヤ・エフエンディの伝承をもっともらしくしている。同じカーディーの町でありながら、出自の傾向におけるエルギリとイブラードゥの相違は明らかである。エルギリでは、軍人系名士層からウラマー層への移動が主に19世紀前半に見られたのに対し、イブラードゥでは、遅くとも19世紀の初めには既に法官の家系が多数存在していたのである。1815年から29年の間に生まれた早い世代に属する

4人もまた、父親と職業を同じくしている。

イブラードゥの南にあるギョデネ (Gödene) 村も、アブドゥルラフマン・パシャの時代頃からウラマーを輩出するようになったという (Özkaynak 1954: 39)。サンプル中にはこの村に生まれた6人の法官が含まれている。そのうち5人が法官の息子であり、長い伝統を感じさせる。

イブラードゥ出身の法官の多くは、伝統的な方法によって、つまり法廷書記官職や郷の法官職での見習いを通じて養成されている。これは既に法官組織の中に広がる人的ネットワークの存在を示唆していよう。現に、父親、兄、おじ、あるいは同郷者が法官をしている法廷で書記を務めた例がいくつも見られる⁵⁸⁾。その代わり、イスタンブルで学んだ者が大多数 (21人, 78%) であるにも関わらず、ナーイブ学院を卒業したのは、27人中3人しかいない。エルギリ郡出身者とは対照的である。

ナーイブ学院で修学しない、このような伝統的な養成・採用方法の選択は、彼らの昇進を著しく不利にした。第3級以上の等級をもつ法官は3人 (11%) しか含まれず、そのうち2人はナーイブ学院卒であった。ある郷土史家は、第二次立憲政期にナーイブ学院卒でないイスラーム法官が法官職から追放されたため、多くのイブラードゥ出身の法官が失職した、と指摘している (Şahankaya 1977: 48)⁵⁹⁾。サンプルのイブラードゥ出身法官の中には1909-10年の人員整理で完全に追放された例はないが、3名が人員整理によって一旦失職し (kadro hâric), その後ナーイブ学

55) アブドゥルラフマンは1796年に「イブラードゥのアーヤーン」として公式に認められている (Uzunçarşılı 1971: 246)。

56) 郷土史家は、「カドゥ・アブドゥルラフマン・パシャのアナトリアとアライエでの任務によって、イブラードゥの多くのウラマーがイスタンブルに行き、その子供や孫、親戚たちがイスタンブルや地方で地位を得る (mevki sahibi olmaları) ようになった」という (Özkaynak 1954: 39)。

57) なお、サンプル中のメフメト・ターヒル (SA dos. 748) の父親は、イブラードゥ出身のナーイブであったが、父親の任地ベイシェヒルで生まれている。

58) 典型的には、父、おじ、兄のもとで書記を務めたアフメト・ニヤズビー (SA dos. 1598) や、親戚や同郷者の指導下で書記や郡の法官を務めたメフメト・ナーフィ (SA dos. 2667) の例がある。

院で試験を受けて復帰した⁶⁰⁾。また、メフメト・アーリフ (SA dos. 722) は、1914 年に司法監察官 (Adliye Mufettişi) によって「能力が十分でない (iktidârî kâfi olmadiğı)」とされて解職された⁶¹⁾。これらの事実からは、一見彼らが新しい任用システムへの適応に失敗したかのように見える。しかし、イブラードゥの人々は既に 19 世紀末には、イスラーム法官職にいわば「見切り」をつけていたのである。

イブラードゥのエリートたちが選んだのは、制定法裁判所制度下の新しい司法職と地方行政官などの一般文官職だった。郷土史家シャハンカヤは次のように述べる。

イブラードゥの人々は、かつて法学部 [法学校] が開設された後には、郷土の伝統である職業人たちを裁判官職へと転向させる一方で、同時に国家の公務員職にも従事して、郷土全体で率先して祖国に知識人

を育てたのである (Şahankaya 1977: 62)。

彼らの「切り替え」の実情は、その教育選択に具体的に見ることができる。まず、1860 年から 1876 年の間に、設立当初の行政学院を 13 人のイブラードゥ出身者が卒業している。この人数はイスタンブル出身者の 21 人に次いで多く、際立っている (Çankaya 1968-71, 3: 20-51)⁶²⁾。そして表 5 に見る通り、新しい法律家を養成する法学校からは、1885 年から 1902 年の間に、イブラードゥ出身の卒業生が 26 名輩出された⁶³⁾。同じ 18 年間に行政学院を卒業した同郷者は 11 人と決して多くないが、同時期のナーイブ学院卒業生の中にイブラードゥ出身者が 2 人しかいないこと⁶⁴⁾と比較すれば、イブラードゥの人々の指向は明瞭であろう。注目に値するのは、上記のイブラードゥ出身の行政学院卒業生 11 人のうち、8 人がイスラーム法官の息子だったことである。ここには、法官職から地方行政官職へという世代間職業移動を明確に

59) Şahankaya は、「統一と進歩派のシェイヒュルイスラーム、ハイリー・エフェンディ」がナーイブ学院卒でない (mektepsiz) カーディーを追放したという。ハイリー・エフェンディがシェイヒュルイスラームに就任したのは 1914 年 3 月であるが、実際にはナーイブ学院卒でない法官の追放は、1909 年に始まっている。なお、同著者は、1908 年の立憲革命後、「イブラードゥのカーディーの中には害を被った者もいた」とし、ミトハト・パシャに死刑判決を出した裁判官がイブラードゥ出身のアーリー・スルーリー・パシャであり、その息子もスルタンの謀報員をしていたため、息子が追放されただけでなく、彼の庇護によって地位を得た者もその地位から追われたという (Şahankaya 1977: 48)。

60) SA dos. 169 (Mehmed Rifat); SA dos. 2696 (Yahya Niyazi); SA dos. 3327 (Mehmed Tahir). 失職はしなかったが、次の任官のために試験を五度も受け、最後にようやく合格して第 5 級を取得したイブラードゥ出身法官の例もある (SA dos. 2887, Mehmed Tevfik)。

61) 彼は 1910 年にナーイブ学院で試験を受けて第 5 級をもっていた。彼の追放時のシェイヒュルイスラームが、ハイリー・エフェンディであった。

62) この間の卒業生全体 (147) の 9% を占める。父親の職業・地位が不明の者が多く、出自について詳しいことがわからない。明記している例は、名士、スイパーヒー、イスラーム法官がそれぞれ 1 名ずつである。また、この 13 人以外に、イチエル生まれだが、イブラードゥ出身のナーイブを父とする卒業生が 1 人いる (Ibid., 66)。行政学院におけるイブラードゥ出身者の存在については、まず Szyliowicz (1971: 381) が注目し、この小さな町から行政学院に入ることが確立した伝統になっていることを指摘した。また、Findley (1989: 115) もこれに着目し、行政学院の教師にイブラードゥ出身者がいた可能性について触れ、この学校の「ギルド的」な性格を示唆している。しかし、両者ともイブラードゥ出身者の法官職における伝統との連続性において捉えることをしていない。Cf. Clayer 2002: 38.

63) 教育省の年鑑に掲載されている法学校の卒業生のリストには、7 人のアクセキ出身者と、2 人のギョデネ出身者が見られる。出身地がアクセキとされている卒業生の中に、実際にはイブラードゥ出身者が含まれている可能性もある。Sâhnâme-i Nezâret-i Ma'ârif-i Umûmiye, 1 (1316): 580-602, 2 (1317): 651-653, 3 (1318): 695-701, 4 (1319): 94-95, 6 (1321): 94-99.

見てとることができる。彼らの職業転換は、新しい司法職や文官職が、イスラーム法官職と比較してより有望であると見られていたことを意味する⁶⁵⁾。

郷土史家たちの著作には、オスマン帝国末期から共和国時代初期にかけて活躍したイブラードゥ出身の法律家、地方・中央の官僚、政治家たちの略伝が多数記述されている(Özkaynak 1954: 139-170; Şahankaya 1977: 29-46, 115-129; Enhoş 1974: 471-488)。1961年憲法制定に携わったイブラードゥ生まれの法律家ムアンメル・アクソイ(Muammer Aksoy, 1917-90)は、共和国期に引き継がれたイブラードゥの伝統を象徴するだろう。このようにイブラードゥ出身者は、オスマン帝国における法律・行政・教育の改革と、トルコ共和国の成立という新しい環境に成功裡に適応し、オスマン帝国の「伝統的」エリートから「近代的」エリートへ、そして共和国のエリートへと自らを変えていったのである。

ところで、表3は第IV期つまり1910年以降、法官全体に占めるイブラードゥ出身者の割合が増大したことを示している。だが、彼らは4人とも郷の法官から昇格したものであり、そのうちの2人は48, 49歳という高齢で法官(郡レベル以上)になっている⁶⁶⁾。つまり、第IV期には帝国崩壊前に死亡した法官が実態よりも多く含まれていることを

想起すれば、ここでのイブラードゥ出身者の占める割合も下方に修正すべきもののなのである。いずれにしても、彼らの存在はこれまで述べてきた傾向と矛盾しない。そこに含まれる全ての事例は、新参者と見なすことができるからである。一人の父親は確かに法官だったが、以前に郷の法官を経験したことがあるのみで、その後は商業に従事していた⁶⁷⁾。ほかの3人は、それぞれ商人、職人、そして「官職なし」である⁶⁸⁾。この時期、旧来の法官家系はすでに職業の移動を果たしており、彼ら新参者はその空隙を埋める形で法官職に進出したのである。

すでに述べたように、イブラードゥの法官家系は、19世紀末から新しい職種へと「鞍替え」を開始していたのだが、それは次のような結果を招いた。法官職は1913年まで通常は2年から2年半の任期制であり、待命中彼らは故郷に戻って暮らしていた⁶⁹⁾。しかし、新しい司法職や文官職は任期制でないため、それらの職に就いた者たちは外に出たまま帰郷しなくなってしまった(Şahankaya 1977: 7)。イブラードゥが郡から郷に降格した1867年頃にはすでに人口の流出が始まっていたと見るべきだろうが、その後人口流出には拍車がかかり、1921年に4550人あった町の人口は(Ibid.: 16)、1954年には2016人にまで減少した(Özkaynak 1954: 101)⁷⁰⁾。

64) 出身地がアクセキやアライエとなっている卒業生も含めると、5名いる可能性もある。なお、この論文で用いているサンプルあるいはAlbayrak (1996)で、たしかにアクセキ出身であることが確認できる以下の2名はその5名には含めていない。*İlmiye Sâlnâmesi*, 711 (Mehmed Seyyid [SA dos. 1313]), 712 (Mustafa Nafi [Albayrak 1996, 4: 96])。

65) 1859/60年にイブラードゥに生まれ、法学校を1886年に卒業生したメフメト・キャズムは、世代間および個人における職業転換の好例である。イスラーム法官の息子であり、イスタンブルでマドラサ教育を受けた彼は、当初はウラマーとしてのイルミエの位階をもっていたが、制定法裁判所の書記官在任中の1887/8年に位階を一般文官の等級に切り替えた。彼はのちに法学校の校長を務めた。*Sâlnâme-i Nezâret-i Ma'ârif-i Umûmiyye*, 3 (1318): 672-673。

66) SA dos. 722 (Mehmed Arif); SA dos. 1483 (İsmail Hakkı)。

67) SA dos. 1025 (Osman Remzi)。

68) SA dos. 1483 (“tüccârden”); SA dos. 2292 (Mehmed Emin, “İbradı Nahiyesi esnâfindan”); SA dos. 722 (Hacı Ahmedzade Ahmed Ağaの息子)。

69) 例えば、ヤフヤ・ニヤズイー(SA dos. 374)は、法官職にない間は、「イスタンブルで、また、私の出生地であるイブラードゥ郷で個人的な用事に携わって過ごしていた」という。

5. 上昇志向の人々—トラブゾン州

黒海の南東部沿岸に位置するトラブゾン州もまた、州単位で比較すると多数のイスラーム法官を輩出していた。サンプルの中には36人(12%)が含まれている。とくに、その約半数(19人)が東端のラーズィスタン県(中心地リゼ)出身である⁷¹⁾。ラーズィスタン県の東端に位置するホバ郡は、同県の中でも8人という最も多数の法官を送り出している(うち5人がアルハヴィ郷)。中心から離れた周縁になればなるほど多くなることは興味深い。他には、州の中心のトラブゾン県から10名、西のジャーニク県(中心地サムスン)からは5名、内陸部のギュムシハーネ県からは2名の法官がサンプルに含まれている。

19世紀の東部黒海地方では、イスラーム教徒が人口の大部分を占めていた。19世紀末の人口統計によると、東に行くほどムスリムの割合が増える傾向があり、ラーズィスタン県においてはムスリム人口が99%に達していた(Karpat 1985: 138-139, 164-165)。しかし、トレビズンド公国の旧支配領域であるこの地域が、このようにほぼ完全にイスラーム化するのは、17世紀頃だったと見られている⁷²⁾。イスラーム化の進行にともなってマドラサ教育も普及し始め、遅くとも18世紀には、トラブゾンより東の地

域ではオフが学芸の中心地になった(Meeker 2002: 164-165)。1869年のトラブゾン州年鑑によれば、オフ郡だけで2000人以上のマドラサ学生がいた⁷³⁾。それ以外の地域にも、年鑑やサンプル中の法官の履歴などから、19世紀後半には村レベルにまでマドラサ教育が普及していたことがわかる。このような宗教的・文化的条件が、イスラーム法官を生み出す背景の一つであった。

この地域では、18世紀から19世紀初めにかけて、非正規軍団から台頭した豪族たちが強大な影響力を持っていた。とりわけリゼのアーヤーン、トゥズジュオール家のメミシュ・アーは、19世紀初頭に近隣の豪族たちを従えてラーズィスタン地方一帯を勢力下に入れた。中央と対立した結果トゥズジュオール家は1834年に恭順させられたものの、この地域の独立性は強く、オスマン政府がトラブゾン州をタンズィマート体制下に組み込むのは他よりも遅れて1847年のことであった⁷⁴⁾。帝国の辺境にあり、中央の直接支配が浸透していない点、そして軍人系名家の支配は、エルギリ郡と共通する特徴である。

一方、地理的・経済的条件はむしろイブラードゥと共通する。東部黒海地方、特にトラブゾンより東方は、海岸沿いにわずかな平地があるのみで、そのすぐ背後には急な勾配が山脈へと続くため、農業に適した土地は限られている。そのため大農場経営が成立する

70) 1970年でも人口は2498人だった(Enhoş 1974: 284)。1950年代までにイブラードゥから多くの人々が国家公務員となってアンカラ、アンタルヤ、イズミル、イスタンブール、ブルサ、コンヤなどの主要都市に移住し、300から400戸の世帯が流出したという(İller Bankası 1956, 1: 258)。その後イブラードゥは、1990年に郷(bucak)から郡(ilçe)に昇格した。

71) さらに、ここではトラブゾン州出身の中に含めていないが、ベルリン条約(1878)によってロシアに併合されたパトゥム(現グルジア領パトゥーミ)は旧ラーズィスタン県の中心地であり、同郡出身者は4名いる。

72) Meeker 2002: 157-160; *EF*², s.v. "Rize," by Suraiya Faroqhi, 8: 566-567.

73) *Trabzon Vilâyeti Sâhnâmesi*, 1 (1286): 71. Repr., Kudret Emiroğlu, ed., *Trabzon Vilayeti Sahnâmesi*, 1869 (Trabzon: Trabzon İli ve İlçeleri Eğitim, Kültür ve Sosyal Yardımlaşma Vakfı, 1993), 150-151.

74) Aktepe 1951-52: 21-52. 地方名士の台頭とトゥズジュオール家の反乱については、Bryer (1969), Toumarkine (1995: 12-27), Meeker (2002: 171-181, 213-226) も参照。タンズィマート改革との関わりは、Çadırcı (1991: 197), Sarıoğlu (1996: 34-45) 参照。

条件はほとんどなかった。農業生産力には限界があり、豊かな富は常に外部に求めざるをえなかったのである。そのため、生活の資を得るために各地に出稼ぎに行くことは、この地域において一般的な慣習だった⁷⁵⁾。18世紀末頃からはイスタンブルへの移住の傾向が顕著になり (Güler 1999: 344-347)、それは今日にまで続いているのである。機会を求めて故郷を後にしたイスラーム法官たちもまた、これら出稼ぎ者や移民として外に出た人々と共通の文脈で理解することができよう。トラブゾン州東端のラズィスタン県から法官が多いのは、その地の経済的条件の困難さと比例しているのである。

マドラサの普及に見られるように、東部黒海地方において教育への関心が高いのも、経済的条件が厳しく、機会を外に求めねばならないという背景と関係がある。ホパの人々については、1902年のトラブゾン州年鑑に「読み書きへの熱意においても他の地域にまさっている (okumak yazmak hevesinde dahi diğer mahallere müreccah)」と記されている⁷⁶⁾。このように、故郷における厳しい条件が人々を外へと駆り立てるなかで、多くのウラマーが輩出されてきた、という点で、東部黒海地方とイブラードゥとは共通している

のである⁷⁷⁾。

東部黒海地方には、エルギリ、イブラードゥと以上のような部分的な共通性があるにもかかわらず、法官の出身階層を比較した場合は、重要な差異がある。サンプルにおいては、イブラードゥ生まれでは6割、エルギリ郡生まれでも2割が法官の子弟だったわけだが、黒海地方出身者の場合、法官を父にもつ者は1名しかいない。ウラマー層の出身者はエルギリよりは多いが、平均よりも少ない3割弱 (11名) である。そのうちの1人は、既にイスタンブルに移住してデルスィアーム (ders-i âm, モスクの教師)⁷⁸⁾ となっているが、この例と先の法官1名を除けば、あとはローカルなウラマーであり、教育に従事している者が多い⁷⁹⁾。ただし、「マドラサ教授」は1名のみで、3名が「ホジャ」としてのみ知られている。これらは固定的なポストをもたない教師または説教師を指していると考えられ、ウラマー層の中でも低い地位に位置すると見なすことができる。一方、地方の官吏が比較的多い (19%, 7名) のが目をつく。一人の郷の首長⁸⁰⁾ 以外は書記官や郡の実務担当官⁸¹⁾ であり、どちらかといえば下級の官吏といえるだろう。彼らの息子たちは法官になることによって、親の世代と比べてオス

75) 州年鑑には、コーカサス地方やルーマニアまで出かけて、商売をしたり、労働者 (rencber) やパン職人 (firnci) をしたりして稼いでいたことが書かれている (*Trabzon Vilâyeti Sâlnâmesi*, 20 (1320): 72, 80, 101, 273, 280, 286)。オフの住民もかつてルーマニアやクリミアまで商売のために出かけていたという (Meeker 2002: 99 n. 31). Cf. McCarthy 1979: 319-320.

76) *Trabzon Vilâyeti Sâlnâmesi*, 20 (1320): 286. 著名なオスマン朝経済史家 Mehmet Genç 氏はホパに属するアルハヴィの出身である。教育・学問重視の伝統が現在につながっている好例であろう。彼が筆者に語ったところによると、共和国初期にアルハヴィの住民は皆読み書きができたという。

77) この点については、Meeker (2002: 276) も指摘している。

78) イスタンブルのモスクで、マドラサ学生に講義をする教師のこと。秋葉 (1996) 参照。

79) 「その他」には、1名の小学校教師が含まれているが、これも地位の低いウラマーである可能性が高い。SA dos. 940 (Hopa-Arhavili Mehmed Celaledin).

80) SA dos. 2465 (Ordu-Perşembeli Osman Nuri).

81) SA dos. 2408 (Ünyeli Abdülcelil Vehbi, 市場監督官の書記 [ihtisab kitabeti]); SA dos. 2553 (Hopa-Viçeli Ahmed Hamdi, 書記 [ketebeden]); SA dos. 3502 (Hopa-Arhavili Yakub Sabri, バグダード総督のもとで書記官). 実務担当官としては、十分の一税の担当官 (a'sâr me'mûru) を父親にもつ者が2名いるが、二人は兄弟なので父親は同一人物である (このような場合でも本研究は父親に関しては全て「延べ」で計算している) (SA dos. 1080, Ünyeli Mahmud Cemal; SA dos. 1456, Ünyeli Mehmed Nuri). 人口調査官 (nüfûs me'mûru) も一人含まれている (SA dos. 3070, Rizeli Emin Hilmi).

マン帝国のシステムの中でより高い地位に達することができたのである。

また、エルギリ郡出身者との相違は、軍人系の名士を親にもつ者が少ないという点にもある⁸²⁾。1869年のトラブゾン州年鑑を見てみると、地方評議会に選ばれた委員の多くが「アー」や「ベイ」であることに気付く。おそらくは彼らこそが、この地域に君臨していた有力名家の出身者なのである。しかし、この地域の法官の父親の称号／敬称の中にはそもそも「アー」は少なく(4名)、「ベイ」はない。むしろ識字層に対する敬称「エフェンディ」⁸³⁾が大半を占めること(23名, 64%)が目される。「サンジャクトールザーデ(旗持ちの子)」や「カリヨンジュザーデ(ガレオン船員の子)」など軍と関わる家系名をもつ者もいるが、どれも村落部に住む「エフェンディ」、つまり村の識字層なのだった⁸⁴⁾。すなわち、先述のウラマー層や地方官吏も含む識字層は、地方社会の中では確かに名士的存在だったであろうが、彼らは有力な軍人系名家出身者ではなく、そのような有力家系に従属し、庇護下にあるような比較的弱小の家系(小名士)の出身者が多い、とい

う印象が強いのである⁸⁵⁾。

以上のように、東部黒海地方出身のイスラーム法官の、エルギリやイブラードゥ出身者との相違は明らかであるが、彼らの出自をより明確に特徴づけるのは村落部出身者の多さである。村出身の19名と郷出身の5名、計24名は、全体の3分の2に達する。このように、この地方出身の法官の出身階層は、これまでの事例に比して相対的に低いと言うことができよう。父親の職業・地位の情報がない者(「官職なし」)が比較的高い割合(10名, 28%)で含まれているのも、彼らの出身階層がそれほど高くないことを想像させる。

同時に、サンプル中のトラブゾン州出身者の中に法官の子弟が一人しか含まれていないという先に指摘した事実は、彼らのほとんど全員が法官職への新参者だったことを意味している。採用された時期を見ると第III期つまり1884年以降から特に増加していることから、法官職への参入は、エルギリ郡、イブラードゥと比べて最も遅く、19世紀半ば以降に本格化したと言えよう。

彼らの教育歴に関して言えば、2人を除く全員がイスタンブルで学問を修めている。新

82) 軍人系名士と見られるのはワクフサギール郷に属するアニファ(?) (Anıfa?) 村の地主 (ashâb-ı emlâk) のアテムダールザーデ(「旗持ちの子」)・イスマイル・アーのみである (SA dos. 428, Vakf-ı Sagirli Hacı Ali Vehbi)。名士層出身に分類されているもう1名の父親は、リゼに属するヴァルトラル(?) (Vartlar?) 村の名士 (eşrâfından) ベキル・エフェンディである (SA dos. 1380, Rizeli Mehmed Tefvik)。

83) 「エフェンディ」は当時においては読み書き能力のある者一般に対して付けられる敬称であった。それに対して「アー」は識字能力のない者に対する敬称であった。Heidborn 1908-12, 1: 185-186; Sâmî 1317-18, s.v. "efendi," "ağa."

84) メフメト・ネジブ (SA dos. 2474) は、「もともと家柄はスルメネの名家に属するアーヤーンザーデの出」であって、祖父が露土戦争に「旗持ち (sancaktâr)」として従軍したためサンジャクトールザーデと呼ばれる家系の出である。ただし、その父親は村の船頭 (kapudan) であり、本家からは離れた傍系である印象を与える。カリヨンジュザーデ家のレシト・フェフミー (SA dos. 2417, Atina-Mapavrilî Reşid Fehmi) の父は、村出身のマドラサ教授だった。前出とは別のもう一人のアテムダールザーデ家の法官の場合、父親の職業・地位は不明であるが、村出身で「エフェンディ」の尊称をもつ (SA dos. 2405, Rizeli Ali Rıza)。

85) 典型的な例は、バグダード総督としてその地のマムルーク勢力を倒したことで知られる「ラズ」・アリー・ルザー・パシヤの親戚 (müte'allikatından) で、彼の随員として (refâketinde) 書記官を務めていたという、ホバ郡アルハヴィ郷に属する村の出身のメフメト・エフェンディ (ヤークブ・サプリーの父) である (SA dos. 3502)。アリー・ルザー・パシヤについては、とりあえず、Mehmed Süreyya (1308-11, 3: 568-569) 参照。

参加者として法官職組織の中に地盤をもたなかった彼らが、教育と任用の機会が集中している首都に向かったことは容易に理解できる。さらに、約半数（17名）がナーイブ学院を卒業している。ナーイブ職の等級制において第3級以上に達した法官が13人（36%、平均は28%）に上ることに示されているように、イスタンブルでの教育、とりわけナーイブ学院での修学は、彼らの社会的上昇を保証したのである。

ナーイブ学院の卒業生全体に対してトラブゾン州出身者は17%を占める。同州は、多数のエルギリ郡出身者を含むヤンヤ州をわずかに上回って州単位では最も多くの卒業生を輩出したのである（表6）。ここでも第Ⅰ期にはとるに足らない数だったのが、第Ⅱ期から他を抜きん出て増加していることも、彼らが法官組織へ遅れて参入したことを物語っている。とくに重要なのは、1910年以降ナーイブ学院からほとんど姿を消すエルギリ郡、イブラードゥ出身者と対照的に、トラブゾン州は、帝国の最末期までナーイブ学院を通じて法官職に人材を送り続けていたという事実である。

このトラブゾン州は、イスラーム法官に限らず非常に多くのウラマーを輩出していた地域だった。例えば、1877年のオスマン朝国家年鑑によれば、イスタンブルのデルスィアームの中には、他のどの州よりも多くのトラブゾン州出身者が存在していた⁸⁶⁾。この

点もまた、イスラーム法官職にほとんど特化していたエルギリ・リボホヴァイブラードゥ出身のウラマーと大きく異なる点である。確かに、アルハヴィなど一部の地域はイスラーム法官職に特化しているように見られるが、リゼ、ヘムシンなどの出身者にはデルスィアームも多い（Albayrak 1996, *passim*）。また、オフ郡からはイスラーム法官も現れているが、オフは、伝統的に教師や説教師などを多く輩出したことで知られている⁸⁷⁾。

さらに、トラブゾン州出身者はイルミエ制度以外でも顕著な活躍をしていた。表5に見られる通り、まず、新しい司法組織に人材を提供した法学校からは、1885年から1902年までの間に38人のトラブゾン州出身者が卒業している。その期間の全卒業生中に占める割合は5.0%であるが、全体の3分の1を占めるイスタンブルを除けば、州単位ではコンヤ、ヤンヤに次いで高い割合である。また、行政学院においては、同時期に卒業した729人中、トラブゾン州出身者は24人（3.3%）であるが、首都出身者が約半数を占めるなかで州単位ではやはり上位を占めている。帝国最末期の1910年から1915年の間にはトラブゾン州から26名（6.2%）が卒業し、30%に至るイスタンブルを除けば最も多くの卒業生を輩出した州となった（Çankaya 1968-71, 4: 1259-1666）⁸⁸⁾。このように、トラブゾン州の人々は全体としてきわめて外向的で、教育そして官職を求める強い指向性をもっていたの

86) *Sâlnâme-i Devlet*, 32 (1294): 181-194. また、筆者と同じく長老府文書館所蔵の履歴文書を利用してデルスィアームの研究をしている Erbay によると、19世紀末のデルスィアームの中には、トラブゾン州出身者が最も多く、次いでカスタモヌ州（黒海沿岸）、アンカラ州が多いという。Halil İbrahim Erbay, "Being Teachers in the Ottoman Traditional Education: Social Mobility and Career Pattern Among Istanbul *Dersîams* in the Late 19th Century," paper presented to a workshop entitled "Reproduction of Islamic Knowledge in the Ottoman Empire: Continuity and Change in the Islamic and Ottoman Traditions," organized by the research group "Knowledge and Society," under the Islamic Area Studies Project sponsored by Japanese Ministry of Education, Tokyo, October 2001.

87) サンプル中にオフ出身者は1名しか含まれていないが（SA dos. 283, Mustafa Zühdi）、トラブゾン州出身のナーイブ学院卒業生全体の中では15人見られ、同州内の郡単位では、ホバ、アティナ、リゼに次いで多い。オフの「ホジャ」については、Meeker (2002) を参照。

である⁸⁹⁾。

数的に見れば、トラブゾン州出身者の活躍が際立っていたのは、やはりイルミエ制度においてであった。そしてとりわけ法官職において彼らは大きな成功を収めた。オスマン帝国の辺境に位置する村落部の出身者が、イスタンブルに渡り、ナーイブ学院を出て法官となることによって、帝国の国家機構の中に地位を確保したのである。こうして彼らは社会的上昇を実現させた。しかし、彼らが法官として成功することができたのは、彼らが遅れて帝国のシステムに参入したことの結果である。イスタンブルやイブラードゥ出身の人々の教育に対する指向からわかるように、ナーイブ学院は19世紀末において既に、帝国の高等教育機関間の序列の中で低位に位置づけられていた。そのため、新参者に対して門戸が広く開かれていたのである。トラブゾン出身者の法官職における成功はそのことと深く関連していたのである。

おわりに

オスマン帝国末期においてイスラーム法官を数多く輩出した4つの地域—イスタンブル、エルギリ郡、イブラードゥ、トラブゾン州—のそれぞれについて、法官が生み出された社会的背景を検討してきた。法官の出自は、各地域によって鮮やかに異なる特徴をもっていた。すなわち、高位のウラマーの子弟が中心のイスタンブル出身の法官、地方名士層の出で、ナーイブ学院で教育を受けたエルギリ郡出身者、代々イスラーム法官を生業とし、徒弟制的伝統で養成されていたイブラードゥ出身者、主に村落部の識字層の出身

で、ナーイブ学院を通じてこの職業に遅れて参入してきたトラブゾン州出身者、という4つのタイプを見出すことができた。これらのタイプの相違は、各地域の経済的条件、社会的成層、文化的伝統、中央への統合の度合いといった要因に由来していた。

それでもこの4地域に共通するのは、マドラサ教育（トルコ語を媒介し、イスタンブルに中心性があるようなマドラサ文化）が普及していた点であり、また、イスタンブルは少し事情が異なるものの、生活の資を得る手段が限られていたという条件である（イスタンブルでは逆に、生活上の必要が生じたウラマーが法官職を選ぶという構図があった）。これら二点は、当然ながら法官職の特性に関係している。法官の組織は、マドラサ教育と、その延長線上にある法廷での見習いや、ナーイブ学院での教育に支えられていたものであり、また、法官職は給与を伴う官職、ただし出身地以外の地方を転々とする官職なのであった。逆に言うと、マドラサ教育が盛んな地域であっても、例えばコンヤやカイセリのように、それ自体が中心性をもち様々な収入獲得手段に恵まれているような町からは、法官はほとんど現れなかったのである。

イスラーム法官職がマドラサ教育に支えられていたということは、裏を返せば、それに比べれば新式学校での教育は必ずしも必要とされていなかったということでもある。ナーイブ学院は新式学校と近い性格を持ち合わせていたが、その入学の条件は、アラビア語文法、論理学、修辞学、法学の基礎など、マドラサ教育に則した内容の試験に合格することであった（Akiba 2003: 139, n. 63）。つまりナーイブ学院入学の際には、新式学校での教

88) 1860年から1949年までの行政学院卒業生に占める黒海地方出身者（カスタモヌ、ボルなども含む）の数が、時代を通じて比較的高い割合を保っていることを、Szyliowicz (1971: 378) が指摘している。

89) 小松香織によれば、トラブゾン州出身者は海軍や官営汽船の人員にも多く含まれていたという。小松香織「オスマン帝国末期の海運と黒海沿岸民—「トルコ海運」史料の分析を通して」日本中東学会第19回年次大会（大分、2003年5月）における口頭発表。

育は必ずしも要求されなかったのである。それに対して、本稿でも比較の対象にしてきた行政学院の場合、入学するためには、附属の高等学校を始めとする新式学校で中等教育を修了してはならなかった（Çankaya 1968-71, 1: 225-229）。また法学校では、オスマン語、アラビア語基礎文法、論理学、地理、算術、歴史の知識を問う入学試験によって学生が選抜され、学歴は条件ではなかったが、実質的には新式学校での教育内容の修得が求められていた⁹⁰⁾。以上の比較は、ナーイブ学院の求める学力基準が他の二校と比べて必ずしも劣っていたということを意味しはしないが、末期オスマン帝国が作り出した新しいシステムへの統合の度合い、つまりその中央集権的なシステムの中での位置づけという点では、ナーイブ学院が決して中心に存在しなかったことを示している。行政学院、法学校、ナーイブ学院の間に存在する序列は、各学校に対応する職種—地方行政官職などの文官職、制定法裁判所制度下の司法官職、そしてイスラーム法官職—の間の関係の反映でもある。法官職は、イルミエの組織の中では、おそらく長老府内の管理職に次いで高いステータスと威信を有する職種であったが、帝国の官僚機構の中では、給与や身分保障などの待遇面から見て最上層にあったわけではなかった。そして、末期オスマン帝国の新しいシステムにおいて、そのステータス、権限、権力といった点から見て、地方行政官職や司法官職よりも上位には位置づけられていなかったのである。

オスマン帝国官僚機構における法官職のこのような位置づけは、人々の法官職に対する志向性を左右する重要な条件であった。オスマン帝国中央に緊密に統合され、改革の影響を強く受けていた地域の住民は、法官職ではなく、より新しいタイプの社会的上昇の機会をめざす傾向があったということが出来る。

このことがかえって、周縁地域の住民に法官組織に参入する余地を与えたのである。それによって結果的にエルギリやトラブゾン州といった、19世紀初頭まで帝国中央に緩やかな形でのみ統合されていた地域の人々が、法官組織を通じて帝国のシステムの中に地位を占めることができたのであり、また、それは、イブラードウの人々が永らく法官職で確固たる地位を維持しえた理由であると同時に、彼らが19世紀末から新しい官職へと移っていった理由でもある。

そして、1910年代には、この趨勢はいつそう如実となる。表1, 2, 3については第IV期のサンプル数が少ないため、必ずしも信頼性が高くないとしても、表6のナーイブ学院卒業生全体の傾向がそれを明らかに示している。すなわち、1910年以後新たに法官に採用された者の中から、イスタンブル、エルギリ郡、そしてイブラードウ出身者がほとんど姿を消し、彼らに代わって、トラブゾン州を初めとするアナトリア地方の出身者が法官組織の中で大半を占めるようになった。もともとナーイブ学院ではなく域内の教育の中心地で修学する傾向が強かったアラブ地域出身者は、ナーイブ学院卒業の原則が厳密化されることによって、新規採用からほとんど閉め出されてしまった。また、イスラーム法官を父にもつ法官（71名）は、サンプル中においては、イスタンブル（22）、イブラードウとギョデネ（22）でとくに多く、次いでエルギリとトリボホヴァ（7）及びアラブ地域（9）である。この点を考慮すれば、これらの地域出身者のほとんどいない1910年以降のナーイブ学院卒業生の大多数は、法官組織への新参者だったと推定できるであろう。さらに、サンプルでは第IV期に村落部出身者が7割を占め（全体では38%）、農民層出身者も13%（全体では2%）含まれていることは、ナーイブ学院卒業生がほとんどを占めるこの時期

90) “Hukûk Mektebi Nizâmnâmesi,” art. 14, *Düstûr*, 4: 446-447.

の新規採用者全体の傾向として、比較的社会的地位の低い階層の出身者が多く参入するようになった、と結論づけることができるだろう。

以上の考察から、オスマン帝国末期イスラーム法官組織の主要な特質を明らかにすることができた。しかし、ここで採り上げた4つのタイプのほかに、主に出身地域内にとどまって法官職に従事するという、アラブ地域出身法官に特徴的に見られるもう一つのタイプが存在することを指摘しておかねばならない。このタイプの法官に関しては、稿を改め

て論ずることになろう⁹¹⁾。また、法官以外のウラマーの出自も検討していくことで、帝国末期のウラマー層を総体的に理解することが可能になるであろう。さらに、本稿では比較の対象として行政学院と法学校の卒業生にしばしば言及したが、それらの卒業生の主な進路である地方行政官や司法官などについても、本稿と同様に出身地ごとにその担い手の分析がなされると、末期オスマン帝国の官僚組織の特質とともに、社会移動や統合の諸相が、より一層明らかになるであろう。

参 考 文 献

1. 文書史料

総理府オスマン文書館 (Başbakanlık Osmanlı Arşivi, BOA)

Şura-yı Devlet Evrakı

イスタンブル・ムフティエ局附属長老府文書館 (İstanbul Müftülüğü Meşihat Arşivi)

Sicill-i Ahvâl Dosyaları (SA dos.)

Sicill-i Ahvâl Defterleri (SA def.)

Defter (D/I) (長老府文書館に属するガシャリーア法廷台帳文書館に配置されている台帳)

2. オスマン政府刊行物

法令集

Düstûr. First Series. 4 vols. and 4 suppl. İstanbul: Matba'a-i Âmire, 1289-1302.

年鑑・公報

Ceride-i İlmiyye (İstanbul).

İlmiyye Sâlnâme-i. İstanbul: Matba'a-i Âmire, 1334.

Sâlnâme-i Devlet (İstanbul).

Sâlnâme-i Nezâret-i Ma'ârif-i Umûmiyye (İstanbul).

Trabzon Vilâyet Sâlnâme-i (Trabzon).

統計

Devlet-i Aliyye-i Osmâniyye'nin Bin Üç Yüz On Üç Senesine Mahsûs İstatistik-i Umûmisidir. İstanbul: Âlim Matba'ası, 1316.

3. その他刊行文献

Agmon, Iris. 2004. "Social Biography of a Late Ottoman *Shari'a* Judge." *New Perspectives on Turkey*, 30: 83-113.

秋葉 淳 1996.「オスマン朝末期イスタンブルのメドレセ教育—教育課程と学生生活」『史学雑誌』105 (1): 62-84.

——— 1998a.「アブデュルハミト二世期オスマン帝国における二つの学校制度」『イスラム世界』50: 39-63.

——— 1998b.「オスマン帝国近代におけるウラマー制度の再編」『日本中東学会年報』13: 185-214.

——— 2003.「オスマン帝国近代のイスラーム法官—任命制度・教育・出自の変容」博士論文, 東京大学.

Akiba Jun. 2003. "A New School for Qadis: Education of the *Sharia* Judges in the Late Ottoman

91) 秋葉 (2003: 158-168) や Agmon (2004) などを参照。

- Empire.” *Turcica*, 35: 125-163.
- . 2005. “From *Kadı* to *Naib*. Reorganization of the Ottoman Sharia Judiciary in the Tanzimat Period.” *Frontiers of Ottoman Studies*, 2 vols. (Colin Imber and Keiko Kiyotaki, eds.), 1: 43-60. London: I. B. Tauris.
- Aktepe, Münir M. 1951-52. “Tuzcu Oğulları İsyanı.” *Tarih Dergisi*, 3 (5-6): 21-52.
- Albayrak, Sadık. 1996. *Son Devir Osmanlı Uleması*, 2nd ed., 5 vols. İstanbul: İstanbul Büyükşehir Belediyesi.
- Baltaoğlu, Ali Galip. 1998. *Atatürk Dönemi Valileri (29 Ekim 1923-10 Kasım 1938)*. Ankara: Ocak Yayınları.
- Bilici, Faruk. 1995. “Les archives du Şeyh’ül-Islam en tant que source de l’histoire de la fin de l’Empire ottoman.” *Histoire économique et sociale de l’Empire ottoman et de la Turquie (1326-1960): Actes du sixième congrès international tenu à Aix-en-Provence du 1er au 4 juillet 1992* (Daniel Panzac, ed.), 27-34. Paris: Peeters.
- Bingöl, Sedat. 1998. “Nizamiye Mahkemelerinin Kuruluşu ve İşleyişi, 1840-1876.” PhD diss., Akdeniz Üniversitesi.
- Blake, Corinne. 1991. “Training Arab-Ottoman Bureaucrats: Syrian Graduates of the *Mülkiye Mektebi*, 1890-1920.” PhD diss., Princeton University.
- Bryer, Anthony. 1969. “The Last Laz Risings and the Downfalls of the Pontic Derebeys, 1812-1840.” *Bedi Kartlısa, Revue de Kartvélogie*, 26: 191-210.
- Clayer, Nathalie. 2000. “Les cadis de l’après Tanzimat: L’exemples des cadis originaires d’Ergiri et Libohova.” *Turcica*, 32: 33-58.
- Çadırcı, Musa. 1991. *Tanzimat Döneminde Anadolu Kentleri’nin Sosyal ve Ekonomik Yapıları*. İstanbul: TTK.
- Çankaya, Mücellidoğlu Ali. 1968-71. *Yeni Mülkiye Târihi ve Mülkiyeliler*. 8 vols. Ankara: Mars Matbaası.
- Ekinci, Ekrem Buğra. 2004. *Osmanlı Mahkemeleri: Tanzimat ve Sonrası*. İstanbul: Arı Sanat.
- Enhoş, Mustafa. 1974. *Bütün Yönleriyle Akseki ve Aksekililer*. İstanbul: n.p.
- Faroghi [Faroghî], Suraiya. 1973. “Social Mobility among the Ottoman ‘Ulemâ in the Late Sixteenth Century.” *International Journal of Middle East Studies*, 4: 204-218.
- Findley, Carter Vaughn. 1989. *Ottoman Civil Officialdom: A Social History*. Princeton: Princeton University Press.
- Gawrych, George Walter. 1980. “Ottoman Administration and the Albanians, 1908-1913.” PhD diss., University of Michigan.
- Güler, İbrahim. 1999. “XVIII. Yüzyılda Trabzon’un Sosyal ve Ekonomik Durumuna dair Tesbitler.” *Cumhuriyet’in 75. Osmanlı Devleti’nin 700. Yılında Trabzon Tarihi İlmî Toplantısı (6-8 Kasım 1998), Bildiriler* (Kemal Çiçek et al, eds.), 327-349. Trabzon: Trabzon Belediyesi.
- Güran, Tevfik, ed. 1997. *Osmanlı Devleti’nin İlk İstatistik Yılığ 1897*. Ankara: T. C. Başbakanlık Devlet İstatistik Enstitüsü.
- Heidborn, Adolf. 1908-12. *Manuel de droit public et administratif de l’Empire ottoman*, 2 vols. Vienne and Leipzig: C. W. Stern.
- Hudson, Pat. 2000. *History by Numbers: An Introduction to Quantitative Approaches*. London: Arnold.
- 今澤浩二 1995. 「オスマン朝初期におけるウレマー制の展開」『イスラム世界』45: 1-28.
- 石丸由美 2002. 「オスマンルックとアルバニア人—「オスマン国民」理念の受容の問題をめぐって」『史学』71 (2-3) : 73-91.
- Itzkowitz, Norman. 1969. “‘Kimsiniz Bey Efendi,’ or a Look at Tanzimat through Namier-Colored Glasses.” *Near Eastern Round Table, 1967-68* (R. Bayly Winder, ed.), 41-52. New York: New York University.
- Itzkowitz, Norman, and Joel Shinder. 1972. “The Office of Şeyh ül-Islâm and the Tanzimat: A Prosopographic Enquiry.” *Middle Eastern Studies*, 8: 93-101.
- İller Bankası. 1956. *Belediyelerimiz*. Ankara: İller Bankası.
- İz, Mahir. 1990. *Yılların İz*, 2nd ed. İstanbul: Kitabevi.
- Karpat, Kemal H. 1985. *Ottoman Population, 1830-1914: Demographic and Social Characteristics*. Madison: University of Wisconsin Press.
- Kreiser, Klaus. 1989. “Süß-bittere Erinnerungen an Rumelien... Türkische Dichter, Bürokraten, Ulema und Politiker aus Südosteuropa.” *Südosteuropa-Jahrbuch, 19: Die Staaten Südosteuropa und die Osmanen* (Hans Georg Majer, ed.), 271-280. München: Selbstverlag der Südosteuropa-Gesellschaft.
- Kushner, David. 1994. “Career Patterns among the Ulema in the Late Nineteenth and Early Twentieth Centuries.” *Tanzimat’ın 150. Yıldönümü Uluslararası Sempozyumu: Ankara, (31 Ekim-3 Kasım 1989)*,

- 165-171. Ankara: TTK.
- Külçe, Süleyman. 1944. *Osmanlı Tarihinde Arnavutluk*. İzmir: n.p.
- 松尾有里子 1996. 「オスマン朝中期におけるウレマー—専門職業的ヒエラルヒーの形成とその担い手たち」『お茶の水史学』39: 45-74.
- McCarthy, Justin. 1979. "Age, Family and Migration in Nineteenth-Century Black Sea Provinces of the Ottoman Empire." *International Journal of Middle East Studies*, 10: 309-323.
- Meeker, Michael E. 2002. *A Nation of Empire: The Ottoman Legacy of Turkish Modernity*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Mehmed Süreyya. 1308-11. *Sicill-i Osmânî yâhûd Tezkire-i Meşâhîr-i Osmâniyye*. 4 vols. İstanbul: Matba'a-i Âmire.
- 三浦 徹 1998. 「19 世紀ダマスカスのイスラム法廷文書 (1) —サーリヒーヤ法廷をめぐる人間関係」『東洋文化研究所紀要』135: 147-227.
- . 2004. 「当事者の世界と法廷の世界—イスラーム法における契約」『比較史のアジア 所有・契約・市場・公正』(三浦徹・岸本美緒・関本照夫編), 113-140. 東京大学出版会.
- 永田雄三 1969. 「マフムート二世の中央集権化政策の一端—アーヤーン, デレベイ対策をめぐって」『オリエンツ』12 (34): 149-168.
- . 2001. 「オスマン帝国における近代教育の導入: 文官養成校 (ミュルキエ) の教師と学生たちの動向を中心に」『駿台史学』111: 63-90.
- Özkaynak, Kemal. 1954. *Akseki Kazası: Tarih - Coğrafya - Turizm - Biyografya*. Ankara: Akgün Matbaası.
- Popovic, Alexandre. 1986. *L'Islam balkanique: Les musulmans du sud-est européen dans la période post-ottomane*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Riza, Emin. 1978. *Gjirokastra: Ville - Musée*. Tirana: Editions «8 Nëntori».
- Roded, Ruth. 1983. "Ottoman Service as a Vehicle for the Rise of New Upstarts among the Urban Elite Families of Syria in the Last Decades of Ottoman Rule." *Asian and African Studies*, 17: 63-94.
- . 1986. "Social Patterns Among the Urban Elite of Syria During the Late Ottoman Period (1876-1918)." *Palestine in the Late Ottoman Period: Political, Social and Economic Transformation* (David Kushner, ed.), 146-171. Jerusalem: Yad Izhak Ben-Zvi, Leiden: E. J. Brill.
- Sâmî, Şemseddin. 1306-16. *Kâmûs-ı 'A'lâm*. 6 vols. İstanbul: Mihrân Matba'ası. Repr. Ankara: Kasgar Neşriyat, 1996.
- . 1317-18. *Kâmûs-ı Türkî*. 2 vols. İstanbul: İkdâm Matba'ası. Repr. İstanbul: Enderun Kitabevi, 1989.
- Sarıoğlu, E. Esin. 1996. "Tanzimat'ın Trabzon'da Uygulanması (1839-1856)." Master's Thesis, Karadeniz Teknik Üniversitesi.
- Strauß, Johann. 1995. "Das Vilayet Janina 1881-1912 - Wirtschaft und Gesellschaft in einer "geretteten Provinz"." *Türkische Wirtschafts- und Sozialgeschichte (1071-1920): Akten des IV. internationalen Kongresses, München 1986* (Hans Georg Majer and Raoul Motika, eds.), 297-313. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Sümbül, Ali. 1989. *Evlîya Çelebi gibi Geze Geze Akseki Kazası ve Köyleri*. İstanbul: Yayıncılık Matbaası.
- Szyliowicz, Joseph. 1971. "Elite Recruitment in Turkey: The Role of the Mülkiye." *World Politics*, 23 (3): 371-398.
- . 1975. "Changes in the Recruitment Patterns and Career-lines of Ottoman Provincial Administrators during the Nineteenth Century." *Studies on Palestine during the Ottoman Period* (Moshe Ma'oz, ed.), 249-283. Jerusalem: Magnes Press.
- Şahankaya, Kemal Naci. 1977. *Çeşitli Yönleriyle Ibradı*. İzmir: n.p.
- Toumarkine, Alexandre. 1995. *Les Lazes en Turquie (XIXe-XXe siècles)*. İstanbul: ISIS.
- . 2000. "Oulémas originaires du Lazistan, d'Adjarie, de Circassie et du Daguestan pendant les dernières décennies de l'Empire Ottoman (fin XIXème siècle - début XXème siècles): Approche préliminaire." *Caucassia between the Ottoman Empire and Iran, 1555-1914* (Raoul Motika and Michael Ursinus, eds.), 49-67. Wiesbaden: Reichert.
- Uzunçarşılı, İsmail Hakkı. 1971. "Kadı Abdurrahman Paşa." *Belleten*, 35 (138-139): 246-302, 409-451.
- Yazbak, Mahmud. 1995. "Strife among the Social Elite in Haifa 1870-1914, The Traditional Elite versus a New Rising Elite: Based Upon the Sijill of the Shari'a Court." *Histoire économique et sociale de l'Empire ottoman et de la Turquie (1326-1960): Actes du sixième congrès international tenu à Aix-en-Provence du 1er au 4 Juillet 1992* (Daniel Panzac, ed.), 539-554. Paris: Peeters.
- . 1997. "Nabulsi Ulama in the Late Ottoman Period, 1864-1914." *International Journal of Middle*

- East Studies*, 29: 71-91.
- . 1998. *Haifa in the Late Ottoman Period 1864-1914: A Muslim Town in Transition*. Leiden: Brill.
- Ze'evi, Dror. 1998. "The Use of Ottoman Sharī'a Court Records as a Source for Middle Eastern Social History: A Reappraisal." *Islamic Law and Society*, 5 (1): 35-56.
- Zerdeci, Hümeýra. 1998. "Osmanlı Ulema Biyografilerinin Arşiv Kaynakları (Şer'iyye Sicilleri)." Master's Thesis, İstanbul Üniversitesi.
- Zilfi, Madeline C. 1983a. "Elite Circulation in the Ottoman Empire: Great Mollas of the Eighteenth Century." *Journal of Economic and Social History of Orient*, 26: 318-364.
- . 1983b. "The *İlmiye* Registers and the Ottoman Medrese System Prior to the Tanzimat." *Collection Turcica III: Contributions à l'histoire économique et sociale de l'Empire ottoman* (Jean-Louis Bacqué-Grammont et Paul Dumont, eds.), 309-327. Leuven: Éditions Peeters.
- . 1988. *The Politics of Piety: The Ottoman Ulema in the Postclassical Age (1600-1800)*. Minneapolis: Bibliotheca Islamica.

中国社会の靈魂觀の表象に見られるパラドックス

謝 荔
(法政大学)

Paradox Found in Representations of Ideas of the Soul in the Chinese Society

HSIEH, Li
Hosei University

本文旨在通过四川地区的事例，探讨中国社会死者灵魂的文化表象中祖先观念与投生观念相悖的问题。在以往的研究当中，民间诸类亡魂的多重表象的问题往往被归结为灵魂观、阴间及来世观的多层性，抑或是死亡仪式体系与死者的超度观念相背反。对这一问题的更为深入的理解，需要将村落社会内部人们的信仰、宗教仪式与中国社会普遍存在的文化表象结合起来综合地进行分析考察。

四川农村地区死者灵魂的表象包括口头传说、与死亡仪式相关的物及文字资料等等。它们在表现了死者受到子孙的祭祀成为祖先的观念的同时，也表现了亡魂经历阴间地狱而后转生的信仰。从四川乃至中国社会整体来看，川剧目连戏、城隍庙内的地狱壁画雕像、“鬼都”酆都的寺庙建筑、善书《玉历至宝钞》等与死者灵魂相关的“公共表象”影响了清代以及民国时代以来人们的阴间观念，其中一部分成为传承至今的“民俗知识”。这些“公共表象”表达了劝善惩恶的社会理念，“百善孝为先”的孝行与仪式行为所体现的孝行一脉相承，覆盖并整合了祖先观念与投生观念的矛盾。

- | | |
|---------------------------|------------------------|
| I 序 | IV 転生する靈魂に関する公共的表象 |
| II 死者の儀礼と死者の靈魂に関する表象 | 1 演劇——目連戲 |
| 1 調査地の死者儀礼と死者追善供養儀礼 | 2 寺廟の彫像・壁画——城隍廟と酆都の寺廟群 |
| 2 靈魂のトポスに関する表象 | 3 出版物——『玉歷至宝鈔』 |
| III コミュニティ内部における死者の靈魂の諸表象 | V 考察 |
| 1 祖先として祀られる靈魂 | VI むすび |
| 2 転生すると信じられる靈魂 | |

Keywords: Soul, representations, ancestor, transmigration, filial duty
キーワード: 死者の靈魂, 表象, 祖先, 転生, 孝行

I 序

本稿は中国四川地域の事例を中心に、漢族の死者の靈魂観念の中で、冥界の地獄で裁きを受けて転生すると信じられる靈魂の表象について考察しようとするものである。死者儀礼と死者追善供養儀礼をはじめ、人々の生活における死者の靈魂にまつわる語り、儀礼の装置としてのモノ、儀礼の文字資料および社会で流通した演劇、寺廟の彫像・壁画、出版物といったような多様な表象がここには存在し、祖先として祀られる靈魂の観念と転生する靈魂の観念とは矛盾を抱えながらも併存している。本論では、死者の靈魂に関する諸表象を整理したうえで、その逆説的な靈魂観念を曖昧なまま両立させる文化のメカニズムを明らかにすることを試みる。

四川農村地域では、死者の靈魂について、(一)墓で遺体を棲家としてこれを守り続けるもの、(二)位牌に附着したり生前住んでいた家屋の周辺など至るところを浮遊したりして食べ物を探し求めるもの、(三)地獄で責め苦を受け、生前の罪が補償されれば転生するものと語られている。死後の魂が墓、位牌、冥界に一つずつあるという三魂の説はこれまで中国東南地域の福建、広東および台湾の漢族研究を中心に広く報告され、漢族の複数の靈魂に関する諸説の中でもっとも多く取り上げられている(張珣 1993: 216)。しかし、(三)に関しては、その行方についての人々の考えが漠然としたもので、しかも(一)、(二)と論理的に整合しないという問題が表出している。従来の研究にはこの問題を正面から取り上げて突きつめるものが少なく、異なった考え方をあまり排除しない中国人の宗教性、すなわち何らかの集団や個人は、互いに矛盾する信仰や慣習の間に必ずしも折り合いをつけないままで複数の思想を信奉している(J.A. バーリング 1995: 326)というところに帰結するなど、靈魂観や冥界観の多層性の枠にそのまま放置するという傾向がみられる。

これについて一つの説明を与えたのは M.L. コーエンである。M.L. コーエンは死者の儀礼体系と救済観念とが中国民間宗教において背反する主題であると指摘した。西方浄土やそれに類する想像上の至福の楽園の信仰は全体信仰の中核要素で、西方往生の救済は葬儀やそれに続く儀礼において最も強調されている。しかし、実際には死者の儀礼は死者が冥界に留まっているという信仰に基づいて実践され、救済を得るという観念とは背反する。また、冥界くぐりの後の輪廻転生の信仰も死者と生者の社会関係の対応と継続、すなわち両者が総合的親族組織に組み込まれているという民間宗教のテーマと一致しない。結局のところ、救済は民間宗教の主要関心事でもなければ、国家的な宗教制度や儀礼において特に強調されることもない。「民衆の正統信仰」に楽園の観念が組み入れられてはいるが、救済が起らないことを前提としている。救済を主な核としているのはむしろ異端とみなされる「宗派」教団の伝統であるとしている(M.L. コーエン 1994: 209-226)。

死者の儀礼は死者が冥界に生き続けるという信仰で行われ、冥界くぐりの後に輪廻転生して救済を得るという観念とは背反すること、輪廻転生の信仰が死者と生者の社会関係の対応と継続、死者が生者と相互的に結びつく社会関係に編入されるという民俗宗教のテーマと矛盾するという議論は重要であるが、M.L. コーエンは救済を目指すのがむしろ、社会秩序の崩壊につながる危険性があるゆえに政府から異端視される民間宗教の結社であると結論づけている。しかし、四川地域においては、死者の救済は死者儀礼および死者追善供養儀礼を行う動機、また儀礼の目的として異端信徒ではない普通の人々によって繰り返して語られる。救済の対象とされる地獄をくぐりぬけて転生する魂が仮に死者の靈魂観念の中心から周辺に追いやられた二次的なものであるとすれば、それが「民間宗教の主要関心事」や、「国家的な宗教制度や儀礼におい

て特に強調されること」との矛盾を抱えたまま「民衆の正統信仰」に組み込まれていることはいかなる意味をもつのか、さらに、救済が死者の儀礼の本質的な観念ではないとすれば、それが繰り返えして強調されることはどのような必要性によるのか。こうした問いの答えをつきとめることが本稿の目的である。

これまでの漢族の死者の靈魂觀念の研究では、靈魂についての民俗分類概念といわれてきた三種の靈的存在〈神〉、〈祖先〉、〈鬼〉は、その祀り手・祀り方によって靈魂の性質が変化し、三つのカテゴリーが可変性をもつとされ、靈魂自体は可變的で、可塑的な性格を帯びたものであるということが論じられてきた(A.P.Wolf 1974, 三尾 1990, 渡邊 1988; 1991)。このような靈魂の構造分析は人々の動態的解釈や認識の変化を提示し、死者の靈魂觀念における操作の可能性を示唆している。本稿で議論の対象となる死者の靈魂は祀り手の子孫がいるという意味で〈祖先〉であり、〈鬼〉のカテゴリーに属するものではないが、一方、転生後の形態が不明瞭であるという意味で〈祖先〉から逸脱する存在でもある。そのうえ、こうした靈魂にまつわる表象は、コミュニティ内部の語りや儀礼に関連するモノ・テキストなどの文字資料から、四川地域および中国社会全体でみられる演劇、寺廟の彫像・壁画、出版物まで及ぶ。したがって、曖昧でパラドキシカルな性格をもつ死者の靈魂の表象に関しては、祖先の觀念と結びつけながらも、それとは異なる視点から考察する必要がある。

ダン・スperlベルの表象の分布に関する研究では、文化的事象には心的表象(mental representations)と公共的表象(public representations)という二種類のタイプの表象が関与していると示した。心的表象に信念、意図、選好など、公共的表象に信号、発言、テキスト、絵などを含む。また、公共的表象は物質的な側面があり、その基礎に言語やイデオロギーなどのシステムがあること

が想定され、誰かに対して何かを表象しているゆえに解釈可能であると主張している(ダン・スperlベル 2001: 43)。心的表象と公共的表象との関係については、「ある社会的集団に広範囲にしかも永続して分布している表象」は文化的表象(cultural representations)で、文化的表象は心的表象あるいは公共的表象の多くのヴァージョンからできている。おののの心的表象のヴァージョンはある公共的表象の解釈に由来し、公共的表象そのものがある心的表象の表現であると彼は論じている(同上: 46, 85-86)。

表象の問題にはその背景となる知識の問題が絡んでくる。知識人類学の議論では、渡邊はシュッツの「知識」(knowledgeの定義)、すなわち知識とは「日常生活をいとなんでいく人間にとって、当人がそう考えるものすべてである」を援用し、調査地の話者の知識を「知識の質量を向上させようとする目的で教化され、植えつけられてきたような知識」と対比し、「民俗的知識」と規定した。民俗的知識にはその正当性の立場からみれば、「慣例的知識」から「象徴的知識」まで複数のレベルのものがある。「慣例的知識」とは「これが世のならいである」という類の説明で、経験的なことばによる客観化の体系が継承される場合に現れるものである。ただし、それはコミュニティ内部に広く普及したものであるが、ことばであるとは限らず、言語によって説明・解釈できないような相手の情緒・イメージも当該社会の知識の核心の一つである。「慣例的知識」の対極をなすのは「象徴的知識」であり、これはさまざまな客観的秩序を統合した象徴からなるひとつの全体性へと包括する知識であり、経験的知識や現実とは異なり現実にかかわる意味づけを行いうる知識である。「象徴的知識」は「専門家」の独占になりやすい一方、それはコミュニティの成員がその知識にしたがい、依存することによって公共的なものとして存在しうるものであり、公共の表現として具体化し具現す

る。言い換えれば、この知識は言語のみならずあらゆる象徴表現によって他者に開陳された知識である（渡邊 1990: 15-31, 230）。

渡邊は「個人が保持しながら個人を超えた知識および知識間の関係」の把握という問題を提起し（同上：2）、それはダン・スperlベルによって取り上げられた心的表象と公共的表象から成る因果連鎖——連鎖はクモの巣やネットワークに似たものを意味し、心的なものから公共的なものへの環と公共的なものから心的なものへの環から成っている（ダン・スperlベル 2001: 46）——言い換えれば心的表象と公共的表象の相互作用という問題と重なっている部分があると思われる。四川農村地域では、死者の霊魂観念の表象および民俗的知識の問題はコミュニティ内部における個人、家族、死者儀礼の担い手となる専門家、社会全体といった異なる次元の表象および民俗的知識のあり方と、その重層する関係性に関わるのである。

以下の章では、まず調査地の死者儀礼と死者追善供養儀礼を概観し、死者の霊魂に関する諸表象を整理する。それに続き、祖先として祀られる霊魂と、地獄を通過して転生すると信じられる霊魂という二つの観念のパラドックス、さらに霊魂の転生を決定する要因とみなされる要素間の矛盾を示す。そのうえで、地獄および転生の観念に関わる社会の公共的表象に注目し、公共的表象と心的表象との社会的回路を明らかにしたい。

II 死者の儀礼と死者の霊魂に関する表象

1 調査地の死者儀礼と死者追善供養儀礼

筆者はこれまで、四川内江市隆昌県、瀘州市近郊の農村地域を中心にフィールドワークを行ってきた¹⁾。四川南部の農村地域では、宗族組織の再興の現象が際立つ中国東南地域と異なり、宗族祠堂の再建や族譜の再編成の動きが殆どみられず、祖先祭祀は清明節の墓参りのほか、旧正月や「鬼節」と俗称される中元節に家で供物をこしらえて祖先を祭るなど、世帯ごとに行われるのが普通である。一方、死者の霊魂が酆都へ赴くという冥界地獄の信仰が四川の諸地域で広がっており、調査地もこの信仰エリアに入っている²⁾。死をめぐる一連の儀礼が「壇」という在家の宗教的職能集団によって執行され、「壇」の宗教的職能者が仏教系か道教系を問わず、通常「道士」や「老師」などと人々から呼ばれる。各々の「壇」は清の時代や民国時代を通して継承されてきた儀礼のテキストを保有し、1980年代頃から、それらを用いて過去約2, 30年間禁止されていた儀礼活動を再開した³⁾。以下では、「壇」によって担われる死者儀礼と死者追善供養儀礼を概観する。

死者儀礼は、死亡直後から死後百日または1年までの間に行われる一連の儀礼〈道場〉、埋葬および〈扶（復）山墳〉、〈做七〉、〈出煞〉、〈除霊〉を含む。死者が出れば、喪家はまず風水の専門家に埋葬の日にと時間を判

- 1) 四川南部地域でのフィールドワークは1996年より継続的に行われてきた。本稿のテーマに関する補足調査は2003年3月に平成14～16年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1）研究課題名『自社会研究としての人類学の確立にむけた基礎的研究』代表者：福岡大学中西裕二教授）により実施したのである。
- 2) 澤田瑞穂は地獄説の流布状況に基づき、中国の地獄信仰圏を「北方圏」と、酆都を拠点とする南方地域との二つに分類している。前者は泰山を起点としはは黄河流域に普及する泰山地獄の勢力範囲、後者は西部として四川、貴州、東部として長江中流下流域の諸省に及ぶと説いているが（澤田1991: 66-67）、吉岡義豊はこの説に対して「この区別は左程劃然としているのではない。むしろ酆都地獄が道教の代表地獄であると考えられる。又、地理的には泰山は勿論山東であるが、酆都は四川の酆都県の酆都宮だとされ、その地の霊域であることが宣伝されている」と異なる見解を示した（吉岡1989: 230）。
- 3) 「壇」と「壇」によって行われる宗教的儀礼については、筆者はかつて論述したことがある。拙稿1998, 1999, 2000, 2001a, 2001bを参照されたい。

断してもらい、その後近くの「壇」のリーダーである「掌壇師」に連絡し〈道場〉を依頼する。〈道場〉は靈魂の冥界への道案内〈指路〉と罪の減少ないし消去を目的とし、1日半の規模の〈道場〉は埋葬日の前日の午後から、3日間の〈道場〉は埋葬日の2日前から行われることになる。〈道場〉の際に、遺体安置室では祭壇が設けられ、赤い紙の位牌〈靈牌子〉と諸神の神位または神像が祀られる。3日間にわたる〈道場〉が行われる場合、またはそれほどの規模の〈道場〉でなくても遺族が謝礼を支払う場合、儀礼進行中に、葬礼の記録『経単簿』が掌壇師によって作成されることがしばしばある。『経単簿』の表紙には「除靈超度」や、「展卷思親」などと書いてあり、〈道場〉の意図が死者の靈魂をこの世から排除し救済するものであること、『経単簿』に記載された祖先を偲ぶものであることが示されている⁴⁾。

死者儀礼の最後の段階として、位牌〈靈牌子〉、遺影と招魂幡を手につく死者の直系の男性子孫を先頭に、出棺の行列は墓地へ移動し、遺体がそこで埋葬される。死者が冥界で使用するための、竹と紙で作られた家屋〈靈房〉がこの時に墓の前で燃やされ故人に届けるケースがある。埋葬3日後には親族は墓地で墓の土を固める〈扶（復）山墳〉を行い、喪服の着用を終了する。

遺体安置室の壁には法事の日程表が貼りつけてある。死後49日目まで7日ごとの供養〈做七〉、死後百日と一周忌の法事、そして死者の靈魂が死後8日目から18日目の間に一度に家に戻ってくるといわれる〈出煞〉の日にちが記される。位牌〈靈牌子〉を焼却する儀礼は〈除靈〉の時期は埋葬の直後、49日、百日〈百期除靈〉、百二十日、一周年など一様ではない。〈靈牌子〉を燃やさなければ、「魂の一つが家に残っており、一日中生

きている家族につきまとい、家族を不安に陥らせる」恐れがあるという。〈靈房〉は位牌〈靈牌子〉と一緒に焼却されることになる。

死者追善供養儀礼は〈七月半〉とよばれ、毎年旧暦の7月中旬の中元節に行われる。この時期に、祖先たちは冥界で正月を過ごす〈老人在陰間過年〉といわれ、7月10日から7月14日にかけて祖先を冥界から家に招請する。夕方頃、火を通した料理をテーブルに出して、年越しに帰ってくる祖先のために供える〈陰間的老人回来過年〉。家で祭祀するほか、7月13日、14日あたりに近くの寺廟へ行き、祖先を個人別に供養する位牌〈大牌位〉もしくは複数の祖先を一括して供養する位牌〈小牌位〉を選んで供養料を支払い、寺廟で供養してもらうこともある。黄色い紙の位牌〈牌位〉の真中に「佛光接引西故亡人往生蓮香位」、その左側に供養対象の祖先の名前が書いてある。供養品は「茲当中元之期／冥京内亡人〇〇〇収用／天運〇〇年7月15日火化奉」と書いてある紙銭、呪文、亡魂救済証明が包まれた紙包み〈袱子〉であり、これは寺廟の中元節の最終日に燃やされ祖先に届ける〈給老人焼袱子〉。

村では、町の寺廟へ行かない人々は「壇」に合同祖先追善供養儀礼〈超度会〉を依頼するケースがみられる。死者の靈魂が取扱われる〈超度会〉の場所はできる限り家の中を避け、在家信者の寄付によって建てられた小さな廟で行われる。〈超度会〉に際して、冥界〈陰間〉からこの世〈陽間〉へ渡る橋が腰掛けで造られ、沐浴神→衆姓先靈香位（祖先）→橋神→諸神→橋神→阿弥陀佛→土地神→門神→迎亡（祖先）という順序に、儀礼の場の外から内へと祀られる。儀礼の参加者たちは「壇」の宗教的職能者の「懺」の誦唱に従って諸神を拝しながら、橋を渡って戻ってくる祖先を迎える。この「懺」を聞いて、祖先が

4) 『経単簿』の形式、内容構成、そこに記載される親族の系譜の特徴について、拙稿1998を参照されたい。

子孫への訴えを思いながら涙ぐんだり泣き出したりする者がいる。「拝懺」の儀礼が進められるかたわら、掌壇師は紙銭、紙製の衣服や靴などを燃やし、諸祖先の冥界の生活用品を届ける。〈超度会〉の初日に、掌壇師は参加者が書いた供養対象の祖先の名前を「朋超各姓先霊」の供養リストに書き写して額縁に入れる。この供養牌は儀礼終了後に廟に掛かり、3年間連続して廟の参拝者の香火を受け続けるという。儀礼の疎文によれば、〈超度会〉の目的は「朋超超衆姓亡魂脱苦生方超登極楽陰安陽泰以乞冥陽二利事」、すなわち諸姓の亡魂が極楽世界に登ることを祈願し追善供養儀礼でそれらを救済し冥界の死者と生者の両方にご利益を与えるとされる。

なお、7月中旬に冥界の地獄の門が開き、祀り手のいない鬼〈陰間里没地位的孤魂野鬼〉、〈兒女没得的孤寡老人〉が地獄から出てきて飲食を求め、金銭をもらおうとしていたところをかき乱す〈七月半、鬼乱竄〉と伝えられ、施餓鬼の儀礼が寺廟や〈超度会〉でセットして行われるのが普通であるが、祀り手のいない靈魂〈鬼〉は本稿の考察の対象外ではないため、それについて論じないこととする。

2 靈魂のトポスに関する表象

死者の靈魂のトポスに関わる様々な表象はコミュニティ内部の死者儀礼と死者追善供養儀礼のみでなく、四川地域ないし漢族社会全体にみられる。今日の村の人々の靈魂觀念に影響を与えてきたと思われる表象は、個々人の語りに出出した冥界のイメージおよび靈魂觀念、儀礼の装置としてのモノと儀礼の文字資料、清代や民国時代に中国社会に広く流布した出版物、演劇、寺廟の彫刻・壁画などがある。これらについて以下に具体的に述べる。

(a) 「壇」の宗教的職能者と村の人の語り。
調査地では〈三魂〉、〈三魂七魄〉、〈魂魄〉と

いう言葉がしばしば耳に入る。その例を挙げれば、

「三つの魂は死後、一つは遺体を守り、一つは至るところを浮遊し、一つは悪いことをしたため苦難を受ける。冥界の10ヶ所の法廷〈十殿〉でもれなく苦しめられ、受けるべき責め苦を一通り受けてはじめて転生〈投生〉することができる。」(隆昌・男性・70代・「壇」の職能者・風水先生)

「魂魄は死後、墓、冥界〈陰間〉と位牌にいる。」(瀘州・男性・40代・掌壇師)

「魂魄は死んだ後に散ってしまう。地獄へ行くものもあれば、天堂へ行くものもある。」(隆昌・男性・40代・掌壇師)

「死んだ人間は確かに三魂七魄を持っている。悪い事をした者は冥界〈陰間〉で責め苦を受ける。」(瀘州・年齢不明・男性・廟の世話役をする人)

「三魂七魄は死後、一つは遺体を守り、一つは空中をさまよう、一つは地下に落ちる。落ちる地下の深さは道士なら計算できる。亡霊がどの道に転生するのかは死亡した時の年齢によって決められる。道士は死亡の年月日と時刻に基づいて、地下のどこに落下したのか、どの道に落ちるのかを調べる。それから畜生道や人道などが書いてあるメモを遺族に渡す。母の場合は死亡年齢がよくないので、畜生道に堕ちることになった。兒女は母のために罪を取り除かなければならない。」(隆昌・50代・女性)

「三魂は正魂で、七魄は気持ちを迷わせる悪いもので、人に悪いことをやらせるものだ。死んだ者の魂は、一つは苦しめられ、一つは墓を守り、一つは物を集めて使用・消費する。七魄は死んだら行ってしまう。」(隆昌・女性・70代[故人]・在家信者)

「一つの魂は転生し、一つの魂は冥界

へ行く。転生に行く〈去投生〉とよくいわれる。転生できたかどうかは、冥界めぐりの能力を持つシャーマン〈仙娘〉の話によれば、生前好事をたくさんし功德を積んでおいた人は死後2、3ヵ月経ったらすぐ転生する。悪い事をたくさんした人は転生が遅いという。出身村や出身の宗族の人間に再び生まれ変わるような例はぜんぜん聞いたことがない。」(隆昌・男性・70代・農業兼商売)

「満60歳の人死後60年経ったらはじめて転生することができる。同じ宗族に生まれ変わることはありえない〈不会投在本家〉。生前に多くの借金をした人は借金を返済するため牛や馬に生まれ変わることになる。ものを盗んだ人は冥界でそれを返さなければならない。普通の人は人間に生まれ変わる。良い人も悪い人も地獄へ行くことになる。出身の県(の城隍廟に祀られる城隍神のところ)へ行き、三年経てば閻魔王のところに辿りつく。」(瀘州・男性・70代・農業)

などが聞かされた。上の例からわかるように、魂と魄はかならずしも厳密に区別されず、〈魂魄〉という言い方をもって死者の靈魂を漠然と表す場合が多い。〈七魄〉については、「壇」の宗教的職能者にも村の普通の人も道教の經典における説明を知る者は殆どいない。〈七魄〉が一つの集合体としてみなされ、身体にある悪い性質のもので、死後にどこかへ「行ってしまう」といった程度で解釈されるにすぎない⁵⁾。それに対し、〈三魂〉をめぐる説明は比較的明確で、語られた内容の個人差がありながらも、民俗的知識としての共通した傾向が認められる。それを要約すれば、(1) 複数の魂が存在すること、(2) 靈魂のトボスは冥界であること。冥界の

イメージが漠然とした〈陰間〉から、冥界の法廷および地獄である「十殿」、墓の中、地下、空中など具体的に〈三魂〉に対応するものまである。分析の便宜上、本稿で民俗的知識の〈三魂〉をそれぞれ第1の魂、第2の魂、第3の魂に分類して考察したい。

第1の魂は墓で遺体を守るとされる。第2の魂は位牌に取り付いたり、至るところを浮遊したりするといわれる。第3の魂については三通りの説明がある。a) 生前に為した悪行のため「十殿」で裁判を受け、その結果地獄で苦しい目にあわされ、そのうちに転生する。b) 地下に落ちる。死亡年齢や死亡の年月日と時刻によって転生の結果が決められる。c) 散ってしまう。互いに矛盾する点が現われているが、その問題について後述する。

(b) 儀礼の装置としてのモノと儀礼の文字資料。死者儀礼に関連するモノには遺体が葬られる墓、冥界での家屋〈靈房〉、位牌〈靈牌子〉、死者追善供養儀礼に関連するモノには、中元節に寺廟で供養される祖先の位牌と〈超度会〉の供養牌、「壇」によって執行される両方の儀礼の祭壇の神位などがある。墓と〈靈房〉はいずれも祖先〈老人〉の冥界の居場所とみなされ、第1の魂に対応するモノと思われる。位牌〈靈牌子〉にはが死後しばらくは靈魂が附着するものとされるが、〈除靈〉の段階で焼却された後、その靈魂は生前住んでいた家屋の周辺など至るところを浮遊して食べ物を探し求めるといわれる。この魂は第2の魂に対応するもので、中元節に寺廟で供養される祖先の位牌、〈超度会〉の祖先の供養牌も同じカテゴリーのものであると考えられる。

祭壇に祀られる神位は数多く、その詳細はここで省略するが、「壇」の道士の説明によ

5) 『雲笈七籤』には、七魄は尸狗、伏矢、雀陰、客賊、非毒、陰穢、臭肺で、すべて身中の濁鬼であると解釈されている(佐藤 1994: 186)。

れば祭祀空間は基本的に内、外の二つの部分に分かれ、内側に祀られるのは上位の神々、外側は死に関わる神々であるという。内側の諸神位の周辺に「胎卵湿化」,「五音𩇑牙」,「十類孤魂」,「麟甲羽毛」などの「香位」が配置され祀られている。「香位」は神位とは異なり神格化できない祭祀対象であり、転生する第3の魂と密接に関連するものである。

儀礼の文字資料はモノに文字が記されるものも含めれば、供養法事および「出煞」の日程表、位牌〈靈牌子〉の文字表現、葬礼記録である『経単簿』,〈超度会〉の供養牌など、死者儀礼または死者追善供養儀礼で「壇」によって作成されたものも挙げられる。この中で、特に注目に値するのは供養法事および「出煞」の日程表である。後に詳しく述べるが、供養を受ける死者の靈魂の転生する形態が示されている。位牌〈靈牌子〉の真中に死者の名前、その両側に「三魂脱化、七魄生方」,「三魂如在日、七魄似生時」,「魂飛天外闕、魄散九霄雲」などが書かれ、靈魂の救済または消失が魂／魄、三魂／七魄の対句の形式で修辭学的に表現されている。『経単簿』は死者をはじめ、〈道場〉で追善供養を受ける祖先の系譜が記されるものである。これらは〈三魂〉の区別がつきにくいものと思われる。

(c) 演劇。四川地域の代表的な演劇である川劇の演目には目連戲がある⁶⁾。川劇目連戲は、地獄に堕ちて苦しんでいる母の劉氏を救うために出家した目連が法力に頼って冥界の「十殿」をめぐり、地獄の牢屋〈鉄圍城〉を打ち破って母を救出し、のちに犬に転生した母の救済を図って孟蘭大会を行って誦経した。玉皇大帝は目連の親孝行をみて旨を

下し、目連を仁孝大菩薩、父を勸善大師、母を勸善夫人に封じ、家族は団欒して天に昇る、といったような内容である。川劇目連戲の舞台の演出は舞台の下で行われる宗教的儀礼を混在させる形で観衆の参与を取り込みながら進められていき、その特徴は一部の内容が四川地域の冠婚葬祭の慣習や伝説に基づいて設定・展開されていくこと、舞台トリックや俳優のアクションが多いところにある(中国戯曲志編輯委員会・『中国戯曲志・四川卷』編輯委員会編 1995; 杜 1993: 19; 104-115; 246-247)。

建国後の1950年代初期頃から目連戲の上演が禁止されるようになったが、川劇目連戲は清代から民国時代を通じ、村、鎮、港町などの地域社会において、自殺者、疫病、戦乱などの災いに見舞われた際に、災因とされる非業の死をなし遂げた「鬼」を救済し、その怨みを鎮めるために奉納される現象が四川全域にみられた。また、裕福な家で49日間にわたる大規模の〈道場〉が行われる場合、川劇団が招かれ目連戲が上演されたケースもあった(杜 1993)。目連戲で演じられた地獄の刑罰、靈魂の輪廻の内容は、第3の魂に関わる地獄と転生の信仰の浸透にかつて多大な影響を及ぼしたと考えられる。

(d) 寺廟の彫像・壁画。冥界と地獄のイメージを表現するものとして、城隍廟、酆都の寺廟建築群の彫像・壁画が特に挙げられる。城隍廟は町の守護神である城隍が祀られる廟であり、現在は一部の地域でしか残っていないが、明の時代ではこの世の官僚システムと対応させるような冥界の諸神体系を構築しようとする意図に基づき、都・州・府・県ごとに制度的に建造された(鄭・王 1994:

6) 四川地域では、川劇のほか、四川南部瀘州周辺の師道戲、北部の梓潼陽戲、東部の巴県陽戲など、四川地方の仮面劇や人形劇にも目連戲の演目が含まれ、死者儀礼における亡魂の救済、または病氣治癒の願ほどの奉納、雨乞い、邪気払いなどを目的として目連戲が地域の舞台または自宅の庭で上演されていたことが報告されている(杜 1993: 258-260)。

112-114)。城隍神は冥界の地方知事とみなされ、城隍は死者が最初に出頭する冥界の末端官僚機構と信じられている。城隍廟には死後の審判および刑罰を受ける「十殿」の彫刻や壁画が多い。また、死者の靈魂が赴くといわれる冥界の都〈鬼都〉で名高い酆都は四川省の東部（現在では重慶市）にある。明代の洪武年間に、明太祖の詔により地名が変更された酆都は死後の靈魂が皆赴き、そこで刑罰を受けて転生する場所であるという信仰はその後いっそう広がっていったという指摘がある（劉大祥 1987: 183）。中国各地の城隍廟の「十殿」の彫像・壁画、四川地域の酆都の寺廟群によって、地獄の裁判および刑罰、冥界の空間構造のイメージが具現化され、死後に拘束されて転生の運命を待ちうける第3の魂の表象に影響してきたと思われる。

(e) 勸善書など社会で公的に刊行・流通している出版物。清代や民国時代に広く普及した通俗的な宗教書・教訓書『玉歷至宝鈔』は、図版を交え平易な文体を使って善行を勧める出版物で、その中で地獄と輪廻が図像と文字によって解説されている。この書物は漢族社会の人々の冥界観に大きな影響を与えていた（澤田 1991: 23）。

死者の靈魂の文化的表象は祖先となる靈魂と転生する靈魂が混在するもので、しかもコミュニティ内部とコミュニティにつながる外部すなわち中国社会全体に分布している。続く第三章と第四章では、コミュニティ内部と社会全体の諸表象についてそれぞれ検討する。

Ⅲ コミュニティ内部における死者の靈魂の諸表象

1 祖先として祀られる靈魂

まず、第1の魂、第2の魂について、儀礼の装置としてのモノからみていく。

出棺の行列で死者の靈魂が招魂旛によって墓地へ導かれていくことによって象徴されるように、埋葬された遺体を守り続けるとされる第一の魂は墓によって表象されている。墓碑の無い墓にしても、墓碑に名前が刻まれている墓にしても、子孫の定期的な墓参りという行為はそこに埋葬された者を祖先として祭祀する印である。そのほか、旧正月の農閑期に、シャーマンに「背墳」とよばれる儀礼を依頼するケースがある。シャーマンは墓の土を媒介に死者とコミュニケーションを行い、墓の土の下にいる祖先の安否、生活物資の需要を確認し、死者の子孫に伝える⁷⁾。

冥界を表象するもう一つのモノは死者儀礼で焼却して冥界へ赴く死者に送り届けるあの世の家屋〈靈房〉である。〈靈房〉は紙銭などの冥界用品と同じように死者の供養に使われ、冥界はこの二つのモノによって顕在化される。注意したいのは死者の靈魂のトポスが二重に表象されること、言い換えれば、墓というモノを通して死者の靈魂の棲家が具現化されると同時に、〈靈房〉というモノを通して死者の靈魂の行方が表され、その所在が不確実で曖昧になるのである。

一方、位牌の問題はやや複雑である。死亡直後の靈魂は〈道場〉の「戒靈安位」の儀式によって遺体安置室の位牌〈靈牌子〉に定着し安定するといわれ、その〈靈牌子〉は死

7) 筆者が隆昌の村で観察した儀礼はおよそ次のような内容である。夜に家にシャーマンを招き、蠟燭と線香をつけ、シャーマンの身体が次第に硬くなりトランス状態に入りかける頃、依頼者のうちの二人が墓へ行き、遺体の頭部および足部の位置の土を一握りずつ取ってくる。その後、その土を手を持つシャーマンに死者の靈が乗り移り、依頼者と問答を行う。後日、依頼者はその時死者との対話の内容に従って、例えば「体の左のほうが寒い」と言われれば墓のその位置で高めに土寄せをする。「先日（の墓参りで）紙銭をたくさん届けてくれたので、お金はまだ足りる」と言われれば特に紙銭を燃やす必要はないとの判断をする。

者儀礼の最終段階〈除霊〉に入ると燃やされる。調査地にはかつて宗族の祠堂が存在し、清明節に一族の祖先祭祀が行われる場所であった。清明節の祖先祭祀の際に、黒い木の板に金色の文字で死者の名前が彫られた位牌〈牌位〉が作られて祠堂に納められたという。今日では祠堂が再建されることは殆どなく、祠堂の〈牌位〉については確認することができない。また、家に〈牌位〉が祀られることはめったにない。祖先を祀るための香炉ぐらいの簡単な祭壇を設置する場合、祖先と生者との相性が合うかどうか〈老人和現在の人是不是相生〉が、「壇」の宗教的職能者または風水の専門家に判断してもらったうえで決められる。赤い紙に祖先の名前を書いてもらって家の堂屋の正面の壁に貼りつけ、燃やされた〈靈牌子〉の灰を香炉に入れてその前方に置く。これは〈安香火〉とよばれる。家で〈安香火〉をしない理由は〈香火〉の方位を間違えれば家に祟りが起こりやすいからだという。

次に、儀礼の文字記録をみていく。祭祀を行う装置としてのモノから靈魂のトポスに着目する場合、第1の魂と第2の魂にあえて分けて考えることは不可能ではないが、しかし、第1の魂と第2の魂のトポスの境界は必ずしも明確なものとは限らず、先に述べたように、祖先の靈魂の所在がむしろ冥界〈陰間〉という、より包括的な言葉をもって説明されている。このことは死者儀礼で文字記録に残される親族関係の系譜において一層明らかである。

宗族組織の復興、族譜の編纂が殆どなされていない現状において、葬礼記録の『経単簿』は死者と生者との上3世代および下3世代の親族関係の系譜を記載する無類の文字資料である。『経単簿』は「除霊超度」の宗教的儀礼の見本という性格のほか、「展卷思親」を目的とする「小族譜」の機能をも併せ持つものである。後者に関して言えば、〈道場〉で救済される死者をはじめ、死者の息子を起

点とする上位の3世代の父系親族、母方・妻方親族の名前や、死者の下位3世代の服喪者の名前が親族カテゴリー別に記入されており、上位の3世代の祖先はその名前が死者の〈道場〉で読み上げられ、死者供養の際に追善供養を受ける。『経単簿』は現実生活の社会関係に基づいて書かれた祭祀家族レベルの祖先の系譜記録であり、通時的にみれば、そこに記載される祖先は父系血縁集団の永続性を示す族譜とは異なり『経単簿』の処分とともに忘れられていくが、共時的にみれば、死者は〈道場〉を経て文字記録の形をもって家族の祖先に編入され、子孫の追善供養を受けることになる（謝 1998）。

中元節の死者追善供養儀礼は祖先に対する供養の法事の中で規模がもっとも大きい。世帯を単位に追善供養が行われるため、供養される祖先の範囲が『経単簿』と比べて一段と範囲が狭くなるのが普通である。「壇」の〈超度会〉では、参加者は「自分が覚えている父系の祖先は全部、妻方のほうが妻の父母までしかはっきりと覚えられないので、そのぐらいまで。」（男性、70代）、「両方（自分と夫）の父母ぐらいまで」（女性、50代）の祖先の名前を掌壇師に教え、供養牌に書いてもらう。前にも触れたように、祖先を迎える「迎亡」の儀式では、祖先は冥界〈陰間〉から橋を渡ってこの世〈陽間〉（正確に言えば儀礼が行われる場）に訪れてくるとされ、儀礼の参加者は「道士」の読経、自分の「拝懺」、冥界の生活用品の提供をもって、冥界にとどまっている祖先を救済しようとするのである。

『経単簿』の最後の一頁には、〈道場〉の執行者である「壇」のメンバー一同の名前と、阿彌陀仏など死者を救済に来る仏の名が書かれている⁸⁾。〈超度会〉の主旨は「亡魂脱苦生方超登極楽」で、寺廟の供養の位牌には「佛光接引西故亡人往生蓮香位」とある。一連の儀礼において、供養・祭祀の究極的な目的は諸仏による西方往生の救済の達成であ

るが、そうした儀礼が、死者が冥界に留まっているという信仰に基づいて実践され、救済を得るという観念とは背反するものであることは、M.L. コーエンが指摘した通りである。子孫による供養や追善供養を受ける第一の魂と第二の魂は祖先として祭祀されることとなればその区別がなくなり、死者と生者との親族カテゴリー上の関係性が現実的により確実な意味を帯びてくる。だが、「超登極楽」、「往生」とあるように、亡魂が冥界に留まるのは望ましい状態ではなく、子孫によって繰り返し行われる追善供養儀礼を経て救済され極楽往生を達成することが望ましいとされる。

2 転生すると信じられる靈魂

祖先として祭祀される靈魂と対照的なのは転生すると信じられる第三の魂である。以下では、隆昌県の村の死者儀礼にみられる供養法事および「出煞」の日程表と人々の語りを

合わせて検討する。

【事例 1】

覚皇寶壇所本壇為亡終身結果事 一呈孝行孝男謝○○女謝○○痛念 新逝頭考謝公諱代清老大人魂下原命生 於庚辰年冬月廿五日酉時受生係在 隆昌県北四里地名新龍湾成長人氏 享年六十三歳大限亡於 公元癸未年正月十五日巳時告終去世 今將七期開列於後 首七／廿一日 二七／廿八日 三七／二月初五日 四七／十二日 五七／十九日 六七／廿六日 尾七／三月初三日 百期／四月廿五日 詳查亡者死星神煞一丈七尺深迨至二月初一日以人道迴魂出煞孝信避之大吉 謹具 天運癸未年正月十七日懸單 法師○○○ 泰叩 南無注染王官主盟

【事例 2】

覚皇寶壇所為亡七期化□出煞事 報恩一呈孝行孝男李○孝女謝○○伏惟 新逝頭考李公諱○○老大人一位魂生於戊辰年九月初三日未

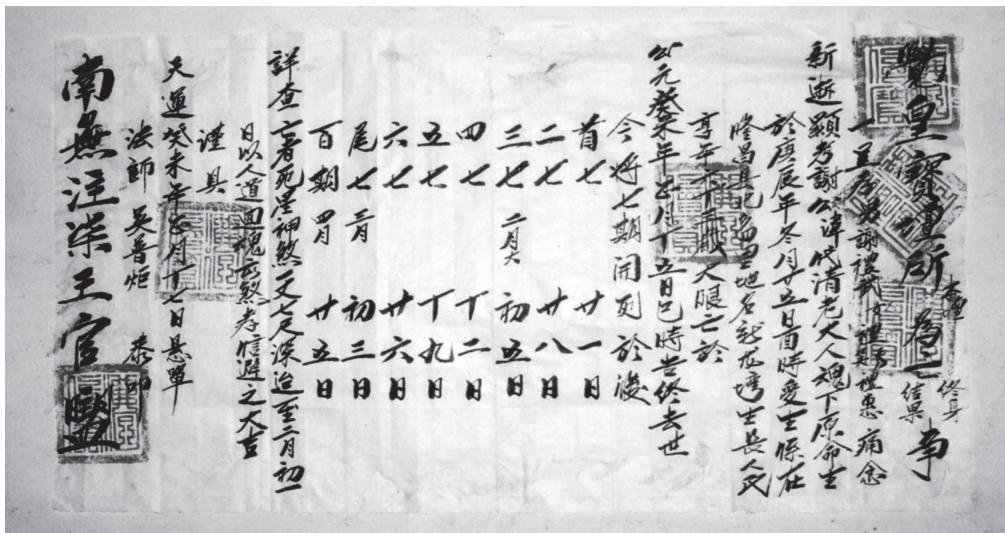


写真 1：供養法事および「出煞」の日程表

- 8) 「主盟 南無天元太保阿彌陀仏」がその一例である。救済の内容には神格の違いがあり、この場合の死者は生前素食し修行していたので最高神の阿彌陀仏に済度してもらうことができたと言明された（謝 1998: 127）。

時受生原係在隆昌県所管地名宋家湾生長人氏
 稀年七十寿亡於公元戊寅年二月十三日天定午
 時告終去世 今將七期開列於後 頭七／十九
 日 二七／廿六日 三七／三月初四日 四七
 ／十一日 五七／十八日 六七／廿五日 尾
 七四月／初三日 百期五月／廿三日 周年二
 月／十三日 詳查亡者生從乾道而來死向天道
 超昇以去神煞下落壹丈深該二月廿二日依故時
 迴魂出煞 孝信避之大吉 太歲戊寅年二月十
 五日懸單 秉教度亡弟子藍〇〇秉行泰叩 南
 無生天界菩薩主盟

「壇」の宗教的職能者によって書かれた日程表は、(1)「七期」すなわち初七日〈頭七〉から四十九日〈尾七〉、さらに百日〈百期〉、一周忌〈周年〉までの供養法事の日にち（実際では省略される法事もある）、(2) 死者の靈魂が家に戻ってくる〈出煞〉日にち、(3) 靈魂が転生する結果の「道」を含めた内容である。「出煞」とは、地下に落ちたとされる死者の靈魂が一度「地下から上がってきて衣服を取りに来る」など、生前の家を訪れることである。その所在、帰宅日および時間帯、転生する「道」は「道士が推定できる〈道士会算〉⁹⁾」といわれ、道士の知識に頼り、死者の生卒の年月日時の干支に基づいて推定され示されたのである。「煞」は有害な靈的存在であり、それに「遭遇すれば熱が出る」などといわれ、遺族をはじめ近所の人々にも害を与える可能性をもつ非常に危険なものとみなされる。「煞」が地上に「出」て家に戻る間に、遺族たちは悉く外に出かけて避難し、近所の人々も戸締りして嚴重な注意を払うようにする。「出煞」の時間については死後9日目から18日目の間とされ⁹⁾、「壇」の宗教的職能者は必ずそれを予め遺族に知らせておく。事例1と事例2の場合、死者の靈魂の所在がそれぞれ地下の1丈7尺と1丈の深さにあり、「出煞」はそれぞれ死後17日目と10日目であるとされる。

死者の転生の「道」が供養法事の日程表に記されることは注目に値する。「壇」の宗教的職能者は、人間が死後、建前として地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天という六道のうちのいずれかに入って転生すると説き、村の人は「亡霊がどの道に転生するのかは死亡した時の年齢と時刻によって決められる。道士は死亡の年月日と時刻に基づいて、地下のどこに落下したのか、どの道に落ちるのかを調べることができる」と語った。事例1では人間に転生し〈以人道迴魂〉、事例2では天道に昇る〈死向天道超昇〉ことが明示され、いずれもありがたい結果と言える。このような場合は別として、「壇」の宗教的職能者によって推定される転生の形態はすべてが開示されるとは限らない。「壇」の宗教的職能者の話によれば、彼らと遺族との間には暗黙の合意があり、書かれない転生について遺族は普通詳しく尋ねない。死者が不幸にも牛馬や鳥類など畜生の道〈畜道〉に堕ちることになることがわかれば、紙（供養法事および「出煞」の日程表）に書いて公表することはまずない。その場合、転生についての知識を持つ遺族ならば、死者の来世〈投生什麼道〉について問い合わせることがあるという。その具体例として、「母は生きている間たくさん良い事をしていたのに、亡くなった年齢がよくないので牛に生まれ変わるようになった」（隆昌県・K鎮、話者は50代の女性）と、「壇」の人に教えてもらってわかったというケースがある。この文脈において、第3の魂の転生の形態は死亡した時の年齢や死亡年月日と時刻という時間の要素によって決められ、宗教的職能者の計算によって特定できるとされる。

しかし、第3の魂の行方については、極楽世界の可能性があり得るとしながらも、普通、生前に行った悪い事により「十殿」で裁判され、地獄で「もれなく苦しめられ」、「責

9) 浙江省富陽地域の慣習についての葉鏡銘の指摘である。

め苦を受け」,「受けるべき責め苦を一通り受けて」から,「転生する」と語られる。さらに人々の生前の行為をみれば,「袋を一つ,それに黒豆と大豆を用意しなさい。朝から善いこと(誰かを手伝ってあげたとか)をしたら1粒の大豆を袋に,また悪いこと(誰かにやきもちを焼いたなど)をしたら黒豆を1粒別の袋に入れて,夜寝る前にどちらが多いかを数えてみてごらん。黒豆が1粒もないことは絶対ない。大豆のほうが多かったらなかなかたいしたものだ」という。すなわち,妬みなども含め,生きている間に悪いことをまったくしていない人は殆どいない。言い換えれば,殆どすべての人々には死後に地獄が待ち受けていることになるという論理が存在する。要するに,転生の觀念には,死亡の年齢・時刻という個人の宿命的な要素が決定の要因であるというものと,生前の行いの善悪が決定の要因であるというものの二つの異なる論理が読み取れる。

故人が天道に転生するとしても,人間道に転生するとしても,遺族は死者儀礼の後の中元節の死者追善供養儀礼を必ず行う。転生の結果が望ましくないとされた場合はなおさらである。母が畜生道の牛に転生するという結果がわかった女性は「子女は母のために罪を取り除かなければならない」と話し,罪を取り除く方法については,「多めに供養の儀礼をすること」と話した。また,「壇」の宗教的職能者は,「りっぱな〈道場〉を手配してくれる子女がいれば,たとえ悪人であっても,死後の運命はいい方向に多少改善することができる」と語った。

ここに死者儀礼と死者追善供養儀礼についての潜在的な論理が浮かび上がってくる。生前の悪行のため冥界での懲罰が待ち受けるという因果応報の問題があるにしても,死亡の

年齢や時刻が悪いという宿命的な問題があるにしても,生前の人間の運勢が「補運」という類の儀礼を通して多少調整することが可能であるという漢族の運命觀のもとで,死者の転生の運命も修正される道が用意されている。それは子女が親の罪を軽減する供養儀礼を大きな規模で行うこと,または追善供養儀礼を多めの回数で行うことである。そうした行為はコミュニティ内部では子女の親孝行の行為であると受け止められ評価される¹⁰⁾。

このように,転生についての民俗的知識は矛盾に満ちたもので,二重の意味での論理の不整合がみられ現出してくる。生前の行い,死亡の年齢や時刻という説明に,さらに子女が親または祖先のために救済儀礼を行うという親孝行の行為によって死後の運命を修正することができるという説明が重なっている。この問題を理解するためには,さらに死者の靈魂に関する社会全体の公共的表象に目を向け,総合的に考えなければならない。

IV 転生する靈魂に関する公共的表象

1 演劇——目連戲

目連戲は中国諸地域に広く分布し,地域ごとに独自の特徴を持って上演された¹¹⁾。最近,整理・刊行された目連戲の脚本または目連戲の上演の報告として,福建省の『莆仙戲目連救母』,江蘇省の高淳陽腔目連戲の『超輪本目連』などがある¹²⁾。四川地域の目連戲の主な版本は,清代の光緒年間,江津古堂何育齋によって印刷・刊行された『音注目連救母本全傳』である(中国戯曲志編輯委員会,『中国戯曲志・四川卷』編輯委員会編1995: 101)。その脚本は鄭之珍の『目連救母勸善戯文』に基づき,清代の朝廷の目連戲である『勸善金科』の内容に四川地域の江湖条

10) 村の人の見方によれば,親が生きている間にその衣食を満たしたり看病をしたりしてするなどの孝行を果たしたうえで,りっぱな〈道場〉を行うことこそが親孝行である。反対に,親が生きている間に親不孝で,りっぱな〈道場〉だけは行うのであれば,本当の親孝行ではないという。

綱の戯目を加えて改編されたものである（于 2000: 291）。

清代または民国時代の四川地域の地方志によれば、「祈禱雨澤有東窓戲驅除疫癘有目連戲」（『宣統広安州新志・卷三十四・風俗志』）、「以天旱祈雨演東窓戲搬目連為日最久」（『民国達県志・卷九・礼俗門風俗』）、「成都の北門の外にある東嶽廟では「毎年均演目連救母打岔（又）戲，観者若狂。俗謂如不演此戲，必不清吉」（清・『成都通覽』）」という記載がある。四川東部，西部の諸地域で，疫病驅除や雨乞いの儀礼を行う際に，目連戯の上演が欠かせないものであったこと，舞台では懲罰の表現として本物の金属の叉を劉氏の体に刺す「打岔（又）戲」は観衆の気分が狂うほど劇を盛り上げたことがそこから窺える。「目

連救母」の説話は演劇の上演を通して 50, 60 代以上の人々の間で広く知られ，小さい頃それを実際見たことがある人も少なくない¹³⁾。四川南部の内江市では，民国時代，城隍廟の神幸祭に川劇目連戯が奉納され，廟のステージで連日上演されていた（陰・範 1994: 208）。

川劇目連戯の演目の一つである「劉氏回煞」では，死者の靈魂が一度生前の家に戻る〈回煞〉のプロセスがそのまま舞台上で再現される。例えば，靈堂で線香・蠟燭・酒食を供えておくこと，目連の母親である劉氏が生前の家と冥界を往復する際に冥界の役者である無常鬼と鶏脚神によって護送されること，靈魂が家にもどってきたかどうかはわら灰に残される足跡を通して検証されることは，四川地域の民間伝説に基づく設定であるとされ

11) 明の鄭之珍著『目連救母勸善戯文』は，明の時代の末頃およびそれ以降の時代において極めて大きな影響を与えたとされる。鄭之珍は明の正徳戊寅～万歴乙未（1518～1595 年）安徽省祁門清溪の出身である。『目連救母勸善戯文』が万歴 10 年（1582 年）に完成し，まもなく刊行された。その脚本は他の地域に広がり，多くの地方劇の目連戯のテキストのもとになった。清代，民国時代まで，安徽地域の祁劇や四川地域の川劇の多くの劇団では，目連戯の上演は『目連救母勸善戯文』に基づいて改編された脚本が用いられていた。清の時代から民国時代にかけて，目連戯の地方劇の全国における分布をみれば，中国北部では河南の豫劇，山東の梆子，陝西の秦腔・懷調・太平調，山西の蒲劇・宛梆・上常梆子，山西道情などに目連戯の演目があり，中国南部では四川の川劇，湖南の湘劇・辰河戲／辰河高腔・江西の弋腔（のちに京腔に変化し，京劇に影響した），江蘇の高淳陽腔，安徽の祁劇，浙江の調腔，福建の莆仙戯に，数日にわたる本格的な上演がみられた（劉楨 1997: 48, 165-211）。

12) 現在，目連戯の上演の事例が報告されている。福建省南部の莆田，南安では，当該地域の地方劇「莆仙戯」の『目連救母』が中元節や旧暦 10 月，11 月に上演される。それについて，「基本的には孤魂や鬼など祀り手のない死霊に対する畏れが大きい。演劇や人形を通じて目に見えない靈魂を可視化させて，怨恨を抱いて亡くなった靈魂を慰撫して救済する。仏教儀礼や道教儀礼の内容を演劇的に組みなおして民俗化し，民衆にわかりやすく救済の意図を伝える芸能として定着したと思われる」と鈴木正崇は論じている（鈴木 2002 「目連戯とその広がり——東アジアの女人救済と芸能」へのコメント：神楽の中の目連とその比較，2002 年 11 月 2 日慶応大学地域研究センターで開催された国際シンポジウム「目連戯とその広がり——東アジアの女人救済と芸能」の配布資料）。そこで，鈴木はさらに「目連戯は普渡や超度など死霊の鎮魂や供養，病氣や不幸を齋す筈の祓い，死霊の祟りに対する人々の恐怖や畏怖を解消するなどの負の儀礼に特化して，各地で個性的な展開を遂げた」と述べている。

高淳陽腔目連戯は黃文虎によれば，1930, 1940 年代の民国時代にしばしば一夜徹夜をして演じられたが，その曲目は 1939 年の抄本から窺える。『超輪本目連』は明代の鄭之珍著『目連救母勸善戯文』との異同が幾つかある。物語のあらすじおよび「関目」の設定はほぼ同じであるが，歌および台詞が『目連救母勸善戯文』より通俗的であり，世間の生活を描いた短い曲目や地域の特徴をもつ独自の曲目があること，アクションふうの立ち回り〈雑技百戯式的武場〉があることが挙げられる（黃 1994: 9-13）。『超輪本目連』には，死者の靈魂が家に戻る「回煞」の内容，「十殿閻王」が生前の行いに基づいて各々の人の転生の判決を下す内容がある。また，豚，ロバ，犬に転生する叙述として，脚本には〈本無和尚陽世貪花好酒，将他変頭猪還陽／尽虛優尼陽間思春，変母猪還陽／劉賈騙人財物，変驢還陽／劉氏有誓願在前，変犬還陽〉という台詞がある。

る（于 2000: 274-298）。亡魂が無常鬼と鶏脚神によって冥界の地獄へ拘引されるという点は、「壇」の掌壇師の〈回煞〉についての説明と同じ筋である。また、劉氏が僧侶を侮辱し、高利の金を貸す悪行によって地獄に堕ち、後に犬に転生する説話は舞台で演じられる靈魂の転生の一例である。

目連戯では、「善には善なる応報あり、悪には悪なる応報あり〈善有善報、悪有悪報〉」という因果応報の輪廻觀念が説かれている。劉氏は生前の悪行により「悪なる応報」すなわち地獄の餓鬼になり、目連によって地獄から救出されても犬に転生する定めになってしまう。また、演劇の題目『目連救母』とあるように、目連が地獄をめぐる母を地獄の牢屋から救出し、犬に転生した母のために盂蘭大会で誦経し、最終的に母を救済したことは大なる親孝行である。目連の行為を通して「百善孝为先」の主旨が宣伝されている（于 2000: 289）。ここでいう親孝行は、親が生きている間に尽くす孝行ではなく、親の死後の救済を指す。劉禎が指摘した通り、地獄に堕ちた母の罪がいかに深いものにしても、また、地獄がいかに凄惨な場所にしても、目連は親孝行の根強い意志をもって、仏教の修行によって獲得した靈力、仏の導きに頼って地獄を打ち破って母を救出した。そのうえ、目連は衆僧侶の読経の功德に頼って、輪廻の結果としての犬という状態の母を救済し、母の昇天を達成したのである（劉禎 1997: 96-98）。

目連戯は宗教的儀礼を取り入れた「鬼戯」で、その上演の目的は前にも触れたように、特に疫病や旱魃などの災いの要因とされる〈鬼〉の駆除と、〈鬼〉に対する救済を行うと

ころにある。中国南部地域をはじめ中国社会に広く広がった目連戯は明代、清代、そして民国時代を通して四百年以上伝承されてきた。これほど長く伝承されてきた要因について、劉禎は（1）親の恩に報いて親孝行をするという社会倫理、（2）救済の対象は親のみでなく、地域社会における数多くの〈鬼〉まで及ぶこと、（3）目連の並大抵ではない靈力を表現する神秘感や恐怖感に満ちたパフォーマンスの効果、（4）祭祀の機能をも兼ねて備えていることと論じている（劉禎 1997: 323-324）。目連戯で演じられる親孝行は親の死後の靈魂を救済するということに重点が置かれ、舞台で表現された地獄の刑罰、靈魂の輪廻の内容は、第3の魂に関わる冥界および転生の信仰の浸透に多大な影響を及ぼしたと思われる。

2 寺廟の彫像・壁画——城隍廟と酆都の寺廟群

中国各地の城隍廟には名称のみが残っていて建築物は破壊されているケースが多いが、今日まで保存されていたり、神像や壁画が修復されているものもある。地獄の彫像・壁画がみられる若干の寺廟の例を挙げれば、中国北部の山西省平遥県の清代の城隍廟と西南地域の四川省都江堰市（もと灌県）の城隍廟には地獄の彫刻、東南地域の上海市青浦区朱家角鎮の清代の城隍廟には地獄絵壁画がある¹⁴⁾。都江堰市の西蜀城隍は城隍殿と「十殿」の建築物が明の時代に建造され、清の時代に修繕されたものである。現在の城隍殿には真中に城隍神、その左側に冥界の官吏である日巡神・白無常・牛頭・黄蜂・魚腮・鬼王、右側に夜巡神・黒無常・馬面・兔鷹・豹

13) 筆者は2003年3月に瀘州市で川劇の俳優（男性、70代）にインタビューした。彼は打叉戯を演じた経験を持っている。彼の話によれば、打叉戯は大変な危険を伴う演目で、実際に劉氏の首や四肢のすぐ近くにに向かって何度も叉を投げていく。すこしでもずれて劉氏の体にあたったら、劉氏を演じる俳優が死傷から免れないことになる。目連戯が上演される際に、舞台の下にはいつも棺が置いてあったという。

尾・皂王が二列に並べて祀られている。また、「十殿」には刑罰・輪廻の彫像がかつてあった。四川南部地域の城隍廟について、人々の記憶に残されているものをみたい。

内江にある民国時代の城隍廟は、前殿では門を右側に入ると人間を捕まえる鉄の鎖を手を持つ鶏脚神、左側に無常神、正面に城隍神が祀られていた。閻羅殿では、中庭の右側に第一殿から第五殿まで（秦広殿・楚江殿・宋帝殿・五官殿・閻羅殿）、左側に第六殿から第十殿まで（卞城殿・泰山殿・都市殿・平等殿・転輪殿）の彫刻があった。閻羅王の神像の前には、例えば、刀山地獄〈上刀山〉（獄卒が亡者を刀の山に投げ込み、刀の山が亡者の身体を劈く刑罰。対象は父輩に対して親不孝をした者）、油鼎地獄〈下油鍋〉（獄卒が亡者を熱い油の中に入れ、身体を揚げてしまう刑罰。財産を狙って殺人した者。）、刮舌地獄〈抜舌頭〉（獄卒が亡者の舌を切り取る刑罰。あることないこと言いふらして人に害を与えた者）、磨身地獄〈磨子推〉（獄卒が亡者の身体を石臼で挽く刑罰。みだらな婦人。）、銅柱地獄〈砲烙柱〉（獄卒が亡者の身体を鎖で銅柱につなぎ、銅柱の熱によって、亡者の身体を焼く刑罰。他人の妻や娘を犯した者）、奈河橋から落とされる刑罰〈下奈河橋〉（橋の下では河川の水が波立ち、蛇などが亡者の身体にからみつく刑罰。財物を騙し取った者）。それらの刑罰と対照的なものは、「金橋」（親孝行をし、師匠や年配者を尊敬していた者は金橋を渡って転生する）、「銀橋」



写真 2：西蜀城隍の「城隍大殿」

（まわりの人をよく助けた者はそれを渡って転生する）などの場面が表現され、冥界における勧善懲悪のテーマが示された（陰・範 1994: 203-206）。

別の例としては屏山県の城隍廟がある。その城隍廟には二人の無常神の彫像があり、両側の廊下に十殿の王の彫像がみられた。第十殿の転輪王は来世の転生を司る神であるとされ、その宮殿の中に人間の皮、獣の皮、鳥の皮、虫の皮などが並べてあり、人間、畜生、鳥類、虫類に転生する運命がそれによって象徴される（張易然 1989: 85）。生前に親孝行をした者は「金橋」を渡って望ましい転生に達成すること、親不孝の者に対して「刀山地獄」の刑法が待ち受けることが表現され、冥界における親孝行への勧奨と親不孝への懲罰という趣旨が伝達されている¹⁴⁾。

伝説上の冥界の都城である酆都は四川地域の巡礼地の一つとして名高い。平都山に造ら

14) 平遥県の城隍廟は明代の洪武2年（1369年）に創建され、度重なる修繕や再建を経て現在に至る。城郭および城内の民を守護し、この世および冥界の監察をすること〈守廓佑民、監察陰陽〉が城隍神の責務とされ、城隍神が祀られる神殿にはさらに善・悪を司る冥界の役人、鬼王などの彫像もある。城隍廟は県内の人々の生死の名簿が保管される場所であると伝えられ、参詣者が引きも切らないという（張桂泉編著 2001: 47-49）。上海市青浦区朱家角鎮の城隍廟は清代の乾隆28年（1763年）に建てられたものである。拝殿内の南側の壁には「十殿」の壁画があり、第十殿輪転王のところには、来世、人間（未亡人、将相など）、畜生類（犬・牛・羊・鹿など）、水禽類（鶏・アヒル・蟹・魚・蝦など）に転生する絵が描かれている（筆者のフィールド資料による）。なお、城隍廟のほか、冥界の法廷および裁判が彫像の形で具象化される寺廟には東嶽廟もあり、北京の東嶽廟の七十二司はその一例である。本稿では主に「十殿」信仰を検討するため、東嶽廟における冥界の表象の問題は別稿に譲る。

れた寺廟群（現在は名山公園）は冥界とこの世との境界線をなす建物「鬼城牌坊」、奈河橋と血河池、玉皇殿、転生する前に前世の因縁と地獄の光景を忘れる「迷魂湯」が飲まされる孟婆茶楼、鬼門関、望郷台、十殿閻王、冥界の最高権力者である陰天子を祀る天子殿などの建築物から構成され、地獄をくぐり抜けて転生するまで通過しなければならないとされる冥界の空間構造が具現化されている。

同じ公共的表象ではあるが、城隍廟と比較して鄭都の寺廟群は冥界全体のビジュアルなイメージをいっそう明確に参詣者に提供している。例えば、奈河橋と血河池に関しては、隆昌の農村では「奈河橋下血滔滔，行善之人橋上過，行惡之人蛇狗咬」と言い伝えられている。生前に悪行を行った者が渡ると落とされて銅の蛇や鉄の犬に噛付かれるが、徳を積んで善を行った者は河に落ちる恐れはなく、順調に橋を渡って人間に生まれ変わるという意味である。また、四川西部で活躍した在家道士〈火居道士〉の「壇」が死者儀礼に使われた掛図には、死者が奈河橋の下の波で銅の蛇に咬みつかれる場面が描かれている。さらに、『玉歷至宝鈔』という勸善書の中に描かれた「十殿」にも奈河橋と血河池の場面がみられ、奈河橋と血河池に関する表象の広がりが見える。鄭都への巡礼にしても、鄭都に関する伝説の流布にしても、鄭都の表象は四川地域では第三の魂に対する個々人の信仰の中身やイメージの一部を構成した。そればかりでなく、勸善書という四川以外の諸地域にも流通していた公共的表象の内容にも影響したのである。



写真3：四川西部の「壇」が所有した清代の十王図・第六殿を司る卞城王。四川省社会科学院李遠国教授提供

- 15) 中国社会におけるこの世の刑罰と冥界の刑罰の観念を示唆する研究も参考になる。福建省南部の晋江市にある道教系の石鼓廟は城隍廟ではないが、その地獄絵壁画も同じ趣旨である。石鼓廟に伝わる地獄図壁画は泉州地区において地獄を表象する唯一の作例である。それを調査した勝木言一郎は図像解釈学 iconology（美術史研究の方法の一つ）のアプローチからその図像をテキストとして読み解くことを試みた。その結果、「地獄図の場合、仏教経典をテキストに用いるだけでは読み解けない図像が少なからずある」ことがわかり、そこで彼は刑罰との比較によって図像解釈を行い、図像の半分がこの世の刑罰・私刑をソースとして描かれていることを明らかにした（勝木1999）。

3 出版物——『玉歷至宝鈔』

「民間第一の地獄経典」として民衆の冥界観に大きな影響を与えたとされる『玉歷至宝鈔』は、民国時代まで次々に重刊され、中国全土に広く流布していた（澤田 1991: 29）。それは世間の人々の心を誘導するという積善の意図をもつ施主の寄付金によって印刷され宗教施設で無料配布された（吉岡 1989）。「近世中国人の地獄に関する知識は、ほとんどすべてこの書から得ているといっても過言ではない」と澤田は指摘している（澤田 1991: 23）。

『玉歷至宝鈔』の版本は多様で細部にわたる違いがみられるが、民国時代、中国北部の天津天成印字館と中国南部の上海宏大善書局によって出版された書物を例に取ってみる。天津天成印字館によって刊行された『玉歷至宝鈔』の題字には「淡痴尊者親入酆都蒙諸神聖鈔傳轉授弟子勿迷道人廣行警世」とあり、淡痴尊者と号する者は自ら酆都へ行き、神聖を蒙って『玉歷至宝鈔』を書写し、これを世の中に広げて世間の人々に警鐘を鳴らすという刊行の意図が示されている。自ら酆都へ赴いたという点からみれば、酆都は冥界のイメージの原型を提供したと推測される。『玉歷至宝鈔』の「十殿」の図像に奈河橋、「孟婆亭」などが描かれていて、酆都の冥界の空間構造と軌を一にしている。

この二つの版本の『玉歷至宝鈔』と、吉岡の研究（吉岡 1989）で取り上げられた清代から民国時代に刊行された『玉歷鈔伝警世』とを合わせてみれば、「十殿」の審判および地獄の数々の酷烈無惨な刑罰と、「四生六道」、「六道転生図」、「輪廻面目図」、「發生図」などと題される転生とは、『玉歷』の類の書物に共通するモチーフであることがわかる。『玉歷』の類の書物には奈河橋から落とされる懲罰、刀山地獄、上望郷台（亡者が故郷・現世を眺められる望郷台に上がる）、鋸身地獄（獄卒が亡者の身体を押し切りにする刑罰）、抜舌地獄、油鼎地獄、鋸身地獄（獄

卒が亡者の身体を鋸引きにする刑罰）、剖腹地獄（獄卒が亡者の腹部から内臓を引っ張り出す刑罰）、車崩地獄（車で身体が引き裂かれる刑罰）などがあり、城隍廟の彫像によって表現される刑罰のモチーフと重なる部分が多い。

『玉歷至宝鈔』における「輪廻面目」の図像および文字説明によって、公侯将相、鰥寡孤独、胎、湿、卵、化といった転生の形態が表現されている。『玉歷至宝鈔』に描かれた靈魂の転生は明らかに仏教で説かれる六道の輪廻という体系ではない。転生の種類は「人道」、具体的には、来世の人生の理想像として高い社会地位および裕福な生活が保証される公侯将（武官の代表の将軍）相（文官の代表の宰相）とその対極となる来世の惨めな人生像として配偶者や子孫がいない鰥（鰥夫）、寡（寡婦）、孤独（子どものいない老人）が示されている。畜生類に転生するのは「在世のとき不孝者、たくさんの生命を殺生した」者であるとされ（吉岡 1989: 333）、それは胎（牛、羊、犬といった類の胎生動物）、卵（鶏、アヒル、飛禽といった類の卵生動物）、湿（みちず、亀、魚、蝦の類）、化（蜚蠊、蜂、蝶の類）の四つの等級に分けられ、もっとも低い等級の転生は、かげろうのように朝に生まれ夕暮れに死ぬといった瞬間の生命しか得られないものである。

『玉歷至宝鈔』にみられる胎、湿、卵、化の分類は「壇」の祭壇に祀られる「香位」の「胎卵湿化」と一致するものである。筆者が『玉歷至宝鈔』のコピー図版を調査地の40代の掌壇師に見せたところ、その掌壇師は「その通りだ、その通りだ。私たちが使っているものだ。古い本がもうなくて、この本は知らないが、主に神像・神位（は私たちが使っているものだ）。その本に描かれているものはまだ全部ではない。」と話した。「壇」の祭壇に設けられる人間に転生できない低い位階の靈魂の「香位」は種類がより多い。胎卵湿化のほか、五音^{ごおん}（孤魂・野鬼・山妖・水

怪), 十類孤魂 (凶死・溺れ死・首吊り・刀殺といった非業の死を遂げたもの) も含まれる。また, 清代, 四川西部地域では, 在家道士の「壇」によって担われる死者儀礼の際に, 地獄の「十殿」が描かれた「十王図」が祭壇に掛けられたことがある。『玉歷至宝鈔』という書物に実際接触する機会がなく, 鄭都の巡礼が実現できない人々にとっても, 城隍廟などの寺廟における彫刻・壁画のほか, 〈道場〉の時に目に入る地獄の掛図なども含め, 冥界の具体的なイメージが喚起されるような複数の表象が存在した。

以上見てきたように, 第3の魂に関しては, 冥界における地獄の「十殿」で苛酷な刑罰を受けた後に転生するという観念が地域社会の舞台上演される目連戯, 寺廟の彫像・壁画, 勸善書を通して表象される。目連戯, 城隍廟は中国各地に広く分布し, 『玉歷至宝鈔』は諸地域に広く流通していた。鄭都冥界, 川劇目連戯は四川地域でとりわけ影響力が強いものであった。このような公共的表象は個々人の冥界に関する心的表象に影響を与え, 彼らの信仰または民俗的知識に寄与したと思われる。

地獄での数々の恐ろしい懲罰と, 蜉蝣のような短い生命しか獲得できない昆虫類, 牛や馬のような使役させられて苦勞する動物, 配偶者のいない孤独な人生といった輪廻の結果としての来世の惨めな運命を免れる方法は自分が生前に「善」を行うことと, 孝行をする子女が死後に救済してくれることである。「善」の行いは, 調査地の人々の語りをまとめてみれば, (1) 他人を助けること〈行善〉。無料でまわりの人々に薬や食料を提供し, 貧困者に財物や力の援助を提供する行い。(2) 宗教的実践〈信善, 向善〉。寺廟に寄付すること, 神誕祭祀の儀礼活動に資金を出して参加することと, 儀礼を執り行うこと。(3) 親孝行などが特に挙げられる。一方, 公共的表象をみれば, 川劇目連戯の場合は, その源流となる鄭之珍の『目連救母勸善戯文』の題目

にも示されるように, 主旨が「勸善」すなわち親の死後の救済という「善」を勧めることである。寺廟の地獄の彫像・壁画の場合は, 生前に犯した悪行について死後に必ず懲罰を受けるというこの世と冥界における因果応報観念が強調されている。勸善書の代表格の一つである『玉歷至宝鈔』は勸善懲惡を主張される書物であり, ここでも因果応報の観念が示されている。勸善書に説かれた「善」は内容が多岐にわたるが, 「百善孝為先」すなわち様々な「善」の中で親孝行が最も重要であるとされ, 「善」の社会理念の中核をなすものであることがわかる。

V 考察

死者の靈魂に関する多様な表象はコミュニティ内部と社会全体に存在する。宗教的職能集団「壇」の死者儀礼を通じ, 第1, 第2の魂は祖先として確立され, 墓や『経單簿』などモノおよび文字記録に定着する。それとは対照的に, 第3の魂は地獄で責め苦を受けて転生するというイメージあるいは観念が語られてはいるが, 死者儀礼の終了後, 法事および転生の結果が示された日程表は処分されるためモノにも文字資料にも残されず, 曖昧なままになっている。祖先の観念とは矛盾し, 死者と生者を関係づける親族体系からはみ出しているこの非秩序的な第3の魂に関する表象は, 一見コミュニティ内部から排除されたように見える。しかし, コミュニティ外部に存在する冥界の表象に注目すれば, それは川劇目連戯, 城隍廟および鄭都寺廟群の彫像・壁画, 『玉歷至宝鈔』を代表とする絵入りの書物といったような形で四川地域ないし中国社会全体に分布していたことがわかる。

ダン・スperlベルは文化的表象と個人的表象との間に境界線や敷居は無いと指摘している (ダン・スperlベル 2001: 85-86)。死者の靈魂に関する個々人のイメージや信念は鄭都冥界についての口頭伝承, 川劇目連戯の

観劇、城隍廟または酆都の廟会の参加に由来するとまず考えられるが、そればかりではない。死者儀礼の慣例的知識は、最小限でも半日程度の〈道場〉を行い、死者の靈魂のために冥界の道案内をする〈指路〉ということである。死者の靈魂がこの世の家にとどまらず、行くべき所へ行くことは生者の生活の安寧を保証するとみなされる。死者の靈魂の行方や冥界についての詳しい知識は、冥界の諸神やその他の超自然的な靈力を動かして死者の靈魂を鎮めるコミュニティ内部の専門家の知識に拠るところが大きい。四川地域では、清代・民国時代以来、宗教的職能集団の「壇」は墓地風水、卜占、経・懺、神々や死者の靈魂を招請・送還する〈請神、送神〉儀礼テキストなどの象徴的知識を保有し、死者をめぐる一連の儀礼における象徴的表現を通して冥界の文化的表象を人々に伝達してきた。川劇目連戯が死者や冥界を取扱う演劇であるため、演劇の専門団体には死者の靈魂を鎮める役を果たす宗教的職能者が必ずいた（于2000）。四川地域全体をみれば、祭祀と演劇がセットになった種類の儀礼が民国時代までは数多くあり、宗教的儀礼と演劇を兼ねて担当する「壇」が少なくなかった（謝2001）。四川地域の事例からみれば、「文化的表象が個人的表象との間に境界線や敷居は無い」ことの要因は、死者の靈魂が地獄を通過して転生するという観念が浸透する社会的回路の一つを「壇」の象徴的知識およびその儀礼が構成しているところに見出される。ダン・スperlベルの言葉を使って言い換えれば、これは心的表象から公共的表象へ、また公共的表象から心的表象への環からなる「因果連鎖」（ダン・スperlベル2001: 46）の一種であると思われる。

「壇」の死者をめぐる一連の儀礼を通してみれば、死者の靈魂が地獄をくぐり抜けて転生するという観念は、死者の靈魂が子孫の祭祀を受けて祖先になるという観念から体系的に逸脱していることが明らかである。通文化

的には、死に関する慣習が「ある種の理性を欠いた逆説や曖昧性によって特徴づけられてはいるが、それらはその文化的コンテクストのなかでは意味をもっている」ことは世界の諸文化にある程度共通して見られる（リチャード・ハンティントン1996: 63）。ダン・スperlベルは、ある社会集団における文化的表象は心的表象（信念、意図など）や公共的表象（発言、テキスト、絵など）からなる集合の曖昧な部分集合であるとし、文化的表象における神秘的な観念や概念は他の観念より多くの呼び起こし（evocation）の力を持ち、また呼び起こしの力に最も富む表象とは一方で他の表象と密接な関係にあり、他方では最終的な解釈を受けつけないような表象であると述べている。文化的成功を収めるのはこれらの有意性に富む神秘（relevant mysteries）であり、一見非合理的な文化的信念は常識に備わる合理性に対して正面きった挑発として出現し、それらの表象が有意性を獲得するのは、神秘としてのパラドキシカルな性格をもつゆえであると主張している（ダン・スperlベル2001: 57; 123-124）。

ここでもっとも重要な問題は有意性、すなわち漢族の文化的コンテクストのなかでもっている意味、価値観がいかなるものなのかということである。死者をめぐる一連の儀礼の本質は、コーエンが指摘したように、救済の観念が死後に関する儀礼や信仰に組み込まれてはいるものの、死者の救済を中心に据えるより、むしろ冥界の法廷の裁きをくぐり抜ける死者の道程を手助けし、その「魂」が転生する時までの快適な物質生活を用意し、死者を西方浄土に「渡す」手助けを目指すところにある（コーエン1994: 209-215）。吉岡も、7日ごとの追善の思想と罪業審判の思想が並列的に扱うことが無理なものであるとしたうえで、次のような重要な指摘をしている。「七日ごとの供養は「予定通り亡者が通過しなくても、規定通りに供養しておけば、かならずそれだけの功德はある。そのまま供養

した本人には預修功德として積み重ねられてゆくことがいわれている」(吉岡 1989: 358)。すなわち、追善供養の儀礼はそれを行う自体に意味があり、冥界にいる死者の生活の手助けをする一方で、供養をした本人の功德、言い換えれば孝行でもあると受け止められると考えられる。

死者儀礼では、喪主は故人の子女(孝子、孝女)であり、服喪することは親が生きている間に孝行を尽くすのと同じ(尽孝)と表現される。盛大な〈道場〉は故人の家族の経済力、社会的な地位を誇示するだけでなく、より多くの宗教的職能者がより多くの経・懺を読み上げ故人の「罪」をより多く軽減することができるとみなされるため、亡くなった親に対する救済という意味において「孝」の行為であると受け止められる。

「孝」については、坂出は「生けるときは之に事うるに礼を以てし、死すれば之を葬るに礼を以てし、之を祭るに礼を以てし」という孔子が『論語』(為政)で評していることを挙げ、日本社会の「孝」に対する理解は「父母をよく「養なう」という意味での「孝」であり、父母が死んで後に葬り祭るのは「孝」としてではなく、仏教的な供養」であるという文化の相違を示した(坂出 2000: 115)。中国社会の親孝行の意味は生前の扶養のみでなく、死後の埋葬・供養や祖先祭祀も含まれることに着目する必要がある。

四川地域の死をめぐる一連の儀礼においては、西方浄土が儀礼の理想として掲げられているにもかかわらず、村のある在家信者が語ったように、普段の生活で念経をして精進料理を取る人でなければ、なかなかそこに到達できないと考えられている。それよりむしろ、死者のための〈解罪〉、すなわち地獄の刑罰を軽減し地獄から早く解き放されることが人々の切なる願望であり、中元節の祖先追善供養儀礼の救済もその文脈において理解することができる。城隍廟や酆都の寺廟群の彫像・壁画、『玉歴至宝鈔』の図説にみられる

冥界の表象には西方往生のモチーフが殆ど登場していない。例外なのは傅氏一家そろっての昇天という目連戯の結局である。地獄で苦しめられる母を救済しようとする目連和尚の親孝行の強い意志および霊力だけでなく、釈迦仏の助力、衆僧侶の読経、玉皇大帝の敕旨といったような霊力の手助けによって目連はそれを実現したのである。

川劇目連戯で演じられる目連の親孝行は母の死後の救済に焦点が当てられている。四川南部の村では、悪人であるとしても、その人の死後の運命は盛大な〈道場〉を行うことによって改善されうると認識されている。第3の魂の転生を決定する要因が死者自身の生前の行いであるという仏教の因果応報の論理は、悪行を積み重ねた人でも子の孝行すなわち死後の供養の功德によって救済されるという儒教的な論理に譲って二次的な問題となっている。それと同様に、死亡年齢・時刻の要素が転生を決定するという運勢の論理も、転生の運命が子女の供養の功德という孝行によって変えられるという儒教的な論理に優先される。

曖昧でかつ神秘的な転生の靈魂に関する觀念の有意性はまさにここに求められる。祖先祭祀の親族体系と背反するパラドックスであるとはいえ、死者儀礼、死者追善供養儀礼を通して亡くなった親に対する救済ならびに祖先に対する記念を行う儀礼行為は孝行という社会理念を実践するものである。冥界の觀念は曖昧さと神秘の性格を備えているゆえに、祖先の觀念と地獄・転生の觀念の両方をカバーし、コミュニティの内部では墓や葬礼記録という祖先へのモニュメント、社会全体では演劇、彫像・壁画、建築物、公に刊行される図像入りの書物などの公共的な表象と結び付けられ、その呼び起こしの力をもって人々の心的表象として刻印されるのである。そのうえ、冥界の地獄での刑罰・転生という觀念は一見非合理的な文化的信念であるが、漢族社会で勸奨される「百善孝為先」の「孝」、す

なわち生者の社会関係における親と子、生者と死者の社会関係における祖先と子孫という社会的秩序にリンクして有意性を獲得したゆえに、「有意性に富む神秘」の文化的表象として中国に広く分布し、文化的成功を収めたのであるといえる。換言すれば、第3の魂と第1、第2の魂との論理の背反は、社会的通念である「孝」の観念およびそれを実践する儀礼行為に統合されることによって最終的な解釈が得られ、全体の整合性を得ることができたのであると考えられる。

Ⅵ むすび

四川地域において、死者の靈魂にまつわる文化的表象はコミュニティ内部で、特に死をめぐる一連の儀礼を通して持続されている。一方、中国社会全体における公共的表象の変化が著しいことも事実である。目連戯は福建南部地域での上演が見られるが、川劇目連戯は舞台から殆ど消えたといえる。川劇目連戯は1990年代初期綿陽市で行われた目連戯国際シンポジウムの開催中に上演されるなど、むしろその伝統芸能としての意味が認められ、関連研究が盛んに進められてきた。また、民国時代まで巡礼地の一つとして盛んだった酆都は今日、観光地としての豊都へ変貌した。冥界の空間構造を表現する寺廟群は修復・再建されたが、地獄の恐怖さが殆ど感じられない名山公園になっている。かつての「鬼都」に関する諸表象は「鬼文化」という豊都の地域文化として再定義され、観光資源として利用されている。1988年から寺廟の縁日の市が再び開かれるようになり、2000年まで約1000万人の観光客が豊都に足を運

んだ (<http://www.zhongguook.com/public/web/zgjqdg/2004-03/1078599751.html>)。

その一方で、このような社会変化に対応して公共的表象のあり方も変貌を遂げてきた。豊都の歴史、冥界信仰を引き合いに酆都を舞台とする靈魂の伝説が語り継がれ、死者の靈魂に関する各種の民間説話集が1990年代前半に相次いで出版された。勸善書の『玉歷至宝鈔』は長い間中国大陆で流通しておらず、筆者が2002年3月に北京の東岳廟を訪れた時、「東岳廟歴史展」では、当該廟によって刊行された『玉歷至宝鈔』の書物が歴史資料として展示された。しかし、中国大陆以外の漢人社会では、例えば台湾や東南アジアの寺廟で『玉歷至宝鈔』が無料で配布され、一般に広く扱まっているといわれる(窪1986:225)。また、四川地域の一部の道観と寺院ではここ数年、『太上感應篇』、『勸善書解説』(「閔聖帝君覺世宝訓」と「文昌帝君陰騭文」の原文および現代文訳付きの冊子)、『道教歷代人生格言選録』などの勸善書、勸善の意味をもつ『地獄遊記』、『発願懺悔文法師法語』などの冊子が無料配布されるようになった。こうした書物の印刷・刊行は四川地域の在家信者〈信善者〉個人の寄付金によるものもあれば、香港の慈善基金の資金援助によるものもある。言い換えれば、書物という公共的表象は今日、地域社会内部から発生することも海外などの地域外から伝達されてくることもある。これは「善」の観念への肯定、再評価につながる現象と見受けられる。死者の靈魂観念はこのような社会的な文脈の変化に埋め込まれ、諸表象との相互作用を通して変化しながら伝承されている。

参 考 文 献

- Arthur P. Wolf 1974. "Gods, Ghosts, and Ancestors" Religion and Ritual in Chinese Society. (Wolf, A.P. ed.) 131-82, Stanford University Press.
- ダン・スベルベル (菅野盾樹訳). 2001. 『表象は感染する——文化への自然主義的アプローチ』新曜社
- ジュディス・A・バーリング. (安藤泰至訳). 1995. 「中国の諸宗教における死と来世」ヒロシ・オオバヤシ編『死と来世の系譜』325-343, 時事通信社
- 勝木言一郎 1999. 「石鼓廟地獄図壁画の図像について」『アジア遊学 No.10・特集地獄と極楽』59-80, 勉誠出版
- 窪徳忠 1986. 『道教の神々』平河出版社
- マイロン・L・コーエン 1994. 「魂と救済——中国民間宗教における背反する主題——」ジエームズ・L・ワトソンほか編 (西脇常記ほか訳) 『中国の死の儀礼』209-228, 平凡社
- 三尾裕子 1990. 「〈鬼〉から〈神〉へ——台湾漢人の王爺信仰について——」『民族学研究』55-3 (3): 243-265, 日本民族学会
- ピーター・メトカーフ, リチャード・ハンティントン (池上良正・池上富美子訳). 1996. 『[第二版] 死の儀礼——葬送習俗の人類学的研究』未来社
- 佐藤成順 1994. 「魂魄」野口鐵郎ほか編『道教事典』186, 平河出版社
- 澤田瑞穂 1991. 『修訂地獄変——中国の冥界説』平河出版
- 謝荔 1998. 「系譜における母方, 妻方親族——中国四川省南部農村の『経単簿』に関する一考察——」『アジア・アフリカ言語文化研究』55: 119-140, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 1999. 「生命強化儀礼としての北斗祭祀——中国四川南部農村の「拜北斗」の事例から——」『人間文化研究年報』22: 44-52, お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
- 2000. 「四川南部地域の寺廟再興における星神祭祀の形態」『東方宗教』95: 44-61, 日本道教学会
- 2001a. 「現代中国内陸部の宗教事情」『アジア遊学・特集華人宗教のネットワーク』24: 89-100, 勉誠出版
- 2001b. 「四川の民間信仰と道教——漢族と少数民族の「陰」, 「陽」祭祀儀礼——」遊佐昇・野崎充彦・増尾伸一郎編『講座道教第六卷アジア諸地域の道教』84-107, 雄山閣出版
- 坂出祥伸 2000. 「「宗族孝を称す」(『論語』子路)」内藤幹治編『今, なぜ中国研究か——古典と現代』113-123, 東方書店
- 渡邊欣雄 1988. 「台湾鬼魂考——漢族における民俗宗教理解のための試論」『社会人類学年報』14: 43-71, 弘文堂
- 1990. 『民俗知識論の課題——沖縄の知識人類学——』凱風社
- 1991. 「鬼魂再考——民俗宗教理解のための試論」同著『漢民族の宗教——社会人類学的研究』153-193, 第一書房
- 吉岡義豊 1989. 「中国民間の地獄十王信仰について——『玉歴至宝鈔』を中心として——」『吉岡義豊著作集 第一巻』279-371, 五月書房
- 中国語資料**
- 張易然 1989. 「七月半燒拜香」『屏山文史資料』8: 85-88.
- 張桂泉編著 2001. 『平遙古城』広東旅游出版社
- 張珣 1993. 「台湾漢人収驚儀式與魂魄觀」黃応貴編『人觀, 意義與社会』207-231, 台北・中央研究院民族学研究所
- 中国戯曲志編輯委員会・『中国戯曲志・四川卷』編輯委員会編 1995 『中国戯曲志・四川卷』101, 北京・中国 ISBN 中心出版
- 『玉歴至宝鈔』1915 (民国 4 年) 天津・天成印字館
- 『玉歴至宝鈔』1929 (民国 18 年) 上海・上海宏大善書局
- 傅崇渠 [清] 1987. 『成都通覽』成都・巴蜀書社
- 黃文虎 1994. 「前言」超輪抄録・黃文虎校訂『超輪本日連』9-13, 台北・財団法人施合鄭民俗文化基金会
- 藍炳奎修・吳德準ほか纂 1938. 『民国達県志』
- 劉楨校訂 1994. 『莆仙戯目連救母』台北・財団法人施合鄭民俗文化基金会
- 劉楨 1997. 『中国民間目連文化』成都・巴蜀書社
- 劉大祥 1987. 「豊都道教和佛教史略」『豊都文史史料選輯』4: 178-194.
- 周克堃 [清] ほか纂『宣統広安州新志』(民国 9 年活字本の影印本)
- 鄭土有・王賢淼 1994. 『中国城隍信仰』生活・読書・新知三聯書店上海分店

- 杜建華 1993.『巴蜀目連戲劇文化概論』北京・文化芸術出版社
陰鈞陶・範增源 1994.「内江城隍廟」『内江市中区文史資料選輯』32: 201-212.
葉鏡銘「談談富陽的「接煞」和「做七」」『民俗』82: 19-22.
于一 2000.『古儺神韻』北京・中央戲劇出版社

グウェレ語の名詞と名詞修飾語の音調形分析*

加賀谷 良平

(アジア・アフリカ言語文化研究所)

A Tonal Analysis of Nouns and Noun Modifiers of
the Gwere Language

KAGAYA, Ryohei

Research Institute of Languages and Cultures of Asia and Africa

The Gwere language is spoken in the northern area of the Pallisa district of Uganda. Guthrie classified this language into the Nyoro-Ganda group (of Bantu languages) together with Ganda, Soga and others and numbered it as E17 (Guthrie, 1971). Unfortunately, the author of this paper doesn't know of any paper on the Gwere language so far. The informant in this study is Mr. D. Gesa, who was born in 1970 in Lerya-Kakule Village, Budaka County of the Pallisa district. He spent 21 years in the village, and moved to Mbale, about 20 km east from Lerya-Kakule, for higher education. He spent 3 years there. He moved to Jinja in 1995 and has been staying there since. He still goes back to his home village every weekend. He can speak Ganda, Soga and English besides his mother tongue Gwere. His parents are Gwere people. His wife is Soga, but her grandparents are Gwere and she knows Gwere very well as much as she knows Soga. The Gwere language is used in their home. All data from him in this text were collected every September from 2001 to 2003. The supplementary data were collected in September 2003 from Mr. Y. Walwana, who was born in the same county as Mr. Gesa, 1931.

In Chapter 1, the author discusses the unit of accent place, i.e., whether an accent of a morpheme is placed on a syllable or a mora is discussed, and as a result, a syllable is adopted as the unit of accent place.

In Chapter 2, tonal patterns of nouns (consisting of the initial vowel prefix-noun stem) in isolation are discussed. The following results were obtained. (1) the final H tone of a word is not involved in the distinction

Keywords: Tonal system of nouns, Gwere language, Uganda, distinctive tone and non-distinctive tone, Contrast in accents and 5 tone melodies

キーワード: 名詞の音調システム, グウェレ語, ウガンダ, 弁別的トーンと非弁別的トーン, アクセントと五つのトーンメロディによる弁別

* 本稿の資料は文部科学省科学研究費補助金（基盤研究 (A) (2)）による「北部中部バントゥ諸語の記述・比較研究」（平成 11 年度～13 年度）及び同科学研究費補助金（基盤研究 (A) (2)）による「未調査のバントゥ諸語および隣接諸言語の記述・比較研究」（平成 15 年度～17 年度）の現地調査で収集したものの一部である。この調査に御協力を頂いた、また御尽力をたまわった国内外の多くの方々に、謝意を表する。

of tonal patterns, if the H tone follows (consecutive) L tone(s). These non-distinctive final H tones are not found in most Bantu languages, and their presence is an inherent characteristic of Gwere. The last H tone(s) is called the non-distinctive H tone in this text. The tonal patterns excluding the non-distinctive H tone of nouns are further discussed from the perspective of tonal distinction, and their underlying forms are discussed. Then, (2) five tone melodies (TM), i.e., H, HL, L, LH and HLH are proposed for noun stems (including infinitives) and H is assumed as for an initial vowel of a noun. (3) The tone melodies of noun prefixes are not specified in the lexicon, and their tonal patterns are derived directly from the initial tone of the tone melody (TM) of the following morpheme. That is, the TM is L when the initial tone of the following TM is H, and H when it is L. This phenomenon is the tonal polarization found in this language. Furthermore, TM of a noun stem determines the tonal pattern after the accent syllable, and the tonal pattern before the accent syllable is determined by the TM just before the TM of the noun stem. In the case where a noun prefix consists of a vowel only, the prefix and the preceding initial vowel are combined and they become one syllable. Tonal changes caused by this phenomenon are discussed in this chapter. In the case where a noun stem consists of one syllable, many tonal changes also occur. The discussion on these tonal changes reveals underlyingly the presence of words with LH of TM for a noun stem consisting of one syllable, though that presence is not clear from each surface tonal pattern.

In Chapter 3, tonal patterns of copula sentences are discussed. Here, the tonal change of a word immediately before a verb is also discussed, and these changes are inherent to Gwere. In Chapter 4, tonal patterns of noun modifiers and genitives are discussed. Furthermore, tonal patterns of nouns with these modifiers are deliberated.

In Chapter 5, tonal phenomena and characteristics are summarized. Furthermore, the tone melody HLH, which is not considered as TM in Proto Bantu languages, is discussed and its historical change from HL or LH is deliberated.

- | | |
|---|-------------------------------------|
| 0. はじめに | 2.2.2.1. 語幹が2音節以上の場合 |
| 1. グウェレ語のアクセント配列単位 | 2.2.2.2. 語幹が1音節の場合 |
| 2. 孤立環境での音調形（含不定形） | 2.3. 不定形の音調形 |
| 2.1. 基底音調形 | 3. 繫辞文の音調形 |
| 2.1.1. 表面音調形の特徴 | 3.1. 「～です」, 「～でない」の音調形 |
| 2.1.2. LHLH と HLH を除いたタイプ
の名詞語幹の基底形 | 4. 様々な環境での名詞音調形 |
| 2.1.3. LHLH と HLH タイプの基底形 | 4.1. 名詞修飾語の音調形 |
| 2.1.4. 名詞語幹のアクセント音節以降
の音調誘導 | 4.1.1. 形容詞の音調形 |
| 2.1.5. 名詞前接辞の基底音調形 | 4.1.2. 述語の直前に位置する語の語末
の音調変化 |
| 2.2. 名詞音調形の誘導 | 4.1.3. 形容詞以外の主な名詞修飾語の
音調形 |
| 2.2.1. 前接辞群が “V ₁ -CV ₂ ” の場合 | 4.1.3.1. 数詞 1, 2, 3, 4 |
| 2.2.2. 前接辞群が “V ₁ -V ₂ ” の場合 | 4.1.3.2. another/other, many, few の |

音調形

4.1.3.3. how many の音調形

4.2. 指示詞の音調形

4.2.1. 指示詞 “-nu”, “-di” の音調形

4.2.2. 指示詞 “-o” の音調形

4.3. 所有詞と属辞の音調形

4.3.1. 所有詞

4.3.2. 所有代名詞

4.3.3. 属辞

5. まとめ

5.1. グウェレ語の名詞音調形の特徴

5.2. グウェレ語の非弁別的音調と修飾的非弁別的音調

5.3. LHLH タイプについて

5.4. HLH タイプについて

補遺：述語の直前の語における語末音調 H の L 化について

略記：

C；子音

V；母音

H；高平ら音調

L；低平ら音調

-；形態素境界

#；語境界

##；文境界

N；直続する子音と同一の調音点を持つ鼻音

t；TBU (Tone Bearing Unit, 音調負担単位)

V_f；名詞語末母音V_{iv}；形容詞冒頭母音

TM；トーンメロディ

AC；Association Convention

o；音節

o, (C)V (underline)；アクセント音節

*；アクセント（の位置）

VC；母音融合

{<a>, , <c>}；a, b, c の何れかの一つ

Cop；繫辞

N.Stem；名詞語幹

ó；高平ら調をもつ音節

ò または o；低平ら調をもつ音節

ô；下降調をもつ音節

õ；上昇調をもつ音節

0. はじめに

グウェレ語¹⁾はウガンダ国の東南部、チョガ湖の南に位置する Pallisa 県を中心に話されているバントゥ諸語の一つである。Guthrie (1971) のバントゥ諸語の分類では E17 と番号付けられ、Nyoro, Tooro, Nyankore, Ciga, Ganda, Soga, Nyala 等と同一の Nyoro-Ganda グループに属する。通常、これらの内の Ganda, Soga, Gwere 等は西ウガンダバントゥ諸語とよばれ、Nyoro, Tooro, Nyankore 等は東ウガンダバントゥ諸語と呼ばれている。二つの言語に共通して存在する語彙の割合からその親近性を述べれば、グウェレ語は (Guthrie には未記載である) Kenyi 語, Masamba 語と各々 76% と 74% の共通性がある。また、Soga 語とは 70% の共通性があり、Ganda 語とは 66%, Nyoro 語, Tooro 語, Nyankore 語とは各々 56%, 56%, 51% であるという (Ladefoged et al, 1972)。話し手の数は 1991 年の国勢調査によれば約 28 万人であるという (Ethnologue, 14th edition)。

本稿のインフォーマントは Mr. David T. Gesa で、1970 年 8 月に Pallisa 県の Budaka 郡の Lerya-Kakule 村で生まれた。彼の両親もグウェレ人である。彼の妻の母語はソガ語であるが、彼女の祖父母は共にグウェレ人であり、グウェレ語を母語のごとくに話し、かれらの家庭で

話す言語はグウェレ語であるという。Mr. Gesa は生まれてから 1991 年まで、Budaka 町を含めた Lerya-Kakule 村近辺で過ごして、高校を卒業した。その後、1991 年から 1994 年まで、さらなる高等教育のために Budaka から 20km 程東に位置する Mbale 町に移る。1995 年からは Jinja に移り現在に至る。彼は、グウェレ語の他に、ガンダ語、ソガ語、ギス語、英語等を話す。Jinja と生まれ故郷の村とは車で 2 時間程の距離で、週末毎に帰郷していて、日常的にグウェレ語を用いている。本稿の資料は主として 2001 年 9 月、2002 年 9 月、2003 年 9 月に現地で収集したものである。また、Mr. Walwana Yokosofati からも確認のための補助資料を収集した。彼は、1931 年に Budaka の Manyoni 村で生まれ、母語であるグウェレ語の他に、ガンダ語、スワヒリ語、ギス語、英語を話す。資料収集は 2003 年 9 月に行った。

本稿の第 1 章では、まずアクセントの配列単位が TBU (音調負担単位) であるか音節単位であるかを論じ、音節単位が妥当であると結論する。その結論に基づき、第 2 章では名詞 (不定形を含む) の孤立形の表面音調形を分析する。その結果、表面音調形の語末 TBU の H 音調は、それが L 音調に続いている場合に限り、音調形の弁別に関与しないことが分かる。この語末の非弁別的音調は、他のバントゥ諸語にはほとんど見つからず、グウェレ語に固有の特徴である。これらの非弁別的音調を取り去った音調形から基底形を考察し、結果として、名詞語幹のトーンメロディ (TM) として、H, HL, L, LH に加え、HLH を仮定した。また、冒頭母音のトーンメロディは H と仮定される。名詞前接辞には TM を指定する必要がなく、その TM は名詞語幹の TM の最初のトーンと反対のトーンとなることが分る。これはトータルポラリティ現象である。また、アクセント音節以降の名詞語幹の音調は語幹の TM によって決まるが、アクセント音節以前の音調はその直前の形態素の TM、すなわち名詞前接辞の TM によって定まることが分る。更に、名詞の冒頭母音と前接辞の音形が共に母音だけからなる場合、それらは 1 音節化するが、この 1 音節化に伴う音調変化を論ずる。また名詞語幹が 1 音節からなる場合に起こる様々な音調変化を議論し、仮定された基底形から表面音調形の誘導を試みる。また、この議論から TM が LH である語幹 1 音節語の存在を明らかにする。この基底形はその表面音調形からは決して推測できないものである。第 3 章では繫辞文「それは～(名詞)です」の音調形を論ずる。ここでは述語直前の語の語末が(一連の) H 音調であれば、それらが(一連の) L 音調に変化する現象も論ずる。第 4 章では様々な環境での名詞の音調形を論ずる。同時に形容詞、数詞他の名詞修飾語の音調形、指示詞、属辞等の音調形を論ずる。第 5 章では、グウェレ語の音調形の特徴について論ずる。また、バントゥ祖語の音調システムには現れない TM である HLH について議論し、その HL および LH からの変容を考察する。

- 1) この言語の音素として、/ p, b, bb, t, d, dd, c, j, k, g, gg, m, n, ny [ɲ], ngh [ŋ], f [f], v [v], s, z, w, l, y, mp, mb, nt, nd, nc, nj, nk, ng, nv [nv], ns, nz/ が見つかった。このうち、/ b / はその閉鎖が弛く、摩擦音成分も極めて弱く、接近音 [w] に近い。丸めや突き出しはない。また、/c, j/ はこの言語の書記法では /ky, gy/ と記される事が多い。以上の音素の他に硬口蓋化音 / by, ty, dy, sy, zy, ly, my, n' [nʰ], mby, nsy/ と軟口蓋化音 / bw, tw, dw, kw, gw, mw, nw, nyw [nʷ], fw, vw, sw, zw, lw, mbw, ntw, nk, ngw, ns, nzw/ が見つかった。これらの内の /n', sy/ は、伝統的な書記法では /nia, sia/ と記される事が多い。また、若い人の発音では /niya, siya/ と 2 音節で発音されることもある。更に、人により有聲声門摩擦音 [ɦ] がクラス 16 の冒頭母音と前接辞の間に介在し /aa/ が [afia-] となって現れる事がある。また、/ bb, dd, gg / は日本語の促音にやや似ているが、弱い声門閉鎖音であり、語頭にも位置する事が出来る。

通常は軟口蓋化音、硬口蓋化音は 2TBU (音調負担単位) をなすが、この言語の軟口蓋化音、硬口蓋化音は二重音的調音をなし、1TBU しか持たない。

1. グウェレ語のアクセント配列単位

グウェレ語では、(1) に示すように、短音節と長音節が対立する。音調負担単位 (TBU) の数は短母音が 1TBU、長母音が 2TBU である。

(1) 短音節と長音節との対立

óku-kumá (to watch over) vs óku-kumá (to make a fire)
 óku-kuulá (to uproot) vs óku-kulá (to grow)

また、この言語では (2) に示すように、長音節の 2TBU が共に同じ高さを持つものと、それらが高平ら調と低平ら調からなるものがある。従って、アクセント (トーンメロディ中の指定された一つのトーンが連結する位置) は一見 TBU 単位に配列されているように見える (なお、以降トーンメロディは TM と略記する)。

(2) 平音調音節と曲音調音節

éki-búuká (insect) vs ómu-sáále (tree)
 áma-táfáalí (bricks) vs óbú-bílííti (match)

一方、アクセント (配列) の単位を音節と考えた方がよい例も見つかる。その例として、語幹が 3 音節から不定形の音調形を (3) に示す。不定形の語末音節は常に短音節であるので、長音節と短音節の組み合わせは 4 通りであり、(3) にその全ての組み合わせの語とその音調形を示す²⁾。(3) で、もしアクセント (配列) 単位を TBU としてアクセントを語幹頭から数えるように考えると、語頭音節が短音節だけからなる語は常に語幹次頭の TBU から高くなり、それが長音節から始まる語は語幹頭から 3 番目の TBU から高くなり、アクセントに二つの系列が存在するとせねばならない。しかし、音節をアクセントの配列単位とすれば、短音節で始まろうとも長音節で始まろうとも語幹次頭音節から高くなると言う事が出来て、二つの系列云々と言うことを考えなくて済む。このことは語末から TBU を数える場合についても言えることである。従って、アクセント配列単位を TBU とするよりも音節とする方がより簡潔であり、齊一なシステムを構成できる。なお、この場合には長音節に曲音調が現れるが、この出現は音調規則を用いて表現されることになる。

(3) 孤立環境での語幹 3 音節の不定形の表面音調形

1	2	3	4
óku-bulúká	óku-buukílá	óku-lowóózá	óku-fuulúútá
(to come from)	(to jump into)	(to think)	(to snore)

2) 軟口蓋化音や硬口蓋化音を含む語末音節は存在するが、長母音を含む語末音節は存在しない。

2. 孤立環境での音調形（含不定形）

2.1. 基底音調形

2.1.1. 表面音調形の特徴

グウェレ語の名詞は「冒頭母音－前接辞－語幹」からなり、冒頭母音の音形は V, 前接辞は“(C)V”または“VN”の音形をとる。少数ながら、冒頭母音を持たない名詞もある³⁾。本稿では冒頭母音と前接辞を合わせて前接辞群と呼び, “V₁-(C)V₂”と表わすことがある。

この言語の孤立環境での表面音調形を(4)に示す。冒頭母音－前接辞を共に持つ音調形を示すが, その例が見つからない場合もある。なお, この表に含まれていない音調形を取る語は極めて少数である⁴⁾。また, 具体的な語形は付表1に示す。この音調形グループの分類は, 主として語幹頭からアクセント音節を数えてグループ化したものである。表中の“-”は前接辞と語幹との境界を, “o”は音節を示す。短音節, 長音節共に高平ら調は“ó”, 低平ら調は“o”で表わし, 下降調は“ô”で表す。

(4) 孤立環境での名詞の表面音調形

	語幹音節数	1	2	3	4	備考
前接辞群音調	タイプ／型					
HL	LH1	óo-ó	óo-óó	óo-óóó	not found	H, 1
	LH2		óo-oó	óo-oóó	óo-oóóó	H, 2
	LH3			óo-ooó	óo-ooóó	H, 3
	LH4				óo-oooó	H, 4
	LHL1	óo-ô	óo-óo	óo-óoo	óo-óooo	HL, 1
	LHL2		óo-oô	óo-oóo	óo-oóoo	HL, 2
	LHL3			not found	óo-ooóo	HL, 3
	LHLH		óo-ôó	óo-oóó	óo-ooóó	HLH, R2
HH	HL1	óó-o	óó-oó	not found	not found	L, 1
	HL2		óó-óo	óó-óoo	óó-óooo	L, 2
	HL3			óó-óoo	óó-óooo	L, 3
	HL4				óó-óóoo	L, 4
	HLH	後述（参照 2.2.2.2）	óó-ôó	óó-óóó	óó-óóóó	LH, R1

上の(4)の表面音調形に現れている特徴を述べておく必要がある。まず, その特徴として, 冒頭母音は常に H 音調で現れる。つぎに, 例えば, LHL1 型や HL2 型の語幹が 3 音節と 4 音節に, また HL1 型の語幹が 2 音節の音調形に見られるように, 語幹に HLH や HLLH のような, 低平ら音調の L を挟んで二つの高平ら音調 H が現れる音調形の存在である。この音調形の後の方の H は常に語末 TBU に現れ, またその前には L をとる一個以上の TBU が存在す

- 3) 前接辞しか持たない名詞は不定の意味合いを持つが, 冒頭母音を持つとその名詞によって表される類の特定の人物やものを意味する。
4) 明らかな複合語を除いて, (4)に含まれない音調形には次のようなものがある。

ó-kóíza,	mother's brother, son of mother's brother
ába-kóíza	mother's brothers, sons of mother's brother
é-tómásiyo,	umbrella
áma-tómásiyo	umbrellas



る⁵⁾。このような語末 TBU の H は、後述するように、語末 TBU 以前の語幹音調形が一定の条件を満たしていれば現れるので、弁別的な役割をはたしていない。従って、これらの非弁別的音調を持たない音調形が、ある規則を経て (4) の音調形に誘導されたと仮定できる。この過程を (5) に示しておく。

(5) 語末 TBU の音調変化 L > H の幾つかの例

	タイプ		語末の L > H 化	表面音調形
	LHL1	óo-óoo	→	óo-óooó
	LHL1	óo-óooo	→	óo-óoooó
	LHL2	ó-oóoo	→	ó-oóooó
	HL1	óó-oo	→	óó-oó
	HL2	óó-óoo	→	óó-óooó
	HL3	óó-óooo	→	óó-óoooó

この語末の L > H の音調変化を今のところ次のように表わしておく。

(6) 語末 TBU の L 音調は、その直前の音節が L 音調ならば H 音調にかわる。

以上のように、規則 (6) を仮定し、この規則が LHL1, LHL2, HL1, HL2, HL3 グループに適用されたと仮定すると、この規則の適用以前の音調形、すなわち語末の非弁別的音調 H を取り除いた音調形を (7) とすることができる。なお、この表では常に H である冒頭母音の音調も取り去っている。また、(7) に示した、これらの音調形は互いに対立している事が確認される。

↘ このうち、“ó-kóíza, ába-kóíza” も複合語の可能性が極めて高い。その理由として、“ko” は “omu-ko” (wife’s brother) の語幹であることである。また “iza” は “saizá (man, male), zeizá (grandparent)” にも見られ、“ó-kw-izá (to come)” の語幹であり、“ó-kóíza, ába-kóíza” と関係なくも無さそうである。“é-tómásíyo, áma-tómásíyo” に関しては、今のところ複合語と主張する証拠は見つかっていないが、このような音調形、すなわち冒頭母音-前接辞が H-L と現れ、語幹頭音節以降は次末音節まで H が続き、語末音節が L で現れる音調形は複合語に良く現れる音調形でもある。例えば、“á-ba-ná-ky-áálo (villagers)” は “na (with)”, ky-aalo (village)” の要素からなり、このうち冒頭母音 “a” は H の TM を持ち。また “aalo” は L の TM を持つ (下線部がアクセント音節)。残りの要素は TM を持たない。これが、後に示す論考により、“na” には H の TM が、次に “ba” には L の TM が与えられて、その表面音調形が誘導されと考えられる。また、“á-ma-ká-n-témá-mbáyízi (dragonflies)” は冒頭母音-前接辞の “a-ma” の他に “ka (it)”, “n (me)”, “tema (cut)”, “mbayizi (axe)” の要素からなり、このうち冒頭母音の “a” が H, “tema” が H, “mbayizi” が L の TM を持つ事が分かっている。これらは最終的に、“é-tómásíyo, áma-tómásíyo” と同じタイプの表面音調形となって現れるので、これらの語は複合語である蓋然性が高いと考えられる。

5) この言語では、名詞の語末音節は常に短音節であり、長音節からなるものはない。(4) の LHL2 に属する “éki-fwofwô (lung)” の “fwô” は短音節である (参照付表 1)。

(7) 音調規則 6 の適用以前の「前接辞－語幹」の音調形とその分類

前接辞音調	グループ	タイプ				
HL	LH	LH1	o-ó	o-óó	o-óóó	not found
		LH2		o-oó	o-oóó	o-oóóó
		LH3			o-ooó	o-ooóó
		LH4				o-oooó
	LHL	LHL1	o-ó	o-óo	o-óoo	o-óooo
		LHL2		o-oó	o-oóo	-oóoo
		LHL3			not found	o-ooóo
		LHLH		o-óó	o-oóó	o-ooóó
HH	HL	HL1	ó-o	ó-oo	not found	not found
		HL2		ó-óo	ó-óoo	ó-óooo
		HL3			ó-óóo	ó-óóoo
		HL4				ó-óóóo
	HLH	HLH	後述（参照 2.2.2.2）	ó-óó	ó-óóó	-óóóó

この非弁別的音調を除いた (7) から、名詞の基底音調形を考えることにする。まず、LHLH と HLH の二つのタイプを除いた音調形は名詞語幹音調の特徴によって大きく三つのグループに分類されるだろう。すなわち、前接辞が L の語は、(a) 語幹音節の任意の音節から H となり、それが語末音節まで続くグループ、すなわち LH1, LH2, LH3, LH4, (b) 語幹音調がその途中で H から L へと変化しているグループ、すなわち LHL1, LHL2, LHL3 である。残りの一つのグループは前接辞が H のタイプで、この特徴は (c) 前接辞から始まる H が語幹のいずれかの音節で L にかわり、それが語末まで続くことである。即ち、HL1, HL2, HL3, HL4 のタイプである。

上で除外した二つのタイプ、LHLH と HLH タイプの特徴は語幹次末音節が下降調でかつ語末音節が H で現れることである。これらの二つのタイプは、この特徴の他に、各々のタイプに共通したアクセント音節が語末から数えた方が統一적であるという特徴があり、上述した三つのタイプとは明らかに異なる。このことは後に詳しく議論する（参照 2.1.3）。さらに、孤立環境での音調形だけでは語幹が 1 音節の HLH タイプの存在を主張出来ないが、これも後に別の環境での音調形を示し議論する（参照 2.2.2.2）。

2.1.2. LHLH と HLH を除いたタイプの名詞語幹の基底形

(7) から、LHLH と HLH を除いたタイプの音調基底形を (8) のように仮定する。なお、“AC 音節” はアクセント音節を表し、この音節とトーンメロディ “TM” の最初のトーンと連結すると仮定する。なお、アクセント音節が 2TBU からなる場合には、その全 TBU と TM の最初のトーンが連結する。(8) の最右翼列の “1” はアクセント音節が語幹頭音節であることを表わし、“2” はそれが語幹次頭音節、“3” と “4” は各々語幹頭音節から数えて 3 番目、4 番目の音節を表す。これらのアクセント音節を下線を付けて “ó” で示しておく。またトーンメロディは、H, L, HL の三種を仮定する。これらの基底形から表面音調形の誘導は後に示すことにする（参照 2.2）。

(8) LHLH と HLH タイプ以外の名詞語幹の基底音調形

前接辞群音調	タイプ				TM	AC 音節	
HL	LH1	- <u>o</u>	- <u>oo</u>	- <u>ooo</u>	not found	H	1
	LH2		- <u>oo</u>	- <u>ooo</u>	- <u>oooo</u>	H	2
	LH3			- <u>ooo</u>	- <u>oooo</u>	H	3
	LH4				- <u>oooo</u>	H	4
	LHL1	- <u>o</u>	- <u>oo</u>	- <u>ooo</u>	- <u>oooo</u>	HL	1
	LHL2		- <u>oo</u>	- <u>ooo</u>	- <u>oooo</u>	HL	2
	LHL3			not found	- <u>oooo</u>	HL	3
HH	HL1	- <u>o</u>	- <u>oo</u>	not found	not found	L	1
	HL2		- <u>oo</u>	- <u>ooo</u>	- <u>oooo</u>	L	2
	HL3			- <u>ooo</u>	- <u>oooo</u>	L	3
	HL4				- <u>oooo</u>	L	4

2.1.3. LHLH と HLH タイプの基底形

LHLH と HLH タイプでは、長母音からなる次末音節が下降調で現れるような基底形を考えねばならない。このために、語末 TBU に LH が連結していると仮定する。次に、その LH の L はその語末 TBU から切り離され、次末音節の最後の TBU と連結する規則を考えれば、このような音調形を誘導できる。また、それを表わす規則の実際の表現形はともあれ、このような現象はルリ語 (Massamba 1984) やジタ語 (加賀谷 2004) 等にも見られる現象である。これらのことから LHLH と HLH タイプの語幹の基底形を次のように仮定する。

(9) LHLH タイプと HLH タイプの名詞語幹の基底音調形

前接辞群音調	タイプ					TM	AC 音節
HL	LHLH		- <u>oo</u>	- <u>ooo</u>	- <u>oooo</u>	HLH	R2
HH	HLH	- <u>o</u> ? (参照 2.2.2.2)	- <u>oo</u>	- <u>ooo</u>	- <u>oooo</u>	LH	R1

これらの基底形ではアクセント音節が定まった位置に固定している。それも、LHLH タイプでは次末音節、HLH タイプでは語末音節である。これについては 5 章で議論する。なお、孤立環境での表面音調形からは、(9) の HLH タイプの語幹 1 音節の語の存在を主張できないが、これについても 2.2.2.2 で議論することにする。

2.1.4. 名詞語幹のアクセント音節以降の音調誘導

上述したような名詞語幹の基底形を仮定すると、そのアクセント音節以降の音調形は次のように誘導される。アクセント音節と TM との連結は次のように仮定できる。

(10) TBU と TM の連結 (Association Convention)

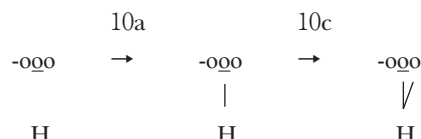
- 10a. アクセント音節と TM の最初のトーンが連結する。アクセント音節が 2TBU からなる場合には、その全 TBU と連結する。
- 10b. アクセント音節から i 番目の TBU と、TM の i 番目のトーンが連結する。
- 10c. 未連結の i 番目の TBU と対応する未連結のトーンがないならば、連結済みの最後のトーンとその未連結の TBU が連結する。

10d. 未連結の i 番目のトーンと対応する未連結の TBU がないならば、連結済みの最後の TBU とその未連結のトーンが連結する。

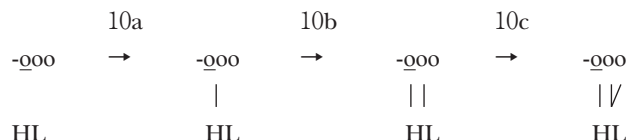
以下にアクセント音節以降の音調形の幾つか連結の例を示す。

(11) 名詞語幹のアクセント音節以降の幾つか連結の例

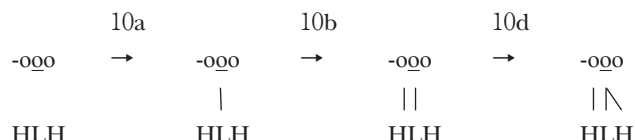
LH2 型



LHL1 型



LHLH 型



以降、(10)を一括して“AC”と呼ぶことにする。

2.1.5. 名詞前接辞の基底音調形

名詞前接辞を含む、アクセント音節以前の音調形はその名詞の語幹のトーンメロディから自動的に定まる。まず、(7)と(8)から明らかなように、語幹のアクセント音節以前の音調は常に前接辞の音調と同一である。その前接辞の音調は、語幹の TM の最初のトーンと反対のトーンを取り、いわゆるトータルボラライゼーションをなしている。言い換えると、語幹の TM が H で始まるタイプ、すなわち LH, LHL, LHLH タイプ（以降本稿では H 型と呼ぶ）では L であり、それが L で始まる HL, HLH タイプ（以降本稿では L 型と呼ぶ）では H で現れる。一方、(10)から明らかなように、この言語では TM と TBU との連結は常に右方向へ拡がって行き、また冒頭母音の TM は H なので、前接辞の TM が H の場合には、この冒頭母音の H が前接辞とそれに続く語幹のアクセント音節以前の TBU と連結すると考えれば良く、前接辞の H を挿入する必要は無い。従って、前接辞の TM は L だけを挿入すれば良い。また、前接辞の TM とトータルボラライゼーションを成しているトーンは、不定形では前接辞の直後の否定辞の TM である H や目的接辞の TM である L であるので（後述）、ここでも「名詞の語幹」の TM の最初のトーンと表現しないで、「前接辞の直後の要素」の TM の最初のトーンとしておく。以上を次のように表しておく。

(12) 前接辞の TM

前接辞の直後の要素の TM が H で始まっているならば、前接辞の TM として新たに L が導入される。

また、既に明らかである冒頭母音の TM を次のように表わしておく。

(13) 冒頭母音の TM

冒頭母音の TM は H とする。

2.2. 名詞音調形の誘導

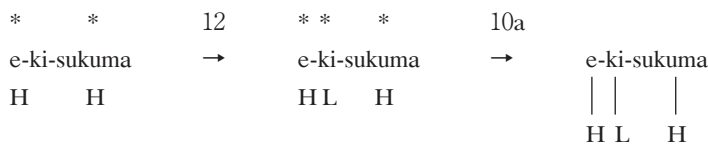
これまで述べてきた (10) の “AC” 及び音調規則 (12) と (6) により、孤立環境での名詞の表面音調形は次のように誘導される。

2.2.1. 前接辞群が “ V_1-CV_2 ” の場合

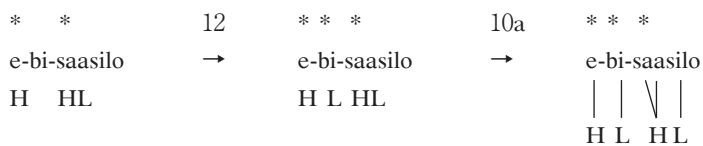
名詞の前接辞群が “ V_1-CV_2 ” の場合の表面音調形は次のように誘導される。

(14) 孤立形での前接辞群が “ V_1-CV_2 ” の名詞の表面音調形の誘導例

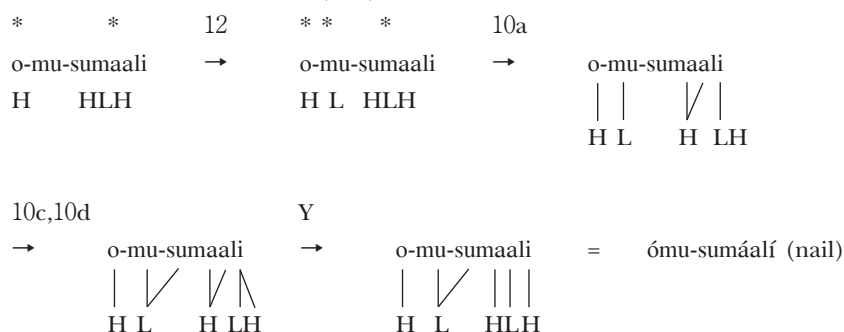
14.1. LH2 タイプ; éki-sukúma (tsetsefly)



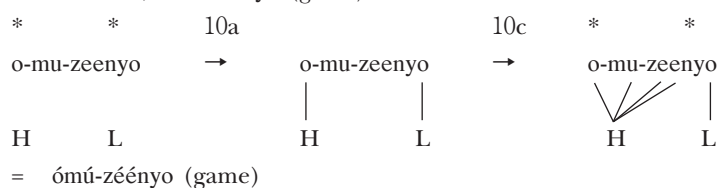
14.2. LHL1 タイプ; ébi-sáásiló (rubbish)



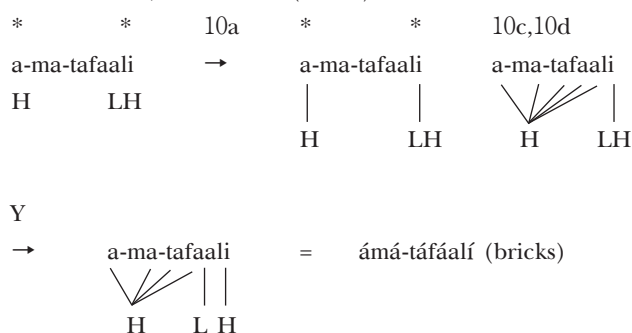
14.3. LHLH タイプ; ómu-sumáalí (nail)



14.4. HL2 タイプ; ómú-zéényo (game)



14.5. HLH タイプ; áamá-táfáalí (bricks)



上の (14.2) 音調変化 (X) は既に述べた (6), すなわち非弁別的音調 H の付加の事である。これを次のような式であら表わしておく。更に、表 4 から n は今のところ、1 ないし 2 としておく。

(15) 語末の L > H



また (14.3) の (Y) は語末音節の上昇調の平音調化であり、次のように表わしておく。

(16) 語末音節の平音調化



冒頭母音のない形、即ち前接辞だけが名詞語幹に前接する場合の音調形の誘導は、以上の誘導から冒頭母音を除けば良いだけなので、省略することにする。

2.2.2. 前接辞群が “V₁-V₂” の場合

前接辞が “V₁-V₂” の場合には、“V₁-CV₂” では現れなかった幾つかの音調変化が起こる場合がある。その音調変化も語幹が1音節の場合と2音節以上の場合では異なる。

2.2.2.1. 語幹が2音節以上の場合

この言語で、「冒頭母音－前接辞」が “V₁-V₂” となる場合は、名詞クラス5の “eli-” の短縮形 “ei-” の場合だけである。

冒頭母音の “e” の TM が H で、前接辞の TM は (12) から自動的に定まるとは既に述べた。従って、名詞語幹のトーンメロディが H で始まる場合には、冒頭母音－前接辞の音調は “é-i” と現れねばならないが、実際にあらわれる表面音調は常に “éí-” である。この状況を、すなわち音調論的アウトプットと表面音調形を (17) に示しておく。ここで、音調論的アウトプットとは、これまでに示した音調規則を適用した最終的な音調形、すなわち (12) と AC によって誘導される音調形を呼ぶことにする。また、各行の下段は複数形で、「冒頭母音－前接辞」は “a-ma” である。“=” は、音調論的アウトプットと実際の表面音調形が同一であることを示す。

(17) 前接辞群 “ei-” と “ama-” を持つ名詞の表面音調形

タイプ	語幹の TM	音調論的アウトプット		表面音調形
LH1	H	éi-tamá (cheek) áma-tamá (cheeks)	→ =	éí-tamá áma-tamá
LHL2	HL	éi-wánga (tribe) áma-wánga (tribes)	→ =	éí-wánga áma-wánga
LHLH	HLH	éi-gáalí (bicycle) áma-gáalí (bicycles)	→ =	éí-gáalí áma-gáalí
HL2	L	éí-lúba (well) ámá-lúba (wells)	= =	éí-lúba ámá-lúba
HLH	LH	éí-péelá (guava) ámá-péelá (guavas)	= =	éí-péelá ámá-péelá

(17) から明らかなように、“é-i- > éí-” の現象は前接辞の直後の TM の最初のトーンが H の場合だけに起こり、L では起こらない。また、(18) に示すように、単に母音連続だから起こる現象でもなく、「冒頭母音－前接辞」が “e-i” の場合だけに起きている。“éí-wánga (tribe) → éí-wánga, éí-gáalí (bicycle) → éí-gáalí” のような場合でも、H に囲まれた L を持つ一つの TBU が H に変わった現象とは考えられない。もしそのような現象ならば、語幹内でも同一の現象が起こればと考えられるが、起きているのは「冒頭母音－前接辞」が “e-i” の場合

だけである。

(18) 連続する母音が異なる音調を取る例

タイプ	語幹の TM	音調論的アウトプット		表面音調形
LH1	H	ómu-gaí (ladle for mush)	=	ómu-gaí
LH3	H	óku-kaíííá (become old)	=	óku-kaíííá
HL2	L	áká-itó (small pillow)	=	áká-itó
HL2	L	ábá-idú (follower)	=	ábá-idú
HL2	L	ó-má-idó (ground-nut)	=	ó-má-idó

この “é-i- > é-í-” と同じ現象がショナ語のゼズル方言でも起こる。すなわち、主格接辞に後続する時称辞群 “a-i” の音調論的アウトプットは “H-L” なのだが、表面音調形では “H-H” と現れる (加賀谷 1998)。

このような現象をどのように考えれば良いだろうか。その一つは語の周縁要素では、語に本来的に適用される規則が適用されないことがあると言う考えである (Pulleyblank 1986)。これは、もともとストレスの研究や音調の研究からでてきた考えであるが、これを語の周縁要素では、本来は起こらない「簡略化」が起こることがあると解釈する。言い換えると、語の中心部ではその言語の決まり (約束事) がきっちりと守られるのだが、語の周縁部ではそれが崩れると言う考えである。すなわち、本来は2音節である “e-i-”, “a-i” が語の周縁要素であるために、発話の過程で1音節化したと考える。1音節化したために、本来はLを持っているTBUがその音節の第一TBUである “e” あるいは “a” の音調Hを持つに至ったと考える。

このような1音節化は、この言語では “ei” だけでなく, “oi” でも起こる。(19) には、母音 “o” に “i” が直続する全ての例語を示す⁶⁾。なお, “ó-i-” は、複数形の音形から明らかに、複合前接辞である。

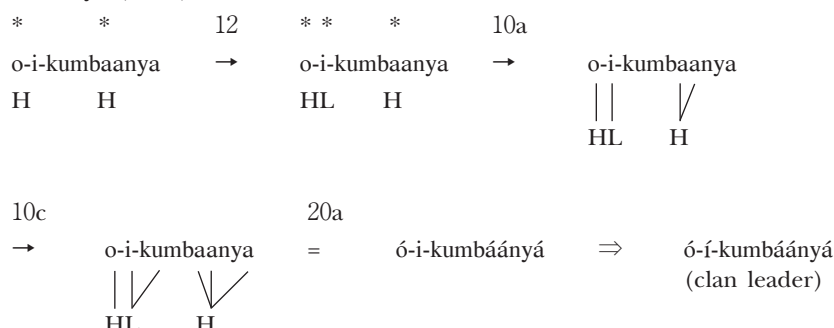
(19) 母音 “o” に “i” が直続する語の音調形

語幹の TM	単数形の表面音調形	複数形の表面音調形
H	ó-í-sengá (father's sister)	ába-i-sengá
H	ó-í-se (heir of a clan beginner, 参照 2.2.2.2)	ába-i-sé
H	ó-í-bboló (penis)	áma-bboló
H	ó-í-kovú (snail, slug)	áma-kovú
H	ó-í-kele (frog)	áma-kele
H	ó-í-ginó (maggot)	áma-ginó
H	ó-í-kumbáán'á (clan leader)	ába-i-kumbáán'á

以上のことから、この1音節化に伴う音調変化を次のように表わしておく。

6) “ó-kóíza, ába-kóíza (mother's brother, son of mother's brother)” は語幹中で “oi” の1音節化が起こっているように見える。しかし、これは1音節化ではなく、複合語 “ó-kó-íza, ába-kó-íza” と考えられ、複合語の表面音調形の音調形と考えられる (脚注 (4) を参照)。

c. ó-íkumbáányá (chief)



2.2.2.2. 語幹が1音節の場合

語幹が1音節の場合には、更に複雑な音調変化が起こる。この変化は、前接辞群が“ V_1CV_2 ”の場合には起こらず、それが“ei-”または“eN-”の場合にのみ起こる。語幹が1音節なので、これらの音調変化は(19)に示した“o-i-se”の場合にも起こる。これらの音調変化を(22a)、(22b)に示す。

(22) 語幹が1音節の場合の音調変化

22a. 名詞孤立形の音調形

	タイプ	語幹の TM	(12),(AC) による誘導		(20b) の変化		孤立形の表面音調形
1	LH1	H	éi-ggí (egg) áma-ggí (eggs)	$\rightarrow$ =	éí-ggí	$\rightarrow$ =	éí-ggi áma-ggí
2	LHL1	HL	éi-jê (army) áma-jê (armies)	$\rightarrow$ =	éí-jê	$\rightarrow$ =	éí-je áma-jê
3	HL1	L	éí-ge (termite) ámá-ge (termites)	= =		= =	éí-ge ámá-ge
4	HLH	LH	ólú-ggā (whip) én-ggā (whips)	= =		$\rightarrow$ $\rightarrow$	ólú-gga én-gga

22b. 「それは～です」の音調形

	タイプ	語幹の TM	(12),(AC) による誘導		「(それは) ～です」の表面音調形
1	LH1	H	i-ggí (it is an egg) ma-ggí (they are eggs)	= =	i-ggí ma-ggí
2	LHL1	HL	i-jê (it is an army) ma-jê (they are armies)	= =	i-jê ma-jê
3	HL1	L	í-ge (it is a termite) má-ge (they are termites) é-na ((luggages are) four)	$\rightarrow$ = $\rightarrow$	i-gé má-ge e-ná
4	HLH	LH	lú-ggā (it is a whip) n-ggā (they are whips)	$\rightarrow$ $\rightarrow$	lú-gga n-ggā

どのようにしてこのような音調変化が起きたのか。まず、(22a)の(1)、(2)で考えられる事は、(a)語幹のトーンメロディが各々H、HLと仮定した場合、「冒頭母音-前接辞」が“ V_1CV_2 ”である音調形と同じ音調形から(20b)の1音節化による音調変化を受けたと考える。その後に、この音調形から、最終的な表面音調形が誘導されたと考えると、(a)「“éí-”

“óí-” の H の直後に位置する語幹の高平ら調と下降調は低平ら調に変わる」と考えねばならない⁷⁾ ((19) 参照)。

更に、これらが「(それは) ~です」という繫辞文になると、(a) とは異なる音調変化がおこる (22b の (3), (4) を参照)。その変化の一つは “í-ge (termite) > i-gé (it is a termite)” で起きている変化で、(b) 「文頭の前接辞 “i-” の高平ら調の直後に語幹の低平ら調が続く場合には、H-L > L-H の音調置換が起こる」と考える必要がある。

最も複雑な変化は “n-ggǎ (whips) > n-ggâ (they are whips)” で起きている変化である⁸⁾。孤立形の表面音調形だけをみれば、“ólú-gga, énn-gga” は “éí-ge, áamá-ge” と完全に同一の音調形であり、その語幹の TM を L と仮定すれば、この孤立形の音調形は誘導できる。しかし、繫辞文での表面音調形は、互いに異なり、同一の基底形を持つとは言えない。“ólú-gga, énn-gga” の語幹の TM は、その前接辞の “lu” の音調が H なので、L で始まる TM を持たねばならない。この言語で採用されている TM の中で、L 以外の L で始まる TM は LH である。このように考えると、ここでは次のような音調変化が起きていると考えざるを得ないだろう。その音調変化とは “lú-ggǎ (whip) > lú-gga (it is a whip)”, “n-ggǎ (whips) > n-ggâ (they are whips)” という変化であり、(c) 「高平ら調に続く上昇調は低平ら調に変化し」、(d) 「文中に単独で存在する上昇調は下降調に変化する」と言わねばならない。この LH を採用すれば、上の現象の説明が可能となる上に、HLH タイプの語幹が 1 音節である語は実際に存在し、それが上の音調変化を受けて現れると考えることが出来て、孤立形の表面音調形からは推測できなかった「語幹が 1 音節で、TM が LH である語」の存在が明らかとなる。これにより基底形のシステムもより妥当なものとなる (参照 (4), (7))。また、“ólú-gga, énn-gga” の語幹の TM を LH と仮定すると、名詞孤立形では “ólú-ggǎ > ólú-gga, énn-ggǎ > énn-gga” の音調変化を考えねばならない。これは前述の (a) と同じ環境での音調変化と考えることが出来る。

- 7) この言語の音調システムでは、前接辞の音調として、前接辞の直後の要素の TM の最初のトーンと反対のトーンが (12) によって挿入されるので、前接辞から語末まで同一の音調、すなわち H だけからなる音調形、L だけからなる音調形は誘導されない。ただ、これに反する語が 1 語だけ見つかっている。それは “ámá-nsángá” で、複合語 “ámá-nsángá-nílo (fork (in road)/ crossing point)” の一部を成す語であるが、“ama-nsanga” 単独の意味は不明であり、またこの語自身も “ámá-nsángá ~ áma-nsángá” の二つの音調形をとるので、考察の対象からはずしておく。
- 8) さらに、(22b) の (4) のグループに入る語として、“ólú-nywa, éé-nywa (crack in the wall)” がみついている。但し、Mr.Gesa では “n-nywâ ~ n-nywá” の二つの音調形が観察される。下線はアクセント音節を示す。

	タイプ	孤立形の表面音調形	it is -
Gesa	HLH	ólú-nywa (crack)	lú-nywa
		éé-nywa (cracks)	n-nywâ ~ n-nywá
Walwana	HLH	ólú-nywa (crack)	lú-nywa
		éé-nywa (cracks)	n-nywâ

また、Mr. Walwana は “éí-bwa (wound), áamá-bwa (wounds)” もこのグループに入ると言う。一方、Mr. Gesa はこれらの語は HL1 タイプだと言う。

	タイプ	孤立形の表面音調形	it is -
Gesa	HL1	éí-bwa (wound)	i-bwá
		ámá-bwa (wounds)	má-bwa
Walwana	HLH	éí-bwa (wound)	i-bwâ
		ámá-bwa (wounds)	má-bwa

これらの音調変化は、名詞の直後に L で始まる語や H で始まる語が続いても起るので、その起生環境は単に語末としておけば良い⁹⁾。

以上の (a) を (23) に, (b), (c), (d) を (24a), (24b), (24c) の音調変化をまとめて、次のように表しておく。

(23) 孤立形での語幹 1 音節名詞の語末音節の音調変化

$$\{<H>, <HL>, <LH>\} \rightarrow L \quad / [H] - \left[\begin{array}{c} \text{—} \\ o \end{array} \right]^{N.Stem \#}$$

(24) 繫辞文での語幹 1 音節の語の語末音節の音調変化

$$24a. \quad H-L \rightarrow L-H \quad / \# \left[\begin{array}{c} \text{—} \\ V-o \end{array} \right]^{Cop \#}; V=i/ \text{ or } /e/$$

$$24b. \quad LH \rightarrow L \quad / \# \left[\begin{array}{c} H- \text{—} \\ i \quad o \end{array} \right]^{Cop \#}$$

$$24c. \quad LH \rightarrow HL \quad / \# \left[\begin{array}{c} \text{—} \\ N-o \end{array} \right]^{Cop \#}$$

2.3. 不定形の音調形

語幹音節数が 1 から 4 までの不定形の表面音調形を以下に示す。これらの音調形の特徴は、語幹が 1 音節の場合には、語末音節が高く、語幹が 2 音節以上の場合には語幹次頭音節から高

- 9) 以下の例は、語幹 1 音節の音調が、その後に続く語によって変化しない事を示している。また、名詞クラス 5 の形容詞の前接辞として、Mr. Walwana は li- を用いるが、Mr. Gesa は li- は用いないで、常に i-, 「冒頭母音-前接辞」で e-i- を使う。なお、下線はアクセント音節を示す。

	タイプ	音調論的最終表示	this -	good -
a.	LH1	éí- <u>ggi</u> (egg) áma- <u>ggi</u> (eggs)	éí-ggi li-nú áma-ggi ga-nú	éí-ggi éí-sa áma-ggi áma-sa
b.	LHL1	éí- <u>je</u> (army) áma- <u>jê</u> (armies)	éí-je li-nú áma-jé ga-nú	éí-jé éí-sa áma-jé áma-sa
c.	HL1	éí- <u>ge</u> (termite) áma- <u>ge</u> (termites)	éí-ge li-nú ámá-ge ga-nú	éí-gé éí-sa ámá-gé áma-sa
d.	HLH (Gesa, Walwana)	ólú- <u>gga</u> (wound) én- <u>gga</u> (wounds)	ólú-gga li-nú én-gga gi-nú	ólú-gga ólú-sa én-ggá én-sa
d.	HL1 (Gesa)	éí- <u>bwa</u> (wound) ámá- <u>bwa</u> (wounds)	éí-bwa li-nú ámá-bwa ga-nú	éí-bwá éí-sa ámá-bwá áma-sa
d.	HLH (Walwana)	éí- <u>bwa</u> (wound) ámá- <u>bwa</u> (wounds)	éí-bwa li-nú ámá-bwa ga-nú	éí-bwa lí-sa ámá-bwa má-sa

また、上例の “áma-jê > áma-jé” のような “good” が続く環境での “ô # > ó #” の変化は以下に示すように任意的な変化である。

	タイプ	音調論的最終表示	this -	good -
	LHL2	éki-fwofwô (lung)	éki-fwofwô ki-nú	éki-fwofwô ékí-sa ~
				éki-fwofwô ékí-sa

くなりそれが語末音節まで続くことである。

(25) 孤立環境での不定形の表面音調形

タイプ	TM	1	2	3	4
LH1	H	óku-tá (to put)			
LH2	H		óku-kulá (to grow) óku-kuulá (to uproot)	óku-bulúká (to come from) óku-lowózá (to think)	óku-salámúlá (to circumcise) óku-bonáábóná (to suffer)

目的接辞も否定接辞も取らない不定形の表面音調形は、名詞の表面音調形と完全に同一なので、ここではその誘導例を省略する。

目的接辞は (C)V からなり、また L の TM を持つ。否定接辞の音形は “i” で、H の TM を持つ。語幹の直前に TM を持つ要素が位置する場合には、その定義より (12) が適用されることはなく、語幹のアクセント音節以前の音調は語幹直前の要素の音調をとる。以下に、目的接辞、否定接辞をとる不定形の誘導例を示す。

(26) 目的接辞、否定接辞をとる不定形の誘導例

1. ó-ku-bisá (to hide)

* * 12 * * * 10c * * *

o-ku-bisa → o-ku-bisa → o-ku-bisa

H H H L H | | |

H L H H L H

10c * * *

→ o-ku-bisa = ó-ku-bisá (to hide)

| / |

H L H

2. ó-kú-ki-bisá (to hide it (thing))

* * * 10a * * * 10c * * *

o-ku-ki-bisa → o-ku-ki-bisa → o-ku-ki-bisa

H L H | | | / / |

H L H H L H H L H

= ó-kú-ki-bisá (to hide it (thing))

2. ó-ku-tá-bísá (not to hide)

* * * 12 * * * 10a * * * *

o-ku-ta-bisa → o-ku-ta-bisa → o-ku-ta-bisa

H H H H L H H | | | |

H L H H H L H H

(31) “i-bwǎ > i-bwâ” の音調変化

* 12 * *		X		* *		AC		* *
i-bwa	→	i-bwa	→	i-bwa	→	i-bwa		
LH		HLH		L HL		/ L HL		

この音調変化規則 (X) を (24) の諸規則に付加し, (24) を新たに (32) として書き換えておく。

(32) 名詞全体が高平らの場合の語末音節の音調変化

$$32a \quad H-L \rightarrow L-H \quad / \# \left[\begin{array}{c} \text{---} \\ V-o \end{array} \right]^{Cop \#} ; V = /i/ \text{ or } /e/$$

$$32b \quad LH \rightarrow L \quad / \# \left[\begin{array}{c} H- \text{---} \\ i \quad o \end{array} \right]^{Cop \#}$$

$$32c \quad LH \rightarrow HL \quad / \# \left[\begin{array}{c} \text{---} \\ N-o \end{array} \right]^{Cop \#}$$

$$32d \quad H-LH \rightarrow L-HL \quad / \# \left[\begin{array}{c} \text{---} \\ i-o \end{array} \right]^{Cop \#}$$

否定形即ち, 「犬ではない」, 「葉ではない」等と言う表現は, 否定の前接辞 “ti-” を用いて, 「ti- 名詞前接辞-名詞語幹」で表される。“ti” は常に H で現れ, 従ってその TM を H と仮定できる。これを次のように表しておく。

(33) 否定接頭辞 “ti-” の TM は H とする。

前接辞の音調は肯定形の場合と同じく, 名詞語幹の TM から自動的に誘導される。但し, 名詞クラス 5 の場合の前接辞 “i-” は “ti-” の高平ら音調に同化され H で現れる。以下に語幹が 2 音節以上の例を示す。

(34)

* * 12 * *		X		AC		* *
ti-ma-simo	→	ti-ma-simo	→	ti-ma-simo		(they are not spears)
H H		H L H		/ H L H		

* * 12 * *	AC	* * *	20a * *
ti-i-simo → ti-i-simo → ti-i-simo → ti-i-simo (it is not a spear)			
H H HL H		/ HL H	/ H LH
* * AC * *			
ti-ma-luba → ti-ma-luba (they are not wells)			
H L		/ / H L	
* * 12 * * *	AC	* * *	
ti-ma-menza → ti-ma-menza → ti-ma-menza (they are not tables)			
H HL H L HL			 H L H L

語幹が1音節で、そのTMがH, HL, LHの何れかで、かつ前接辞が“i”の場合には、次に示すような音調変化が起る。以下に例を示す。

(35) 否定繫辞文での音調変化

	タイプ	語幹の TM	(12),(AC) による誘導		「(それは) ～ではない」の表面音調形
a	LH1	H	tí-i-ggí tí-ma-ggí	→ =	tí-í-ggi (it is not an egg) tí-ma-ggí (they are not eggs)
b	LHL1	HL	tí-i-jê tí-ma-jê	→ =	tí-í-je (it is not an army)tí-ma-jê (they are not armies)
c	HL1	L	tí-í-ge tí-má-ge	= =	tí-í-ge (it is not a termite) tí-má-ge (they are not termites)
d1	HLH	LH	tí-lú-ggǎ tí-n-ggǎ	→ →	tí-lú-gga (it is not a whip) tí-n-gga (they are not whips)
d2	HLH	LH	tí-í-bwǎ tí-má-bwǎ	→ →	tí-í-bwa (it is not a whip) tí-má-bwa (they are not whips) (from Mr. Walwana)

以下にこの誘導過程を示しておく。

(36) 否定繫辞文の音調形

* * 12 * *	AC	* * *	X	* * *
ti-i-ggi → ti-i-ggi → ti-i-ggi → ti-i-ggi				
H H HL H		 HL H		/ HL H

以降は、各修飾語毎にその音調形を記していくことにする。

4.1.1. 形容詞の音調形

形容詞の語幹は、名詞の場合と同じく、その音調形から TM を容易に推定できる。それらの TM と例語を (38) に示す。表中の上段は形容詞の語幹で、下線で示した音節はアクセント音節である。下段には「名詞＋形容詞」の表面音調形の例を示す。なお、参考のために、このグループの前接辞群をとる語を付表 3 に示しておく。

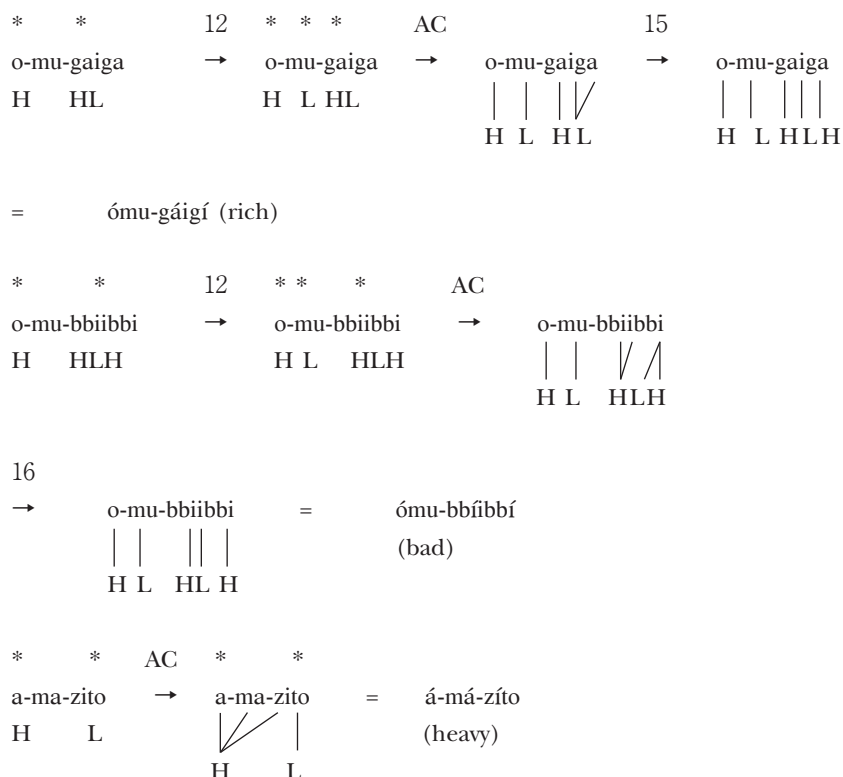
(38) 形容詞語幹の基底形と「名詞＋形容詞」の音調形例

タイプ	TM			
LH1	H	- <u>ngi</u> (many) ábá-ntu ába-ngí, many people	<u>tono</u> (small/few) ó-mbwa ómu-tóno, small dog	
LH2	H		- <u>nene</u> (big) ó-mbwa ómu-nené, big dog	
LH3	H			ge <u>izi</u> (fat) ómú-ntu ómu-geizí, fat person
LHL1	HL	- <u>gaiga</u> ómú-ntu ómu-gáigá, rich person		
LHLH	HLH	- <u>bbiibbi</u> (bad) ómú-ntu ómu-bbíbbí, bad person		
HL1	L	- <u>sa</u> (beautiful) ómu-kalí ómú-sa, beautiful woman		
HL2	L		<u>zito</u> (heavy) áma-baalé áma-zító, heavy stone	
HL3	L			- <u>kaile</u> (old/used) ómu-gugú ómú-káile old/used luggage

これらの形容詞の主な表面音調形の誘導例を以下に示す。

(39) 形容詞の音調形誘導

*	*	12	*	*	*	AC	
a-ba-ngi	→	a-ba-ngi	→	a-ba-ngi	=	á-ba-ngí	
H H		H L H				(many)	
				H L H			



(38), (39) の例からも明らかなように, 「名詞+形容詞」の音調形は基本的には各々の孤立形の音調形がそのまま連続して現れる。しかし, 任意的に (a) その前後を H で囲まれた音節の L は H に変わることがある。また, (b) 名詞の語末母音とそれに続く前接辞群の最初の母音が融合を起こし, それに伴う音調変化が起ることがある¹⁰⁾。以下に例を示す。

(40) 名詞+形容詞の音調形に現れる任意的変化

(a)

éí-wángá éí-náfu ~ éí-wángá éí-náfu (weak tribe)
 ábá-ntu ábá-náfu ~ ábá-ntú ábá-náfu (strong people) (from Mr. Walwana)
 ábá-ntu ába-nené ~ ábá-ntú ába-nené (big person) (from Mr. Walwanaa)

(b)

ó-mbwa ómu-nené ~ ó-mbwó mu-nené (big dog)
 ábá-ntu ába-nené ~ ábá-ntwá ba-nené (big person) (from Mr. Walwanaa)
 ábá-ntu ábá-náfu ~ ábá-ntwá bá-náfu (strong people) (from Mr. Walwanaa)

10) (b) の変化が起り, その後に (a) の H に囲まれた形容詞前接辞の L が H に変化することはない。以下の例に示すような変化以上の変化は決して起こらない。

ómu-sómesyá ómu-bíbí > ómu-sómesyó mu-bíbí (the bad teacher)
 ómw-izíkúlú ómu-bíbí > ómw-izíkúló mu-bíbí (the bad grandchild)
 ábá-ntu ába-bbíbí > ábá-ntwá ba-bbíbí (bad persons)

上の (a) の音調変化を次のように表しておく。

(41) H に囲まれた名詞語末の L の同化現象 (任意的)

$$t \rightarrow \acute{t} / \acute{t} ___]^{\text{Noun}} \# [^{\text{pfs}} \acute{t} ;$$

但し, pfs は「(冒頭母音-) 前接辞」を現す。

(b) の母音融合とそれに伴う音調変化は多くのバントゥ諸語で観察されるものであり, ここでは次のように表しておく。

(42) 冒頭母音の融合と音調変化 (任意的)

$$\begin{array}{ccc} (C)V_f \# V_{IV} & \rightarrow & (C(A))V_{IV} \# \\ | & & | \\ X & H & X \quad H \end{array}$$

; 但し, Vf は名詞語末母音, VIV は形容詞の冒頭母音, C は子音, A は w/y のいずれかを示す。また, X は L/H のいずれかの音調を示す。

4.1.2. 述語の直前に位置する語の語末の音調変化

形容詞語幹は冒頭母音を常にとる。冒頭母音がなく, 前接辞のみを取れば, 常に「(名詞)である」(“it is-”) という繫辞文となる。また, 名詞に直続して「前接辞-形容詞語幹」が続く場合も, また「名詞は~である」という繫辞文となる。また, この言語では, 主語は術語の前に位置する。この時, 主語となる名詞が一連の H 音調で終わる場合には, その一連の H 音調が L 音調に変化する。以下に, これらの例を示す。なお, 語末母音とそれに続く冒頭母音の間で, 音交替が任意に起こる¹¹⁾。

(43) 形容詞での冒頭母音の有無と述語の直前の語の音調変化

a)

ómu-sómesyá ómu-bbúbbí ~ ómu-sómesyó mu-bbúbbí (the bad teacher)

ómu-sómesya mu-bbúbbí (the teacher is bad)

b)

ómw-izíkúlú ómu-bbúbbí ~ ómw-izíkúló mu-bbúbbí (the bad grandchild)

ómw-izukulu mu-bbúbbí (the grandchild is bad)

c)

ómu-tááné ómu-bbúbbí ~ ómu-táánó mu-bbúbbí (the bad son)

ómu-taane mu-bbúbbí (the son is bad)

d)

ábá-ntu ába-bbúbbí ~ ábá-ntwá ba-bbúbbí (the bad persons)

11) 異なる形態素に属する母音が連続する場合には, 次のような音交替が起こる。

CV₁ - V₂ > C + V₂; 但し, V₁ = {<e>, <a>, <o>}, V₂ = {<e>, <a>, <o>}。

Ci - V₂ > Cy + V₂; 但し, V₂ = {<e>, <a>, <o>}。

Cu - V₂ > Cw + V₂; 但し, V₂ = {<e>, <a>, <o>}。

ábá-ntu ba-bbǫbbǫ (persons are bad)

このような語末音調の変化は、繫辞の直前の語だけに起こるのではなく、述語の直前であれば起こる。また、この変化は主語に起こるのではなく、述語の直前の語に起こる。次の例では、「名詞＋形容詞」句が述語の直前に位置しているが、語末音調の変化が起こる語は名詞を修飾している形容詞である^{12) 13)}。

(44) 述語の直前での形容詞語末の一連の H > L 化 (参照 (43))

ómu-sómesyá ómu-bbǫbbǫ aizâ (the bad teacher is coming)

ómw-izǫkúlu ómu-bbǫbbǫ aizâ (the bad grandchild is coming)

ábá-ntu ába-bbǫbbǫ baizâ (bad persons is coming)

以上の (43), (44) に示した音調変化は、述語の直前の語の語末が一連の H からなる場合には、その一連の H が一連の L に変わる現象である。これは語末の TM の H が L に変化したと解釈出来る。この音調変化が起こる条件は他にもあるのだが、今のところは次のように表しておく (補遺参照)。

(45) 述語直前の語の語末の H の L への変化

H → L / _] # [^X ; X=Verb

4.1.3. 形容詞以外の主な名詞修飾語の音調形

形容詞以外の主な名詞修飾語の音調形とそれらの語幹の基底形を (46) に示す。以下に示される表面音調形からも、これらの基底形が容易に推測できる。なお、下線で示した音節がアクセント音節である。

12) 動詞の直後に位置する目的語を修飾する形容詞では、このような変化は決して起こらない。

tubóna ómu-sómesyá ómu-bbǫbbǫ (we are seeing the bad teacher)

tubóna ómw-izǫkúlu ómu-bbǫbbǫ (we are seeing the bad grandchild)

tubóna ába-ntu ába-bbǫbbǫ (we are seeing bad persons)

13) 形容詞が冒頭母音を取らない場合には、当然のことながら、「名詞＋形容詞」を主語や目的語とする文は成立しない。従って、以下の文は全て正しい文ではない。

*ómu-sómesyá mu-bbǫbbǫ aizâ (the bad teacher is coming)

*ómw-izǫkúlu mu-bbǫbbǫ aizâ (the bad grandchild is coming)

*ábá-ntu ba-bbǫbbǫ baizâ (bad persons is coming)

*tubóna ómu-sómesyá mu-bbǫbbǫ (we are seeing the bad teacher)

*tubóna ómw-izǫkúlu mu-bbǫbbǫ (we are seeing the bad grandchild)

*tubóna ába-ntu ba-bbǫbbǫ (we are seeing bad persons)

(46) 形容詞以外の主な名詞修飾語の語幹

タイプ	TM			
LH1	H	- <u>ndi</u> (another/other) - <u>ngi</u> (many) - <u>nu</u> (this/these) - <u>di</u> (that/those)	- <u>bili</u> (two) - <u>satu</u> (three)	
LH3	H			-o <u>iza</u> (one)
LH3	HL	- <u>tono</u> (few) - <u>meka</u> (how many)		
HL1	L	- <u>mo</u> (one) - <u>na</u> (four)		

4.1.3.1. 数詞 1, 2, 3, 4

数詞のうち, 1, 2, 3 は「冒頭母音－前接辞－語幹」からなり, 名詞の後ろに位置して名詞を修飾する。「冒頭母音－前接辞」は修飾される名詞と文法的に呼応して, その音形が異なる。数詞 1, 2, 3 と数詞 4 では, 名詞クラス 4 と 6 での冒頭母音と前接辞の音形が異なる (付表 2 参照)。また, 数詞 1 は, 名詞クラスによって用いられる語幹が異なり, クラス 1, 1a, 9 では “-oiza” が用いられ, これら以外のクラスでは “-mo” が用いられる。これら 1, 2, 3, 4 の音調形は次のように現われる。

(47) 数詞のうち, 1, 2, 3, 4 の音調形

é-kí-ntu é-kí-mo ~ é-kí-ntwé kí-mo (one thing; 名詞クラス 7)
ó-mu-gugú ó-gú-mo ~ ó-mu-gugwó gú-mo (one luggage; 名詞クラス 3)
ó-mú-ntu ó-mw-oizá ~ ó-mú-ntwó mw-oizá (one person; 名詞クラス 1)
á-bá-ntu á-ba-bílí ~ á-bá-ntwá ba-bílí (two persons; 名詞クラス 2)
á-ma-iinó á-ma-sátú ~ á-ma-iiná ma-sátú (three teeth; 名詞クラス 6)
á-ba-izúkúlú á-bá-na ~ á-ba-izúkúlá bá-na (four grandchildren; 名詞クラス 2)

(47) の表面音調形から, 語幹の基底形は (46) のように仮定できることが容易に分る。また, 表面音調形はそれらの基底形から, 形容詞と同じように, 容易に誘導できる。なお, 語幹 “-mo, -na” は 1 音節であり, それらの表面音調形は次のように現われるので, (22a) と (22b) に照らし合わせてみて, その TM は L である。

(48) 1 音節語幹 “-mo, -na” の表面音調形

	タイプ	語幹の TM	(12), (AC) による誘導		孤立形の表面音調形
a.	HL1	L	é-é-na (four) á-bá-na (four) ó-gú-mo (one)	= = =	é-é-na á-bá-na ó-gú-mo
b.	HL1	L	é-na (it is four) bá-na (they are four) gú-mo (it is one)	→ = =	e-ná (< i-ná) bá-na gú-mo

以下に、幾つかの誘導例を示す。なお、“VC” は母音融合を表し、括弧内の規則による音調変化は任意的変化である。

(49) 数詞の誘導例

* * * *	AC	* *	* *
e-ki-ntu e-ki-mo	→	e-ki -ntu	e-ki-mo
H L H L		$\begin{array}{c} \diagup \\ H \end{array}$ $\begin{array}{c} \\ L \end{array}$	$\begin{array}{c} \diagup \\ H \end{array}$ $\begin{array}{c} \\ L \end{array}$

(43,VC)

= é-kí-ntu é-kí-mo → é-kí-ntwé kí-mo
(one thing)

* * * *	12	* * * *
o-mu-ntu o-mu-oiza	→	o-mu-ntu o-mu-oiza
H L H H		H L H L H

VC	* * * *	AC	* * * *
→	o-mu-ntu o-mw-oiza	→	o-mu-ntu o-mw-oiza
	H L H L H		$\begin{array}{c} \diagup \\ H \end{array}$ $\begin{array}{c} \\ L \end{array}$ $\begin{array}{c} \\ H \end{array}$ $\begin{array}{c} \diagup \\ LH \end{array}$

(43,VC)

= ómú-ntu ómw-oizá → ómú-ntwó mw-oizá
(one person)

* * * *	12	* * * *
a-ba-ntu a-ba-bili	→	a-ba-ntu a-ba-bili
H L H H		H L H L H

AC	* * * *		
→	a-ba-ntu a-ba-bili	=	ábá-ntu ába-bílí
	$\begin{array}{c} \diagup \\ H \end{array}$ $\begin{array}{c} \\ L \end{array}$ $\begin{array}{c} \\ H \end{array}$ $\begin{array}{c} \\ L \end{array}$ $\begin{array}{c} \diagup \\ H \end{array}$		(two persons)

(43)

→ ábá-ntwá ba-bílí

「名詞＋数詞」が動詞の直前に位置する場合には、形容詞の場合と同じく、動詞直前の語、すなわち数詞の語末の一連の H は L に変化する¹⁴⁾。当然のことながら、数詞 1 と 4 の “-mo, -na” の場合には、語末に H がないので、この変化は起こらない。

(50) 動詞直前の数詞の一連の語末の H の L への変化（参照（47））

ómw-izúkúlú ómw-oiza aizâ (one grandchild is coming)

ábá-ntu ába-bili baizâ (two persons are coming)

ába-tááné ába-satu batúúka (three sons are arriving)

ába-izúkúlú ábá-na baizâ (four grandchildren are coming)

形容詞の場合と同じく、冒頭母音を取らない「前接辞－数詞語幹」は繫辞文となる。例を示す。

(51) 数詞の繫辞文¹⁵⁾

a) 肯定文

mw-oizá (he is one)

kí-mo (it is one)

ba-bílí (they are two)

ba-sátú (they are three)

bá-na (they are four)

b) 否定文

tí-mw-oizá (he is not one)

tí-ba-sátú (they are not three)

また、主語の名詞が「前接辞－数詞語幹」の直前に位置する場合には、(45)に従って、名詞の語末の（一連の）H は（一連の）L に変化する¹⁶⁾。

(52) 繫辞直前の語の H > L 化

ába-taane ba-bílí (sons are two)

áma-iino ma-sátú (teeth are three)

ába-izukulu bá-na (grandchildren are four)

これまで述べたように、数詞は文法的にも音調論的にも形容詞と同じであったが、数詞と形容詞が互いに異なっている点もある。それは形容詞では「前接辞－形容詞語幹」はその直前の名詞を修飾できなかったが、「前接辞－数詞語幹」は繫辞文の他に、その直前の名詞を修飾することができることである。従って、(52) は次のような意味でもある。

14) 動詞の直後に位置する目的語を修飾する数詞では、このような変化は決して起こらない。

tubóna ómw-izúkúlú ómw-oizá (we are seeing one grandchild)

tubóna ábá-ntú ába-bílí (we are seeing two persons)

tubóna ába-tááné ába-sátú (we are seeing three sons)

15) これらは次のようにも表現される。

a-li mw-oizá ~ mw-oizá (he is one)

bá-li kí-mo (it is one) ~ kí-mo (it is one)

bá-li ba-bílí (they are two) ~ ba-bílí (they are two)

bá-li ba-sá-tú ~ ba-sá-tú (they are three)

bá-li bá-na (they are four) ~ bá-na (they are four)

t-á-lí mw-oizá ~ tí-mw-oizá (he is not one)

tí-bá-lí ba-sá-tú ~ tí-ba-sá-tú (they are not three)

(53) 「前接辞－語幹」の名詞修飾とその意味

ómú-ntu mw-oizá (one person)

ábá-ntu ba-bílí (two persons)

ómw-izukulu mw-oiza (one grandchild)

ába-taane ba-bílí (two sons)

áma-iino ma-sátú (three teeth)

ába-izukulu bá-na (four grandchildren)

繫辞である「前接辞－数詞語幹」が、その直前に位置する語の語末の一連の H を L に変化させたように、この場合も「前接辞－数詞語幹」に修飾される名詞の語末の一連の H が L に変化する。この変化自体は (45) の変化と同一の変化であるが、適用条件が異なるので、次のように表しておく。

(54) 冒頭母音を取らない数詞直前に位置する名詞の語末の H の L への変化

$H \rightarrow L / _]^{\text{Noun}} \# [\text{Pf-Stem of Numeral}]$

この「名詞＋前接辞－数詞語幹」が動詞の直前に位置すると、名詞が (54) による変化を受け、動詞直前の数詞は (45) による変化を受けて現われる。すなわち、2 重の変化を受けて現れる。例を示す。

(55) 「名詞＋前接辞－数詞語幹」が動詞直前に位置する場合の音調形

ómw-izukulu mw-oiza aizâ (one grandchild is coming)

ábá-ntu ba-bili baizâ (two persons are coming)

ába-taane ba-satu batúúka (three sons are arriving)

4.1.3.2. another/other, many, few の音調形

another/other, many, few の語幹は各々、“-ndi, -ngi, -tono”であり、これらの基底形は (46) に示した通りであり、また (56) の表面音調形からも明らかである。これらの語幹は「冒頭母音－前接辞」を伴って、名詞の直後に位置して名詞を修飾する。語幹“-ndi”は単数名詞を修飾すると「もう一つの」を意味し、複数名詞を修飾すると「他の」を意味する。「冒頭母音－前接辞」は修飾される名詞のクラスに文法的に呼応して、それぞれ異なる音形をと

16) 動詞の直後に位置する目的語を修飾する「名詞＋前接辞－数詞語幹」では、このような変化は決して起こらない。

a)

tubóna ómw-izúkúlú ómw-oizá (we are seeing one grandchild)

tubóna ábá-ntu ába-bílí (we are seeing two persons)

tubóna ába-tááné ába-sátú (we are seeing three sons)

上の文は全て特定の grandchild, persons, sons を指している。一方、次の (b) のような複文も成立し、この場合の grandchild, persons, sons は特定されていない。

b)

tubóna ómw-oizukulu mw-oizá (we are seeing one grandchild < we are seeing that grandchild is one)

tubóna ábá-ntu ba-bílí (we are seeing two persons < we are seeing that persons are two)

tubóna ába-taane ba-sátú (we are seeing three sons < we are seeing that sons are three)

る。例を示す。

(56)

a. another/other

ómu-gugú ógu-ndí ~ ómu-gugwó gu-ndí (another luggage)

émi-gugú égi-ndí ~ émi-gugwé gi-ndí (other luggages)

ómu-sómesyá ógo-ndí ~ ómu-sómesyó go-ndí (another teacher)

ába-sómesyá ába-ndí ~ ába-sómesyá ba-ndí (other teachers; a+a>a)

ómw-izúkúlú ógo-ndí ~ ómw-izúkúló go-ndí (another grandchild)

ába-izúkúlú ába-ndí ~ ába-izúkúlá ba-ndí (other grandchildren)

ómú-ntu ógo-ndí ~ ómú-ntwó go-ndí (another person)

ábá-ntu ába-ndí ~ ábá-ntwá ba-ndí (other persons)

b. many

ába-sómesyá ába-ngí ~ ába-sómesyá ba-ngí (many teachers)

ába-izúkúlú ába-ngí ~ ába-izúkúlúwá ba-ngí (many grandchildren)

ábá-ntu ába-ngí ~ ábá-ntwá ba-ngí (many persons)

émi-gugú émi-ngí ~ émi-gugwé mi-ngí (many luggages)

c. few

ába-sómesyá ába-tóno ~ ába-sómesyá ba-tóno (few/small teachers)

ába-izúkúlú ába-tóno ~ ába-izúkúlúwá ba-tóno (few/small grandchildren)

émi-gugú émi-tóno ~ émi-gugwé mi-tóno (few/small luggages)

これら「名詞 + 冒頭母音 - 前接辞 - 語幹」は、述語の直前に位置する場合には、これまで述べた他の名詞修飾語と同じように、(45)に従って、「冒頭母音 - 前接辞 - 語幹」の語末の TM の H は L になる¹⁷⁾。なお、“-tono”では語幹末の TM は L なので、(45)は起こらない。例を示す。

(57)

a. another/other

17) 動詞の直後に位置する目的語を修飾する数詞では、このような変化は決して起こらない。

a. another/other

tubóna ómu-sómesyá ógo-ndí (we are seeing another teacher)

tubóna ómw-izúkúlú ógo-ndí (we are seeing another grandchild)

tubóna ábá-ntu ába-ndí (we are seeing other persons)

b. many

tubóna ába-sómesyá ába-ngí (we are seeing many teachers)

tubóna ába-izúkúlú ába-ngí (we are seeing many grandchildren)

tubóna ábá-ntu ába-ngí (we are seeing many persons)

tubóna émi-gugú émi-ngí (we are seeing many luggages)

c. few

tubóna ába-sómesyá ába-tóno (we are seeing few teachers)

tubóna ába-izúkúlú ába-tóno (we are seeing few grandchildren)

tubóna ábá-ntu ába-tóno (we are seeing few persons)

- ómu-sómesyá ógo-ndi aizâ (another teacher is coming)
 ómw-izúkúlú ógo-ndi atúúka (another grandchild is arriving)
 ábá-ntu ába-ndi baizâ (other persons are coming)
 b. many
 ába-sómesyá ába-ngi baizâ (many teachers are coming)
 ába-izúkúlú ába-ngi baizâ (many grandchildren are coming)
 ábá-ntu ába-ngi baizâ (many persons are coming)
 émi-gugú émi-ngi giizâ (many luggages are coming)
 c. few
 ába-sómesyá ába-tóno baizâ (few teachers are coming)
 ába-izúkúlú ába-tóno baizâ (few grandchildren are coming)
 ábá-ntu ába-tóno baizâ (few persons are coming)

冒頭母音を取らない「前接辞－語幹」は、他の名詞修飾語と同じく、繫辞文となる。この場合、語幹 “-ndi” は「もうひとつの、他の」という意味よりも、多少強調された「異なる」の意味合いが強くなる。さらに、他の名詞修飾語で示したように、繫辞の直前の名詞には (45) の変化が起こる。

(58)

- a. another/other
 gu-ndí (it is different)
 ómu-gugu gu-ndí (the luggage is different)
 émi-gugu gi-ndí (luggages are different)
 ómu-sómesya go-ndí (the teacher is different)
 ába-sómesya ba-ndí (teachers are different)
 ómw-izukulu go-ndí (the grandchild is different)
 ába-izukulu ba-ndí (grandchildren are different)
 ómú-ntu go-ndí (the person is different)
 ábá-ntu ba-ndí (persons are different)
 b. many
 ba-ngí (they are many)
 ába-sómesya ba-ngí (teachers are many)
 ába-izukulu ba-ngí (grandchildren are many)
 ábá-ntu ba-ngí (persons are many)
 émi-gugu mi-ngí (luggages are many)
 b. few
 ba-tóno (they are few)
 ába-sómesya ba-tóno (teachers are few)
 ába-izukulu ba-tóno (grandchildren are few)
 ábá-ntu ba-tóno (persons are few)
 émi-gugu mi-tóno (luggages are few)

さらに、冒頭母音を取らない「前接辞－語幹」は繫辞文のみならず、数詞の場合と同じく、名詞を修飾をすることができる。しかし、これらの「名詞＋前接辞－語幹」は主語にはなれず、「名詞＋前接辞－語幹＋述語」という構造は取れない。この点で、「名詞＋前接辞－数詞語幹＋述語」の構造を取れる数詞と異なる¹⁸⁾。

4.1.3.3. how many の音調形

how many の語幹は “-meka” であり、冒頭母音は決して取らず、常に「前接辞－語幹」からなる。名詞の直後に位置して、名詞を修飾するが、前接辞は名詞のクラスに文法的に呼応して、名詞クラスごとに異なる音形をとる。(46) に語幹 “-meka” の基底形を示しているが、以下の例からもその基底形を容易に推測できる。また、述語である「前接辞－語幹」の直前の語の語末の TM が H の場合に、(45) によって、H > L の変化が起こる。

(59)

ába-sómesya ba-méka ? (how many teachers are there? < lit. teachers + how many are)

ába-izukulu ba-méka ? (how many grandchildren are there? < lit. grandchildren + how many are)

ába-ntu ba-méka ? (how many persons are there? < lit. persons + how many are)

「名詞＋前接辞 -meka」はこのままの形では主節の主語にはなれない。次の例に示してあるように、「どのくらい沢山の～が～する」は「名詞＋動詞＋前接辞 -meka」の語順で表される。次の例では動詞直前の名詞の語末 TM の H が、(45) に従って、L に変化する。なお、以下の文は “baizá” がその直前の名詞を修飾している関係節ではないことは、その音調形から明らかである¹⁹⁾。

18) 主語にはなれないが、動詞の後ろに位置して目的句にはなれる。

a. another/other

tubóna ómu-sómesya go-ndí (we are seeing the different teacher)

tubóna ómw-izukulu go-ndí (we are seeing the different grandchild)

tubóna ábá-ntu ba-ndí (we are seeing different persons)

b. many

tubóna ába-sómesya ba-ngí (we are seeing many teachers)

tubóna ába-izukulu ba-ngí (we are seeing many grandchildren)

tubóna ábá-ntu ba-ngí (we are seeing many persons)

tubóna émi-gugu mi-ngí (we are seeing many luggages)

c. few

tubóna ába-sómesya ba-tóno (we are seeing few teachers)

tubóna ába-izukulu ba-tóno (we are seeing few grandchildren)

tubóna ábá-ntu ba-tóno (we are seeing few persons)

19) 次のような文では、「名詞＋前接辞 -meka (繫辞)＋関係節」の語順が許される。

ába-sómesya ba-méka ábaizá ? (how many teachers are coming? < lit. teachers + how many are + who are coming)

ába-izukulu ba-méka ábaizá ? (how many grandchildren are coming? < lit. grandchildren + how many are + who are coming)

ába-ntu ba-méka ábaizá ? (how many persons are coming? < lit. persons + how many are + who are coming)

しかし、「名詞＋前接辞 -meka (修飾語)＋動詞」の語順は許されない。

* ába-sómesya ba-méka baizá ? (how many teachers are coming?)

(60)

ába-sómesya baizâ ba-méka ? (how many teachers are coming?)

ába-izukulu baizâ ba-méka ? (how many grandchildren are coming?)

ába-ntu baizâ ba-méka ? (how many persons are coming?)

4.2. 指示詞の音調形

指示詞は指示形容詞あるいは指示代名詞として機能する。指示形容詞には「この／これらの」, 「その／それらの」, 「あの, あの当該の／あれらの, あれら当該の」の3種があり, 各々の語幹は “-nu”, “-di”, “-o” である。これらの基底形は (46) に示した通りである。このうち, “-nu”, “-di” は「前接辞－語幹」からなり, 冒頭母音を取らない。一方, “-o” は「冒頭母音－前接辞－語幹」からなる。形容詞と同じく, 名詞の直後に「前接辞－語幹」が後続しても, 名詞の語末の H が L に変化する事はない。この点で, 数詞等とは異なる。

4.2.1. 指示詞 “-nu”, “-di” の音調形

以下に, “-nu”, “-di” の表面音調形の例を示す。

(61) “-nu”, “-di” の表面音調形

ómú-ntu o-nú (this person)

ába-sómesyá ba-nú (these teachers)

ába-izúkúlú ba-nú (these grandchildren)

ábá-ntu ba-nú (these persons)

ómu-gugú gu-nú (this luggage)

ómú-ntu o-dí (that person)

ábá-ntu ba-dí (those persons)

ómu-gugú gu-dí (that luggage)

述語の直前の指示形容詞は, 他の名詞修飾語と同じく, (45) によって語末の H が L に変化する²⁰⁾。

(62) 述語の直前の指示形容詞 “-nu”, “-di” の音調

ómu-sómesyá o-nu aizâ (this teacher is coming)

ómw-izúkúlú o-nu aizâ (this grandchild is coming)

ábá-ntu ba-nu baizâ (these persons are coming)

ómu-sómesyá o-di aizâ (that teacher is coming)

20) 動詞の直後に位置する目的語を修飾する指示詞では, このような変化は決して起こらない。

tubóna ómu-sómesyá o-nú (we are seeing this teacher)

tubóna ómw-izúkúlú o-nú (we are seeing this grandchild)

tubóna ómú-ntu o-nú (we are seeing this person)

tubóna ómu-sómesyá o-dí (we are seeing that teacher)

tubóna ómw-izúkúlú o-dí (we are seeing that grandchild)

tubóna ábá-ntu ba-dí (we are seeing those persons)

tutúmúra okú-mu-sómesyá oyó (we are talking about that teacher in question)

tutúmúra okú-mw-izúkúlú oyó (we are talking about that grandchild in question)

ómw-izúkúlú o-di aizâ (that grandchild is coming)

ábá-ntu ba-di baizâ (those persons are coming)

指示詞は指示代名詞としても機能する。先述したように、「前接辞－名詞語幹」は繫辞文であり、従って述語の直前の語の語末の H は (45) によって L に変化する。なお、名詞語幹が 1 音節からなる場合、また前接辞が “i-” の場合には、(32) に示したような複雑な音調変化が起こる²¹⁾。

(63) 指示代名詞 “-nu”, “-di” の音調

ki-nu kí-balá (this is a fruit/plant)

bi-nu bí-balá (these are fruits/plants)

ga-nu má-ge (these are termites)

ki-nu kí-balá (this is a fruit)

ga-nu ma-gí (these are eggs)

li-di ii-gí (that is an egg)

ga-di ma-gí (those are eggs)

ki-nu tí-kí-balá (this is not a fruit/plant)

bi-nu tí-bí-balá (these are not fruits/plants)

ga-nu tí-má-ge (these are not termites)

ki-nu tí-kí-balá (this is not a fruit)

ga-nu tí-ma-gí (these are not eggs)

21) (32) によるこれらの音調変化の幾つかの例を示す。

	TM	名詞孤立形の音調形	this is -	this is not -
a.	H	éf-gí (egg) áma-gí	li-nu i-gí ga-nu ma-gí	li-nu tí-í-gí ga-nu tí-ma-gí
b.	H	ólu-ví (white hair) én-vi	lu-nu lu-ví gi-nu n-ví	lu-nu tí-lu-ví gi-nu tí-n-vi
	H	éf-ka (home village) no pl	e-nu i-ká ga-nu ma-ká	e-nu tí-í-ka ga-nu tí-ma-ká
	HL	éf-je (army) áma-jê	li-nu i-jê ga-nu ma-jê	li-nu tí-í-je ga-nu tí-ma-jê
	LH	ólú-nywa (crack on the wall) é-nywa	lu-nu lú-nywa gi-nu ny-wâ	lu-nu tí-lú-nywa gi-nu tí-ny-wa
	LH	éf-bwa (wound) ámá-bwa	li-nu i-bwá (Gesa) ~ li-nu i-bwâ (Walwana) ga-nu má-bwa	li-nu tí-í-bwa ga-nu tí-má-bwa
	LH	ólú-ga (whip) én-ga	lu-nu lú-nga gi-nu n-gâ	lu-nu tí-lú-nga gi-nu tí-n-ga
	L	éf-ge (termite) ámá-ge	li-nu i-gé ga-nu má-ge	li-nu tí-í-ge ga-nu tí-má-ge
	L	éf-subí (grass) ékí-balá (fruit)	li-nu i-subí ki-nu kí-balá	
	L	éf-lúba (well,spring) ámá-lúba	li-nu i-lúba ga-nu má-lúba	

li-di tí-í-gí (that is not an egg)

ga-di tí-ma-gí (those are not eggs)

4.2.2. 指示詞 “-o” の音調形

“that/ those in question” を意味する語は、「これ／これら」、「あれ／あれら」とは異なり、冒頭母音を持ち、「冒頭母音－前接辞－語幹」からなる。「冒頭母音－前接辞」の音形は修飾される名詞に文法的に呼応する。前接辞 CV の母音は / u, i, a / のいずれかの一つだが、語幹の “-o” と融合して “u-o > w-o, i-o > y-o, a-o > o” と音交代する（参照脚注 11）。

この音調形は、前接辞群の音形に関わらず、常に LH で現れる。以下に例を示す。

(64)

ómú-ntu o-y-ó (that person over there, person in question)

ómu-sómesyá o-y-ó (those teachers over there, persons in question)

ómu-gugú o-gw-ó (those luggage over there, luggage in question)

ába-nyumbá a-b-ó (those houses over there, houses in question)

これらの音調形をどのように考えるか。これまで述べて来た名詞、形容詞、数詞、序数、another/other の TM は H と仮定してきた。この TM の H に加えて、(34) で示したような語幹 1 音節語特有の音調変化が起こると考えることもできるだろう。しかし、本稿では、最も簡単にこれらの音調形を誘導する考え方を採用することにする。すなわち、他の名詞修飾語の冒頭母音の TM は全て H であったが、それらとは異なり、この “that/those in question” の冒頭母音の TM を L と仮定し、語幹 “-o” の TM を H と仮定することである。

(65) 指示詞 “-o” の冒頭母音の TM は L とする。

以下にこれらの幾つかの音調形の誘導例を示す。

(66) that in question の音調形誘導

a. 前接辞が CV の場合 (class 3)

* *	VC	* *	AC	
o-gu-o	→	o-gw-o	→	o-gw-o = o-gw-ó
L H		L H		
				L H

b. 前接辞が V の場合 (class 1 他)

* *	VC	* *	AC	
o-i-o	→	o-y-o	→	o-y-o = o-y-ó
L H		L H		
				L H

4.3. 所有詞と属辞の音調形

4.3.1. 所有詞

所有詞には、所有形容詞および所有代名詞があり、前者は「前接辞－語幹」で表わされ、後者は「冒頭母音－前接辞－語幹」で表わされる。これらの語幹の音形は次に示す通りである。

(67) 所有詞の語幹

	sg	pl
1st	-ange	-isu
2nd	-o	-anyu
3rd	-e	-awe

このうち、語幹が“-o”と“-e”である場合を除けば、所有詞の語幹の音形は“-VCV”であり、これらの音調形は常に語末音節がHで、それ以前は前接辞を含めてLで現れる。従って、これらでは、これまでと同じ方法から、アクセント音節が語末音節で、かつそのTMがHとして誘導できる。しかし、この仮定では所有代名詞の音調形の説明にアドホックな規則が必要となる（後述の(73)を参照）ので、その代わりにTMをLHとして、語幹頭音節がアクセント音節と仮定する。このように仮定すると、前接辞も含めて、アクセント音節以前の音調は(10)のACと(12)から自動的に誘導できる。

(68) 名詞クラス1に対応する1人称単数形 “w-angé (my)” の音調形誘導

*	12	**	X	*	AC		
u-ange	→	u-ange	→	w-ange	→	w-ange	= w-angé
LH		H LH		H L H		L H	(my)

上の音変化に伴う音調変化“X”は、形態素境界を挟んで母音が隣り合う場合には、“(C)u > (C)w, (C)i > (C)y, (C)a > (C)”の変化が起り、同時にそれらの音調が脱落して後行母音の音調だけが残ると言う現象である²²⁾。これは(42)と同一の現象であるが、起生条件が異なるので、次のように表わしておく。

(69) 冒頭母音の融合と音調変化（任意的）

(C)V ₁ -V ₂	→	(C)X-V ₂
X H		X H

；但し、V₁が所有詞の前接辞母音、V₂は所有詞の語幹頭母音。また、V₁=uの場合 X=w, V₁=iの場合 X=y, V₁=aの場合 X=nullである。Cは子音。

22) 人称所有詞での音交替の例

omu-*geni* u-ange > ómú-*géni* w-angé (my guest)
e-*nyama* yí-e > é-*nyáma* y-ê (his meat)
ama-*líina* ga-awe > áma-*líina* g-awé (their names)

一方、2 人称単数、3 人称単数形の語幹の音形は “-V” であり、この音調形はその直前の音調即ち名詞の語末音調が H ならば L で、それが L ならば H からの下降調で現れる。2 音節以上からなる語幹ではこのようなトータルボラリティ現象に似た音調変化は決して起こらない。例を示す。

(70) 所有詞の 2 人称単数、3 人称単数形の語幹の音調変化

- ó-mú-géni w-ê (his guest)
 á-ma-idó g-e (his ground-nuts)
 ó-w-ângé (mine, for class 1 noun)
 ó-(b)u-w-ê (his (his person), for class 1 noun)
 ó-gw-íga gw-aisú (our huge river)
 ó-gu-sozí gw-aisú (our huge mountain)

所有詞の語幹の TM は LH と、またそのアクセント音節は語幹第一音節と仮定したので、上に示した 2 人称単数、3 人称単数の音調形は、本来ならば (12) と (AC) によって “w-ě, g-ě” と現れる筈である。これらが “w-ě > w-ê / o # __ #”, “g-ě > g-e / ó # __ #” という音調変化を経たと考え、この音調変化は (32) と極めて良く似た音調変化であると言える。すなわち、前者は先行音調に対するトータルボラライゼーションあり、後者は (23) に見られるような語末音調の一種の平滑化である。これを次のように表わしておく。

(71) 語幹 1 音節の所有詞の音調変化

- 71a LH → L / H] ^{N.Stem} # $\left[\begin{array}{c} \text{—} \\ \text{CV} \end{array} \right]$ ^{Poss} #
 71b LH → HL / L] ^{N.Stem} # $\left[\begin{array}{c} \text{—} \\ \text{CV} \end{array} \right]$ ^{Poss} #

但し、X=N.stem の時、Y=Poss、Z=#。X=Pf の時、Y=Poss、Z=-。

この規則を適用した誘導例を以下に示す。

(72) 名詞クラス 1 に対応する 3 人称単数形の音調形誘導

- | | | | | |
|---------------|----|----------------|----|----------------|
| * * * | 12 | * * * | 69 | * * * |
| o-mu-geni u-e | → | o-mu-geni w-e | → | o-mu-geni w-e |
| H L LH | | H L H LH | | H L H LH |
-
- | | | | | | |
|----|---------------|----|---|---|---------------|
| 71 | * * * | AC | * * * | | ó-mú-géni w-ê |
| → | o-mu-geni w-e | → | o-mu-geni w-e | = | (his guest) |
| | H L HL | | $\begin{array}{c} \diagdown \quad \quad \diagup \\ \text{H} \quad \text{L} \quad \text{HL} \end{array}$ | | |

* * *	12	* * * *	69	* * *
a-ma-ido ga-e	→	a-ma-ido ga-e	→	a-ma-ido g-e
H H LH		H L H H LH		H L H H LH
71	* * *	AC	* * *	
→ a-ma-ido g-e	→	a-ma-ido g-e	=	áma-idó g-e
H L H L		/		(his ground-nuts)
		H L H L		

4.3.2. 所有代名詞

所有代名詞は、その語幹が“-VCV”からなる場合には「冒頭母音－前接辞－語幹」からなる。語幹が“-V”だけからなる場合は複合前接辞を持ち、即ち「冒頭母音－前接辞－前接辞－語幹」の構造を取る。その語幹は(67)に示した通りである。名詞と同様に、冒頭母音はHのTMを持ち、前接辞は語幹のTMから自動的に誘導される。以下に幾つかの誘導例を示す。

(73) 所有代名詞の表面音調形の誘導例

a. 語幹がVCVの場合

* *	69	* *	AC	
e-ki-ange	→	e-ca-ange	→	e-ca-ange = é-cá-angé
H L H		H L H		/
				H L H (mine; class7)

b. 語幹がVの場合

* *	12	* * *	69	* * *	71
e-ki-ki-e	→	e-ki-ki-e	→	e-ki-ce-e	→ e-ki-ce-e
H LH		H L H L H		H L H L H	H L H L
AC					
→ e-ki-ce-e	=	é-ki-cé-e			
		(his/hers; class7)			
H L H L					

なお、先に語幹が“-VCV”からなる場合のTMをH、アクセント音節を語末音節とすると、所有代名詞の正しい表面音調を誘導できないと述べた。そのように仮定すると(73a)の例は、(12)で導入される前接辞音調がLとなり、“é-ca-angé”と現れ、正しい表面音調形が誘導できないからである²³⁾。

23) TMをH、アクセント音節を語末音節とした場合には正しい表面音調形は誘導されない。例を示す。

* *	12	* * *	69	* * *	AC	
e-ki-ange	→	e-ki-ange	→	e-ca-ange	→	e-ca-ange = * é-ca-angé
H H		H L H		H L H		/
						H L H

所有代名詞も冒頭母音を取らずに「前接辞－語幹」, 「前接辞－前接辞－語幹」と表わされると繫辞文となる。また, 述語の直前の語の語末の H は L に変わる。以下に例を示す。

(74) 所有代名詞を用いた繫辞文

(a) 肯定文

ky-angé (it is mine)

by-angé (they are mine)

ki-ky-ê (it is hers/his)

bi-by-ê (they are hers/his)

ki-nu ky-angé (this is mine)

bi-nu by-angé (these are mine)

ki-nu ki-ky-ê (this is hers/his)

bi-nu bi-by-ê (these are hers/his)

(b) 否定文

tí-ky-angé (it is not mine)

tí-by-angé (they are not mine)

tí-ki-ky-ê (it is not hers/his)

tí-bi-by-ê (they are not hers/his)

ki-nu tí-ky-angé (this is not mine)

bi-nu tí-by-angé (these are not mine)

ki-nu tí-ki-ky-ê (this is not hers/his)

bi-nu tí-bi-by-ê (these are not hers/his)

指示詞に修飾される所有代名詞の表面音調形を以下に示す。この場合には, 所有代名詞の語末の H は当然のことながら L には変化しない。

(75) 所有代名詞を用いた繫辞文

a. 肯定形

ky-angé ki-nú (this thing of mine)

by-angé bi-nú (these things of mine)

ki-ky-ê ki-nú (this thing of his/hers)

bi-ky-ê bi-nú (these things of his/hers)

b. 否定形

tí-ky-angé ki-nú (not this thing of mine)

tí-by-angé bi-nú (not these things of mine)

tí-ki-ky-ê ki-nú (not this thing of his/hers)

tí-bi-ky-ê bi-nú (not these things of his/hers)

4.3.3. 属辞

属辞は名詞の直後に位置して, その直前の名詞が属辞の直後の名詞に属する事を示す。また, その素材等の意味も表わし, 日本語の「の」に相当する。属辞は「前接辞－語幹」からな

り、前接辞は直前の名詞と文法的に呼応し、名詞クラス毎に異なる音形をとる。語幹は“-a”である。但し、属辞の直後に位置する名詞が冒頭母音を持つので、aと冒頭母音の融合が起こり、“a+e > e, a+o > o, a+a > a”と音交代する。また、属辞の表面音調形は、先行する名詞のクラスその語末音調に関わらず、常に“C-á”と現れる。

(77) 属辞の表面音調形

ó-mu-gugú gw-ó mú-géni (a luggage of the guest, gw-o mu-geni < gw-a o-mu-geni)
 é-mi-gugú gy-á bá-géni (luggages of the guests, gy-a ba-geni < gy-a aba-geni)
 é-ny-áma y-á -mbulí (a piece of meat of the goat)
 é-ny-áma gy-é -mbulí (pieces of meat of the goats, gy-e -mbuli < gy-a e-mbuli)
 ó-bú-lézi bw-á ba-gwére (a medicine of Gwere people)
 á-má-lézi g-á ba-gwére (medicines of Gwere people)

語幹“-a”のTMをHと仮定すると、この“C-á”という表面音調形は容易に次のような過程から誘導される（参照脚注11）。

(78) 名詞クラス3の属辞の音調形誘導

*	12	* *	69	*	AC	
gu-a	→	gu-a	→	gw-a	→	gw-a = gw-á
H		L H		L H		(of; class 3)
				H		

既に述べたように、音交替(69)は、属辞の場合には“Ca-a > C-a, (C)u-a > (C)w-a, (C)i-a > (C)y-a”の形で起る。

5. まとめ

5.1. グウェレ語の名詞音調形の特徴

本稿では、グウェレ語の名詞、名詞修飾語、指示詞、所有詞、属辞等の音調システムを論じた。これらの表面音調形は、それらの語を構成する形態素の基底形と少数の音調誘導規則、すなわち(12)の前接辞のTM指定規則、(15)、(16)の語末音調に関する規則により誘導できる。これら以外の音調規則は前接辞群の連続母音の1音節化に伴う規則と語幹1音節語に関する規則である。

基底形の特徴としては、前接辞にはTMの指定がないことである。このTMはその直後の要素の第一トーンとトータルポラリティの関係にあり、自動的に決定される。

これらの語の表面音調形は、その前後に他の語が位置しても、すなわち句や文を成しても、基本的にはその語の孤立形の表面音調形と同一である。ただし、述語の直前に位置する場合には、その語の一連の語末のHがLに変わるという統語に関連した規則がある。

音声レベルでの音調変化について言えば、語末の母音と語頭の母音が融合することあり、この場合にも音調の変化が起こる。また、Hに囲まれた語末のLがHに変わることがある。

5.2. グウェレ語の非弁別的音調と修飾的非弁別的音調

本稿で言う非弁別的音調とは、音調形の弁別に寄与していない音調をいう。例えば、東京方言の「あおぞら（青空）」の場合には、その音調形の弁別に寄与している音節音調はアクセント核（下がり核）の直前とその直後の音調、すなわち「ぞら」の音調であり、それ以前の各音節の音調は弁別には寄与していない。それらの非弁別的音調はアクセント核の定義、あるいはオートセグメント理論的に言えば、TM とアクセント音節との連結に関する定義ないしは適用される規則の広がり（右へのびるか左に伸びるかについての定義）から自動的に誘導されるものである。これと同一の非弁別的音調は多くのバントゥ諸語の音調形にも現れる。グウェレ語でも同一の非弁別的音調があり、アクセント音節以前の音調がそれにあたる。グウェレ語には、このような非弁別的音調の他に、これと性質の異なるもうひとつの非弁別的音調が現れる。その音調は次末 TBU が L の場合に現れる語末の H 音調であるが、これは上述したような核の定義やアクセントと TM との連結関連の定義から誘導されるものではなく、それらとは全く異なる規則から導入されねばならないものである。この種類の非弁別的音調を本稿では修飾的非弁別的音調と呼ぶことにする。

グウェレ語の修飾的非弁別音調とはほぼ同一と考えられる修飾的非弁別音調は、グウェレ語と同じグループに属するソガ語にも現れるが、やはり同一グループに属するガンダ語には決して現れない（筆者が収集したソガ語、ガンダ語資料による）。また、グウェレ語のような修飾的非弁別音調をもつという他のバントゥ諸語の報告も筆者は寡聞にして知らないし、また筆者自身の調査してきた東アフリカや南部アフリカのバントゥ諸語にも現れないので、この修飾的非弁別音調はめずらしい現象と思われる。これらの事柄から、十分な証拠はないのだが、グウェレ語やソガ語の修飾的非弁別音調は、ガンダグループのバントゥ諸語やその隣接諸言語に局在的にあらわれる現象と思われる。しかし、その修飾的非弁別音調はガンダグループのバントゥ諸語が共通に持っていた特徴であると仮定して、ガンダ語では消滅し、グウェレ語やソガ語には残存している特徴と考えるか、ガンダグループの諸語に共通した特徴ではなく、グウェレ語やソガ語が後天的に得た特徴であるかを議論するには近接諸言語のさらなる資料収集が必要である。

このようなグウェレ語の修飾的非弁別音調が如何にして生まれたのかを議論するするには多くの点で資料が不足している。しかし、バントゥ諸語の通時的音調変化を論じた Carter(1973) には、歴史的にその語の音調全体が語頭方向へずれ、語末から新たな音調が侵入して音調形に変化が生じた例が見られる (Carter, H. 1973, pp.41-42)。従って、例えば、語末に H 音調が侵入してきて語末 TBU と連結し、加えて語末 TBU に二つのトーンが連結出来ないという特徴があれば、グウェレ語やソガ語の修飾的非弁別音調が生じると考えることができる。これが LHL タイプや HL タイプに現れた修飾的非弁別音調ではないだろうか（参照音調規則 (15), (16)）。

5.3. LHLH タイプについて

LHLH タイプに属する語は複合語を除けば 41 語見つかっているが、そのうちの 10 語は明らかに語幹が 2 音節以上であるスワヒリ語からの借用語である。また、スワヒリ語からの借用語はすべてこのタイプに属している。スワヒリ語の孤立形の音調は次末音節だけがやや長くかつ下降調で発音され、他の音節はみな低平ラ調で現れる。この音調形 “… (L).HL.L.#” は、グウェレ語では次末音節にアクセント音節がある LHL タイプと見なされ、従って規則 (15)

によって語末 TBU が H に変化させられて “… (L).HL.H.#” と出てくるだろう。このようにして、スワヒリ語からの借用語は LHLH タイプとなって現れる。その他にも借用語と思われる語は 4 語あり、これらもスワヒリ語からの借用語と同じように考えられるかも知れない。

複合語を除く 41 語の内の 23 語がソガ語でもほぼ同じ意味と音形をもって対応している。この 23 語から、スワヒリ語からの借用語を除いた語は 14 語である。この 14 語の内、7 語はソガ語でも LHLH タイプであるが、残りの 7 語のうち 5 語は全て語幹が 2 音節であり、表面音調形は LH-LH と現れる（後述）²⁴⁾。

この議論の前に述べておいた方が良い興味深い音調シフトが Guthrie(1971) の祖形、現在のガンダ語、グウェレ語の音調形の比較から見つかる。

(79) Proto Bantu, Ganda, Gwere の音調比較

	Proto Bantu (from Guthrie 1971)	Ganda	Gwere	
	-puká	-wúka	-búuká	insect
	-	-HL	-HLH	Tone Melody

上の例の Guthrie の祖形の音調形は LH と再構されており、ガンダ語、グウェレ語の音調形は各々、HL, HLH である。これらを通時的に考えると、“LH > HL > HLH” に見られるように Guthrie の祖形からガンダ語へは、トーンが右から左へ一つシフトして、その後直前のトーンとは反対のトーンが右端から侵入してきていると考えることが出来る。なお、最初のトーンは押し出されて消滅したと考える。ガンダ語からグウェレ語へは、ガンダ語の TM に新たに右端から H が侵入したと考えることが出来る。Guthrie の祖形を含む例はこの 1 語しか見つかっていないが、この変化の内のガンダ語からグウェレ語への変化 “HL > HLH” は筆者の資料内で 4 語で見つかっている²⁵⁾。また、ソガ語での HL がグウェレ語で HLH と現れる語が一語（-yémbé (Soga), -yéembé (Gwere)）だけだが見つかっている。一方、ガンダ語、ソガ語、グウェレ語の音調形を比較すると、LHLH タイプの音調形はガンダ語には見つからず²⁶⁾、グウェレ語とソガ語をくらべると圧倒的にソガ語に少ない。従って、荒っぽく言えば “HL > HLH” の TM シフトはガンダ語では起こらず、ソガ語では一部終了し、グウェレ語では完全に終了したと解釈できる。このことは、LHLH タイプのもともとの TM のひとつは HL であり、H の右端からの侵入によって、このような音調形が生じたと言えるだろう。

さて、ソガ語とグウェレ語の音調形を比較すると、ソガ語の語幹の TM “-LH” がグウェレ語の “HLH” に対応していることがわかる。この音調シフト “LH > HLH” も上述した “LH > HL > HLH” という右から左への音調シフトと考えることが出来るだろう。実際、このシフトの中間に位置する “HL > HLH” の変化が、上述した “-yémbé (Soga) > -yéembé (Gwere)” に見つかっている。このような例は前述したように 5 語見つかっている（参照脚注 24）。

24) ソガ語からグウェレ語への通時的音調変化と考えられる語幹例

	グウェレ語	ソガ語	
	-káagá	-kaagá	six
	-túundú	-tuundú	half, piece
	-wéendó	-weendó	number, price
	-séelá	-seelá	period
	-lúundí	-luundí	number of times

(80) ソガ語からグウェレ語への音調形のシフト 1

*	X,Y	*	Y	*	AC,17		
-tuundu	→	-tuundu	→	-tuundu	→	-tuundu	= -túundú
-LH		-H L		-H LH		HL H	(piece)

上の (X) は TM の左へのシフトを, (Y) は TM の最後のトーンと反対のトーンの TM 末への侵入を表わす。

以上のように, スワヒリ語からの借用語を除いた, この言語固有の語で LHLH タイプに属する語の TM はもともとは (LH ないしは) HL だったと考えられる。これは, バントゥ祖語の TM は H, HL, L, LH の 4 形であると言われているが, この見解とも合致する。

5.4. HLH タイプについて

HLH タイプの語末 TBU に現れる H 音調は, LHLH タイプのそれとは由来が異なるように思われる。このタイプは単純に, その TM が LH であり, アクセント音節は語末音節であるのだが, アクセント音節が語末以外の語が他のタイプ, すなわち HL タイプに合流した結果, 語末アクセントの音調形だけがあたかも独立したタイプのように残ってしまったと思われる。語幹が 4 音節からなり, かつ語幹次頭音節がアクセント音節である音調形は見つかっていないが, 以下の例に示すように, 他は全て HL タイプに合流したと考えることが出来る。なお, 既に述べた様に HLH タイプの語幹が 1 音節の語の表面音調形は HL1 タイプのそれと同一であるが, その基底形は HL1 タイプのそれとは異なる ((参照 (24)))。

25) ガンダ語からグウェレ語への通時的変化と考えられる語例

	グウェレ語	ガンダ語	
	é-múundú	e-múndu	gun
	ó-lu-wúuzí	e-wúzi	thread
	é-ki-kóondé	e-kyi-kónde	fist
	é-ki-búuká	é-ki-wúka	insect

26) 充分には調査していないが, 手許の資料内では見つかっていない。もしあったとしても, ソガ語, グウェレ語に比べてはるかに少ないことは容易に想像できる。

(79) HLH タイプのアクセント音節による音調形の合流

	語幹音節数	1	2	3	4	備考
前接辞音調	グループ					
HH	HL1	óó-o	óó-oó	not found	not found	L, 1
	HL2		óó-óó	óó-óóó	óó-óóóó	L, 2
	HL3			óó-óóó	óó-óóóó	L, 3
	HL4				óó-óóóó	L, 4
	HLH	oo-o > óó-ó > óó-o = R1	oo-oó > óó-oó = HL1	oo-oóó > óó-oóó not found	oo-oóóó > óó-oóóó not found	LH, 1
			oo-oó > óó-óó = R1	oo-oóó > óó-óóó = HL2	oo-oóóó > óó-óóóó not found	LH, 2
				oo-oóó > óó-óóó = R1	oo-oóóó > óó-óóóó = HL3	LH, 3
					oo-oóóó > óó-óóóó = R1	LH, R1

以上のように考えると、この言語の TM には L, HL, H, LH の四つが存在し、全ての音節がアクセント音節になり得ていた言語ではなかったかと推測される。

参 考 文 献

- Carter, H., 1973. "Tonal Data in Comparative Bantu", African Language Studies, SOAS, Univ. of London. London
- Ethnologue, 14th edition, SIL International Academic Bookstore, Dallas, U.S.A.; <<http://www.ethnologue.com/>>.
- Guthrie, M., 1971, *Comparative Bantu* 2, Gregg International Publishers LTD. England.
- Ladefoged P., R. Glick & C. Cripe., 1972, *Language in Uganda*, Oxford University Press, New York · Nairobi · Toronto
- Massamba, D.P.B., 1984. "Tone in Ci-Ruri", *Autosegmental Studies in Bantu Tone*, edited by G.N.Clements and J.Goldsmith, Foris Publications, Dordrecht-Holland/ Cinnaminson- U.S.A. Pulleyblank, D., 1986. *TONE IN LEXICAL PHONOLOGY*, Boston, D. Reidel.
- 加賀谷良平, 1998. 「ショナ語現代ゼズル方言の動詞音調形とその通時的変化 — 高音調の低音調への被さりと見かけ上の右方向への移動 — (Tonal Patterns of Contemporary Zezuru Dialect of the Shona Language and its Diachronic Changes — The High Tone Covering on the Next Low Tone and its Shifting to the Right —)」; 『アジア・アフリカ言語文化研究 56』, 211-247, アジア・アフリカ言語文化研究所
- 2004. 「ジタ語ムランギ方言の動詞音調分析 (A Tonal Analysis of Verbs of the Mrangi Dialect of Jita)」, 『アジア・アフリカ言語文化研究 68』, 49-95, アジア・アフリカ言語文化研究所

27) グウェレ語とソガ語の「冒頭母音-前接辞」の音調形は異なるが、語幹の音調形が共に FL であるものが多数なので、語頭からの全音調が右へシフトしたとは考えられない。さらに、TM シフトは最初には音声レベルで生じた現象と考えられるので、このレベルで語の一部である形態素だけの TM シフトが起こるとは考えづらい。

補遺：述語の直前の語における語末音調 H の L 化について

述語の直前の語における語末トーン H の L 化は、次のような環境で起きている。

1) 動詞の直前の主語である名詞、代名詞（独立人称代名詞、指示代名詞）に起こる。

linú > linu

linu lúga (this is a whip)

ómu-tááné > ómu-taane

ómu-taane mubbúbbí (the son is bad)

iiswé > iiswe (ourselves)

iiswe twaizilé. (we came)

émi-gugú > émi-gugu

émi-gugu eena (luggages are four)

ómu-sómesyá > ómu-sómesya

ómu-sómesya tíyabísíle. (the teacher didn't hide)

ómu-kakátí > ómu-kakati

ómu-kakati yábisá. (the adult person will hide)

ómw-oizá > ómw-oiza, ába-bílí > ába-bili

ómw-oiza yákwatíbwíle, ába-bili (ni)bailúka.

(one was caught, and two run away (yesterday))

ómw-izúkúlú > ómw-izukulu

ómw-izukulu bábisá. (grandchildren will hide)

2) 動詞の直前の主語を修飾する語に起こる。

áma-bbúbbí > áma-bbúbbi

ámá-lézí áma-bbúbbi gaizâ (medicines+bad+come > bad medicines come)

ág-ámaaní > ág-ámaani

ámá-lézí ág-ámaani gaizâ (medicines+strong+come > strong medicines come)

ába-bílí > ába-bili

ábá-ntu ába-bbúbbí ába-bili baizâ. (two bad teachers are coming)

ábá-ntu ába-bbúbbí ába-ndí ába-bili baizâ. ~ ábá-ntu ába-bbúbbí ába-ndí ba-bili baizâ.

(two other bad teachers are coming)

ába-ngí > ába-ngi

ábá-ntu ába-bbúbbí ába-ngi baizâ. (many bad teachers are coming)

ába-ndí > ába-ndi

ábá-ntu ába-bbúbbí ába-ngí ába-ndi baizâ. (many other bad teachers are coming)

3) 叙述文の疑問文でも主語の語末の H>L が起こる。

ómu-kakátí > ómu-kakati

ómu-kakati tíya↑bisile ? (didn't adult people hide?)

ómu-kakati ako↑beile ? (did adult people tell?)

ómw-izúkúlú > ómw-izukulu

ómw-izukulu tíya↑kobeile ? (didn't the grandchildren tell?)

ómw-izukulu ako↑beile ? (did the grandchild tell?)

“↑”は、その直後の音節から高く始まり、語末が下降調となる音調形を表わす。疑問文の典型的な音調形である。

4) 従属節であっても、動詞直前の語には起こる。

éyabisilé (who hid (Remote past tense) > éyabisile

ómu-sómesyá éyabisile aizâ (the teacher who hid is coming)

émi-gugú > émi-gugu

ómu-sómesyá éyabisilé émi-gugu aizâ (the teacher who hid luggage is coming)

H>L 化が起こらない環境：

5) 疑問文の不定代名詞では起らない。

náaní oyó ? (who is that person?)

banáaní abó ? (who are those persons?)

náaní yaizilé ? (who came?)

náaní áíza ? (is somebody coming?)

cf. o-náani aizâ (somebody is coming)

6) 関係節によって修飾されるの名詞では起らない。

ó-nanyelé éyabisilé (owner who hid)

ói-kelé éyabuukilé (a frog that jumped)

iibó ábaizilé (themselves who came)

iswé ótwáízíle (ourselves who came (yesterday))

付表 1：孤立環境での名詞の表面音調形

L type				
LH, 1	óbu-ló (millet)	áka-bóngé (ankle) ómu-tááné (son)	ébi-sángálá (maize stalk)	not found
LH, 2		áma-tamá (cheeks) áma-baalé (stones)	éki-sukúmá (tsetsefly) ómu-byaalísyá (midwife)	ába-izúkúlú (grandchildren)
LH, 3			áma-lugunjú (mangooses)	ába-ikumbáányá (chieves)
LH, 4				áma-wailuké (bosses of baboons)
LHL, 1	áma-jê (armies) éí-je (army)	éki-kópo (cup) éki-tóóko (papyrus)	ómu-kózesá (employer) ébi-sáásiló (rubbish)	áma-sélengetá (slope)
LHL, 2		éki-fwofwô (lung)	éki-kolólo (cough) áka-tadóóba (lamp)	ó-nfulúgundú (cobra)
LHL, 3			not found	áma-bulangíti (blanket)
LHLH		éki-búuká (insect)	ómu-sumáalí (nail)	ába-masikíní (begger)
H type				
HL, 1	ékí-da (stomach)	ékí-balá (fruit)	not found	not found
HL, 2		áká-símo (hoe) ómú-zéényo (game)	óbw-ésigá (< óbú-ésigá) (reliability)	ékí-ídukanó (diarrhea)
HL, 3			áká-késélo (sickle)	not found
HL, 4				ékí-sányúlúzo (comb) ékí-bímbíkíli (hairy caterpillar)
HLH	ólú-gga (whip) (後述)	ámá-péelá (guava)	ámá-táfáalí (bricks)	ó-nkálábáandá (wooden sandal)

付表 2：名詞修飾語前接辞群音形

名詞クラス	Noun Pf	Subj.pf,	only, alone (-onka)*4	dir.rel subj.Pf, 序数の 1	(a) Adj Pf -bbiibbi (bad) 他 * 参照 (38); many, few	(b1) 数詞 1,2,3	(b2) how many (-meká)	(c) 数詞 4	(d) another /other (-ndi)	(e1) that/those in question (-o) *4	(e2) this/ these of, (-nu), that/ those (-di)	(f1) 所有形容詞 of, 所有形容詞 *3)、以降	(f2) 所有代名詞, 序数 2
IV の TM					H	H			H	L		(H)	H
1, 1a	(o-)mu, (o)	a / _C, i / _V	?o >y-e	a(a) / _C, e-i / _V	(o-)mu	(o-)mu			(o-)go	o-i	o	(o-)u	o-u
2	(a-)ba	ba	ba	a-ba	(a-)ba	(a-)ba	ba	(a-)ba	(a-)ba	a-ba,	ba	(a-)ba	a-ba
3	(o-)mu	gu	gu	o-gu	(o-)mu	(o-)gu			(o-)gu	o-gu	gu	(o-)gu	o-gu
4	(e-)mi	gi	gi	e-gi	(e-)mi	(e-)mi	mi	(e-)e *1)	(e-)gi	e-gi	gi	(e-)gi	e-gi
5	(e-)li,	li	li	e-li	(e-)li,	(e-)li			(e-)li	e-li	li	(e-)li	e-li
6	(a-)ma	ga	ga	a-ga	(a-)ma	(a-)ma	ma	e-e *1), e- (L)	(a-)ga	a-ga	ga	(a-)ga	a-ga
7	(e-)ki	ki	ki	e-ki	(e-)ki	(e-)ki			(e-)ki	e-ki	ki	(e-)ki	e-ki
8	(e-)bi	bi	bi	e-bi	(e-)bi	(e-)bi	bi	(e-)bi	(e-)bi	e-bi	bi	(e-)bi	e-bi
9	(e-)N/ (e-)	e	e	e	(e-)N	(e-)mu			(e-)ge	e-i	e	(e-)i	e-i
10	(e-)N	gi	gi	e-gi	(e-)N	(e-)i	i	(e-)i~(e-)e, i (L)~e (L)	(e-)gi	e-gi	gi	(e-)gi	e-gi
11	(o-)lu	lu	lu	o-lu	(o-)lu	(o-)lu			(o-)lu	o-lu	lu	(o-)lu	o-lu
12	(a-)ka	ka	ka	a-ka	(a-)ka	(a-)ka			(a-)ka	a-ka	ka	(a-)ka	a-ka
14	(o-)bu/ (o-)wu	bu	bu	o-bu	(o-)bu	(o-)bu	bu	(o-)bu	(o-)bu	o-bu	bu	(o-)bu	o-bu
16	(a-)a	a	a	a-a	(a-)a *2)	(a-)a	a	(a-)a	(a-)a	a-u	a	(a-)a, -u ?	a-a, -u ?
17	(o-)ku	ku	ku	o-ku	(o-)ku	(o-)ku	ku		(o-)ku	o-ku	ku	(o-)ku	o-ku
18	(o-)mu	mu	mu	o-mu	(o-)mu	(o-)mu	mu		(o-)mu	o-mu	mu	(o-)mu	o-mu
20	(o-)gu	gu	gu	o-gu	(o-)gu	(o-)gu			(o-)gu	o-gu	gu	(o-)gu	o-gu
22	(a-)ga	ga	ga	a-ga	(a-)ga	(a-)ga	ga	(a-)ga	(a-)ga	a-ga	ga	(a-)ga	a-ga

* 1) Mr. Walwana は class4, 6 で各々 (e)mi, (a)ma も良いと言うが, Mr. Gesa はそれらは許されないと言う。

* 2) Mr. Walwana は wa- も良いと言うが, Mr. Gesa は wa- は使えない言う。áa-nsí áa-bbĩbĩ (bad land, Gesa), áa-nsí a-bbĩbĩ ~ áa-nsí wa-bbĩbĩ (bad land, Walwana),

* 3) 人称所有形容詞は冒頭母音がなく前接辞のみ。

* 4) 語幹が "o" で始まるので, (C)a-o > (C)o-o, (C)i-o > (C)y-o, e-o > y-o の音交替が起こる。なお, 名詞クラス 1, 1a では "yenka" と現れる。

付表3：形容詞前接辞群をとる修飾語語幹（下線で示した音節はアクセント音節を表わす）

基底形	TM	意味	例	origine
- <u>sa</u>	L	beautiful	ómu-kalí ómú-sa, beautiful woman	
- <u>na</u> fu	L	weak	ómú-ntu ómú-náfu, weak person	oku-nafuya
- <u>ko</u> do	L	mean	ómú-ntu ómú-kodo, mean person	
- <u>ta</u> ki	L	poor	ómú-ntu ómú-táki, poor person	
- <u>an</u> gu	L	light in weight	áma-baalé ám-ángu, light stones	okw-anguya
- <u>zi</u> to	L	heavy	áma-baalé áma-zító, heavy stone	
- <u>ka</u> mbwe	L	fierce	ó-mbwa ómú-kámbwe, fierce dog	
- <u>ka</u> ile	L	old/used	ómú-gugú ómú-káile, use/old luggage	oku-kailila
- <u>esi</u> gwa	L	honest, reliable	ábá-ntu ábé-ésigwá, honest person	
- <u>bbi</u> bbi ~ <u>bi</u> bi	HLH	bad	ómú-ntu ómu-bíbí, bad person	
- <u>tyo</u>	H	dull	áma-iino áma-týó, dull teeth	oku-tyoya
- <u>mpi</u>	H	low/short	ómú-ntu ómu-mpí, short person	
- <u>ngi</u>	H	many	ábá-ntu ába-ngí, many people	?
- <u>ne</u> ne	H	big	ó-mbwa ómu-nené, big dog	oku-geiza
- <u>gu</u> mu	H	brave	ómú-ntu ómu-gumú, brave person	
- <u>si</u> lu	H	stupid	ómú-ntu ómu-silú, stupid person	
- <u>wolu</u>	H	mild	ó-mbwa ómu-wolú, mild dog	
- <u>ogi</u>	H	sharp, clever	ómú-ntu ómw-ogí, clever person	okw-ogi?
- <u>ondi</u>	H	thin, slender	ómú-ntu ómw-ondí, thin person	
- <u>an</u> vu	H	long	ómw-igó ómw-anvú, long stick	
- <u>waan</u> vu	H	high, tall	ómú-ntu ómu-wanvú, tall person	
- <u>ge</u> izi	H	fat	ómú-ntu ómu-geizí, fat person	
- <u>tono</u>	HL	small, few	ó-mbwa ómu-tóno, small dog	oku-toniya
- <u>ya</u> aka	HL	new	ómú-gugú ómu-yáaka, new luggage	
- <u>ga</u> iga	HL	rich	ómú-ntu ómu-gaigá, rich person	

付表4：グウェレ語の名詞音調規則群

1. 形態素の基底形に関して以下に示している。

名詞基底形 = 付表1

形容詞語幹の基底形 = (38)

形容詞以外の主な名詞修飾語の語幹の基底形 = (46)

指示詞の語幹 nu, di = (46)

指示詞の語幹 o = H

人称所有詞の語幹の基底形 = LH

(13) 冒頭母音の TM は H とする。

(33) 否定接頭辞 “ti-” の TM は H とする。

(65) 指示詞 “-o” の冒頭母音の TM は L とする。

2. TBU と TM の連結に関して

(10) TBU と TM の連結 (Association Convention)

10a. アクセント音節と TM の最初のトーンが連結する。アクセント音節が 2TBU からなる場合には、その全 TBU と連結する。

10b. アクセント音節から i 番目の TBU と、TM の i 番目のトーンが連結する。

10c. 未連結の i 番目の TBU と対応する未連結のトーンがないならば、連結済みの最後のトーンとその未連結の TBU が連結する。

10d. 未連結の i 番目のトーンと対応する未連結の TBU がなければ、連結済みの最後の TBU とその未連結のトーンが連結する。

3. 音調規則

(12) 前接辞の TM

前接辞の直後の要素の TM が H で始まっていると、前接辞の TM として新たに L が導入される。

(15) 語末の L > H

$$\begin{array}{c} t^n t \\ \diagdown \\ L \end{array} \rightarrow \begin{array}{c} t^n t \\ | \quad | \\ L \quad H \end{array} \quad / \quad \begin{array}{c} H \text{ _____\#} \\ t = \text{TBU} \end{array}, n=1,2,$$

(16) 語末音節の平音調化

$$\begin{array}{c} .tt.t. \\ \diagdown \quad \diagup \\ H \quad LH \end{array} \rightarrow \begin{array}{c} .tt.t. \\ | \quad | \quad | \\ H \quad LH \end{array} \quad / \quad \begin{array}{c} \text{_____\#} \\ t = \text{TBU} \end{array}$$

(23) 孤立形での語幹 1 音節名詞の語末音節の音調変化

$$\{<H>, <HL>, <LH>\} \rightarrow L \quad / \quad [H] - \left[\begin{array}{c} \text{_____\#} \\ o \end{array} \right]^{N.Stem}$$

(29) 繫辞文での前接辞 “i-” の L 化

$$H \rightarrow LH \quad / \quad \begin{array}{c} \# \left[\begin{array}{c} \text{_____\#} \\ i-o \end{array} \right]^{Cop} \# ; n \text{ は } 2 \text{ 以上の整数} \\ \text{_____\#} L \end{array}$$

(32) 名詞全体が高平らの場合の語末音節の音調変化 (< 24)

$$32a \quad H-L \rightarrow L-H \quad / \quad \begin{array}{c} \# \left[\begin{array}{c} \text{_____\#} \\ V-o \end{array} \right]^{Cop} \# ; V = /i/ \text{ or } /e/ \end{array}$$

$$32b \quad LH \rightarrow L \quad / \quad \begin{array}{c} \# \left[\begin{array}{c} H- \\ i-o \end{array} \right]^{Cop} \# \end{array}$$

$$32c \quad LH \rightarrow HL \quad / \quad \# \left[\begin{array}{c} \text{N-o} \end{array} \right]^{Cop} \#$$

$$32d \quad H-LH \rightarrow L-HL \quad / \quad \# \left[\begin{array}{c} \text{i-o} \end{array} \right]^{Cop} \#$$

(37) “.é.i., .ó.i.” の 1 音節化に伴う音調変化 (< 20)

$$37a. \quad \begin{array}{ccc} X \text{ i-o} & \rightarrow & X \text{ i-o} \quad / \quad \# _Y \\ \begin{array}{|c|} \hline H \\ \hline \end{array} \begin{array}{|c|} \hline L \\ \hline \end{array} & & \begin{array}{|c|} \hline H \\ \hline \end{array} \begin{array}{|c|} \hline \text{L} \\ \hline \end{array} \end{array}$$

または

$$37b. \quad \begin{array}{ccc} X \text{ i} & \rightarrow & X \text{ i} \quad / \quad \# _Y \\ \begin{array}{|c|} \hline H \\ \hline \end{array} \begin{array}{|c|} \hline L \\ \hline \end{array} & & \begin{array}{|c|} \hline H \\ \hline \end{array} \begin{array}{|c|} \hline L \\ \hline \end{array} \end{array}$$

但し、X = /e/ または /o/、或いは否定接辞 /ti/。Y は CV からなる音節。

(71) 語幹 1 音節の所有詞の音調変化

$$71a \quad LH \rightarrow L \quad / \quad H]^{N.Stem} \# \left[\begin{array}{c} \text{CV} \end{array} \right]^{Poss} \#$$

$$71b \quad LH \rightarrow HL \quad / \quad L]^{N.Stem} \# \left[\begin{array}{c} \text{CV} \end{array} \right]^{Poss} \#$$

但し、X = N.stem の時、Y = Poss、Z = #。X = Pf の時、Y = Poss、Z = -。

4. 語の連結時での音調論的音調変化

(45) 動詞直前の語の語末の H の L への変化

$$H \rightarrow L \quad / \quad _] \# [^X ; X=Verb$$

(54) 冒頭母音を取らない数詞直前の名詞の語末の H の L への変化

$$H \rightarrow L \quad / \quad _]^{Noun} \# [Pf-Stem \text{ of Numeral }]$$

5. 音声レベルでの音調変化

(41) H に囲まれた名詞語末の L の同化現象 (任意的)

$$t \rightarrow \text{f} \quad / \quad \text{f} _]^{Noun} \# [pfs \text{ f} ;$$

但し、pfs は「(冒頭母音-) 前接辞」を現す。

(42) 冒頭母音の融合と音調変化 (任意的)

$$\begin{array}{ccc} (C)V_f \# V_{IV} & \rightarrow & (C(A))V_{IV} \# \\ \begin{array}{|c|} \hline X \\ \hline \end{array} \begin{array}{|c|} \hline H \\ \hline \end{array} & & \begin{array}{|c|} \hline X \\ \hline \end{array} \begin{array}{|c|} \hline H \\ \hline \end{array} \end{array}$$

；但し、V_f は名詞語末母音、V_{IV} は形容詞の冒頭母音、C は子音、A は w/y のいずれかを示す。また、X は L / H のいずれかの音調を示す。

(69) 冒頭母音の融合と音調変化 (任意的)

$$\begin{array}{ccc} (C)V_1 - V_2 & \rightarrow & (C)X - V_2 \\ \begin{array}{|c|} \hline X \\ \hline \end{array} \begin{array}{|c|} \hline H \\ \hline \end{array} & & \begin{array}{|c|} \hline X \\ \hline \end{array} \begin{array}{|c|} \hline H \\ \hline \end{array} \end{array}$$

；但し、V₁ が所有詞の前接辞母音、V₂ は所有詞の語幹頭母音。また、V₁ = u の場合 X = w, V₁ = i の場合 X = y, V₁ = a の場合 X = null である。C は子音。

The Verb *'bri* “to write” in Old Tibetan

HILL, Nathan W.

Harvard University

An examination of the verb *'bri* ‘to write’ as it occurs in Old Tibetan texts reveals that the original conjugation was *'dri* (pres.), *bris* (past), *bri* (fut.), *ris* (imp). When Cr- clusters became retroflexes (i.e. *dr* > *ḍ* and *br* > *ḍ*) the verbs *'bri* ‘to write’ and *'dri* ‘to ask’ became homophonous. At that point the prefix *b-* of *'dri*, *bris*, *bri*, *ris* ‘to write’ was reanalyzed as part of the root, and extended by analogy to the spelling of the present stem, in order to graphically differentiate *'dri*, *dris*, *'dri*, *dris* ‘to ask’ from ‘to write’ (newly spelled) *'bri*, *bris*, *bri*, *bris*. This discovery is brought specifically to bear on the interpretation of line 68 of the east face of the treaty inscription of 821-822.

As the earliest attested of the Tibeto-Burman languages, Old Tibetan is not only important in the study of Tibetan language and history but also has unique importance for the entire Tibeto-Burman language family. Unfortunately most comparative studies which use Tibetan material rely on Classical Tibetan dictionaries rather than relying directly on Old Tibetan texts. Benedict in the first sentence of his discussion of the Tibeto-Burman *b-* prefix draws particular attention to the verb *'bri* ‘to write’ as an exception to the generalisation that Tibetan “prefixed *b-* is characteristically found with the ‘perfect’ [past¹] root of verbs” (1972: 110; brackets mine). More recently Matisoff opines that Tibeto-Burman had a root **b-ɾɿy* ‘draw / write’ (2003: 132). As will be shown here, the *b* in the present stem of *'bri* ‘to write’ never represented a linguistic reality in Tibetan, and should therefore not be considered in comparative research.

Many imperial Tibetan stone inscriptions refer to their own creation with a formula such as *rdo rings la bris* “written on the stele”. A reminiscent phrase occurs in the 68th line of the east face of the treaty inscription of 821-822, which stands before the Gtsug-lag-khang in Lhasa, but instead of *bris* the text has *'dri*. Richardson (1985: Index) sees this as an orthographic variant for *'bri*. He reads the text thus:

[68] *rdo rings la 'dri ba'I spyang yang// rgya'I pho nya thabs//gu*

[69] *shi cung shIng yod pa// do tshé'e dang// thab can shan de b+'u yod pa//*

[70] *li khri b+'u la stsogs pas byas so//* (1985: 116)².

Keywords: Old Tibetan, verb ‘to write’, epigraphy, verb conjugation, Tibeto-Burman

- 1) The work of Zeisler (2004) should put to rest once and for all that the semantics of the Tibetan verb stems has anything to do with ‘aspect’.

And an examination of this inscribed stone pillar was made by the Chinese envoys Do tse'e, who has the rank of 'Gu Shi Cung Shing, and Li Kri [sic.] B'u, who has the rank of Tsan Shan De B'u, and others (1985: 117).

Presumably one reason Richardson found his explanation persuasive is that 'dri and 'bri are homophonous in many modern dialects. However, it is improbable that they were homonyms at this early period. Also, the spelling *bris* is met with just a few lines earlier at line 65; it is unlikely both that an imperial inscription would contain a spelling mistake, and that a single scribe would change his spelling erratically. Richardson suggests comparison with Thomas (1935-65: II, 74, lines 19 and 22), where the spelling 'dri occurs twice in a single document.

Rgya'i [d]ar ma 'dri ba'i yi ge [pa] brgyad [cu] dang / zhu che ... [20] nyi shu la stsal te
// (1935-65: II, 74; brackets in original).

copyists for the Chinese scripture up to eighty scribes and twenty revisors were sent (1935-65: II, 76).

/ slad kyis / blon Khong bzher lastsogs [22] mngan rnams dbang po la khungs phyung ste
/ da dung tu Bod kyi dar ma 'dri ba'i [y]i ge ... [23] p ... thob ste / phyag rgya nod tu gsol
// (1935-65: II, 74; italics and brackets in original).

Afterwards, Councilors Khong-bzher and the other authorities having entered upon power, we once more beg to receive a signature for obtaining ... scribes copying Tibetan scripture (1935-65: II, 77).

Richardson and Thomas both give 'dri as an equivalent of 'bri in their indices, although nowhere in their corpora is the form 'bri actually attested; in contrast, the past *bris* and the future *bri* occur with some frequency. In the Old Tibetan contracts studied by Takeuchi the syllables 'bri po and 'dri each occur only once. Takeuchi sees 'bri as an orthographic mistake for 'bring-po 'the middle' (1995: 209-11). He explains that 'dri is a mistake for 'bri 'to write':

2. *sku yon 'dri ba'i shog shog yug rings nyis brgya' bung dze weng gi sug pa na mchis pa*
snga g.yar du 'tshal te / (1995: 180).

[In order to pay the loan Shang he-'do] borrowed in advance [from Bung dze-weng] two hundred bolts of long-bolt paper, which was in the hands of Bung dze-weng for the purpose of copying [sutras as] an offering (1995: 181; brackets in original, cf. also 182 n. 2).

Two dictionaries (Das 1902 and Zhang 1985) acknowledge 'dri as an alternative pres-

2) In this and all other citations of Tibetan I follow the "extended Wylie" transcription system, with the exception that the gigu *verso* is here written as <I>.

ent of *'bri*. Not only does this ‘alternate’ prevail in Old Tibetan, but in all of the Old Tibetan documents hitherto studied *'bri* is nowhere found with the meaning ‘to write’, but *'dri* is found with this meaning at least four times.³⁾

In contrast to Richardson, Li and Coblin suggest that in the aforementioned inscription *'dri* has its expected meaning ‘to ask’, and is part of a larger syntagme *'dri-ba'i spyan* with the meaning ‘supervisor’. They read the text thus:

[68] *rdo [ring]s la 'drI ba'I spyan yang // rgya'I pho nya thabs // 'gu*

[69] ... *[yo]d pa // do tse'e dang // ... yod pa/*

[70] ... *byas so //* (1987: 51 brackets in original).

As supervisors of the long stone, the Chinese envoys Do Tse'e (i.e. Tu Tsai), having the rank of 'gu..., and ..., having..., did ... (1987: 99; parenthetical comment in original).

The analysis of Li and Coblin is not wholly satisfactory. I am unable to confirm the meaning ‘supervisor’ for this concatenation of words. In addition, because the expression contains a genitive it would be more likely to have the sense “the *spyan* of the *rdo rings la 'drI ba'*” instead of “*'drI ba'I spyan* of the *rdo rings*”. If the meaning of *'dri* is indeed ‘ask’ the phrase must translate as “the Chinese envoys did the *spyan* (eye) of the asking to/on/at the long stone”. Finally, it is unclear how Li and Coblin would clarify the examples put forward by Thomas and Takeuchi.

I would like to suggest that Richardson’s analysis is correct, but that *'dri* is not a simple error, but rather the genuine early spelling of the present tense of the verb ‘to write’. This verb is plainly related to the noun *ri-mo* ‘a drawing’. The root of the verb can be either *ri* or *bri*, and if the root were *bri* we must account for the loss of the *b-* in the word *ri-mo*. If however the root were *ri*, not only would the past *bris* and the future *bri* be regular, but the present stem *'dri* would be the expected result of the epenthesis **ʔ* > *'dr*.

Li gives the following examples, and explanation to show that roots in *r* have a present tense in *'dr*.

'drul ba “to become putrid, rot”, pf. [past] *rul* or *drul*, cf. *rul ba* “to rot, get rotten.”

'dral ba “to tear to pieces, rend asunder”, pf. [past] *ral* or *dral*, cf. *ral* “rent, cleft.”

'drud pa “to drag, pull along the ground”, pf. [past] *drud*, cf. *rud* “a falling or fallen, mass (in landslide, avalanche)”.

'dril ba “to be turned, rolled around”, pf. [past] *dril*, cf. *ril ba* “round, globular.”

'dre ba “to be mixed with”, pf. [past] *'dres*, cf. *sre ba*, *bsres* “to mix with, mingle”.

3) The documents collected in Choix III and IV seem not to include relevant data. Instead we only have the words *'dri* ‘to ask’ (S1284.v0005-6 and P0216,0120) and *'bri* ‘to diminish’ (S0751,37a2) and many occurrences of the word *'bri* ‘a female yak’ (e.g. P0126,0146, P1068,0082-83, P1134,0281-2 etc.).

The perfective [past] *dr-* forms are apparently analogical to the present *'dr-* forms, and have all but replaced the simple forms in *r-*. (1959: 59; brackets mine, also compare Sprigg 1970: 16).

To these one could add *'dring, rings* 'to be far', the topic of Li's paper.

Most dictionaries give the imperative as *bris*, but Bsam Gtan (1979) gives the voiceless form *phris*. However, in the previously mentioned Dunhuang document (Thomas 1935-65: II, 74) there are two instances of the imperative of 'to write' spelled as *ris*: This form of the imperative reconfirms that the root of the verb is *ri* and not *bri*.

[8] @// *rta'i / l[o'i] [d]us gcig tu sku yon tu bsngos [te] / bla'i mdzad – ya las byung ba / [B]o[d] kyi Shes rab* [9] *'[b]u[m] pa sde brgyad dang // Rgya'i 'bum pa bam po [d]rug brgya' [pa] sde gsum ris shig ches byungste* (1935-65: II, 73 italics and brackets in original).

A donation having been undertaken sometime in the Horse year, arising from the previously made communication (?) it appeared that a Tibetan *Shes-rab-'bum-pa* (*Śata-sāhasrika-Prajñā-pāramitā*) in eight divisions, and a Chinese *'bum-pa* in six hundred chapters, three division, should be copied (1935-65: II, 76).

[24] @ / ... *byang ... byungste / Rgya'i Tshe dpag tu ma m[chi]s, pa ...* [25] *ris shig ches byung ba [de]...* (1935-65: II, 74; brackets in original)

... copy a Chinese *tshe-dpag-tu-ma-mchis-pa* (*Aparimitāgūḥ-sūtra*) ... (1935-65: II, 77)

Thus, in Old Tibetan the verb 'to write' has the stems *'dri* (pres.), *bris* (past), *bri* (fut.), *ris* (imp.). When Cr- clusters became retroflexes (i.e. *dr* > *ḍ* and *br* > *ḍ*) the verbs 'to write' and 'to ask' became homophonous. After that sound change, the prefix *b-* of *'dri, bris, bri, ris* 'to write' was reanalyzed as part of the root, and extended by analogy to the spelling of the present stem, in order to graphically differentiate *'dri, dris, 'dri, dris* 'to ask' from 'to write', spelled at that time as now *'bri, bris, bri, bris*.

References

- Benedict, Paul (1972). *Sino-Tibetan: A Conspectus*. Cambridge: at the University Press.
- Bsam Gtan (1979). *Dag yig gsar bsgrigs*. Xining: Mtsho sngon mi rigs dpe skrun khan.
- Choix III (1990). *Choix de Documents Tibétains à la Bibliothèque Nationale III. Corpus Syllabique*. Eds. Yoshiro Imaeda and Tsuguhito Takeuchi. Paris: Bibliothèque Nationale.
- Choix IV (2001). *Choix de Documents Tibétains à la Bibliothèque Nationale IV. Corpus Syllabique*. Eds. Yoshiro Imaeda et al. Tokyo: Institut de Recherches sur les Langues et Cultures d'Asie et d'Afrique (ILCAA) Université des Langues Étrangères de Tokyo.
- Das, Sarat Chandra (1902). *A Tibetan English Dictionary with Sanskrit Synonyms*. Eds. Graham Sandberg and A. William Hyde. Calcutta: Bengal Secretariat Book Depot, 1902; Delhi: Motilal-Banarsidass, 1995; Kyoto, Rinsen Book Company, 1988.
- Li Fang-kuei (1959). "Tibetan Glo-ba-'dring." *Studia Serica Bernhard Karlgren dedicata*. Copenhagen: Musksgaard. 55-9.

- Li Fang-kuei and W. South Coblin (1987). *A study of the old Tibetan inscriptions*. Special publications 91. Taipei: Academia Sinica.
- Matisoff, James A (2003). *Handbook of Proto-Tibeto-Burman: System and Philosophy of Sino-Tibetan Reconstruction*. Berkeley: University of California Press.
- Richardson, Hugh E. (1985). *A corpus of Early Tibetan Inscriptions*. James G. Forlong Series 29. Hertford: Royal Asiatic Society.
- Sprigg R. K. (1970). "Vyajñanabhakti, and irregularities in the Tibetan Verb." *Bulletin of Tibetology* 7.2. Gangtok: Namgyal Institute of Tibetology. 5-20.
- Thomas, Frederick William (1935-65). *Tibetan literary texts and documents concerning Chinese Turkestan*. 4 vols. Oriental Translation Fund Publication. New series, vol. 32, 37, 40, 41. London: The Royal Asiatic Society.
- Takeuchi Tsuguhito (1995). *Old Tibetan Contracts from Central Asia*. Tokyo: Daizo Shuppan.
- Zeisler, Bettina (2004). *Relative Tense and Aspectual Values in Tibetan Languages: A Comparative Study*. Trends in Linguistics, studies and monographs 150. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Zhang Yisun (1985). *Bod rgya tshig mdzod chen mo / Zhang Han Da Cidian*. Beijing: Mi rigs dpe skrun kang / Minzu Chubanshe.

脱「伝統」運動の成立と展開
ーフィジー諸島共和国におけるイラミ・フィジアン・
コーポレイションを事例としてー

丹 羽 典 生
(東京都立大学大学院)

**The Formation and Development of One Counter-traditional Movement:
A Case Study of the Ilami Fijian Corporation
in the Republic of Fiji Islands**

Graduate School of Tokyo Metropolitan University
NIWA, Norio

In this paper, I depict the development of the activities of the Ilami Fijian Corporation up to the present day. The Ilami Fijian Corporation is a co-operative venture group and is now widely known as the Lami in the western part of Fiji. It engages in commercial activities as middlemen of cash crops.

The main characteristics of the Lami are that it distances itself from the traditional Fijian way of life in order to achieve better living. For example, the Lami not only tries to reduce some aspects of Fijian customary obligations such as weddings and funerals, but also prohibits its members from drinking kava. At the same time, the Lami people encourage themselves to work hard.

This group started its activities as the Tabanivono co-operative in Togovere village of Nadroga/Navosa province in 1949. After the Tabanivono co-operative was closed down, it was resumed as Dra ni Lami in 1959, then as Bula Tale in 1961. From August 1961, it underwent a name change again to the Bula Tale Communist Party for a short period. After some conflict with neighbouring societies, the Bula Tale Communist Party changed the name of the group to the Lami. The Lami began relocating from Nadroga/Navosa to Ba in 1962 and continue to settle there today.

In this paper, after depicting these ups and downs of this group in detail, I will re-examine the validity of the two assumptions of previous studies on the Lami: 1) one assumption is that characteristic activities of the Lami were established owing to both the sterile land quality and unstable land right of the villages of the Lami. 2) the other assumption is that the Lami comes from a line of Melanesian cargo cults such as the Viti Kabani movement in Fiji.

Keywords: cargo cult, invention of tradition, the Bula Tale Communist Party, co-operative, development

キーワード：カーゴ・カルト、伝統の創造、ブラ・タレ共産党、協同組合、開発

In my analysis, these two points are not necessarily well grounded. If we take a close look at the development of the Lami, we can find close relationships between the activities of the Lami and the government policy of the day.

- I はじめに
 - 1 先行研究
 - 2 問題提起
- II ブラ・タレ以前の先駆的活動
 - 1 タンバニヴォノ協同組合 [1949 年 - 1952 年]
 - 2 ラ・ニ・ラミあるいはラ [1959 年 - 1961 年 1 月 9 日]
- III ブラ・タレの誕生と脱「伝統」運動の成立 [1961 年 1 月 10 日 - 8 月]
 - 1 ブラ・タレの活動内容
 - 2 ブラ・タレ参加主要村落の特徴
 - 3 ブラ・タレ規則の目的
- IV ブラ・タレ共産党期の活動 [1961 年 8 月 - 1962 年 6 月]
 - 1 ブラ・タレ共産党へ
 - 2 ブラ・タレの活動と意義の変化
- V ラミの活動展開
 - 1 ラミ前期—ナンロガ・ナヴォサ地方にて [1962 年 6 月 - 8 月]
 - 2 ラミ中期—バ地方への移転以降 [1962 年 8 月 - 1980 年代後半]
 - 3 ラミ後期—ラミ集落の形成へ [1980 年代後半 - 1990 年代]
- VI 考察—ラミの発生原因再考
 - 1 土地に関連する 2 つの論点
 - 2 カーゴ・カルト的伝統との関係
- VII 最後に—ラミのヴィジョンと植民地政府の政策との並行性

I はじめに

1 先行研究

本稿では、こんにちフィジー諸島共和国においてラミ (Lami) という名前で知られる協同組合的集団を取り上げる。ラミはこれまで様々な学問分野から着目を浴びてきた集団である。たとえば、歴史学では共産主義政党として記述され、人類学では独自の伝統認識を持つ集団として着目を浴び、宗教学ではカルト的宗教社会運動やキリスト教の分派として取り上げられてきた。このように専門を異にする研究者の多くの関心を引きつつも、ラミの活動それ自体は傍系的に扱われるのみで、系統だった記述・研究は存在していないのが現状である。

そこで、本稿では、まず活動初期から現在に至るまでのラミの活動展開をあきらかにしたい。そのうえで、同集団の発生・展開の特

質を考察することを通じて、先行研究において、ラミ発生の暗黙の原因とされてきた 2 つの点—土地に関連する諸問題及び宗教的社会運動との系譜的関連性—の妥当性を検討することを目的としたい。

ラミとは、現在、その独自の脱「伝統」的と言い得る生活様式とサトウキビ栽培、レストラン経営から野菜、根菜類の仲買業にまで及ぶ商業活動で著名な協同組合的集団である。1980 年代後半から 1990 年代頭にかけて会社登録も行い、イラミ・フィジーアン・コーポレーション (Ilami Fijian Corporation) を経営している。

歴史的にみると、ラミは、1940 年代後半ヴィティレヴ (Vitilevu) 島ナンロガ・ナヴォサ (Nadroga/Navosa) 地方トゴヴェレ (Togovere) 村落の先住系フィジー人¹⁾の手によって形成された協同組合を基盤として成立した。その後 1959 年頃に、トゴヴェレ

村落を中心に近隣の3村落が組織の中核となる現在のラミの形態ができあがる。1961年からは、脱「伝統」的な独自の生活様式を始めた。この時点で、1,000人にまで成長したラミのメンバーは、政治活動等に起因する周辺社会との軋轢を経て、ナンログ・ナヴォサ地方からバ(Ba)地方へ移動した。この居住地の移転を契機に、メンバー数は150人まで減少した。その後、バ地方で活動を続け、1980年代前半までにメンバー数200人以上にまで回復し、80年代後半には300人にまで及んだという。そして、ラミの活動は現在まで続けられている。指導者の方針に応じて組織の性質は変化しているし、時の推移につれてメンバーも増減しているが、トゴヴェレ村落民を中心にナンログ・ナヴォサ地方の諸村落民で構成された協同組合的活動を行う集団という点では一貫している。

現在ラミが有名な存在となっている理由の一端は、その脱「伝統」的な活動にある。脱「伝統」的活動とは、経済発展を志向してフィジー人の「伝統」的慣習の一部を改変し、独自の規則に従って生活するという、いわば自発的な経済開発運動である。1961年に開始されたこのラミ規則Ⅲでみるようにブラ・タレと呼ばれる時代に形成されたのであるが一の具体的内容は、葬儀、婚姻等にまつわる儀礼的慣習を簡略化・廃止し、儀礼遂行に際して過剰な出費を抑えること試みると同時に、各種嗜好品の消費を抑制・禁止して、規律ある生活を営むことであった。

こうした特異な生活実践のあり方のみならず、共産党という名称を一時時期集団名に冠したことなどから人目を引く存在であったらしく、ラミはこれまで様々な論者に様々な角度

から議論されてきた。はやくも1970年には、参与観察調査に基づく研究がだされている。メソディストの牧師、エパラム・ナイヴォラシガによる報告書(Naivolasisiga 1970)は、興味深いエピソードを記録しているものの、閲覧しづらい神学校の学位論文として収蔵されていたこともあり、後続の研究者に参照されることはなかった。

それ以降、ラミに関するより社会科学的な研究が生み出されている。ことに考察の焦点とされてきたのが、①ラミの特異な規則がいかにして生み出されたのかという点と、②ラミが先行する宗教的社会運動の継承者であるという点である。

①の代表的な研究者は、シミオネ・デュルタロ(Durutalo 1985)である。彼は、社会経済的な視点から、トゴヴェレの土地生産力の低さと土地所有制度における同村落の不利な位置づけに、ラミ規則の発生原因をみいだしている。具体的には、ラミに見受けられる勤勉さを重視するエートスや、フィジー人の「伝統」的社会から抜け出すような独自の規則は、ラミ参加村落が痩せた土地しか持っていないこと、及び通常のフィジー人村落が持つ土地所有権がラミ参加村落に与えられていなかったことに起因していると、デュルタロは分析した。

土地所有権の点で不利な位置におかれていたことについては、もう少し説明が必要であろう。大英帝国の植民地統治下におかれた1874年以降、フィジーでは先住民保護政策が施行されたことと並行して、全土の80%以上の土地が先住民系フィジー人の所有物とされた。こうしたネイティヴ・ランド(native land)²⁾と称されるフィジー人の土地

1) フィジーは多民族国家であり、総人口およそ80万人のうち、先住系のフィジー人と、1879年以降の移民の子孫であるインド人が2大民族集団となっている。その他に、ロトゥマ人(Rotuman)、華人、バナバ人(Banaban)や、19世紀からの入植者の子孫であるヨーロッパ人、ヨーロッパ人とフィジー人の混血であるパート・ヨーロッパ人(Part European)、などが少数民族として存在している。以下でフィジー人と記述する際は先住系フィジー人を指している。

は、先住民土地委員会の土地所有単位確定作業を経て、マタンガリ (mataqali) という概ねリネージにあたる共同所有単位ごとに区画されている。ところが、本来多様であった土地所有の形態を植民地政策の枠に収めようとするこの政策は、必然的に、共同的な土地所有権を区画・配分していく過程で、利益を得る集団と、不利益を被る集団とを生み出した (France 1969: 150)。具体的には、土地所有単位として記載されていないマタンガリが一部ながら生まれたのである。ラミに参加した村落民はこうした数少ないマタンガリに属するフィジー人の事例であったことを、デュルタルロはラミの発生原因と関連させて分析した (Durutalo 1985)。1980 年代初頭のラミに関する報告を残しているジョン・ヤングも、デュルタルロの近傍で研究を行っていたこともあり、彼の分析の枠組みを受け継いでいる (Young 1992)。

以上のナイヴォラシガ、デュルタルロ、ヤングの 3 研究はラミの現地調査を踏まえた数少ない研究成果であり、それ以降、現地調査に基づく研究は基本的に存在しない。上記 3 論文以降の研究で特筆すべきは、ラミ規則の特異性について検討を施したニコラス・トーマス (Thomas 1997) のものである。1960 年時のラミ以下に整理するように、当時はブラ・タレと呼ばれていた時代に相当する一を対象に、ラミ規則の特質を当時のフィジー社会で支配的だった「伝統」にまつわる言説への対抗言説 (「伝統の転倒 (inversion of tradition)」) として読み解く作業をトーマスが行っている。文献資料に基づく彼の研究は、いわばデュルタルロたちが強調したラミ参加村の不利な社会的条件を、ラミの言説レベルに着目して再分析したものである。

ラミの発生原因として、これまで繰り返し着目されてきたもうひとつの点が、先ほど②とした、ラミをカーゴ・カルトと呼ばれるオセアニアの宗教的社会運動の系譜に位置づける論点である。先行研究においてラミは、フィジーのカーゴ・カルト—ことにフィジーで発生したアポロシ・ナワイ (Apolosi Nawai) のヴィティ・カンバニ (Viti Kabani) 運動 (e.g. Macnaught 1979, 1982; 春日 2001) —と暗黙のうちに関係づけられてきた。

アポロシ・ナワイのヴィティ・カンバニ運動とは、1910 年代に起きた宗教的社会運動の一種である。彼の「フィジー人によるフィジー人のための会社設立を目標に謳い、西洋人支配の払拭とフィジー人の繁栄を…実現しようとした」(春日 2001: 1-2) 活動は、時の植民地政府やヨーロッパ人入植者の反発にainaながらも、フィジー全土、ことに彼の出身地の位置するヴィティレヴ島西部に根深い影響を残している。彼の活動は半ば神話と化し、それ以降フィジーで発生した宗教的社会運動に様々な影響を与えている (cf. Worsley 1968, Kaplan 1995, 春日 2001)。

このヴィティ・カンバニ運動とラミの系譜的な繋がりには、様々な論者によって言及されてきた。たとえば、ラミの指導者のなかにヴィティ・カンバニ運動への参加者がいたという経歴に着目する者から (e.g. Naivolasisiga 1970)、ヴィティ・カンバニ運動の理念をラミが受け継いでいるという者まで (e.g. Durutalo 1985: 406-407, Young 1992, 春日 2001)、具体的な着目点は異なりながらも、ラミはアポロシと関係づけられてきた。ラミについて挿話的に言及するのみで本格的な検討の俎上に載せていない研究でも同様に、ヴィティ・カンバニ運動との関係性は、

2) フィジーにおける土地所有形態は、大きく 3 種類に分けられる。ネイティヴ・ランド以外の土地所有形態には、ステート・ランド (state land) とフリーホールド・ランド (freehold land) がある。前者は植民地期の土地区画事業に際して、請求者が名乗りでなかった土地と、所有者が消滅したため政府所有とされた土地である。後者は、植民地以前と植民地期の一時期 (1905 年 - 1912 年) に、主としてヨーロッパ人入植者に売却された土地である。

多かれ少なかれ暗黙の前提とされてきた(e.g. Mayer 1963: 100, Mamak 1978: 50, Howard 1991: 88)。

2 問題提起

以上、ラミにまつわる先行研究を整理してきたが、3点ほど問題点を指摘したい。

まず第1に、依拠する文字資料の片寄りである。先行研究のほとんどが英字版全国紙フィジー・タイムズ紙に掲載された当時の指導者アピメレキ・ラマタウ・マタカ(Apimeleki Ramatau Mataka)の発言を重視する一方で、フィジー語の新聞であったヴァカレワ・ニ・パシフィカ紙(Vakalelewa ni Pasifika)等他の土着のメディア情報は無視している。そのため資料の取捨選択に片寄りがある、かなり限定的な情報に依拠した研究となっている。現地調査に基づく研究もあったが、基本的に調査期間が短く、ラミは主題としても傍系的な扱いを受けており(e.g. Durutalo 1985, 春日 2001)、筆者の知る限りで踏み込んだ記述を残しているのはナイヴォラシガの研究だけであった(Naivolaisiga 1970)。ただし、先ほども触れたように、彼の研究がこれまで参照されることはなかった。

第2に、資料の片寄りとも関係して、既存のラミに関する先行研究は同集団の一時期あるいは一側面を取り上げるのみで、総合的に検討されていない点である。これは、ラミがその創設以来、集団名と生活拠点を頻繁に変更していること、また、1962年あたりに出身諸村落から追放されたという歴史的経緯から集団として閉鎖的な傾向を持ち、ラミのメンバーのなかには過去を語りたがらない者もいるためと思われる。このような集団の経歴と特質のため、活動初期のブラ・タレと呼ばれていた時期を取り扱っている研究では、そ

の後のラミとしての活動展開は言及されていないことが多い(e.g. Mayer 1963, Mamak 1978, Thomas 1997, Lal 1992)。逆に、ラミに焦点をあてている研究は、ブラ・タレ期の活動等のラミ結成に至るまでの歴史的展開に対する配慮が手薄になるといった問題点を抱え込んでいる(e.g. Young 1992, 春日 2001)。

そこで本稿は、その存在がこれまで知られていなかった資料—土着のメディア資料(新聞)等を用いて³⁾、先行研究の欠落を補うためラミの集団名の変遷、活動特色の持続と変容を整理することを第一の目的としたい。Ⅱでは、ラミ以前の先駆的な活動の時期[1949年—1961年1月9日]を整理する。Ⅲ、Ⅳ、Ⅴにおいて現在のラミ規則と同様な活動を開始した時期[1961年1月10日—1990年代]を取り上げ、当時の集団名称、具体的活動内容、組織上の特質、主たる活動場所に着目して記述・分析していきたい。そしてⅥで、こうした活動展開の洗い直しからみえてくる、ラミの持った特徴と意義について検討する。ここでは同時に、先行研究において想定されていた①発生原因としてのネイティヴ・ランドの所有権を持たなかったことと肥沃な土地の不足と、②カーゴ・カルトと関係づけることの妥当性について検討する。そのうえでⅦにおいて、先行研究のようにラミ規則の内実に着視するのではなく、むしろ集団としての活動展開のあり方からみいだすことのできる論点について示唆したい。

本稿のデータは、2001年から2002年にかけてフィジー諸島共和国にて行った調査に基づいている。文献調査と並行してトゴヴェレを中心にナンロガ・ナヴォサ地方のラミ関連諸村落及び、現在の居住地であるバ地方の集落にて、ラミの現役メンバー、退会者、近隣

3) 論中では煩瑣になることを避け、略号で新聞等々の出所を示すことにした。The Fiji TimesはFT, Vakalelewa ni PasifikaはVP, そしてVolagaunaはVGとした。(FT 10/17/1973)は、フィジー・タイムズ紙の1973年10月17日付けの記事を指す。

で生活している人々を中心に聞き取り調査も行った。

Ⅱ ラミ以前の先駆的活動

1 タンバニヴォノ協同組合 [1949年－1952年]

ラミに先行するもっとも古い組織は、1949年に活動を開始したタンバニヴォノ協同組合 (Tabanivono Co-operative) である。同協同組合はナンログ・ナヴォサ地方、トゴヴェレを拠点に、その周辺のナンロウマイ (Nadroumai)、ヴナトヴァウ (Vunatovau) 等の村落民で構成された (Naivolasisa 1970: 1)。設立2年前の1947年には、植民地政府によって、フィジー人社会を市場経済に参入させることを目的とする協同組合関連の法律が施行され、フィジー人による協同組合活動が推奨されていた。そのため正式に登録された協同組合のみならず非公式な組合的集団が、フィジー人によって数多く結成されていた (cf. Council Paper No.22 1950)。そうした意味で、タンバニヴォノ協同組合はフィジー人自身を開発へと向かわせる時期に誕生した組織のひとつであった。

指導者はエモシ・ソヴェ (Emosi Sove) と呼ばれるトゴヴェレ出身のフィジー人で

ある。彼はかつてアポロシ・ナワイのヴィティ・カンパニ運動へも参加していたという証言もある人物である。エモシは、牛200頭以上に及ぶ大規模な牧畜業や稲作等を行う先駆的な事業を興したことでトゴヴェレ周辺で知られていた⁴⁾ (cf. Naivolasisa 1970: 1-3)。エモシは米、トウモロコシ、ヤムイモを蓄える小屋を建造し、彼の農場で働く労働者を雇うこともあったという (Young 1992: 88)。そしてこの組合は、現在のシガトカ・タウン (Sigatoka Town) にあたるヴナハル (Vunahalu)⁵⁾ の市場で換金作物等の売買を行っていた (cf. Naivolasisa 1970: 1-3)。この事業は多大な利益を生み出した (Young 1992: 88)。

輝かしい活動が展開されていたとされるタンバニヴォノ協同組合は、協同組合の役職保持者、ことにエモシによる金銭の取り扱いミスから1952年に破産したという。1949年から1952年までの通算3年強にわたる活動のあいだに、ラワンガ (Lawaga) にある地方議会の事務室には47ポンドしか蓄積することができなかった (Naivolasisa 1970: 3)。

2 ラ・ニ・ラミあるいはラ [1959年－1961年1月9日]

タンバニヴォノ協同組合の挫折の後、エモ

4) トゴヴェレ村落民によると、タンバニヴォノ協同組合は、エモシの他に都市部の協同組合学校にて帳簿作成能力の基礎を習得した人々が組織の中心となり、農作物を市場に卸す業務を主として行っていたという。彼らが扱った作物には、タピオカ、タロイモのほか、ナンログ・ナヴォサの特産品である柑橘類から畜産品までの多岐にわたった。また、エモシの畜産業の先駆性については、トゴヴェレ村落、ラミの広報担当者ともどもしばしば自慢気に語った。近隣で生活しているインド人も、トゴヴェレで畜産業が盛んに行われていた様子を、当時立てられた広大な柵ともども記憶していた。さらに、広報担当者によると、エモシはサルダール (sirdar) としても活躍した。サルダールとはサトウキビを刈り入れる際に組織される集団の指導者である。トゴヴェレ近辺のライワンガ (Raiwaga)、ズヴ (Cuvu) を生活拠点としていたインド人は、不足した労働力を補うべくエモシに目を付け、彼にフィジー人サトウキビ刈り集団のサルダールとなるよう依頼した。エモシがこの仕事を期待以上に果たしたため、インド人はフィジー人的な歓迎方法であるソリ (soli) 一人々が食事、贈り物を持ち寄って提供する儀礼を行い、エモシをもてなしたという。上記の出来事は近隣で生活するインド人の証言とも一致している。現在に至るも、トゴヴェレ近郊のインド人は、エモシをヒンディー語に転訛した「モティシ (Motish)」の名前で鮮明に記憶している。

5) ヴナハルはナンログ・ナヴォサ地方の方言にあわせた表記である。共通語にあたる標準フィジー語では、通常ヴナサル (Vunasalu) として知られている (cf. Surridge 1940: 32)。

シは活動の記録から姿を消した。かわりに指導者として登場したのは、エモシの実の息子にあたるキチョーネ・トクラ (Kitione Tokula) というトゴヴェレ出身のフィジー人である (Naivolasisiga 1970: 4, FT 3/5/1996: 15)。彼はトゴヴェレで5年間メソディスト教会の説教者の職務を果たした人物でもあるが (Naivolasisiga 1970: 4)、彼の親族によると、教会の日曜学校や初等教育以外特別な教育を受けた経験はなかったという (cf. Young 1992: 100)。

このキチョーネは、タンバニヴォノ協同組合が破産し活動を停止した後、1959年あたりに、すでに父親の牧畜業を引き継ぎ、ビジネスを通じて幸福な社会を実現することを説いていたとされる (Naivolasisiga 1970: 4, cf. FT 3/5/1996: 15)。そうしたなか1960年頃立ち上げられたのがラ (Dra) あるいはラ・ニ・ラミ (Dra ni Lami) と呼ばれる集団である⁶⁾ (cf. VP 8/31/1961: 9)。組織名のラ・ニ・ラミとはヒツジの血を意味している。この言葉はフィジー人にとって聖書に含まれる宗教的なものを喚起する表現である⁷⁾ (cf. Naivolasisiga 1970: 5)。以下ではこの時期に結成された集団をラ・ニ・ラミと表記する。

1960年の時点でトゴヴェレ、エムリ (Emuri)、カンビシ (Kabisi)、ヴァガンラ (Vagadra) —いずれも次節で取り上げるブラ・タレに参加した主要な村落—から人々が集まっていた (cf. VP 8/31/1961: 9)。ラ・ニ・ラミは、トゴヴェレを中心とする4村落で形成された集団という意味で、現在ラミと呼ばれる集団構成の原型といえる。

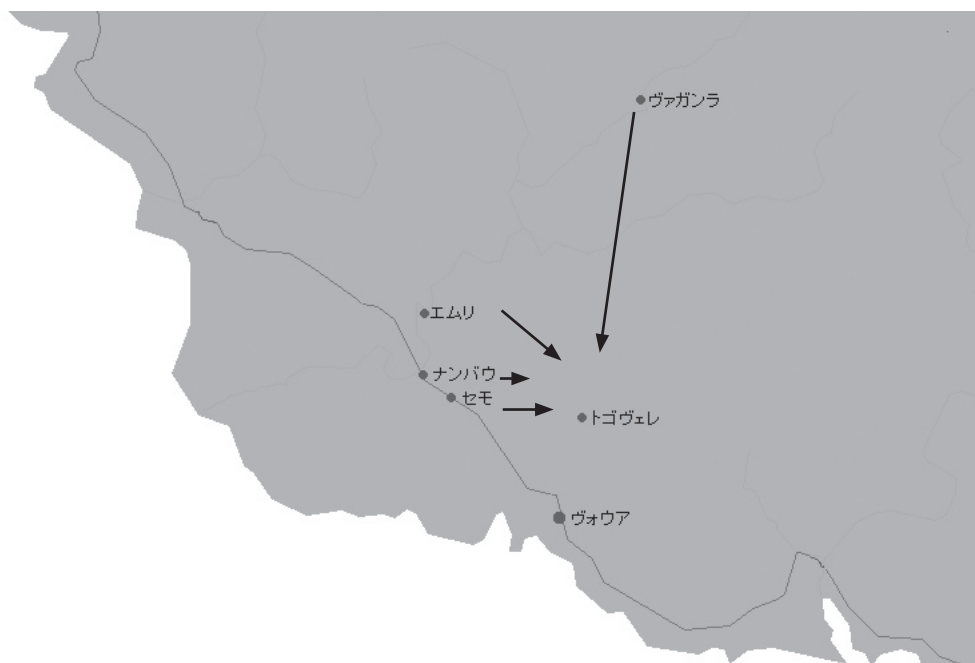
ただし、活動内容の点で、ラ・ニ・ラミが、現在もっともラミ的な特徴として知られている脱「伝統」的活動を実践していたかどうかは定かでない。ラミ的とされるそれ以外の活動、たとえば市場での活動等はすでに行われていた。たとえば、この時点で2箇所の市場にて働き、フィジー人行政の役職であるロコ (Roko)⁸⁾ やナンログ・ナヴォサ地方の大首長であるカ・レヴ (Ka Levu) の子息からも助力を得ていたと記録されている (VP 8/31/1961: 9)。しかしこうしたラ・ニ・ラミの活動も一原因は定かでないが—長続きしなかった。

Ⅲ ブラ・タレの誕生と脱「伝統」運動の成立 [1961年1月10日－8月]

1 ブラ・タレの活動内容

そうしたなかで1961年1月10日、ブラ・タレとしての活動が開始される (VP 7/13/1961: 12, VP 8/31/1961: 9)。ブラ・タレとはフィジー語で再生を意味する。短命に終わった、タンバニヴォノ協同組合やラ・ニ・ラミ等のこれまでの活動の再生に向けた思いを表して命名されたという (Naivolasisiga 1970: 5)。タンバニヴォノ協同組合と同じくトゴヴェレを本部としつつ、ラ・ニ・ラミ以来のカンビシ、エムリ、ヴァガンラの諸村落が活動の中心を担っていた。さらにその他ナンロウマイ、ナンバウ (Nabau) といった近隣の村落からも参加者がいた (VP 7/13/1961: 12, Naivolasisiga 1970)。文字記録には残されていないが、現在のラミのメンバ

- 6) 1959年時点の活動が1960年以降のラ・ニ・ラミとどのような関係にあるのかは、筆者が入手した資料からは判然としない。ラミ関係者もこの時代的編年に関する記憶は曖昧である。一方で、この時点での指導者はキチョーネ・トクラであったと口を揃えて証言している。
- 7) ナイヴォラシガは、ラ・ニ・ラミの語源をインド的な慣習とも関連づけている。しかし、この解釈には根拠が乏しい。彼は、インド人の集住地帯であるバ地方における生活から、ラミのメンバーがインド的慣習を受容したと解釈している。ラミの意味についてはV-1を参照のこと。
- 8) 当時フィジーの行政単位は、上からヤサナ (Yasana)、ティキナ (Tikina)、コロ (Koro) の順に階層化されており、各担当役人はそれぞれロコ (Roko) あるいはロコ・トゥイ (Roko Tui)、ブリ (Buli)、村役 (Turaga ni koro) と呼称されていた (Roth 1973: 144)。



地図1 ブラ・タレの主要参加村落

一の系譜をたどると、ナンバウと隣接するセモ (Semo) の村落民も参加していたことが確認できる。1960年代始めの時点で、メンバーはすでに1,000人前後いたとされる (Young 1992: 90)。

この時点で組織編成に変化がみられた。組織内の役割分担がある程度整備され始め、これまで言及されることのなかった書記の存在が確認できる (VP 7/13/1961: 12)。また、指導者が交替し、キチョーネは活動の表舞台からは退いた⁹⁾。代わりに指導者として登場したのがアピメレキ・ラマタウ・マタカであった¹⁰⁾。もともと医局 (Medical

Department) の事務員として働いていた彼は、メディアでの会見、発言を着々とこなした。メンバーの大半がナンログ・ナヴォサ地方の4村落民から構成されるこの集団のなかで、彼自身は例外的にサンベト (Sabeto) というバ地方の村落出身者である (Lal 1992, Thomas 1997)。彼の妻はブラ・タレの活動が盛んな村落のひとつであったエムリ出身であり、妻方の親族を通じてブラ・タレに参加する契機を得たと推測できる¹¹⁾。

次に、ブラ・タレの当時の活動内容についてみていきたい。まず、ブラ・タレのメンバーは各出身村落を引き払いトゴヴェレ

9) ただし、1992年の死去までキチョーネは実質的な指導力を握りつづけたと、筆者の調査時にラミ関係者は口を揃えて語った。また彼らは、ブラ・タレの指導者ラマタウや後述のラミの指導者エモシは、外部には指導者として対応したものの、集団内部においては、少なくともキチョーネの死去までは、広報担当的な位置づけであったと証言している (cf. Young 1992: 103-105)。

10) 2001年時にラマタウの実兄へとインタビューしたところによると、ラマタウは英語にも長けた聡明な子供ではあったが、教育歴自体は浅く小学校卒であったという。IVに述べるように彼は共産党を設立したが、ロシア語も習得していなかったという。

に集住し、ブラ・タレ独自の規則に従った。規則を具体的に検討してみると、家具等の財産 (iyau) や農場からの収穫物 (vua ni qele) 等はすべて一箇所に集められ、共用されるなど、共同での生活が重視された。農場、食堂、調理場も共同で利用された (VP 7/13/1961: 12)。各人の私有の財を捨て去るこうした活動は、キチョーネが率先して始めたとされている (Young 1992: 88-89)。

また、ブラ・タレとしての自律性も持っていた。これは、先住民法廷 (Veilewai vakaitaukei)¹²⁾ を利用せず、ソリ・ニ・ヤサナ (soli ni yasana) と呼ばれる地方税¹³⁾ はブラ・タレで一括して支払う (VP 7/13/1961: 12) という方針にもみて取ることができる。ブラ・タレ独自の学校を作るなど教育に関する改革案もあったようだが (cf. FT 8/12/1961), ブラ・タレの子供たちは、この時点ではまだ通常の学校教育を受けていたという (VP 7/13/1961: 12)。

規則は日常生活の様々な局面にも及び、酒、タバコといった嗜好品の消費は禁止された。石炭や灯油はブラ・タレ側で一括して用意され、各人に配分された (VP 7/13/1961: 12)。さらにメンバーは、ブラ・タレ側で定められたタイム・テーブルに従って日常生活

を送っていた。一日の生活は次のように律せられていた。朝の5時に起床し、村落内の清掃を始める。7時には休息をとり、8時から朝食の時間となる。1時間後の9時に仕事を再開し、11時には昼食の準備を始め、12時に昼食をとる。午後1時から仕事を再開し、夕方4時まで働き続ける。4時で一日の仕事は終了する。それ以後、6時の夕食までは自分の畑で農作業を行うなど、各人にまかせられた。9時が就寝時間とされた¹⁴⁾ (VP 7/13/1961: 12, cf. FT 8/12/1961)。

フィジー人の「伝統」的活動とされる様々な慣習の手順も禁じられた。たとえば、セヴセヴ (sevusevu)¹⁵⁾、結婚式、葬儀等といった「伝統」的義務を放棄した。さらにブラ・タレの規則は、それなしでは多くの儀礼が進行さえまならない「伝統」的な交換材であるタンブア (tabua)¹⁶⁾ を文字通り捨て去り、フィジー文化の要であるカヴァ¹⁷⁾ の飲用を禁止することにまで及んでいた (VP 7/13/1961: 12)。

同様に、キリスト教的活動も行わなかった¹⁸⁾。トゴヴェレにあったメソディスト教会施設は、ブラ・タレ活動のために利用された (VP 7/13/1961: 12, Naivolasisa 1970: 4)。メソディスト派のキリスト教 (lotu) は当時

11) フィジー語の辞書において (Tabana ni Vosa kei na iTovo Vakaviti n.d.), ブラ・タレの拠点がエムリとされているのは、英字新聞の一節に基づいた記述と推測される (FT 8/12/1961; cf. Durutalo 1985: 406)。ただし本文中に記したように、実際の拠点はトゴヴェレであった。事実、同時期英字新聞に掲載されたラマタウの投書には、彼自身の手でトゴヴェレが拠点であったと明記されている (FT 9/2/1961)。このことは、ラミ関係者の証言とも一致している。

12) 先住民法廷とはフィジー人のために設置された法廷の制度である。

13) 当時フィジー人は、各人の出身地方 (yasana) ごとに割り振られたソリ・ニ・ヤサナとよばれる税金の一種を支払う義務があった (Roth 1973: 150-163.)。

14) 1980年代まで熱心なラミのメンバーであった複数の老人によると、こうした日常の生活を拘束するスケジュールは、週ごとのみならずラミ独自の年間カレンダーとして存在していたという。しかしいずれもバ地方への移転以降、利用されることはなくなった、と語られた。

15) セヴセヴとはフィジーの村落を最初に訪問した際に、客人がカヴァ (kava) の根を村落の首長に献上する入村儀礼のことである。カヴァとはフィジー語でヤングナ (yaqona) と呼ばれる胡椒科の植物の根から作られた飲み物を指す。

16) タンブアとは鯨の歯でできた交換財の一種である。

17) カヴァについては、注15を参照のこと。

18) 活動初期にキチョーネは聖書を屋外に投げ捨てたと言われている (Young 1992: 89)。同様の挿話は筆者も調査時に、その場に居合わせたというトゴヴェレ出身の老人から耳にしている。

すでにフィジー人の生活の隅々まで根付いていた。そのためブラ・タレの反キリスト教ともとられかねないこうした活動に、フィジー人からの反発を予期したのか、ラマタウも「キリスト教を捨てたわけではない」と弁明している (VP 7/13/1961: 9)。ラマタウによると、宗教を捨てるかどうかという問題ではなく、キリスト教にあまり熱心になりすぎないよう人々に呼びかけたということであった (VP 8/3/1961: 9)。

しかし、ブラ・タレの宗教観はフィジー人のあいだに賛否両論を巻き起こした。たとえば、メディアの報道以前からブラ・タレの活動を口コミで耳にしていたあるフィジー人 (トゴヴェレ近隣のバ地方の村落出身) は、ブラ・タレが「伝統 (itovo vakavanua)」を嫌っていることはともかくとして、キリスト教を捨てた点は問題だと非難した (VP 7/20/1961)¹⁹⁾。反対に別のフィジー人 (バ地方出身) は、地球上の総人口の半分以上はキリスト教徒ではないとブラ・タレ側を弁護した。そのうえで後者は、ブラ・タレに見受けられる「共同での労働 (solesolevaki)」は、フィジー人の「開発 (vakatoroicaketaki)」に役立つものだとバーンズ報告 (Burns Report)²⁰⁾を参照にしつつ指摘した (VP 7/20/1961)。後者の見解を支持するかのように、実際に彼らの活動を目にした記者は、その特質を「自由 (galala)」を求めているのではなく、「共に働くこと (cakacaka solesolevaki)」にあるのだと述べた (VP 7/13/1961: 11)。

ブラ・タレは1村落内に留まらず、対外的にも様々な活動を行った。商業活動にも乗り

出し、トゴヴェレ近隣のロマワイ (Lomawai) とナンディ (Nadi) 近くのナマカ (Namaka) の市場にて小売業を営んでいた。トラックも1台所有していたという (VP 7/13/1961: 12)。

また、ラマタウは、みずから足を運び、当時の政府側へもブラ・タレの活動を喧伝した。ナンログ・ナヴォサ地方の地方行政を司る役人の長であるロコ・トゥイ・ナンログ (Roko Tui Nadroga)²¹⁾とは2度面会しており、首都スヴァ (Suva) にいたフィジー人担当省副長官ラトゥ・マラ (Ratu Mara) にもブラ・タレの活動内容について報告した (cf. VP 7/13/1961: 11)。さらに、ラマタウによると、ブラ・タレの活動を披露すべくラトゥ・マラをトゴヴェレに招待したという (VP 8/17/1961: 11)。

以上、1961年時点ですでに成立していたブラ・タレ規則と活動の特徴について記述してきた。冒頭で手短に紹介したラミの特徴である特異な活動が、すでに始められていたことが分かる。たとえば、フィジーの「伝統」とされる諸儀礼とキリスト教的諸儀礼を簡略化・廃止していく活動の傾向はすでに確立している。商業活動を重視した勤勉な労働倫理も目にすることができる。参加村落の構成も現在と変わりがなく、ラミの現役メンバーの多くは、この時代に参加していた人々の子孫にあたる。

2 ブラ・タレの参加主要村落の特徴

ここでブラ・タレ参加村落の主要な特徴について述べておきたい。ブラ・タレに参加した主要4村落のうち、トゴヴェレ、エムリ、

19) ただし彼の批判は、感情的ではなかった。ブラ・タレについて調べてみて彼らの試みが順調に伸展しているのであれば支持し、そうでないなら補助してやるべきだと紙上にて私見を述べている (VP 6/20/1961)。

20) バーンズ報告 (Burns 1960) は、前ナイジェリア総督のバーンズを指導者として、フィジーの人口動態、天然資源から政治制度、社会的問題までを扱った包括的な調査調査報告書である。1960年に発表された。

21) ロコ・トゥイについては注8を参照のこと。

カンビシの3村落はズヴ²²⁾地区に位置する (Seruvakula 2000: 147)。エムリとカンビシは、お互いに徒歩で15分ほどの距離に位置する。トゴヴェレは、エムリ・カンビシから多少離れているがそれでも両村落から馬で1時間以内の距離にあり、3村落は隣接している。ヴァガンラのみが、シガトカ²³⁾地区にあたり (Seruvakula 2000: 147)、ナンディから車で1時間半ほどかかる高地に位置している。ヴァガンラへの交通の便は現在でも非常に悪い。土地の生産性という点でも村落ごとに様々で、トゴヴェレがタラシガ (talasiga) と称される灌木の広がる乾燥地帯で生産性の乏しい土地にある一方で、ヴァガンラは肥沃な土地を持つことで近隣でも名高い。

言語的にみても、地域の政治体系においても、ブラ・タレ4村落には共通点が少ない。カンビシはトゴヴェレの分村ということもあり、同じ方言域に属し、概ねクランに相当する同一のヤヴサ (yavusa) に所属している。しかし、残りの2村落は、トゴヴェレ・カンビシとはそれぞれ別のヤヴサに属し、独自の首長を有している。また、トゴヴェレ・カンビシ、エムリ、ヴァガンラの三者はそれぞれ異なる方言域に属している。

各村落の土地所有状況についてみておきたい。エムリとヴァガンラは通常のフィジー人村落と同様にマタンガリ²⁴⁾ごとに区分されたネイティヴ・ランドを共同所有してい

る。一方で、トゴヴェレ、カンビシにはそうした土地所有権がなかった。トゴヴェレ村落民は、1911年に開かれた土地請求委員会 (Lands' Claims Commission) による土地の区画と所有者を確定する協議の席でうまく交渉を進めることができなかった。そのため、トゴヴェレの土地は近隣のズヴ地区のヴォウア (Voua) 村落の所有物とされてしまったとされる²⁵⁾ (cf. Durutalo 1985: 407, Young 1992: 85-86)。カンビシ村落民は、トゴヴェレ村落民と同じマタンガリに属しているため、土地に関する条件もトゴヴェレと基本的に同じである。ただし、彼らが現在生活している土地はヴォウアの所有する土地ではなく、ステート・ランド²⁶⁾にあたる合計49エーカーのなかに位置している。なぜなら、カンビシ村落民によると、カンビシはアポロシ・ナワイの運動が盛んであった時期に、アポロシの教えに従って現在の土地に移動したという歴史的経緯があるためである²⁷⁾。

このように、同じブラ・タレ参加村落とはいえ言語、地方の政治体系、土地所有の状況等の点で、4村落は共通点が乏しいといえる。つまり何らかの特徴を共有する集団がブラ・タレという組織を立ち上げたというよりは、これまで漠然とラ・ニ・ラミの活動を通じて知り合った人々が、さらにお互いの親族のネットワークを通じて人々を集め、ブラ・タレとしての輪郭を明確にかたどっていったとい

22) 旧地区 (Tikina Makawa) の名称は、トゥヴァ (Tuva) といい (Seruvakula 2000: 147)、現在でも自己の出身地区をトゥヴァと説明する人は多い。

23) 旧地区名称は、ワイゾンバ (Waicoba) という (Seruvakula 2000: 147)。前注と同様、現在でも自己の所属地区をワイゾンバと認識している者は多い。

24) 場合によっては、この土地所有単位がヤヴサになったり、およそ大家族に相当するトカトカ (tokatoka) になったりすることがある。

25) トゴヴェレの村役によると、2000年にトゴヴェレの土地は正式にトゴヴェレの人々に返還されたとのことである。土地に関する情報は秘匿性が高く、政府資料へのアクセスも制限されている。そのため、ここでの情報の多くも村役が保持する公式な見解にのみ基づいて記述している。ズヴ側には、トゴヴェレ村落民が土地所有権を失った経緯に関する若干異なる説明が存在している。

26) ステート・ランドについては、注2を参照のこと。

27) 以上の経緯を記録した資料を発見することはできていない。ただしこの話は村役をはじめとするカンビシの人々に公式的な出来事として語り伝えられている。また、カンビシの土地がステート・ランドに分類されていることも事実である。

える。

3 ブラ・タレ規則の目的

Ⅲ－1で述べたブラ・タレの特異な活動実践は、指導者キチョーネ・トクラがある種の夢見を通じて思いついたと記録されている²⁸⁾ (Naivolasisiga 1970: 4, Young 1992: 88)が、活動実践が具体的にどのように考案されたのかはあまりあきらかでない。その一方で、活動の目的については比較的明瞭な発言が残されている。たとえば、「ブラ・タレの声」と題された短い文章では、ブラ・タレのメンバー8人が次のように記している。彼らは、社会の変化にうまく適応できていないフィジー人の現状を問題視して、「死んだ状態から再度立ち上がり、あらたな世界へ向けて自由のために走る。旧い世界のやり方 (ivalavala) と衝突したり、それに目をとられてはいけない」(VP 8/31/1961: 9)と社会変革の必要性を表明した。そのうえで、彼らはブラ・タレの活動目的を「旧い世界の重荷から人間を解き放つことが目的だ。世俗 (vuravura) の金銭や物品が必要とされているのではない。魂 (yalo) だけだ。思いやりということにおいて我々は一つになれるのだ (ME DA DUAVATA ENA VEILOMANI)」(VP 8/31/1961: 9)と述べた。

我々はこうした発言に、今日まで続くラミ規則の原型をみることができる。つまり、ブラ・タレは、既存の生活方式に批判的距離をおく脱「伝統」的な生活を志向していた。また同時に、相互の思いやりや慈愛を意味するヴェイロマニ (veilomani) を、先の発言の結びのように大文字で書き、その意義を強調している。ヴェイロマニとは、ロロマ (loloma) というやはり慈愛を意味する単語

から作られた言葉で、後のロロマを重視したラミ活動の萌芽をここに読みとることもできる。

Ⅳ ブラ・タレ共産党²⁹⁾期の活動 [1961年8月－1962年6月]

1 ブラ・タレ共産党へ

ブラ・タレとしての活動が開始して半年以上過ぎた1961年8月、ブラ・タレはブラ・タレ共産党 (Bula Tale Communist Party) へと再度改名した。ラマタウはみずからの協同組合活動の内容を「共産主義」として積極的に規定して、フィジー・タイムズ紙上にて公表した (FT 8/25/1961)。

ラマタウが共産主義という言葉で、いつどこで聞き知ったのか判然としない。遅くとも1961年8月12日には、ブラ・タレの特異な活動を目にした人々から、「私は共産主義者と呼ばれてきた」という彼の発言をみつけることができるが (FT 8/12/1961)、この情報だけから彼が共産主義の原理を信奉していたかどうかの判断を下すことは難しい。共産主義者であると明言したのは、先述したように1961年の8月25日のことである。彼が共産主義に関する情報を得たのは、彼の同郷者で、著名な組合運動家であるアピサイ・トラ (Apisai Tora) からの可能性が高い。トラ自身はマレーの兵役に従事した経験から、共産主義についてある程度の情報を得ていたと推測できる (cf. VP 10/20/1960)。

ラマタウは、共産主義を「共同体に財産が帰属しており、メンバーは各自の能力に応じて働き、各自の欲求に応じて受け取る」(FT 9/2/1961)と定義した。そして、ブラ・タレ共産党は、「理念及び実践において共産主義的」で植民地政府、フィジー人行政部に

28) 2002年の調査の時点で、このラミ規則の起源にまつわる伝承のほぼ同じバージョンをラミの指導者及び中核メンバーから聞くことができた。

29) ラミを取り扱った先行研究では、興味深い彼らの行動のためであろう、どの研究もこの時期を中心に扱っている (cf. Lal 1992; Thomas 1997)。また、この共産党宣言をめぐる騒動と顛末の詳細については丹羽 (2003) を参照のこと。

つぐ「第3の政府」であると主張し、「もし皆の生活をよくするのが共産主義であるのなら、何がいけないんだ」と断言した（FT 8/25/1961, cf. Lal 1992: 188）。

ところが、フィジー人協会執行部、フィジー人教職員協会及び各種メディア等の各界から予想以上の反発を受けたためか（cf. 丹羽 2003: 73-74）、ラマタウは発言のニュアンスを若干変えた。ブラ・タレ共産党の理念・目的は、「私有財産という外来の教義からフィジーを伝統的な共同的所有へと戻す」（FT 9/2/1961）ことを意味したにすぎず、共産主義という標語はかかる事態を表現しかつ人々を驚かせるために便宜上使用したにすぎないと、ラマタウは述べた。そして、当然のことながら海外で活動している共産主義や国際的な政治運動とは何ら関係がなく、すでにナンログの村落で実践している原理をフィジー各地に広めただけであった、と付け加えている（FT 9/2/1961, cf. VP 8/31/1961: 12）。

特に批判が寄せられた共産主義と宗教との関係についても、ラマタウによれば、ブラ・タレの活動には宗教行為を否定するようなことはまったくない。ラマタウ自身キリスト教を信仰しているし、私有財産の否認に関していえば、初期キリスト教ではどのような私有財産をも承認しなかったはずであるというのが彼の言い分であった（FT 9/2/1961）。すなわちフィジー人に共産主義者はいないし、ブラ・タレが行っているのは「協同組合的起

業（cooperative venture）」にすぎないというのである（FT 9/2/1961）。

こうしたラマタウの発言の意図がどこにあったのかを、今の時点で判断することは難しい。しかし、彼の指導するブラ・タレが、当時の政府にいつそう注視される存在となったことは間違いない。たとえば、1961年9月6日水曜日、ヨーロッパ人2人、フィジー人2人からなるナンログ・ナヴォサ地方を管轄する行政官4人³⁰⁾が、ブラ・タレと関連する4村落を巡回、視察した³¹⁾（FT 9/8/1961）。さらに、9月中旬に、ブラ・タレの指導者ラマタウは、ナンディ空港に侵入した疑いで逮捕された（FT 9/19/1961, VP 9/21/1961）。彼はナンディ空港勤務の友人と会うために出向していただけであったという。

2 ブラ・タレの活動と意義の変化

一方で、上記のラマタウの発言をみる限り、ブラ・タレのメンバーと日常的な活動内容自体に変化はなかったようである³²⁾。この時点で、およそ1,000人近くメンバーがいたという（Lal 1992: 188）。ただし、教育に関しては、次第にブラ・タレのメンバーの子弟をブラ・タレの内部で自主的に教育する規則が確立したと推測できる。たとえば1961年9月25日あたりから、総計43人にのぼるブラ・タレ子弟の登校拒否に端を発して、1961年11月ブラ・ラレは区立セモ学校（Semo District School）の教員と対立するという事件を起こした。不登校の理由につ

30) 4人とは、西部の長官ヒル（J.A.C. Hill）、地域役人ヒュース（C.A.A. Hughs）、ロコ・トゥイ・ナンログという政府の役職を担い、彼自身ナンログ・ナヴォサ地方の大首長の家系にも属していたラトゥ・ワケサ・ヴォサイラギ（Ratu Wakesa Vosailagi）、及びラトゥ・モセセ・ヴァラシケテ・トゥイサワウ（Ratu Mosese Varasikete Tuisawau）であった（FT 9/8/1961）。

31) 別の情報では、トゴヴェレ、エムリ、カンビシの3村落が訪問されたとされている（VP 9/14/1961）。ヴァガンラが他の3村から大きく離れていること、同村の交通の便の悪さを考えるとこちらの方が蓋然性が高い。

32) 2002年トゴヴェレで村人にインタビューしたところ、当時熱心なブラ・タレの活動家であったという60代の老人は次のように語った。「ところで共産主義とは何なのか？確かに一時期共産党と名乗ったのは事実だ。でも我々が実際に行っていた活動には何ら変化がなかった。村のなかで一生懸命畑を耕していただけだ。そもそも共産主義とはそんなに悪いものだったのか？」

いてラマタウは、金銭的理由から子供たちを学校へ出席させることができなくなったと弁明した (FT 11/18/1961) が、登校しなかった児童の数を考えると組織的な行動であった可能性が高い³³⁾。この対立は最終的に法廷に持ち込まれ、ブラ・タレ側が敗訴した (FT 11/18/1961, VP 11/23/1961, cf. 丹羽 2003)。

こうした周辺社会との対立を経て、ラマタウ自身もブラ・タレ活動に若干ニュアンスの異なる意味づけをし始めた。ラマタウは、ブラ・タレとは神の国 (Matanitu ni Kalou) とその公正さを探求しており、ブラ・タレの活動を通じて、地上の豊かさを手に入れやすくすることを望んでいると説明した。そして、ブラ・タレは、フィジー人が儉約を知らない怠惰な人々であり、土地をきちんと活用することもできないと考えられていることを憂慮し、ブラ・タレの活動を通じてフィジー人のなかにも向上心のある人々がいることを示したいと述べた (VP 1/25/1962: 7)。この発言をみる限り、共産主義的な言辞は影を潜め、むしろブラ・タレの規則には若干宗教的な色彩が加えられたようである。

ただし、ラマタウが少なくとも個人的に現世的な社会変革をも希求し続けていたことはあきらかである。事実、先の発言の後半

で、彼は社会改良への意志を語っていたし、1963 年の選挙前には、政治的なコメントもするようになった。たとえば、同選挙においては、コモン・ロール (common roll)³⁴⁾ に基づく選挙方法を積極的に推奨した (VP 3/29/1962: 8)。また、ラマタウはラミの活動から離れ、西部フィジー社会をベースとする西部民主党 (the Western Democratic Party) の結成にも関わっている (cf. 丹羽 2003: 77-78)。

V ラミの活動展開

1 ラミ前期—ナンロガ・ナヴォサ地方にて [1962 年 6 月—8 月]

ラマタウが政治活動へ傾斜し始めるなか、ブラ・タレは 1962 年 6 月に集団名をラミと突如変更し、指導者はラマタウからエモシ・ソヴェ³⁵⁾へと引き継がれた (VP 6/7/1962: 12, VG 6/8/1962)。ラミとはヒツジを意味するフィジー語である。聖書にも典拠があるため、イエスを象徴する意味が込められていると一般的に理解されている³⁶⁾ (cf. The Bible Society 2004: 779)。名前はラミ (lami: ヒツジ) のような口ロマという集団の理念を表している³⁷⁾ (VP 6/7/1962: 12)。

33) ラミ退会者のある老人 (ヴァガンラ出身) によると、キチャーネ・トクラは学校では口ロマを学習することができないため、集落内で子供たちに教育を与えるべきであると語っていたという。2002 年、筆者がラミ集落を訪問した際にも、子供は学校に送られていなかった。

34) コモン・ロールによる選挙方法とは、フィジー人がフィジー人を選択し、インド人がインド人を選出するコミュニアル・ロール (communal roll) に対して、各人の民族に関わらず立候補者に票を投じることが可能となる選挙方法である。フィジーの歴史において、フィジー人がコミュニアル・ロールを、インド人がコモン・ロールを好む傾向が強い。ラマタウはそうしたなかフィジー人としては例外的にコモン・ロールを推奨しているのである。

35) このエモシ・ソヴェは、タンパニヴォノ協同組合の指導者エモシ・ソヴェとは同名の別人である。フィジー人の慣習で同じ名前を共有する関係をヴェイヤザニ (veiyacani) という。彼ら 2 人もこの関係にあった。

36) 典拠は旧約聖書のイザヤ書 53 章 7 節である。また、新約のヨハネ伝 1 章 29 節には、「その翌日、ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのをみて言った。『みよ、世の罪を取り除く神のヒツジ (Lami) だ!』」(cf. The Bible Society 2004: 119) という一節もある。なお、括弧内の翻訳にあたっては、新共同訳を参照した (共同訳聖書実行委員会 1991: 164)。

37) ラミ関係者の証言によると、ラミという名は、キチャーネ・トクラの息子の名前イラミにちなんで命名された可能性もあるという。イラミはラミにとって特別な存在であつたらしく、ラミのメンバーのなかには 1977 年に彼が死去した際に、彼の名と死亡年を体の一部に入墨した者もいる。また彼の誕生日 9 月 16 日は、いまでもラミの基金集めの祭りが開かれる日となっている。



図1 ラミ

出典 (VP 8/23/1962:11)

活動場所は、ブラ・タレ期と変わらずナンログ・ナヴォサ地方のトゴヴェレを中心としていた。キチョーネの親族によると、エモシはキチョーネと同様トゴヴェレ村落民であるが、彼と直接の血縁関係はない。そしてやはりキチョーネと同じく初等教育しか受けていないという。

集団名こそ変更されたが、当時出版された資料を検討する限り、ブラ・タレの特徴であった「伝統」を改変する規則に目立った変化はみられなかったと推測できる (cf. VP 6/21/1962: 11)。ただし以下で述べるように、仲買をはじめとする市場での商業行為にいつそうの力を注ぎ、同時に、活動の原理としてロロマの考えをさらに強く打ち出し始めた。商業行為も経済的利益を追求する活動と理解されるだけでなく、人類全体の利益向上を目指す、ロロマを求める活動とされた。

では、この時期の活動実態を具体的にみていきたい。まず食物の廉価販売や高価格での買い取りを実施した。たとえば、1962年6月4日にトゴヴェレ村落に2日間滞在した経験をもとに作成された探訪記事は、村落の様子を次のように記している。トゴヴェレで

は、1袋15シリング³⁸⁾が相場のオレンジが1袋10シリングの安値で販売された。ラミのメンバーは、1ダース9シリングが一般的な相場の朝食用のパンを12シリングほどで購入しようとした。ナンディに設置されたラミのメンバーが経営する市場では砂糖5単位重量 (bibi)³⁹⁾ 当たり1シリング、小麦粉3単位重量当たり1シリングという格安の値段で販売を行っていた。さらに、1962年9月6日のナンディ市場において、ラミは砂糖の無料配布を行った (VP 6/7/1962: 12)。1962年から1967年にかけては、ナンログ諸村落を中心に、草の根レベルの村落開発援助を行ったという証言もある。具体的には、村落ストアなどの小規模ビジネスへと援助を行い、支援は総額100,000ドルにも及んだとされる (Young 1992: 101)。

こうしたラミの活動は、ロロマを口にしていただけでは駄目で、ヒツジのようにロロマに従って生活しなければならないという理由に基づいているという。指導者エモシも同様に、ロロマの説教は聞き飽きた、むしろ我々はロロマを実行に移さなければならないと、意見を述べた。取材した記者は「ブラ・タレの人々が安らぎのある生活とヒツジのようなロロマを求めているのをみた」と締めくくっている (VP 6/7/1962: 12)。

さらにラミは仲買業にも進出した。ナンディの市場では、ラミのメンバー以外のナンログ地方の各村落民との間でも食物の売買を行った。たとえば、毎週金曜日にフィジーの主要作物であるタピオカを20袋 (taga) 集め販売したという。ある日の例では、トゴヴェレ近郊のナンドゥリ (Naduri) (2袋)、ライワンガ (1袋)、ナンロウマイ (3袋) といった諸村落や、コロニサガナ (Koronisagana) (2袋)、ヴァガンラ近郊のヴナモリ

38) もとの資料に具体的な価格単位が記載されていない箇所には、前後の文脈から推測して記載してある。この時期フィジーではポンド制を採用し、1ポンドが20シリング、1シリングが12ペンスであった。1969年以降ドル制に移行した (Lal 1992)。

39) ビンビ (bibi) とは重量単位である。具体的にどの程度の重さに対応していたのかは不明である。

(Vunamoli) (1 袋), ヤヴサニア (Yavusania) (1 袋), ワイゾンバ (3 袋) などからタピオカを持ち寄った。それに加えて, ヴァガンラから 3 袋, ラミのメンバーから 4 袋収集し, 合計 20 袋集めた (VP 7/5/1962: 11)。別の日には, タピオカの供給が過剰気味だったのでナンロウマイや, ヴナモリ, ワイゾンバは, 前二者が 3 袋ずつ, 後者が 2 袋のタピオカをラミのストアへ持ち寄ることを通達するなど, 各村落の供給量を調節しながら売買した (VP 7/12/1962: 8)。

こうした仲買業は, タピオカの販売経路を整理することが目的で, 一般の人々をラミへ勧誘することが目的ではないとエモシは説明した (VP 7/12/1962: 8, VP 7/19/1962: 8)。なぜこれらの村落が選択されたのかは不明である。ただし, いずれの村落もラミの中心的 4 村落の近くに位置しており, ラミのメンバーとも婚姻等を通じて親族のネットワークで繋がれていたため, 取引の依頼がしやすかったと推測できる。

さらに, 仲買業はたんなる商業行為ではなくラミ独自の理念に基づいて行われていたことも見逃せない。たとえば, ナンログ・ナヴォサ地方ロロマ (Lomaloma) の市場において「ロロマを渡す (solia na loloma)」活動が展開された。午前 8 時から午前 11 時まで開いた後, 2 時間の休憩を挟んでさらに午後 4 時まで開かれたという同市場の販売所では, 砂糖を 4 単位重量あたり 2 シリング, 小麦粉を 3 単位重量あたり 1 シリング, そしてタピオカをひとやま 1 シリングで販売していた。この売買の特徴的な点は, 取引終了後, 買い物客にレシートを渡しそのレシートに記載された取引額が一定水準まで達すると, ロロマとして金銭を一部払い戻す所にあった。たとえば, 砂糖であれば 36 単位重量で 5 シリング 3 ペンス, 小麦粉は 36 単位重量購入すると 4 単位重量あたり 4 ペンスの返済, タピオカは 1 ポンド購入してレシートを持参すると一定額をロロマとして返済した。市場

の販売人 (ラミのメンバー) は, 今後ロロマ支払いの対象になる商品の種類を徐々に増やしていき, 紅茶, 鮭の缶詰, 石鹼等も含めていきたいと述べた。そして, 彼にとってロロマがどんどん貯蓄されていく (tubu ga na loloma) こうした活動は, 収益に反する行為であるにもかかわらず, 肯定されるべき活動であると語った (VP 6/14/1962: 12)。

以上のようなロロマという独自の論理に基づく市場での活動を, ラミのメンバー (ナンディでラミのストアを経営) は以下のように正当化している。「利益 (tubu ni ilavo) について私に質問しないでくれ, それは人の血を吸うサタンの仕業 (cakacaka ni Setani) だ。お互いを傷つけるような行為は禁止されている, これは慈愛のストア (sitoa ni veilomani) なのだ。この世界中の人々が健康ならそれにまさる幸せはない。…これはあらたな世界 (vuravura vou) のストアだ。我々フィジー人 (iTaukei) のあらたなストアなのだ。我々の利益はロロマなのだ」 (VP 6/21/1962: 11)。ここでは, 経済的損得よりも, ロロマを重視するというラミの考えが表明されている。同時に, ロロマとは, ラミのメンバーに限らず世間一般の人々の生活向上に役立つという理由で重視されていることが伺える。

指導者エモシ自身は, ロロマとして払い戻したお金を人々に生活の活力 (bula) をもたらさないこと—ヤングナを飲んだり, 結婚式, 葬式やその他の様々な雑事—に利用すべきでないと主張した。なぜならこうした雑事はフィジー人を縛り付け, 「人々の魂を曇らせる (vakabutobutotaka) もの」だからである。ゆえに「悪魔の仕業 (vakatevoro) に由来する悪習は捨てるのだ」 (VP 6/21/1962: 11) と自説を展開している。

また, ラマタウと同様, エモシも指導者に就任した 1962 年の 6 月末から, メディアでの発言を開始した。以上に述べたようなラミの規則にまつわる話題はもちろんのこと, 次

第に発言の幅を広げ、アメリカのアポロ月面着陸の意義について論じるなど啓蒙的な側面を有していた⁴⁰⁾。ただし、ラマタウと違い、エモシは政治的な見解を述べることはなかった (VP 6/21/1962: 11)。

この時期の、ブラ・タレ期との最大の違いは、悪習を捨てるという生活改善を通じた変革への意志は共通しているものの、ロロマという理念をよりいっそう前面にうち立てた活動を始めたという点にある⁴¹⁾。また、ブラ・タレ後期のラマタウの発言に伺えた宗教的色彩は薄れ、指導者の発言から直接的な政治色もなくなった。

2 ラミ中期—バ地方への移転以降 [1962 年 8 月—1980 年代後半]

前節で述べたラミ組織上の転換にも関わらず、ラミの特異な活動は周辺社会や時の政府の理解や賛同を得ることは難しかった (cf. 丹羽 2003: 79-80)。事実、ラミは、以下で述べるように税金未払い問題に端を発してナンログ・ナヴォサ地方から追放されるという憂き目にあった。

地方税未払い問題とは、ラミのメンバーがソリ・ニ・ヤサナと呼ばれる地方税を滞納していたことから起きた問題である。税金をたんに滞納していたという問題に留まらず、当時の地区議会 (Tikina Council) は、税金滞納を口実として、ラミのメンバーにトゴヴェレ村落からの立ち退きの決議まで下したのである。新聞報道によると前年度に続き 1962 年 8 月 24 日に、ブリ・ズヴ (Buli Cuvu)⁴²⁾ と警察が視察のためトゴヴェレに派遣され

た。トゴヴェレから海へ向かって徒歩 1 時間ほどの距離にあるヴォウアに駐在していた彼らは、1962 年 8 月 22 日に開かれたこの地区議会の決議を受け、ラミに対して 1 週間以内の立ち退きを勧告した (VP 9/6/1962: 11, VP 9/13/1962: 11)。

ラミは、この勧告を受けて、周辺諸村落とちょっとしたいざこざが起きていたこともあり (cf. 丹羽 2003)、トゴヴェレ村落をいったん引き払い、フィジー西部の都市に散らばって生活した (Naivolasisiga, 1970, cf. VP 11/29/1962)。その後、バ・タウンに借家を求め、そこに落ち着いた (Young 1992)。このバ・タウンへの移転の際に、ラミは多くの脱落者を出した。ブラ・タレ共産党の時期には、およそ 1,000 人近くいたとされるラミのメンバーは、バ・タウンに移動した時点で 150 人程度にまで減少したとされている (Naivolasisiga 1970: 17)。

こうした居住地の移転という大転機の後には、ラミの活動はどのように変化したのであろうか。ラミ参加者と同じくナンログ・ナヴォサ地方の出身である牧師エパラマ・ナイヴォラシガが、バ・タウンのラミ居住区及びトゴヴェレにおいて行った調査のデータを参照すると、移動後も、ブラ・タレ時代に生み出された規則自体に変化はみられなかったと分かる⁴³⁾ (Naivolasisiga 1970)。指導者の交替はなされず、エモシが指導者を続けた。メディアでの啓蒙的発言も引き続き行い、インターフェロンという新薬の開発とその影響や (VP 8/23/1962: 11)、保険会社の意義などについて (VP 4/5/1963: 2)、ラミとしての見解を

40) 1983 年の調査の際、ラミの車のドアに「アポロ 11」の題字のある宇宙船の写真が張り付けられているのを、ヤングはみつけている。彼によると、この写真は近代社会のビジネス分野における開拓者像、つまり進歩的なフィジー人というラミの自意識を象徴しているという (Young 1992: 91)。

41) ラミの信奉者の中には、現役メンバーであるか退会者であるかを問わず、みずからの協同組合の別名を「慈愛の協会 (Soqosoqo ni Loloma)」であると話す人が現在でも少なくない。

42) ブリについては、注 8 を参照のこと。

43) ただし、筆者が調査時にラミの現役メンバーとインタビューを重ねたところによると、このバ地方への移転を契機として、ラミ規則の規制は概して緩やかになったになったという。



地図2 バ地方への移転

述べている。また、以下にみるようにロロマを中心とした活動である点にも変化はなかった。

ナンディのストアは閉店されたが (cf. VP 11/29/1962), 市場ではラミ独自の活動を相変わらず展開した。たとえば, 1963年3月2日土曜日からバ・タウンの市場で金銭の信用貸しを開始した。その後, 毎週月曜日と木曜日に1シリングごとに4ペンスの額で金銭の貸し付け商売を続けた。この信用貸しは, 相互扶助に役立つ金銭の提供を目的とするもので, お金を必要とする者なら誰でも貸し付けを受けることができた。指導者エモシによると, バ・タヴァ (Tavua) を管轄する DO⁴⁴⁾ とラミのメンバー1人がこの信用貸しの管理者になっていたという (VP 3/8/1963: 8)。

貸付金の返済に関していえば, 必ずしも現金で支払う必要はなく, バ・タウンの市場に

あるラミの販売所で買い物をすれば, この取引行為をもって返済完了とみなされた。現金で返済するとしても, 借入した額と同額の返済で充分とされ, 利息は付かなかった。さらに, 返済は各人の宗教的な信仰心 (nona dina ki nona lotu) に委ねられ, 貸付金を返済しないとしても法廷に訴えるなど返済を強制することはなかった。人間に対するロロマを持つべきで差別はよくないという理由から, フィジー人, インド人, ロトゥマ人⁴⁵⁾ など民族に関わりなく, この信用貸しを頼ることができたという (VP 3/8/1963: 8)。

1963年3月22日木曜日には, ラウトカでも市場を開設した。それ以後しばらくのあいだ, 毎週木曜日に市場を開いた。しかし, 同時に, バ・タウンの市場は毎週月曜日のみに縮小され, 信用貸しも1シリングごとに6ペンスの保証金に変更された⁴⁶⁾ (VP

44) DO は政府の役職のひとつで、District Officer を指す。

45) ロトゥマ人は、フィジーに在住するポリネシア系の少数民族である。注1も参照のこと。

3/22/1963: 11)。

以上のような活動を続けるなか、ラミはバ・タウンに点在していたメンバーの居住地を一箇所にまとめ始める。1964年あたりから、バ・タウンの川を挟んで向かいに位置するヤラレヴ (Yalalevu) の賃貸家屋へ集住し始めたのである (Naivolasisiga 1970, cf. Young 1992)。この賃貸家屋の整理を経て1980年半ばに至るまでには、ラミも落ち着きを取り戻したようで、メンバーは200人台⁴⁷⁾まで回復した。市場での仲買業も着実に継続し、バ・タウンに入る道路脇には、バーンズ・フィルプ (Burns Philp) 社の協力を得て、ブラ・タレ雑貨店 (Bula Tale General Merchandise) と称されるストアを経営した。このストアでは米、魚の缶詰、砂糖、石鹸などの生活必需品が販売された (Young 1992: 98)。ラミの仲買業は成功を収め、1983年の時点では、フィジー西部の6箇所の市場で合計14の販売所を設置する程であった⁴⁸⁾。各販売所の売人は、週末になるとヤラレヴのラミ本部へとレシートを運び、会計を行った (Young 1992: 93)。このように、ラミのメンバー各人の収入はラミの組織で一括して管轄され、全体での会計が組まれるなど共同的な側面が依然として重視された (Young 1992: 98)。

1980年代前半になると、その他のラミの

主要な収入源としては、男性がサトウキビ刈りに従事し⁴⁹⁾、女性は裁縫仕事等の手仕事を行っていたことも記録されている (Young 1992: 93-94)。サトウキビ刈り業などは、1982年時にナンロガ諸村落から400人のサトウキビ刈り労働者が集められ、総計80,000トン进行刈り取る契約を結べるほどの規模に達していた。サトウキビ刈り労働の結果、ラミの人々は賃金の前渡しを依頼することが可能となり、こうした前金は車などのラミの設備投資に回された (Young 1992: 97)。ラミは9台の3トン・トラック、1台のサトウキビ用大型トラック、1台の小型トラックを所有していた (Young 1992: 99)。

また、ラミ規則も継続していた。結婚式など形式的な儀礼を執り行わず、カヴァ、お茶、コーヒーやアルコールなど嗜好品に対する禁制は守られていた。ラミのメンバーが一緒に食事をとる決まりも続けられていた。音楽活動も行われた。そして、日曜日に働く勤勉さで近隣社会から高く評価されている様が記録されている (Young 1992: 95)。ラミのメンバーは政府に出生届⁵⁰⁾や婚姻届を提出することもなかった。さらに、ラミの子供は学校ではなく、ラミの内部で教育を受けていたという (Young 1992: 100)。

この時期のラミの活動をまとめると、ラミ規則の大枠には変化がなかったことが分か

46) ここでの記述は、指導者エモシが残した同時代の文字資料に依拠しているため、多少、信用貸し事業を理想化している可能性もある。たとえば、この信用貸しにまつわる成功と失敗は、印象に残る出来事であったらしく、ラミの現役メンバー、退会者をとわず、インタビューした際には常に話題とされたが、その際きちんとした取り立てを行うこともあったと証言するラミの現役メンバーもいた。

47) ヤングの調査では271人以上とされ (Young 1992: 90)、デュルタロの調査では217人とされている (Durutalo 1985: 410)。

48) 市場とその販売所数の具体的内訳は、バに3、ラウトカに3、ナンディに4、タヴァに2、シガトカに1、ラキラキに1であった (Young 1992: 93)。

49) 実際にサトウキビ刈り業に進出したのはもっとも前の時期、バに移転して直後あたりからだ、ラミ関係者は口を揃えて語っている。

50) 出生届を提出しないと、フィジー人が土地所有権を得るための条件である系譜図にも登録されないことになる。系譜図とは、フィジー人を各人のヤヴサ、マタンガリ、トカトカの区分ごとに登録するフィジー人のための戸籍にあたる制度である。バ地方で生まれたラミの若者の中には、系譜図に登録されていない者が多い。

る。ただし、以前のような人目を引く活動はあまり行われなくなったようである。たとえば、ヴァカレレワ・ニ・パシフィカ紙上に断続的に掲載していた指導者エモシの意見広告は、次第に公表されなくなった。メディアにもラミに関する情報が残されていない点も、人々の注目を集めるような活動をしていなかったことを証明している。ラミが特に人目を引く活動をしていなかったことは、それぞれ1985年、1983年と1980年代前半に、トゴヴェレとラミの居住地で調査とインタビューを行ったデュルタルとヤングの研究からも伺える(Durutalo 1985, Young 1992)。

3 ラミ後期—ラミ集落の形成へ [1980年代後半—1990年代]

ついでラミがフィジーに住む人々の注目を集めたのは、ブラ・タレから数えて4半世紀が過ぎた1980年代後半のことであった。ここでも、ラミは依然としてフィジー人から「異物」として扱われた。

ラミが着目されたのは、1986年4月に開催されたバ市議会(Ba Town Council)選挙の際であった。フィジー労働党(Fiji Labour Party)が、バ・タウン近郊のヤラレヴ選挙区にて議席を獲得したことを契機に、ラミは再度人目を引く存在となった。同選挙区はもともとフィジー人で占められる同盟党(Alliance Party)の議席であった。しかし、インド人の支持も得ていたフィジー労働党の

対立候補者が勝利を収めた。同盟党は、この選挙敗北の責を、同地区在住のフィジー人ことにラミ⁵¹⁾が同盟党に投票しなかったことに帰したのである。

同盟党によると、選挙の3年前、彼らはラミに対してニュージーランド銀行を通じて20,000ドルの銀行借款を保証しており、ラミは11,000ドルに及ぶ額の借金を現時点でも返済していない。そして、同盟党のこうした支援にも関わらず、総計93票にのぼるラミの票は、同盟党へ投じられることがなかったという。同盟党は、そのため、裏切り者として名指しでラミを批判したのである(FT 4/21/1986: 2, Howard 1992: 182-183)。ラミの側は、3年前に同盟党から20,000ドルの銀行貸し付けがあったこと自体は認めたが、未返済額は3,000から4,000ドルにすぎないと説明した。また、ラミのメンバーの多くは同盟党を支持したと思うが、誰が誰に投票したかを知る方法はないと抗弁した(FT 4/25/1986: 9)。ラミがはたして同盟党に投票していたか否かということが問題なのではない⁵²⁾。むしろ、出身地方を離れてはや20年が経過したにもかかわらず、依然としてラミはフィジー人のなかの例外者として認識されていたことが興味深い。

その後、バ・タウン近郊の農村地帯の一角にラミ集落(仮称)の地76エーカー⁵³⁾を買収し、遅くとも1992年⁵⁴⁾までには集落を再度移転し始めた。移転の理由は都市部で住居

51) メディアではラミと記載されているが、ハワードはラ・ニ・ラミと表記している(Howard 1991: 183)。筆者に調査時にもラミの関係者以外は、ラミのことをラ・ニ・ラミと述べる人が数多く見受けられた。

52) ラミは当初、インド人政党国立連合党(National Federation Party)を支持していたが、1982年の国政選挙ではアピサイ・トラの所属した同盟党、1987年選挙ではフィジー労働党を支持したと記述されている(Young 1992: 102)。ただし、この記述には、フィジー労働党の党首がラミと同じくフィジー西部出身者であったという以上の根拠がない。

53) 筆者が2001年の調査時に質問した時の広報担当者は75エーカーと返答した。

54) 移転は段階的に行われ、また記録もないため正確な年代を確定することはできない。ただし、初代指導者のキチョーネ・トクラは1992年死去しており、彼の墓がこのラミ集落内に設置されていることから、遅くとも1992年の段階である程度の移転が済んでいたと推測できる。この移転時期は筆者の調査時の指導者エモシ及びその他のラミのメンバーの証言とも一致している。



地図3 ラミ集落への移転

費・地代等を払い続けていくことが困難であったからとされる。この時点での人口は300人ほどであった。指導者も引き続きエモンが担当したが、4人の理事など委員会も存在し、毎週日曜日には集会が開かれた。子供はラミのなかで教育を受け、共同で食事をとる慣行も引き続き行われた。さらに非暴力的生活を志向し、競争を煽るようなスポーツは禁止されたことが分かっている（FT 3/5/1996: 15, cf. Robertson 1998: 116）。

この時期のラミのメンバーは商業活動にもあいかわらず精力的に取り組み、ナンディ、ラキラキ（Rakiraki）、バ、タヴァの各都市の市場に販売所を確保して、仲買業を営んでいた。バ・タウンではレストランを経営し、その他、様々な都市部の仕事やサトウキビ刈りなどに従事していた。ラミの女性も裁縫仕

事に励んだ。こうした収益から得られる金銭はラミの委員会へと一括して納められたという（FT 3/5/1996: 15）。

また、ザギマイラ開発協会（Cagimaira Development Association）⁵⁵⁾ が設立され、村落民の開発計画を支援した。この協会はフィジー西部のラ地方、バ地方、ナンロガ・ナヴォサ地方の諸村落民に小規模のビジネスに乗り出すための資金を提供したり、村落ストアの建設・運営の支援を各村落相手にすることを目的としていた。ラミの会計士によると、すでに62の村落が何らかのかたちでこの開発協会の助力を得たという（FT 3/5/1996: 15）。

このようにラミ的な活動規則や商業活動の重視といったブラ・タレ時期に確立された活動の大枠は、変更されることなく続いてい

55) ザギマイラとは、西からの風を意味するフィジー語。筆者の調査時点で、この協会は解散していた。

た。ただし、1996年の短い報告によると（FT 3/5/1996: 15）、ラミ的な規則に対する意味づけは若干変化したようである。たとえば、この時点で、指導者エモシは、依然としてラミのメンバーが教会に参加することはないものの、ラミ的な活動を「（ラミの）年輩者によって解釈された聖書の教えに基づいて生活している」と宗教的な意味を付して説明した（FT 3/5/1996: 15, cf. Robertson 1998: 166）。かつての共産党時代の混乱という経験を踏まえて、ラミ側がメディアを意識して発言した可能性を差し引いて考えても、ラミのメンバーがかつてラミ的な生活様式に対してしていたラディカルな意味づけを若干後退させたといえる。

Ⅵ 考察—ラミの発生原因再考

前章まで、1949年から1990年代初頭までのラミの活動の展開について、筆者が手に入れることのできた資料から記述・分析してきた。タンバニヴォノ協同組合のエモシ、キチョーネ、ラマタウ、ラミのエモシと指導者が替わるにつれて、ラミとしての活動の力点が、協同組合、ロロマ、政治などと揺れ動いていた。また、周辺社会の圧力にさらされてきたため、時代ごとのメンバーの増減も激しかった。ただし、トゴヴェレ村落民を中心にナンログ・ナヴォサ地方の諸村落民で構成された協同組合的活動を通じて、近隣村落の経済的向上にも配慮する集団という点では一貫している。つまり、以上の記述から、その時代ごとにラミ活動の中心原理の強調点や細かな活動実態に若干違いがみられる一方で、ラミ規則自体は、Ⅲの1961年以来、それほど大きな変化はみられないことがあきらかとなった。本章では、これまで呈示してきたデータをもとに、冒頭で紹介した先行研究が示唆するラミの発生原因説—ラミ参加諸村落の土地と関連する問題点やカーゴ・カルト的な伝統と関連性—について考察していきたい。

1 土地に関連する2つの論点

先行研究の箇所でも触れた、ラミ関連村落が土地所有制度の点で不利な位置におかれていたことをラミの発生原因とする説の妥当性を検討してみたい。まず、Ⅲの1-2で述べたように、6村落以上のラミ参加諸村落のうちで、通常のフィジー人が持っているネイティヴ・ランドの土地所有権が与えられていないのは、トゴヴェレとカンビシの2村落にすぎないという点を確認しておきたい。他の村落は平均的フィジー人村落とまったく変わりのない土地所有権を手にしていった。主要4村落以外のナンバウ、セモの2村落や、一時期、限られた人数がラミに参加していたにすぎないナンロウマイ、ヴナトヴァウなどの村落でも、土地所有権に問題があったという事実はない。

また、先行研究においてラミ活動村落が位置した土地は、地味が乏しい地帯とも指摘されてきた。村落ごとの正確な土地産出力を算定したデータがないので具体的な数字を提示することはできない。ただし、各村落を管轄する村役に村落の土地生産力に関するデータを問い合わせたところ、土地の生産性が乏しい村落であると返答したのは、トゴヴェレとカンビシだけであった。エムリは平均的な土地生産力と認識されていたし、そもそも同村落が所有する土地面積は相対的に広いため、農地に適した場所も適宜みつげだすことができるということであった。ヴァガンラなどはむしろ豊かな土地であると認識されていた。事実、ヴァガンラが農地に適した肥沃な土地を所有していることは、近隣村落にも広く知られている。つまり、土地生産力の低さという経済的条件が当てはまるのは、ラミ関連村落のうち2村落にすぎないのだ。

ついで、同時代における、関係者自身のラミの目的に関する発言をみていきたい。Ⅱ節からⅣ節まで、タンバニヴォノ協同組合から始まりラミに至るまでの活動の特徴と、ラミ参加者自身が彼らの活動にどのような意味づ

けしたのかを彼ら自身の同時代の発言から記述・検討してきた。注目したいのは、以上の資料にはラミの活動目的と土地所有権の問題とを関係づける言辭がほとんどみあたらないという点である。メンバーは土地を一括して利用しようというブラ・タレ時代の規則や(Ⅲ-1)、フィジー人は土地を有効に利用し切れていないというラマタウの発言(Ⅳ-2)は散見される。しかし、ラミと土地問題を関連づける発言は、あくまで土地の有効な活用が不十分であると指摘する水準に留まっている。それ以上の論点、たとえば所有権などに関して、ラミのメンバーから言及されることはなかった。

ラミは中期以降、出身村落での生活を断念してバ地方というあらたな生活の場所を求めた。さらには、バ地方の生活のなかで出生届を出さないことで土地所有権に与ることができないラミの若年層も生み出していた(Ⅴ-2)。こうした、現実的に土地にアクセスする権利から疎外された状況におかれてからも、ラミの発言には土地所有権にまつわる言辭がみあたらないのである。つまり、土地所有にまつわる客観的な条件はもとより、ラミのメンバー自身が彼らの土地所有をどのように問題視していたかという水準で検討してみても、土地にまつわる2つの論点—土地所有権の点で不利な位置づけ及び肥沃な土地の少なさ—は、ラミ発生原因としては根拠が薄弱であるといえる。

以上のようにみていくと、主としてデュルタロとヤングが指摘したような、経済的劣位の条件とラミの発生とを直接因果関係で結びつけることには問題があることがあきらかになる。もちろん、エモシ、キチョーネから始まるラミの歴代指導者を生み出し、つねに中心地として存在していたトゴヴェレ村落の状況—ネイティヴ・ランドの所有権がないことと、土地の生産力の低さ—が、勤勉さを強調するラミの形成に幾ばくか影響を与えた可能性を完全に否定することはできない。しか

し、先行研究において、以上2つの論点をラミの発生と結びつけてきたことは、ラミ関連村落全体をみずにトゴヴェレの例を一般化してしまっているといえる。これは両研究者が調査に訪れた村落が主としてトゴヴェレであったこととも無関係ではなかろう。

2 カーゴ・カルト的伝統との関係

ついで、ラミとカーゴ・カルト的伝統とを結びつける議論を検討していきたい。

カーゴ・カルトとは、オセアニアの植民地社会における宗教的社会運動の名称で1945年10月に『パシフィック・アイランズ・マンスリー (Pacific Islands Monthly)』誌上にて初めて活字化された用語であるとされる。その後、この言葉は、バリッジ (Burridge 1960)、ローレンス (Lawrence 1964)、ワースレイ (Worsley 1968) 等の仕事を通じて、社会科学ことにオセアニア研究内での人類学の用語として定着した (cf. Lindstrom 1993)。

1980年代以降、カーゴ・カルト概念に批判・検討を加えて、それまでカーゴ・カルトと呼ばれていた現象をメラネシア諸社会の植民地主義的な歴史的背景から読み解いたり、オセアニアの文化的論理から説明を試みる研究が生み出されていく (cf. Lindstrom 1993, Kaplan 1995)。そのためカーゴ・カルトという言葉の持つ意味は拡散しつつあるが、さしあたり、西洋社会と土着社会が会合する植民地状況下のニューギニアやメラネシア地域を舞台として、独自の教義に基づき西洋の富を獲得しようとする千年王国的色彩を持つ宗教的社会運動と定義される (cf. 石森 1990: 80, 笠原 1994: 138)。

こうした定義を参照してラミの展開を検討すると、少なくとも活動初期の時点(Ⅱ-2, Ⅲ)においてカリスマ的指導者が引き起こした宗教的社会運動という特徴を示しており、また、西洋的な富を直裁に要求してはいないものの一貫してある種の商業活動を行ったと

いう点で、カーゴ・カルトと重なり合う特質を備えている。しかし、これ以上の類似点は存在していない。たとえば、ときおり宗教的な主題がラミの活動の目的として顔を覗かせるが、千年王国の主題は一貫して欠如している。また、具体的な活動内容に、過剰な慣習的負荷を軽減し、勤勉に振る舞うなど現実的なアプローチが含まれているという意味で、むしろ基本的に現世志向的であるとさえ言い得る。つまり、ラミの活動はカーゴ・カルトの研究上の定義には収まりきらない。

また、研究上の定義から外れるという点以外にも、先行研究がヴィティ・カンバニ運動の系譜にラミを位置づけてきた根拠は、実はかなり曖昧なのである。たとえば、デュルタロは、カーゴ・カルトの系譜にラミを連ねる根拠として、フィジー的カーゴ・カルトに連綿として続いてきた反体制的性格をラミが持っている点を指摘している。つまり、ラミをカーゴ・カルト的な伝統に連ねる根拠は、活動形態の類似性からくるデュルタロの解釈で、両者の具体的な影響関係ではない。具体的な関係として唯一示唆されているのは、アポロシ・ナワイの後継者を自称した組合運動家であったトラ (Lal 1992: 190) と、ブラ・タレ共産党の指導者ラマタウとの親類関係の存在だけである。しかし、これまでの論述が明らかにしたように、ラマタウは短期の指導者にすぎないし、彼の共産主義的政治活動もラミの活動展開からみるとほんの一時的な現象に過ぎない。

さらに、メイヤーやママックは、同時代の新聞資料を根拠にして、ラミとヴィティ・カンバニ運動とを結びつけている (e.g. Mayer 1963: 100, Mamak 1978)。しかし、これまで詳細に述べてきたように、こうした資料の中にカーゴ・カルト的な活動との関係性を示唆

する文言は存在していない。つまり、資料的な事実というよりは両者の活動実態の比較検討に基づく解釈であると推測できる。ただし、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳで記述したように、ヴィティ・カンバニ運動に関係した活動実態はラミに存在していない。ハワードの論述の根拠も、両者の活動域が地理的に近いという点にあり、それ以上具体的に影響関係があったのかどうかまで踏み込んだ記述・分析はなされていない (Howard 1991: 88)。

ついで、口頭伝承に依拠した先行研究の記述を検討していきたい。タンバニヴォノ協同組合の指導者エモシが、ヴィティ・カンバニ運動に参加していたという記録はあり (Naivolaisiga 1970: 182-183)、筆者の調査の際にもラミ関係者やトゴヴェレ村落民は同様な証言をした。しかし、タンバニヴォノ協同組合は、これまで詳述してきたように、ラミの活動展開のなかでも最初期に位置づけられ、先行研究者が宗教的社会運動と関連づけてきた脱「伝統」的な活動が行われている段階ではそもそもない。「伝統」に対する特異な活動を開始したのは、あきらかにエモシの息子キチョーネ・トクラであり、彼はヴィティ・カンバニ運動には参加していない⁵⁶⁾。

また、カンビシ村落民が、ヴィティ・カンバニ運動の結果、現在の村落の場所に定住していること自体は事実であるが、筆者がインタビューを重ねたところでは、村落の移動という村落の歴史に関連しているだけで、ラミとは何の関係もないということである。同様に、ヴァガンラの村役をはじめとする古老によると、ヴァガンラ村落にもアポロシ伝説は語り伝えられているが、ラミの活動とは関係していないという。さらに、同時代のメディアはもちろん、ラミ指導層のあいだで伝えられているラミ誕生にまつわる正史的な歴史的

56) 口頭伝承の水準でみても、少なくとも筆者の調査時点では、ヴィティ・カンバニ運動の理念とラミの規則とは何ら関係ないと、ラミの指導者ともどもメンバーは一様に口にしていた。この点は、春日の採集した伝承と対照的である (春日 2001: 339-340)。

語りのなかにも、両者を関係つける言辞はみられない。ラミと、ヴィティレヴ島東部タイレヴ (Tailevu) 地方で活動していた村落開発運動⁵⁷⁾との類似性を指摘する証言は、1961年の新聞記事にみいだすことができるが (VP 9/7/1961: 7)、ヴィティ・カンバニ運動との関連性を示唆するような記事はみつからなかった。そもそも、キチョーネがラミ規則の着想を得たのは夢見からとされ、ヴィティ・カンバニ運動から直接的な影響を受けたわけではないと、ラミ関係者の間には語り継がれている (cf. Young 1992: 86)。

もちろん、こうした口頭での証言を文字通り受け取っていいのかどうかは、慎重な検討が必要とされるであろう。しかし、村落とヴィティ・カンバニ運動との関わりを明言していることからあきらかなように、ヴィティ・カンバニ運動との関係性を認めること自体を忌避しているわけではないと推測できる。言い換えれば、仮にラミの活動の一時期に、ヴィティ・カンバニ運動と交流があったなら、そのことを彼らが意図的に否定する必要まではないと思われるのである。

このようにみていくと、ラミとアポロシとを関係づけているのはむしろラミ関係者ではなく、第三者や研究者の解釈の方でないかという可能性が浮かび上がってくる (e.g. Mayer 1963, Mamak 1978; 春日 2001)。つまり、ラミの活動がヴィティ・カンバニ運動から間接的な影響を受けた可能性までは否定できないが、これまでの研究で主張されてきたラミとヴィティ・カンバニ運動の直接的な関係は、やや誇張されているといえるのではないであろうか。

VII 最後は一ラミのヴィジョンと植民地政府の政策との並行面

前節のように、ラミの活動展開を見直してみると、従来の研究で強調されてきた①ネイティヴ・ランドの所有権がない点と土地生産力の低さといった、土地に関する問題点や②宗教的社会運動との連続性に発生原因を求める研究は、ラミの一面を提示したにすぎないことがあきらかになる。そもそも、ラミを理解するに際して、その発生原因だけに着目して解釈すること自体に無理が潜んでいるともいえる。貧困から共産主義的な運動が起きたと解釈したり、ラミの脱「伝統」的な活動にカーゴ・カルト的な反体制的側面をかき取ることは、その分かりやすさもあり、研究者のあいだに流布したのであろう。しかし、そもそもラミは活動開始以来40年以上活動を持続させており、活動時期に応じて集団名、活動内容等を変化させていることに注意を払う必要がある。

以下において、上記2点の先行研究の解釈や、ラミが当時の政府と相容れなかったという人の目に付きやすい側面ではなく、ラミの活動の別の側面を①タンバニヴォノ協同組合の時期、②ブラ・タレの時期、③ブラ・タレ共産党の時期、④それ以降の時期に着視して検討していきたい。結論を先取りすると、こうした観点から検討していくことで、ラミ活動がむしろ時代に柔軟に対応している側面があきらかとなるだろう。

第1に、タンバニヴォノ協同組合である。このラミの起源である協同組合が設立されたのは、1949年のことであった。フィジーにおいて協同組合活動が本格的に始動するのは、1947年に協同組合に関する法律が制定

57) この村落開発運動はダク (Daku) 運動という。ダク運動とは、ラトゥ・エモシ・サウララ (Ratu Emosi Saurara) によって、1937年開始された運動である。フィジー人の手による開発モデルの事例として地理学者、人類学者、宗教史家等の手で考察の対象とされてきた (Spate 1959, 1991, Nayacakalou 1975, Garrett 1973, 1977, Scarr 1980)。ダク運動の展開と現在の活動に関して、筆者は別稿を準備中である。

されて以降である。協同組合局(Co-operative Societies Department)は、協同組合及び協同組合的組織の形成・運営の監督・監査を通じて、フィジー社会に適合したあらたな協同組合運動を発展させることを目的としていた。さらに組合運営を担う人材養成のため、ことに経済に関する知識や近代的な商業方法について教育活動がなされた(Nand 1969: 41)。ラミの起源であるタンパニヴォノ協同組合は、まさにこの時期に誕生した組織であった。

第2にブラ・タレの時期をみてみたい。ブラ・タレの特異な「伝統」改変—婚姻・葬儀にまつわるフィジー人の慣習的な負荷の軽減—は、1961年頃から本格的に始まった活動であった。1950年代末から1960年代始めにかけてのフィジーでは、フィジー人社会を開発に導いていくことが、緊急の課題として設定されていた。この問題を検討するべく2つの報告書が作成されている。1959年のスペイト報告と1960年のバーンズ報告である。興味深いのは、この両報告書の推奨する活動指針のなかに、フィジー人を束縛する伝統文化—具体的には、共同的(communal)な社会生活と表現された—を緩和することが盛り込まれていたのである(Spate 1959, Burns 1960, Lal 1992: 182-186)。そして両報告書の内容は同時代の各種メディアにおいて広く喧伝されてもいた。つまり、この変革の方向性は、伝統的束縛を緩和していくという意味でラミの活動と一致していたのだ。

同じような時代的な並行性は、3番目のブラ・タレ共産党としての活動からも伺うことができる。ブラ・タレ共産党が結成されたのは1961年で、1963年の立法議会選挙を前にして、ローカルな政治活動が活発化した時期であった。しかし、政治的意識の高揚と裏腹に、フィジー人が指導的役割を果たす組織的なまとまりは存在しなかった。そのため、フィジー各地にフィジー人のための様々な政党が結成された時期であった(Lal 1992: 188)。

共産党という特異な意匠に惑わされなければ、ブラ・タレ共産党もこうした政治的組織が編成された時代の申し子であったのだ。

そして4番目として、このブラ・タレ共産党以降、ことにバ地方へと活動の拠点を移して後の時期がある。以降、ラミは活動規則の多くを堅持しながらも、「ロロマ」重視というスローガンを強調し始めた。ブラ・タレ共産党に至る過程で様々な批判を浴びせられた経験から、活動内容の喧伝からは一歩距離をおき、周囲のフィジー人社会により受け容れられやすいロロマを前面に押し出したと思われる。③までと異なり時代に対応すると言うよりは、一歩距離をおき始めたといえるであろう。

つまり、ラミ規則ではなく、集団としての活動展開のあり方に着目することでみいだすことのできる論点とは、むしろ政府の施策に柔軟に対応し、さらにそれをラディカルなまでに受容したことである。先行する研究では、ラミの反体制的側面があまりに強調されてきたため、こうした政府に順応したような側面は見過ごされてきたのであろう。③までにみられるラミの活動とフィジー政府の方針との並行性は、偶然の一致ではないと考えられる。ラミのメンバーは、協同組合活動から始まり、政府の勧告書に歩調を合わせ、さらには政党政治へ参画するなど、時代時代に敏感に対応してきたのだ。

さらに、ラミはたんに政府側の動向を受容するだけではなくて、政府側が留保した点まで押し進めたというラディカルさを持っていた。たとえば、フィジー的な慣習の軽減という意味でブラ・タレ規則と共通性をみいだすことのできるスペイト報告、バーンズ報告の両報告書は、同時代のフィジー人社会において、フィジー人の「伝統」を破壊する勧告として、好意的に迎えられないことはなかった。1960年代のフィジー人を代表する政治家として頭角をあらわにしつつあったラトゥ・マラは、スペイト報告書を「インド系フィジー

人のためにヨーロッパ人によってものされたフィジーについての書物」と位置づけたし (Lal 1992: 186, Mara 1997), 両報告書の内容は当時の政府に検討されたとはいえ, 勧告のすべてが施行に移されたわけではない。

そうした社会的状況のなかで, ラミはよりよき生活を求めてフィジー人の「伝統」的な慣習的行為の簡略化・廃止を徹底的に押し進めたのである。出身村落で生活を営むことができなくなったのも, こうした意味では無理なからぬ点があった。ラミ規則のあり方と変遷をみてみると, ラミの歴代指導者はフィジー人エリートからほど遠い, 教育歴の浅い人々であったが, 手持ちの資源を活用しながら彼らなりの手段で豊かな生活を追い求める

変革への夢を実現させるべく, 活動を持続させたのである。時代に敏感に対応し果敢に行動に移したことによって, かえって不遇な扱いを受けたという歴史の皮肉な側面を, ラミの活動を通じて我々は垣間みることができる。

謝 辞

丁寧なコメントを下さいました査読者の方々及び, 草稿に目を通していただいた大川真由子氏 (日本学術振興会特別研究員) に記して感謝いたします。なお, 本論の作成にあたり 2000 年度及び 2001 年度大和銀行アジア・オセアニア財団の資金援助を得ました。

参 照 文 献

- Burns, Alan. 1960. *Reports of the Commission of Enquiry into the Resources and Population Trends of the Colony of Fiji*. Council Paper No. 1. Suva: Legislative Council of Fiji.
- Burridge, K. 1960[1995]. *Mambu: A Melanesian Millennium*. Princeton: Princeton University Press.
- Durutalo, Simone. 1985. *Internal Colonialism and Unequal Regional Development: The Case of Western Viti Levu*. MA thesis, University of the South Pacific.
- Garrett, John. 1977. "Motivation, Values and Goals for Economic Development: The Case of Daku.", in Ray Parkinson Memorial Lectures Delivered at The University of the South Pacific *Tourism in Fiji*. Suva: University of the South Pacific
- . 1997. *Where Nets Were Cast: Christianity in Oceania Since World War II*. Suva and Geneva: Institute of Pacific Studies.
- Howard, Michael. 1991. *Fiji: Race and Politics in an Island State*. Vancouver: University of British Columbia Press.
- Kaplan, Martha. 1995. *Neither Cargo nor Cult: Ritual Politics and the Colonial Imagination in Fiji*. Durham: Duke University Press.
- Lal, Brij. 1992. *Broken Waves: A History of the Fiji Islands in the Twentieth Century*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Lawrence, Peter. 1964. *Road Belong Cargo: A Study of the Cargo Movement in the Southern Madang District New Guinea*. Manchester: Manchester University Press.
- Lindstrom, Lamont. 1993. *Cargo Cult: Strange Stories of Desire from Melanesia and Beyond*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Macnaught, Timothy. 1979. "Apolosi R. Nawai: The Man from Ra." In Scarr (ed.) *More Pacific Islands Portraits*. 173-192. Canberra: Australian National University Press.
- . 1982. *The Fijian Colonial Experience: A Study of the Neotraditional Order under British Rule Prior to World War II*. Pacific Islands Monograph Series No. 7. Canberra: Australian National University.
- Mamak, Alexander. 1978. *Colour, Culture & Conflict: A Study of Pluralism in Fiji*, Rushcutters Bay: Pergamon Press.
- Mayer, Adrian. 1963. *Indians in Fiji*, London: Oxford University Press.
- Meller, Norman. and James Anthony. 1968. *Fiji Goes to the Polls: The Crucial Legislative Council Elections of 1963*. Honolulu: East-West Center Press.
- Nand, Sharda. 1969. "The Co-operative Movement in Fiji." *South Pacific Bulletin*, second quarter, 41-44.

- Naivolaisiga, Eparama. 1970. *Evangelization*. Bachelor of Divinity Thesis: Pacific Theological College.
- Nayacakalou, Rusiate. 1975. *Leadership in Fiji*. Melbourne: Oxford University Press.
- Robertson, R. 1998. *Multiculturalism and Reconciliation in an Indulgent Republic: Fiji After the Coups 1987-1998*. Suva: Fiji Institute of Applied Studies.
- Roth, G.K. 1973. *Fijian Way of Life*. Second Edition. Melbourne: Oxford University Press.
- Scarr, Deryck. 1980. *Ratu Sukuna: Soldier, Statesman, Man of Two Worlds*. London: Macmillan Education.
- Seruvakula, S. 2000. *Bula Vakavanua*. Suva: University of the South Pacific.
- Spate, O.H.K. 1959. *The Fijian People: Economic Problems and Prospects*. Council Paper No.13. Suva: Government of Fiji.
- . 1991. *On the Margins of History: From the Punjab to Fiji*. Canberra: National Centre for Development Studies, Australian National University.
- Surridge, H.R. 1940. "A Note on Lawaqa Market." *Agricultural Journal*, 11(2): 32.
- Sutherland, William. 1992. *Beyond the Politics of Race: An Alternative History of Fiji to 1992*. Political and Social Change Monograph 15, Australian National University.
- Tabana ni Vosa kei na iTovo Vakaviti n.d. *Na iVolavosa Vakaviti*. (The Fijian Monolingual Dictionary).
- The Bible Society. 2004. *Ai Vola Tabu*. (The Holy Bible in Fijian) Suva: The Bible Society in the South Pacific.
- Thomas, Nicholas. 1997. *In Oceania: Visions, Artifacts, Histories*. Durham and London: Duke University Press.
- Worsley, Peter. 1968. *The Trumpet Shall Sound: A Study of 'Cargo' Cults in Melanesia*. New York: Schocken Book.
- Young, John. 1992. "Social Protest and Spontaneous Development: A Contemporary Social Movement in Fiji." *Pacific Studies*, 15(3): 77-114.
- 石森秀三 1990 「カーゴ・カルト」『文化人類学事典』石川栄吉・梅棹忠夫・大林太良・蒲生正男・佐々木高明・祖父江孝男(編)弘文堂, 80.
- 笠原政治 1994 「カーゴ・カルト」『オセアニアを知る事典』石川栄吉・越智道雄・小林泉・百々佑利子(監修)平凡社, 138.
- 春日直樹 2001 『太平洋のラスプーチン——ヴィチ・カンパニ運動の歴史人類学』世界思想社
- 共同訳聖書実行委員会 1991 『聖書(新共同訳)』日本聖書協会
- 丹羽典生 2003 「我々の『共産党宣言』——フィジーにおける一協同組合集団ブラ・タレの実験と顛末」『南方文化』, 30:67-83.

汎用的な電子辞書の構造についての考察

児 玉 茂 昭

(日本学術振興会特別研究員)

On the Structure of the General-purpose Digital Dictionary

KODAMA, Shigeaki

JSPS Research Fellow

This short article aims at constructing a dictionary's structure that can be used for any language and that can be converted into many kinds of medium easily. The structure must also be highly portable and legible. We first make brief examinations of meta-languages that are designed for constructing data structures. The meta-languages examined are CVS, SGML, HTML, XML, and YAML, which are used in the areas of computing and text processing. These languages, excepting CVS, are called mark-up language, because they mark up what an element designates with tags. Comparing these languages, we choose XML for our marking-up language, by its simplicity and affinity for the Internet.

In the latter half of the chapter two, the dictionary's structure is composed of XML language by defining DTD, in which the definitions of the tags and the data structure is described.

- | | |
|----------------|--------------|
| 1 目的 | 2.1.5 YAML |
| 2 構造の記述 | 2.1.6 本節のまとめ |
| 2.1 構造記述に用いる言語 | 2.2 辞書構造の構築 |
| 2.1.1 CSV | 2.2.1 辞書の作成 |
| 2.1.2 SGML | 2.2.2 辞書の項目 |
| 2.1.3 HTML | 3 結論と展望 |
| 2.1.4 XML | |

1 目的

この小論では、ある言語の電子的な辞書を作成する際に、作成するデータの可用性を高め、同時に異なる言語に対して共通に使用可能な構造記述のフォーマットを提案することを目的とする。このような構造記述は以下のような条件を満たしていなければならない。

Keywords: multipurpose, dictionary, multimedia, XML, DTD

キーワード: 汎用的、辞書、マルチメディア、XML、DTD

1. 可読性が高いこと。
2. 可搬性が高いこと。
3. 必要な項目を過不足なく含んでいること。
4. データの加工が容易であること。

第一に挙げた可読性が高いという条件は、特別な知識を持たない者であってもデータ構造を容易に読み取ることができることを意味する。構造化において、習得に時間を要するような知識を前提としたデータ構造の記述を採用した場合には、その記述がたとえ優れたものであったとしても使用には困難が伴うものと考えられる。また、辞書の作成の作業において分担制を取る場合には、複数の作業担当者間で、取り扱う辞書のデータ構造に関する知識が共有されていることが作業の効率化という観点からは望ましい。そのためには、データ構造それ自体が容易に理解可能でなければならない。

第二に挙げた可搬性が高いという条件は、データ自体をどのような計算機においても同様に取り扱えること、また、どのような計算機においても同様の表示を得られることを意味する。このような観点から当然に導き出される帰結として、データは、特定の計算機上の特定のソフトウェアに依存するような形式によるものであってはならない。また、どのような計算機においても同様の表示を得られるという条件を満足させるためには、そのデータを記述するために使用される文字コード体系が、特定の国家の公的な規格や私的な規格に依存したものであってはならない¹⁾。この点において、世界で現在使用されている、あるいはかつて使用されていた文字全ての統一的なコード化を目的としている Unicode Consortium²⁾ と、その成果である Unicode standard³⁾ は注目に値する⁴⁾。

第三に挙げた必要な項目を過不足なく含んでいることという条件は、データ構造が、ある言語の辞書を記述する際に必要な情報を全て盛り込むことができ、かつ不必要にデータが肥大化しないということを意味する。巨大なデータを扱う際には潤沢な計算機資源が要求される。近年、計算機の価格が下落しているとはいえ、性能に対する高い要求は、データを取り扱うことができる計算機を制限することになり、結果、比較的低性能の計算機を使用している作業従事者が、データの取り扱いに困難を感じることになりかねない。必要な情報をも全て盛り込むという条件は達成不可能であるように思われるが、記述者が必要と感じた項目を、データ構造を壊さず随意に追加できるような仕組みを用意することで、可能な限りその条件に対応できるような構造を準備することとする。

第四の加工が容易であるという条件は、以下のようなことを意味する。作成した辞書を成果物として公表する場合、従来のように書籍として出版する以外に、社会基盤としてほぼ定着したと思われるインターネットを通じて公開するという手段を取ることも可能である。インターネットを通じた公開の場合には、PDF⁵⁾ による電子出版、html による静的なコンテンツの提供、あるいは、検索フォームを用いた動的なコンテンツの提供など、多彩な選択肢が現在では

-
- 1) 計算機上での表示の問題としては、各文字に対応したフォントの整備も、無視できない重要な問題である。しかし、この問題については、将来的には解決が図られるものと思われる。
 - 2) <http://www.unicode.org/>.
 - 3) 現在の最新版は 4.0 である。URL は上記注 2) を参照。
 - 4) XML 規格では、文字コードが無指定の場合には、Unicode (UTF-8) が暗黙に指定されているものとして解釈される。

用意されており、提供者は自由にそうした選択肢のいずれかを選ぶことができる。もしも、提供者が複数の媒体による出版を希望する場合には、元データからの各媒体への変換を容易に行えることが望ましい。また、動的なコンテンツを提供する際に、携帯電話を考慮に入れる場合には、通信環境を考慮してデータを軽量化することも可能でなければならない。

以下では、上で述べたような条件を実現可能なデータ構造の雛型について考察していくこととする。

2 構造の記述

2.1 構造記述に用いる言語

以下に、これまでに構造記述用のメタ言語として提案されてきた言語をいくつか挙げ、それらについて、本稿の目的にどの程度適合しているかを検討していきたい。以下では、次の5つのメタ言語について検討する。一般に通用する略語と展開したフルスペルを、後者はカッコに入れて、以下に示す。

1. CSV(comma separated value)
2. SGML(standard generalized markup language)
3. HTML(hypertext markup language)
4. XML(extensible markup language)
5. YAML(YAML ain't markup language)

2.1.1 CSV

CSV は、各項目をカンマで区切った形式のテキストファイルである⁶⁾。以下に例を挙げる。

book, noun, countable, 本

区切り文字はカンマ以外にも、タブ文字、スペースなどが用いられることがある。カンマ以外の区切り文字が使われるデータは、厳密には CSV 形式であるとは言えない。しかし、ほとんどのテキスト処理ソフトで CSV によるデータと同様の処理を行うことができる⁷⁾。CSV 形式のファイルは、注にも記したように、多くのデータベースソフトで出入力に使用され、表計算ソフトでも出入力として指定することができる。

上で挙げたような多くのソフトで取り扱うことが可能であるということが CSV 形式の利点の一つであり、また、sed や awk, perl などのテキスト処理言語とも親和性が高いため⁸⁾、長い間計算機上でデータを扱う際のフォーマットとして、広く使用されてきた⁹⁾。

5) PDF は Adobe 社が開発したファイルフォーマットで、現在ではインターネット上での文書交換において、事実上の標準として使用されている。以下の URL を参照のこと。

<http://www.adobe.co.jp/products/acrobat/adobepdf.html>

6) 各項目は、以下の例のようにそのまま並べられることもあるが、なんらかの記号（“” など）が用いられることもある。

7) 多くの表計算ソフトやデータベースソフトで、CSV 形式の出力と同様に、カンマ以外の区切り文字を用いた出力が指定できる。また、テキスト処理ソフトの大部分は、任意の文字を区切り文字として指定することができる。

8) これらのテキスト処理言語は、CSV 形式のファイルに対する操作に対して親和性が高い。

このようによく普及したデータ形式である CSV 形式であるが、いくつかの欠点も持っている。まず第一に、一つの列に含まれる項目の数が多くなった場合に、データ全体の見通しが悪なることが挙げられる。この場合、データ構造を熟知している者であっても、ある項目が何をあらわしているのかを把握するには困難を感じることになる。これは、CSV 形式のデータフォーマットが、各項目の意味をその位置によってしかあらわすことができないことに起因する¹⁰⁾。第二に、CSV 形式のデータは、各項目がカンマで区切られただけで直線状に配列されているため、複雑なデータ構造を表現することができず、このため、階層化されたデータ構造を表現することができない。

2.1.2 SGML

SGML は、文書を構造化して記述することを目的として策定されたメタ言語で、国際標準化機構の規格となっており¹¹⁾、また、日本工業規格にも正式に規格として制定されている¹²⁾。SGML の基本的な思想として、SGML は文書の構造を明確に標示するために使用されるのであり、文書がどのように表示されるかという部分には関わらないということをあげることができる。構造化された文書がどのように表示されるかということを指示する言語として SGML には DSSSL という言語規格が用意されている。この構造と表現の分離という考え方は、HTML や XML にも受け継がれている重要な概念である。

SGML においては、文書の構造は、DTD(data type definition) という文書によって定義される。DTD は、その文書がどのような要素をもっており、それらの要素はどのように構造化されるかということを記述する。DTD には、タグ¹³⁾と呼ばれる構造を定義するマークが、タグの間の階層関係も含めて定義されており、このタグを使用することで、文書は構造化¹⁴⁾される。構造化された文書の一部¹⁵⁾を以下に示す¹⁶⁾。

```
<namecard>
  <name>
    児玉茂昭
  <tel-number>
    042-330-xxxx
  <address>
    東京都府中市朝日町 5-xx-x
</namecard>
```

9) 規格化された標準的なデータフォーマットとして現在でも多くの場面で使用されている。

10) 例えば、「五番目の項目は、音声表示である」というように。

11) ISO-8879:1986 “Information processing —Text and office systems —Standard Generalized Markup Language(SGML)”. その後、1996 年と 1999 年に改訂されている。

12) JIS X 4151:1992 「文書記述言語 SGML」。その後 1998 年と 2001 年に改訂されている。

13) <で始まり、規格で定義付けられた文字列が続き、>で終わる一連の文字列である。

14) タグは文書の構造化だけでなく、文書の各要素を相互に参照するためにも使用される。

15) SGML を利用した文書フォーマットとして有名なものの一つに、DocBook がある。技術文書やマニュアルを作成するには広く利用されている。以下の URI を参照のこと。

<http://www.docbook.org/>. 現在では、XML 版の DocBook も存在する。

一見して分かるように、SGML によるタグ付けは、後で述べる HTML や XML などのものと酷似している。これは、後者が前者の部分集合として設計されているためである¹⁷⁾。

SGML による文書の構造化は、以下のような利点を持っているとされる。

1. 国際標準規格として規格化されており、異なる組織や国家の間で流用することが容易である。
2. SGML で構造化されたテキストは、人間にとっても計算機にとっても可読性が高い。
3. いったん作成したデータは、適切なツールを使用することによって多様なメディアに変換することが可能である。
4. 構造化してデータ化することによって、全文検索等のテキスト処理が容易になる。

一方で、以下のような問題点が存在すると考えられている。

1. 仕様が複雑で、構造化記述を行うために必要な DTD の設計にかかるコスト、作業従事者に SGML を習熟させるための教育コストが高い。
2. 構造の妥当性検証や変換ツールなどにかかる導入コストが高い。
3. 周知されているとは言い難い。
4. インターネットが大規模に普及するより前に規格化されたため、インターネットに対する対応にやや問題がある。

2.1.3 HTML

HTML は SGML の応用例の一つであり、ネットワーク上で文書を相互参照することを可能にし、情報を共有することを可能にする文書フォーマットとして作成された。当初、HTML は厳密には SGML の規格に適合しない形で実装された。その後、インターネットの爆発的な普及によって、HTML が必要とされる場面が増大したために、当時の HTML が抱えていた問題の解決¹⁸⁾が必要とされ、現在では W3C¹⁹⁾と呼ばれる組織が、HTML 規格についての仕様策定作業と策定された規格の勧告を行っている。現行の HTML 規格は、HTML4.01²⁰⁾と、HTML 規格を後述する XML に適合させた XHTML1.0²¹⁾の二つである。

HTML は、インターネット上での文書交換の標準フォーマットとしての地位を確立していること、文書内、もしくは文書間での相互参照を可能にしている点などが、オンライン上で辞書を構築するという目的には向いているが、反面、規格に拡張可能な余地が残されておらず、

16) 実際の SGML 文書は、SGML 宣言、DTD、文書インスタンスの三つの部分からなる。以下に示すのは文書インスタンスの部分である。

17) これについては後述。

18) 主な問題点は、

1. ブラウザによって解釈の異なる、もしくは解釈されない独自タグが各企業によって追加され、互換性が問題になったこと
2. タグが文章構造を規定するという本来の目的を外れ、装飾目的に使用されるようになっていたこと

などである。これらの問題点を受けて改訂された HTML 規格は、基本的にタグは文章構造のみを規定するのに用いられ、装飾は CSS (cascading style sheets) と呼ばれる別規格で行われることになった。

19) <http://www.w3c.org/>。

20) この規格は SGML の規格に厳密に適合しており、使用されているタグは、DTD によって規定されている。

目的に応じてタグの追加や変更が行えないという欠点があり、本論での目的には使用できない。

2.1.4 XML

XMLは、W3Cによって1998年に勧告された。現在は、日本工業規格として規格化されており²²⁾、様々な領域で使用されている。上述したようにXML規格は、SGML規格の部分集合²³⁾であり、SGMLが規格化された時には一般的でなかったインターネットでの利用に適した文書マークアップ用のメタ言語として設計されている。

実際にXMLはインターネット上で様々に応用されており、標準的なマークアップ言語としての地位を確立している。その応用範囲はweb上でコンテンツを公開するという目的にとどまるものでなく、ネットワーク上に接続されたコンピュータ同士で自動化された情報交換を行うためのプロトコル²⁴⁾などにも使用されている。これは、インターネット上での使用が容易で、計算機にも人間にも理解しやすい構造化言語というXMLの設計目的が十分に達成されていることを示していると思われる。

XMLは、SGMLと同様にDTDを用いて文書構造を定義することができる。しかし、SGMLと異なり、DTDによる構造の定義が行われていなくても、下に示すような特定の条件を満たしていれば、XML文書として認められる。その条件は、以下のようなものである。

1. 文章もしくは要素を含む要素は必ず開始タグと終了タグを持たなければならない。
2. 空要素のタグは、`</>`で閉じられなければならない。
3. 全ての属性の値は、引用符で囲まなければならない。
4. 要素は重なり合ってはいけない。
5. マークアップに使用される特殊文字が、内容部分に含まれていてはならない。
6. 要素の名前は、それを記述するために許されている文字のみが含まれていなければならない。

以上の条件を満たしている文書を、整形形式 (well-formed) の文書と呼び、XML規格では、XML文書の中に入れている。以下に整形形式のXML文書の例を示す。

21) いくつかの点でHTML4.01とXHTMLは記述に違いがある。それらのうち特に重要なのは、
 1. XHTMLはXML宣言によってファイルが開始されること。
 2. HTMLはタグ名は大文字・小文字の混在を許すのに対し、XHTMLではタグ名はすべて小文字で書かれること。
 3. XHTMLでは開始タグは必ず対応する終了タグによって閉じられなければならないこと。
 4. 空要素のタグは、必ず`</>`で閉じられなければならないこと。
 の四点である。特に三つ目と四つ目の相違点は、XHTMLが、DTDの記述によっては終了タグの省略を許すSGMLに対し、終了タグの省略を許さないXMLに基づいた規格であることを示すものである。

22) JIS X 4159:2002「拡張可能なマーク付け言語 (XML)」。

23) SGMLとXMLの相違点については、以下のURIを参照せよ。
<http://www.w3.org/TR/NOTE-sgml-xml.html>

24) Webサービスと呼ばれる分野への応用で、主要な規格として、SOAP, UDDI, WSDLなどがある。

```

<namecard>
  <name>
    児玉茂昭
  </name>
  <tel-number>
    042-330-xxxx
  </tel-number>
  <address>
    東京都府中市朝日町 5-xx-x
  </address>
</namecard>

```

また、整形形式の XML 文書であって、更に DTD などによってその構造が定義されており、その定義に従ってタグ付けが行われている文書は妥当な (valid)XML 文書と呼ばれる。

XML 規格では、DTD にあるいくつかの制限や機能上の不備²⁵⁾を補うために、XML-
Schema²⁶⁾や、Relax-NG²⁷⁾などの DTD の代替となる言語仕様が提案されている²⁸⁾。これらの
言語を使用すれば、DTD よりも柔軟に文書の構造を定義できるため、今後はこれらの言語の
使用が広がるものと考えられている。

作成した XML 文書は、XSLT²⁹⁾によって別の XML 文書に変換の仕方を指定したり、CSS
や XSL-FO³⁰⁾などによって、各要素がどのように表示されるかということについての指示を与
えることができる。

XML 文書はこれまで見てきた CSV や SGML などと同様にテキストファイルであるので、
XML の編集自体は、テキストファイルを編集できるソフトウェアであれば行うことができる。
しかし、大きなファイルを扱う場合にはタグの対応関係の誤りや入力の間違いが生じやすい
ので、XML の編集を支援する機能を持つソフトウェアや、各要素の対応関係を分かりやすい
形で表示してくれるソフトウェア等が多く開発されている。また、インターネット上で対話
的な web サイトを提供する際に使用されている主要な言語である、perl, java, ruby などには、
XML 文書を操作するためのモジュール群が実装されており、それらによって、XML 文書の簡
便な取り扱いが実現されている。さらに、XML 文書を格納し、それに対する検索などの問い
合わせがあると、問い合わせに応じた出力を提供するデータベースソフトも複数存在する³¹⁾。

以上のように対応するソフトウェアが充実しているため、XML を使用した場合には、ほぼソ

25) 不備の一つとして、DTD は XML の規格に適合しておらず、XML を処理するツールで扱えない
ことを挙げることができる。

26) <http://www.w3.org/XML/Schema>

27) <http://www.relaxng.org/>.

28) 後者は、前者の仕様が巨大で、複雑な構造をもつ文書の構造定義を行うためには大きな労力を要
するため、比較的少ない労力で構造定義が可能になるような言語を策定することを目的として開
発された。

29) <http://www.w3.org/TR/xslt/>.

30) <http://www.w3.org/TR/xsl/>.

31) こうしたデータベースは従来から存在していたものを XML にも対応するように改良したものと、
最初から XML のみに特化したデータベースとして設計されたものの二つに分かれる。

フトウェアにかかる費用をゼロに押さえてシステム全体を構築することも可能になっている。

本論文で考察しようとしている、汎用的な電子辞書の構築という観点から見ると、XMLには以下のような利点が存在する。

1. 言語仕様がSGMLに比べると簡易で理解しやすいこと
2. 文書の構造化という点については、CSVより適していること
3. 編集や変換等の作業に使用することのできるソフトが数多く用意されていること
4. 入門書などが多く出版されており、導入が容易であること

しかしながら、作成される文書が冗長であるため³²⁾、インターネット経由でデータ交換を行う場合には、交換に必要とされるデータ量が大きくなり、大量の情報交換が行われる場合には、通信速度の低下が生じることがあるということが欠点として指摘されることがあり、この欠点は、電子辞書の構築を行う際にも無視することはできない。

2.1.5 YAML

YAML³³⁾は、厳密にはXMLやSGMLのようなマークアップ言語ではない³⁴⁾。YAMLは、この言語の設計を行った人物によれば、“a straightforward machine parsable data serialization format designed for human readability and interaction with scripting language such as Perl and Python”³⁵⁾である。YAMLはXMLと同様にPerl, Python, Rubyといったスクリプト言語から利用することができ、またテキストファイルとして適当なテキストエディタで編集することが可能である。また、可読性と計算機での処理の容易さを両立させることを意図しているという点も、YAMLとXML両者の共通点である。

YAMLとXMLの相違点³⁶⁾は、上に述べたような設計思想の違いが第一に挙げられる。どんな文書に対しても使用可能な汎用性を持たせることを目的の一つとしているXMLに対し、YAMLは、data serializationに特化している。また、前節の終わりでXMLの欠点としてあげた冗長性とデータの巨大化からも免れている³⁷⁾。これはYAMLが、XMLが用いているようなタグを使ったデータ構造の表示を採用せず、字下げによる構造の表示を採用しているためである。以下に、YAMLを使用して構造化した文書の例を挙げる。

```
namecard:
  name: 児玉茂昭
  tel-number: 042-330-xxxx
  address: 東京都府中市朝日町 5-xx-x
```

上の例からも分かるように、XMLと比較すると、データのサイズは小さく、また表記も簡便である。

32) 開始タグに対応する終了タグが必ず存在していなければならない、また構造が複雑さに応じて多くのタグが必要とされるため、データ量が増大する。可読性を高めるためにタグを作業者にとって理解しやすいものにとすると、このデータ量の増大は更に著しくなる。

33) <http://yaml.org/>.

34) YAML ain't Markup Language.

35) 注33参照。

36) まつもと 2003b, p.157ff.

37) まつもと 2003a, p.153ff.

逆に YAML の欠点としては、大規模な構造の変更に弱いことが挙げられる。これは、辞書の構造自体が頻繁に変更されるような場合には問題となる可能性がある。また、XML と比較した場合に、YAML の知名度が低い点、さらに YAML で使用可能な文字コードは UTF-8 のみである点も YAML の欠点といえるかもしれない。

2.1.6 本節のまとめ

ここまでで、構造記述用のメタ言語をいくつか見てきた。それらをふまえて、どのメタ言語を採用するかについて考えてみたい。

最初に取り上げた CSV は複雑な構造記述ができないという点と、可読性の低さという点から考えて、本論文での目的にはそぐわないものと考えられる。HTML も、タグ付けの自由度という点から考えると、候補から外さざるを得ない。

残る三つの言語のうち、SGML は規格の複雑さと多様な媒体や計算機言語への対応という点で他の二つにやや劣る点がある。残る二つの言語、XML と YAML については、現時点での対応プラットフォームの多さや、普及の度合いとその結果としての導入の容易さなどの点から考えると、前者がやや優れている。また、YAML の項で述べたように、YAML は大規模な構造の変更に弱いという弱点が存在する。以上から、本論文においては、XML を記述用の言語として使用することとする³⁸⁾。

2.2 辞書構造の構築

本節では、前節で構造記述言語として採用することとした XML を使用して、具体的に辞書構造の構築を行うこととする。まず、辞書の構造を決定する際に前提となる条件について検討を行い、その後、具体的な構造の構築を行うこととする。

2.2.1 辞書の作成

まず、電子辞書をいかにして作成するかという問題について考察しておきたい。電子辞書の作成については、

1. 既に存在している紙媒体上の辞書を電子化する。
2. 既に存在している電子媒体の辞書を変換する。
3. フィールドノートなど、未整理の情報を整理して編集する。

などの手段が取られることが予想できる。1., 2. の場合には、すでに定型化されている文書の本論文で提案する形式に変換することになるが、3. の場合には、定型化されていない文書から必要な項目を選択して、本論文で提案する形式にあてはめることになる³⁹⁾。

また、これ以外の作成法として、web 上もしくはそれ以外の媒体を使用して、多人数によって編集作業を行うという手段も考えられる。web 上でそのような作業を行っている事典とし

38) YAML を XML を利用して記述するための、YAXML という XML の下位言語が規格化されており、これを利用すれば、YAML と XML とを統合できるかもしれない。また、YAML と XML とは、完全ではないものの相互に変換することが可能である。

39) フィールドノート自体の電子化という問題も興味深い問題であるが、ここでは触れない。フィールドノートとして使用できる既存のツールとして Linguist's Shoebox (http://www.ethnologue.com/tools_docs/shoebbox.asp) がある。これは最新版で XML による出力をサポートしている。

て、Wikipedia⁴⁰⁾を挙げることができる。Wikipedia と同等の機能を持つ Web サイトを、XML を利用して構築することは可能であると思われる⁴¹⁾。そのような用途には、修正箇所や修正者の明示や、議論の場の提供といった独自機能が必要とされるが、その場合にも、辞書の基本構造として、本論文で考察するような辞書の構造を使用できるかもしれない。

以上のように辞書の作成の手順については様々な可能性が考えられるが、本論文で考察する辞書の構造の適用は、上記条件のうち 1., 2. に限るものとする。

2.2.2 辞書の項目

本節では、辞書に含まれるべき項目について、その要素と要素相互の関係について考察する。

まず、辞書の最上位の要素は、dictionary というタグであらわすことにする。その下位には、個々の語彙項をの上位要素となる、辞書の内容部分を表すタグが必要である。このタグを dictionary-content⁴²⁾ とする。この他に、辞書には、作者や編集が完結した日時をあらわす部分や、版を管理する部分など、辞書自体に関する情報を格納する部分が必要である。この部分を dictionary-headers というタグで表示する。以上のように、辞書の最上位の要素を dictionary、ヘッダ部分の要素を dictionary-headers、本体部分の要素を dictionary-content というタグであらわすとする、DTD では以下のように記述することができる。

```
<!ELEMENT dictionary (dictionary-headers, dictionary-content)>
```

ヘッダ部分に含まれるべき情報には、辞書の名称、辞書の版、編者、共編者、対象言語、記述に用いる言語、編集が終了した日時、および注記などがある。これらの要素をそれぞれ、dictionary-name, dictionary-version, editor, coeditor, target-language, describing-language, date, note であらわすとする、DTD は以下のように記述することができる⁴³⁾。

```
<!ELEMENT dictionary-headers (name-of-dictionary, dictionary-
version, editor, co-editor*, target-language, describing-
language, date, note)>
<!ELEMENT name-of-dictionary (#PCDATA)>
<!ELEMENT dictionary-version (#PCDATA)>
<!ELEMENT editor (#PCDATA)>
<!ELEMENT co-editor (#PCDATA)>
```

40) <http://en.wikipedia.org/wiki/>.

日本語版は、

<http://jp.wikipedia.org/wiki/>.

41) このような目的には YAML の方が適しているかもしれない。

42) 以下で、タグの名称には英語を用いているが、タグには Unicode の範囲内の文字をほぼ全て使用することが可能であるので、それ以外の言語による名称を使用することも可能である。その場合、辞書の処理を行う前に、各言語で記述されているタグを、対応表を使用することで簡便に英語版のタグに変換することができる。

43) DTD の表記において、タグの名称に後続する * はその要素が 0 回以上あらわれることを、? は 0 回もしくは 1 回あらわれることを、+ は 1 回以上あらわれることをあらわす。何も記号が付加されていない要素は、1 回のみ現れる。

```
<!ELEMENT target-language (#PCDATA)>
<!ELEMENT describing-language (#PCDATA)>
<!ELEMENT date (#PCDATA)>
<!ELEMENT note (#PCDATA)>
```

辞書の内容部分には、個々の項目が一回以上生起することになる。個々の項目を *item* というタグで表すとすると、内容部分の DTD は以下のように書くことができる。

```
<!ELEMENT dictionary-content (item+)>
```

個々の項目の下位にどのような要素を置くかという問題は、困難な問題を含んでいる。まず、項目が、見出し語 (*headword*) とそれに対する記述 (*description*)、およびそれ以外の特記事項 (*notice*) に細分されるという点には問題はないと考える。

```
<!ELEMENT item (headword, description, notice*)>
<!ELEMENT headword (#PCDATA)>
<!ELEMENT notice (#PCDATA)>
```

問題は、*headword* として何を選択するかという部分と、*description* に何を含めるかという部分に存在している。第一の問題に関しては、動詞の活用が多彩で、完全に規則的とは言えない言語、たとえばギリシア語やサンスクリット語などの言語において、それらの活用形のどこまでを見出し語に含めるかということを考える必要がある⁴⁴⁾。この問題の解決法については、

1. 全ての活用形を見出し語に採用する。
2. 不規則なもののみを見出し語に採用し、規則的なものについては採用しない。
- 3 活用形は一切採用せず、その言語において通常見出し語として採用される活用形、もしくは語根のみを使用する。

という三通りの手段をとることができるだろう。第一の手段は、一つの動詞語根についてその活用形が三桁に達するような言語においては非現実的である。

第三の手段は、一般に辞書で取られている手段で、その言語について十分に学んだものにとっては、使用に際して特に問題がないと考えられる。しかし、言語を学び始めたばかりのものにとっては、とりわけ検索の面で使用に困難を覚えるような辞書になる可能性が高い。

第二の手段は、第一の手段と第三の手段の折衷案である。この手段を取る目的は、初学者が辞書の検索を行う際の困難を低減することである。規則的な形式については、辞書の利用者が検索語を入力した後、それをもとに検索用のソフトが辞書の検索を始める前の中間の部分で、検索語を見出し語の形式に変換する前処理ソフト (FEP) を使用する。不規則な形式については、辞書に見出し語として登録されている形式が使用される。結果として、辞書の利用者は、文法を熟知していなくても、正しい見出し語にたどり着けることになる。

44) 動詞と比べると小さな問題であるが、名詞類が曲用を行う場合、名詞についても同様の問題が生じることになる。

この手段を取る場合の問題は、前処理ソフトウェアを開発しなければならない点と、前処理ソフトウェアが正しい処理を行えるように、見出し語についての記述の部分に適切な情報⁴⁵⁾を入力しておく必要がある点である。言語によっては、この部分の設計に必要なコストが大きくなる可能性があるため、どのように設計するかという部分に労力を割く必要があるかもしれない。

記述部分についても、別の困難な問題が存在する。語彙についての情報は音韻に関する情報、文法に関する情報、意味に関する情報、形態に関する情報、そして、それ以外の付加的な情報などに分類することができる。また、テキストドキュメントとそれ以外の音声、画像、動画等を対等のものとして扱うことができるネットワークの特性を活用するために、それらに対するリンクを用意できるようにしておく必要があると考える。

問題は、語彙についての情報にどのような項目を盛り込むかという点を考えるときに生じる。例えば、文法に関する情報の中にどのような情報が必要になるかは、言語によって異なる。動詞については、人称、数、態、法、活用のタイプ⁴⁶⁾などの情報が必要であると考えられるが、これらの分類には当てはまらない動詞の区分をもつ言語も存在している。また、この問題は、上で論じた、活用形のどこまでを辞書の項目として登録するかという問題とも関係する。

このような問題を消極的に避けるために、筆者は、これらの動詞の分類に用いられる様々な文法的範疇を、タグによって構造化するのではなく、タグに必須要素として付加される属性として指定することを提案する。この考え方に従うならば、たとえば、ラテン語の動詞 *video* については、以下のような指定を行うことになる。

```
<grammatical-info>
  <g-element type="part-of-speech">
    verb
  </g-element>
  <g-element type="class">
    2
  </g-element>
</grammatical-info>
```

属性の指定に使用可能な文字列は無限に存在するので、このような方法を取れば、タグをどれだけ用意するかという問題を回避することができる。他の品詞に文法的な範疇の指定が必要な場合にも、同様のやり方で指定を行うことが可能である。さらに、音韻的な情報の指定を行う場合にも、同様に属性によって、その情報がどのレベルの情報であるかを指定する。たとえば以下のような指定を行うことが可能であるだろう。

45) その動詞がどのようなタイプの活用を行うかといった情報が必要になるだろう。また、分詞や不定詞が特有の語尾の付加によって形成される言語や、さらにそれらが名詞類として曲用するような言語では、名詞類としての曲用のタイプなどの、より多くの情報が必要となる。

46) ラテン語やサンスクリット語における動詞クラスのような動詞の類別。

```

<phonological-info>
  <p-element type="phoneme">
    </p-element>
  <p-element type="phone">
    </p-element>
</phonological-info>

```

さらに、派生関係や語形成などの形態論的な情報も、同様に属性によって、その情報がどの範疇に属しているかを指定するようにすれば、上で文法についての情報について考察したときと同様に、どのような範疇をタグとして指定するかという問題を回避することができる。

ここまでの DTD の指定をまとめると、以下のようになる。

```

<!ELEMENT grammatical-info (g-element+)>
<!ELEMENT phonological-info (p-element+)>
<!ELEMENT morphological-info (p-element+)>
<!ELEMENT g-element (#PCDATA)>
<!ELEMENT p-element (#PCDATA)>
<!ELEMENT m-element (#PCDATA)>
<!ATTLIST g-element type CDATA #REQUIRED>
<!ATTLIST p-element type CDATA #REQUIRED>
<!ATTLIST m-element type CDATA #REQUIRED>

```

次に意味に関する情報をどのように構造化するかについて考えることとする。意味に関する情報は、意味そのものと、その例文、意味分野、類義語、対義語などからなるとすることができるだろう。さらに、例文については、例文そのものと、存在する場合はその例文の出典と例文の音声ファイルへのリンクが可能であることが望ましい。これらを DTD で表現すると以下のようになる。

```

<!ELEMENT semantic-info (meaning, example*, semantic-field?,
  synonym*, antonym*)>
<!ELEMENT example (example-sentence, example-reference*, example-
  voice?)>
<!ELEMENT meaning (#PCDATA)>
<!ELEMENT example-sentence (#PCDATA)>
<!ELEMENT example-reference (#PCDATA)>
<!ELEMENT example-voice (#PCDATA)>
<!ELEMENT semantic-field (#PCDATA)>
<!ELEMENT synonym (#PCDATA)>
<!ELEMENT antonym (#PCDATA)>
<!ATTLIST example-voice type CDATA #REQUIRED>

```

以上の情報の他に、それ以外の情報として、アジア・アフリカ言語文化研究所で発行されている基礎語彙集における番号と、更に語彙項目の重要度に関するデータを付加することは教育や研究において有益であると思われる。この部分についての DTD はたとえば以下のようにして表現することができるだろう。

```
<!ELEMENT other-info (word-index-number?, significance?)>
<!ELEMENT word-index-number (#PCDATA)>
<!ELEMENT significance (#PCDATA)>
```

最後に、音声等の要素を語彙記述に組み込む仕組みの実現について述べる。まず、description 要素の中に、multimedia-contents という要素を用意し、その下に、content というタグを用意する。content の下位には、音声等の要素の位置を指定する referer 要素と、それに対する説明である explanation 要素を置く。referer タグには、その要素がどのような種類のメディアなのかということを指示する type 属性とアクセシビリティを高めるための alt 属性が必要である。以上を DTD で指定すると、以下のようになる⁴⁷⁾。

```
<!ELEMENT multimedia-contents (content+)>
<!ELEMENT content (referer, explanation*)>
<!ELEMENT referer (#PCDATA)>
<!ELEMENT explanation (#PCDATA)>
<!ATTLIST referer type CDATA #REQUIRED>
<!ATTLIST referer alt CDATA #IMPLIED>
```

これらのタグと属性を使用して音声等の要素を指定するやり方は、以下のようになるだろう。

```
<multimedia-contents>
  <content>
    <referer type="audio/wav" alt="multimedia">
      sound/m/multimedia.wav
    </referer>
    <explanation>
      2004/08/28 recorded
    </explanation>
  </content>
</multimedia-contents>
```

以上で description タグで指定される要素の下位要素がすべて DTD によって定義された。

47) 属性指定 (<!ATTLIST で始まる記述) において、その属性の指定が必須であるものには #REQUIRED、随意的のものについては #IMPLIED という指定が行われる。

description タグの DTD による定義は以下ようになる。以下の DTD から明らかなように、description タグの下位にある全ての要素は随意的な要素であり、編者が必要と考えるタグのみを選択して使用することができる。

```
<!ELEMENT description (grammatical-info*, phonological-info*,
semantic-info*, morphological-info*, other-info*, multimedia-
content*)>
```

本節で構築した DTD の完全な内容は、本論末尾の図 1 を参照のこと。

3. 結論と展望

本論文では、汎用的な電子辞書の構造についての考察と、具体的な辞書構造の提案を行った。汎用的な電子辞書の構造を定義することによって、作成した辞書の可用性を高めることができ、様々なメディアでの公開にかかるコストを低減することができると期待できる。また、更に、異なる言語に対して共通のフォーマットを適用して電子辞書を作成することで、通言語的な相互検索を可能にするような多言語辞書や、他言語間での翻訳の自動化にもつなげることができるかもしれない。

本論文で提示した構造は、試案、もしくは今後の議論のための叩き台であり、このまま実際に使用することはできない可能性がある。たとえば、タグの名称などについては、よりよい命名法があるかもしれない。今後、ある言語を例に取り、実際にその言語の電子辞書を構築することによって、本論文で提示した構造の改良と改善を図りたいと筆者は考えている。

参 考 文 献

まつもとゆきひろ 2003a 「初等 Ruby 講座第 19 回 XML と YAML」『Linux Magazine』2003 年 6 月号 :151-155.
 まつもとゆきひろ 2003b 「初等 Ruby 講座第 20 回 XML と YAML (その 2)」『Linux Magazine』2003 年 7 月号 :157-161.

The Unicode Consortium. 2003. *The Unicode Standard., Version 4.0*. Boston: Addison-Wesley.

図 1

```
<!ELEMENT dictionary (dictionary-headers, dictionary-content)>
<!ELEMENT dictionary-headers (name-of-dictionary, dictionary-
version, editor, co-editor*, target-language, describing-
language, date, note)>
<!ELEMENT dictionary-content (item+)>
<!ELEMENT item (headword, description, notice*)>
<!ELEMENT description (grammatical-info*, phonological-info*,
semantic-info*, morphological-info*, other-info*, multimedia-
content*)>
<!ELEMENT grammatical-info (g-element+)>
```



```

<!ELEMENT phonological-info (p-element+)>
<!ELEMENT semantic-info (meaning, example*, semantic-field?,
synonym*, antonym*)>
<!ELEMENT example (example-sentence, example-reference*,
example-voice?)>
<!ELEMENT morphological-info (m-element+)>
<!ELEMENT other-info (word-index-number?, significance?)>
<!ELEMENT multimedia-contents (content+)>
<!ELEMENT content (referer, explanation*)>
<!ELEMENT name-of-dictionary (#PCDATA)>
<!ELEMENT dictionary-version (#PCDATA)>
<!ELEMENT editor (#PCDATA)>
<!ELEMENT co-editor (#PCDATA)>
<!ELEMENT target-language (#PCDATA)>
<!ELEMENT describing-language (#PCDATA)>
<!ELEMENT date (#PCDATA)>
<!ELEMENT note (#PCDATA)>
<!ELEMENT headword (#PCDATA)>
<!ELEMENT notice (#PCDATA)>
<!ELEMENT g-element (#PCDATA)>
<!ELEMENT p-element (#PCDATA)>
<!ELEMENT m-element (#PCDATA)>
<!ELEMENT meaning (#PCDATA)>
<!ELEMENT example-sentence (#PCDATA)>
<!ELEMENT example-reference (#PCDATA)>
<!ELEMENT example-voice (#PCDATA)>
<!ELEMENT semantic-field (#PCDATA)>
<!ELEMENT synonym (#PCDATA)>
<!ELEMENT antonym (#PCDATA)>
<!ELEMENT word-index-number (#PCDATA)>
<!ELEMENT significance (#PCDATA)>
<!ELEMENT referer (#PCDATA)>
<!ELEMENT explanation (#PCDATA)>
<!ATTLIST referer type CDATA #REQUIRED>
<!ATTLIST referer alt CDATA #IMPLIED>
<!ATTLIST example-voice type CDATA #REQUIRED>
<!ATTLIST g-element type CDATA #REQUIRED>
<!ATTLIST p-element type CDATA #REQUIRED>
<!ATTLIST m-element type CDATA #REQUIRED>

```

Journal of Asian and African Studies

Published by the Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

The Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), an institution affiliated with the Tokyo University of Foreign Studies, has worked to implement and stimulate research on the languages, linguistics, history, cultural anthropology and ethnology of Asia and Africa since its foundation in 1964. It was the first Inter-University Institution to be designated in the area of Humanities and Social Sciences in Japan, and has been engaged in the computerization of data in Asian and African languages and cultures since the 1970s. This area of specialty has been strengthened further by the establishment of the Information Resources Center in 1997, the main purpose of which is to process information resources pertaining to the languages and cultures of Asia and Africa.

The *Journal of Asian and African Studies* welcome contributions of "Articles" and "Source Materials" in Japanese, English, or French. Articles present original work focusing on linguistic, cultural and/or historical studies related to Asia and Africa. Source Materials provide data to be shared with researchers in relevant fields, such as texts with transcription and translation, or word lists of a language that has been little described. All papers submitted for publication in the Journal are reviewed anonymously by at least two referees.

Guidelines for Authors

To submit a manuscript for consideration, send three hard copies and the computer file to the Editorial Committee (address below). Microsoft Word files (.doc), rich-text files (.rtf) are preferred formats. An Adobe Acrobat file (.pdf) may replace the hard copies. When special fonts or symbols are used in the manuscript, they should be listed on a separate sheet. Regardless of the category of the submission, the paper must be an original work of the author(s) should not have been previously published elsewhere and should not be simultaneously under consideration for another journal.

Manuscripts must be either printed out or typewritten on A4 size paper, single-sided with 22 mm margins. The body of the text must be in 12pt fonts and double-spaced. On the first page of the manuscript, only the title of the paper, the name(s) and the affiliation(s) of the author(s), and the category submitted (either "Article" or "Source Material") should be indicated. This information (apart from the title) should not appear elsewhere in the manuscript.

Any manuscript that does not follow the style of the Journal will be returned to the author. In particular, the following should be observed.

- a) The second page should start with the title, followed by an Abstract in English. (Do NOT include the name of the author here.)
- b) Following the Abstract, supply a table of contents and a list of five keywords in English.
- c) Acknowledgements should be in a footnote marked with "*" immediately following the title. Footnotes should be numbered consecutively throughout the manuscript.
- d) References in the text should appear in the following form: Taylor 1976: 189-190.
Full references should be provided at the end of the text, following the style of the Journal.
- e) Tables, figures, and photographs should be attached on separate sheets, and the approximate position where they should appear must be indicated in the text. All the tables, figures and photographs must be numbered and have a title. A clear copy of each of the tables, figures and photographs suitable for printing should be submitted in addition to those sent as a part of the three required copies of the manuscript.
- f) Whenever a form or sentence of a language that is different from the one used for the text is cited, both word-to-word (or morpheme-to-morpheme) translation (or, 'gloss') and the translation should be provided. Examples are shown below.

- (1) *nákorera ébaná.*
I.am.working.for children
'I am working for the children.'
- (2) *n-á-kor-er-a ébaná.*
1SG.SUB-PRES.PROG-WORK-BEN-FIN children
'I am working for the children.'

When such forms and/or sentences are cited in the text, they should be in italics.

The author will be required to check the first proof, and the second (and later) proof(s) if the Editorial Committee considers it necessary. Apart from the corrections of typographical errors, no substantive changes will be allowed. It should be noted that it is considered to be a part of the agreement in publishing a work in the Journal that the Editorial Committee reserves the right to reproduce and transmit all the contributions published in the Journal by electronic and other means (such as on the Institute web site).

All communications regarding publication in the Journal, including submission of manuscripts and inquiries about previous issues, should be sent to:

The Editorial Committee
Journal of Asian and African Studies
Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa
Tokyo University of Foreign Studies
3-11-1 Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo 183-8534 Japan.
E-mail: editcom@aa.tufs.ac.jp

1. 原稿は、日本語・英語・フランス語のいずれかを使用すること。
2. 原稿は、「論文」または「資料」とする。「論文」は、執筆者自身による未発表の研究論文、「資料」は、研究・分析のための資料を研究者一般が利用できる形にして掲載するもので、言語テキスト、語彙資料、歴史資料など。原稿1枚目表紙には「論文」「資料」の別を明記する。
3. 原稿は、投稿段階でハードコピーおよびプリントアウトに用いた文書ファイルを提出することとし、前者を正本とする。特殊文字・記号を用いた原稿の場合には、その一覧表のプリントアウトを添える。なお、pdfファイルをもって、ハードコピーに代えることができる。
- ・ハードコピー原稿はA4判とし、以下の形式で3部提出すること。
- ・天地左右とも余白22ミリ、日本語の場合は文字サイズ10.5ポイントにて、43字×40行、英語・フランス語の場合は、文字サイズ12ポイントを使用し、ダブル・スペースで入力すること。
- ・脚注・図版・写真などを割付けた原稿のほか、それぞれ巻末にまとめて添え、挿入箇所を本文中に記してもよい。また、鮮明な図版・写真原稿は1部とし、他の2部はコピーでよい。
4. 英語およびフランス語の原稿の場合、タイプライターによる投稿も認める。その場合、行間はダブルスペースとし、イタリック体の箇所には下線を施すこと。また、この場合にも、5.以下の規定に従うこと。
5. 原稿は、1枚目表紙に、「論文」「資料」の別のほか、表題、執筆者名、所属（日本語原稿の場合には、日本語・英語の両文）を記す。その他の箇所には、執筆者名および所属など筆者を特定できる情報を記載しないこと。
6. 2枚目以降は、論文または資料の本文とし、「論文」「資料」の別を記し、表題に続いて要旨、目次、本文と、ジャーナルの形式に従って執筆のこと。また、特に次の点に注意すること。
- a. 要旨は、日本語・フランス語の論文および資料の場合には英語とすること。
- b. 表題、要旨に続き、章、節などの大・中までの見出しを掲げ、目次として記すこと。
- c. キーワードは日本語と英語それぞれ5語を附すこと。英語およびフランス語の場合には、英語5語のキーワードを附すこと。
- d. 注は脚注とし、謝辞などはタイトル行に「*」として入れる。続けて1から始まる通し番号とすること。
- e. 論文などに本文中で言及し、また引用する場合には次のような形で著者名、出版年、ページを記す。
Sapir 1925: 40-41.
今西 1972b: 25.
7. 参考文献は稿末に一覧としてまとめる。その場合、著者の姓のアルファベット順とし、同著者による同年の文献が複数あるものについては、タイトルのアルファベット順に 2004a, 2004b. として区別すること。なお、見やすくするために文献を言語別に分けてもよい。この場合には、日本語文献については五十音順とする。文献の記載方法は次の通りとする。
- a. 単行本 [例]
Bloomfield, Leonard. 1933. *Language*. New York: Henry Holt & Co.
- b. 雑誌 [例]
前嶋信次 1966「テリアカ考—文化交流史上から見た一薬品の伝播について」『史学』38 (4): 1-39.
Sapir, Edward. 1925. "Sound Pattern in Language." *Language*, 1: 37-51.
- c. 論文集掲載論文 [例]
Polanyi, Karl. 1957. "The Economy as Instituted Process." *Trade and Market in the Early Empires* (K. Polanyi, C. W. Arensberg and H. W. Pearson, eds.), 243-270, Chicago: The Free Press.
白鳥庫吉 1944. 「拂菻問題の新解釈」『白鳥博士記念論文集（東洋学報 29(3・4)】、407-500, 東洋協会学術調査部。
* 同一論文集の論文を多数引用している場合、その論文集自体を単行本の扱いで見出しとして出し、各論文には次のような要領で論文集を示す方式を取ってもよい。
Polanyi, Karl. 1957. "The Economy as Instituted Process." *Trade and Market in the Early Empires* (K. Polanyi et al. eds.), 243-270.
8. 本文以外の言語の引用には、必ず本文で用いた言語で訳をつける。また、言語学における例文の引用などについては、以下のように、語または形態素ごとに訳「グロス」をつけること。
- (1) nákorera ébaná
I.am.working.for children
'I am working for the children.'
- (2) n-á-kor-er-a ébaná
1SG.SUB-PRES.PROG-work-ben-fin children
'I am working for the children.'
- (3) n-á-kor-er-a ébaná
1 単主語 - 現在進行 - 働く - 受益 - 語尾 子供たち
「私は子供たちのために働いている。」
9. 校正は、初校を著者校正とし、資料などの性質上、必要と認められた場合には二校目以降も著者が行う。校正時の訂正は、誤植および字句の修正以外は認めない。
- * 『アジア・アフリカ言語文化研究』第70号
(2005年3月末メ・9月末刊行)より適用する。

投 稿 規 定

1. 原稿の内容は、アジア・アフリカの言語文化研究に学術的に寄与しうるものとします。
 2. 投稿された原稿は、レフェリー制度を通じて審査の上、当編集委員会が最終的な採否の決定をします。また採否にかかわらず、原則として原稿（フロッピー、CD、図表等を含む）は返却しません。
 3. 投稿者の資格は、特に制限しません。
 4. 原稿の分量は制限しません。
 5. 投稿原稿は、他の学術誌に過去掲載されていないもの、投稿時点で他誌に投稿中でないものに限ります。
 6. 稿料の支払い、掲載料の徴収は行いません。なお、著者に抜刷を50部贈呈します。それ以外にも、あらかじめ注文があれば、実費で作成します。
 7. 締切り期日は、9月30日（3月31日発行）及び3月31日（9月30日発行）とします。
 8. 本誌に発表されたものを転載する場合は、あらかじめ当研究所編集委員会にご一報の上、出版物を一部ご寄贈ください。
 9. 編集委員会は本誌に掲載された全ての原稿を電子化媒体によって複製、公開し、公衆に送信することができるものとします。
 10. 連絡先：東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所
編集委員会
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
電話：042-330-5600
FAX：042-330-5610
URL：http://www.aa.tufs.ac.jp
E-mail：editcom@aa.tufs.ac.jp
-

■ 編 集 後 記 ■

『アジア・アフリカ言語文化研究』69号編集委員会は国内外から合計17点（「論文」12点・「資料・研究ノート」5点）の投稿原稿を受理しました。各投稿原稿は少なくとも2名の査読者（所外の査読者を含む）による慎重な審査を実施いたしました。その結果、合計8点（「論文」5点、「資料・研究ノート」3点）が採択され、当誌に掲載されました。

■ Note from the Editor ■

The Editorial Committee received 17 manuscripts for this volume from both inside and outside the country. Twelve of these were submitted as Articles, while five were submitted for Source Materials and Remarks. Five Articles and three Source Materials and Remarks were accepted. Each paper was reviewed by at least two referees, some of whom were non-ILCAA members.

アジア・アフリカ言語文化研究 69号

2005年 3月 31日 印刷発行

編集・発行：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
(電話 042-330-5600)

編集委員会：菊澤律子、栗原浩英（委員長）、中谷英明、羽田亨一、深澤秀夫
(50音順)

印刷：株式会社東京プレス
〒174-0075 東京都板橋区桜川 2-27-12

(表紙の題字：津田貞子)

『アジア・アフリカ言語文化研究』69号 正誤表

p.211の柱を下記の通り訂正します。

誤)【論 文】

正)【資料・研究ノート】